

大学院研究科便覧

工学研究科〈修士課程・博士後期課程〉
情報学研究科〈修士課程〉

2 0 1 9

大同大学

—— 大同大学の理念 ——

「実学主義」

大同大学は実学の教育と研究を通じて
産業と社会に貢献します

目 次

大学院の概要

1. 大学院の沿革と組織
2. 大学院研究科と課程の目的
3. 工学研究科の教育目標・教育方針
4. 情報学研究科の教育目標・教育方針
5. 学位授与の方針及び教育課程編成・実施の方針

履修要綱

工学研究科・情報学研究科共通等

1. 学籍番号
2. 履修の方法
3. 学位審査論文の申請・提出等
4. 教職課程

工学研究科

修士課程 講義要綱等

1. 機械工学専攻
2. 電気・電子工学専攻
3. 建築学専攻
4. 都市環境デザイン学専攻

博士後期課程 講義要綱等

1. 材料・環境工学専攻

担当教員一覧

1. 修士課程
2. 博士後期課程

情報学研究科

修士課程 講義要綱等

1. 情報学専攻

担当教員一覧

1. 修士課程

諸規程等

奨学生制度

ティーチング・アシスタント（TA）制度

大同大学大学院学則

大同大学学位規程

大同大学大学院学位審査等取扱細則

大同大学大学院研究科履修規程

大同大学大学院研究生規程

大同大学大学院科目等履修生規程

大同大学大学院学部学生の大学院授業科目の早期履修に関する規程

大同大学大学院外国人留学生規程

大同大学大学院特別研究学生規程

大同大学大学院特別聴講学生規程

大同大学大学院入学前の既修得単位の認定に関する規程

大同大学大学院他の大学院における授業科目の履修等に関する規程

大同大学大学院他の大学院等における研究指導に関する規程

大同大学大学院連携大学院教育に関する規程

大同大学学籍異動に関する取扱規程

大同大学大学院一般奨学生規程

大同大学大学院一般奨学生規程施行細則

大同大学大学院博士後期課程特別奨学規程

大同大学大学院学生表彰規程

大同大学大学院学生表彰規程実施細則

大同大学学生懲戒規程

大同大学大学院日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考規程

大同大学大学院日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考委員会規程

大同大学提携教育ローン規程

大同大学提携教育ローン利子補給奨学規程

大同大学提携教育ローン利子補給奨学細則

大同大学大学院論文博士の学位授与申請書類

(7)外国語の能力に関する申告書) についての申合せ

大同大学大学院論文博士の申請資格、試験及び業績についての申合せ

大同大学大学院課程博士の業績についての申し合せ

大学院の概要

1. 大学院の沿革と組織
2. 大学院研究科と課程の目的
3. 工学研究科の教育目標・教育方針
4. 情報学研究科の教育目標・教育方針
5. 学位授与の方針及び教育課程編成・実施の方針

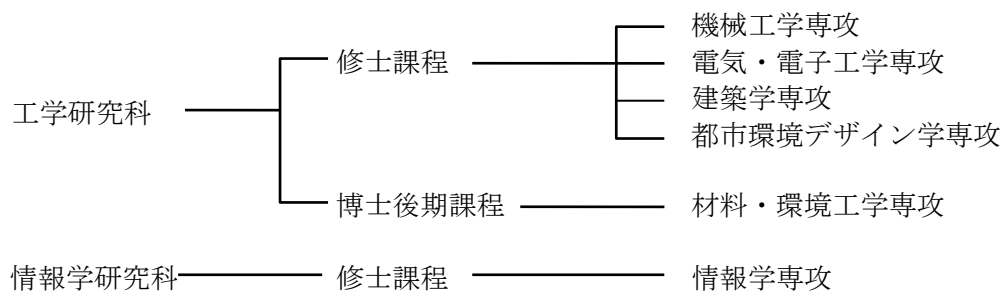
1. 大学院の沿革と組織

沿革

平成 2 年 4 月	大学院工学研究科を設置 機械工学専攻、電気・電子工学専攻、建設工学専攻の 3 専攻からなる修士課程を開設
平成 7 年 4 月	工学研究科に博士後期課程材料・環境工学専攻を開設
平成 17 年 4 月	情報学研究科を設置 修士課程情報学専攻を開設
平成 18 年 4 月	工学研究科修士課程建設工学専攻の学生募集を停止 工学研究科修士課程に建築学専攻と都市環境デザイン学専攻を開設
平成 20 年 3 月	工学研究科修士課程建設工学専攻を廃止

組織

現在の大学院研究科の構成は、次のとおりである。



2. 大学院研究科と課程の目的

工学研究科

工学研究科の目的は、次のとおりである。

(目的)

本大学院の工学研究科は、科学の応用である工学を教授研究し、産業を基盤とする人間社会に科学技術面から貢献する優れた人材を育成することを目的とする。(大同大学大学院学則第 4 条の 2 の第 1 項)

情報学研究科

情報学研究科の目的は、次のとおりである。

(目的)

本大学院の情報学研究科は、情報の科学とその広い応用にかかわる情報学を教授研究し、情報社会に貢献する優れた人材を育成することを目的とする。(大同大学大学院学則第 4 条の 2 の第 2 項)

また、両研究科の修士課程および工学研究科の博士後期課程の目的は、次のとおりである。

修士課程

(目的)

修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とする。(大同大学大学院学則第 5 条の 2 の第 1 項)

博士後期課程

(目的)

博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するために必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。(大同大学大学院学則第 5 条の 2 の第 2 項)

3. 工学研究科の教育目標・教育方針

(1) 修士課程

機械工学専攻

大学院工学研究科の教育理念・目標をもとに、機械工学専攻の教育目標・教育方針を次のように定めている。

【機械工学コース】

- ①基礎学力を十分身に付けた、優れた応用開発能力を有する創造性豊かな機械技術者の養成を目的とする。
- ②機械工学の基礎学力を充実高度化させるとともに、自主的な課題解決能力と創造性を育成する。
- ③グローバルな視点に立った幅広い知識を修得させ、コミュニケーション力とリーダーシップを備えた人間性豊かな技術者を養成する。

【総合機械工学コース】

- ① 基盤的な機械工学とともに応用工学を修得し、創造性に富んだ機械技術者の養成を目的とする。
- ② 将来の重要課題である環境、福祉、安全の向上、国際競争力堅持に役立つ機械システム開発者を育成する。
- ③ コミュニケーション能力とリーダーシップを備え、社会に貢献する人間性豊かな技術者を育成する。

電気・電子工学専攻

電気・電子工学は、わが国の産業を幅広い分野で支える基幹工学である。本専攻では電気機器・電子情報産業はもとより、自動車産業など他の業界をも含む社会での多様な要請に、柔軟に対応できる基礎知識および技術の習得を目標とした教育を行う。このためカリキュラムは学部教育から連続性を持たせた構成となっており、専門性の高い教育・研究を行うと共に、全専攻共通の講義により、幅広い知識と高い教養を持った技術者を養成する。

建築学専攻

建築学はわが国の社会基盤を計画・整備する基幹的な学問分野であると同時に、我々の生活に直接関わる居住空間を形成するための最も身近な学問分野といえる。本専攻では、建設業界を始めとする社会の多様な要請に対し、柔軟に対応できる基礎知識および技術の習得を目的とした教育を行う。

このため教育・研究内容には、学部教育からの連続性と幅広い視点から、建設・計画・環境の広い分野に係わる学科目が配置されている。このカリキュラムにより、専門性の高い教育とともに幅広い知識と教養を目指した教育を実施する。

都市環境デザイン学専攻

学習教育目標

a. 教育目標

- 1) 土木・環境コースでは、学際的な視点に立って、持続的発展可能な社会基盤の整備に必要な工学的手法を修得する。かおりデザインコースでは、学際的な視点に立って、快適な住環境の創造に必要な工学的手法を取得する。
- 2) 実験や調査を計画・遂行してデータを正確に分析し、論理的に考察し、まとめて発表できる能力を身につける。

b. 人材の養成目標

- 1) 都市環境デザインの分野において高度で専門的な知識・能力を有する。
- 2) 倫理観に根ざした責任感を持ち、社会に貢献できる。
- 3) 課題を探究して自主的、継続的に学習でき、与えられた制約の下で解決のための過程を構築できる実践的能力がある。また、それらのリーダーシップがとれる。

(2) 博士後期課程

材料・環境工学専攻

博士後期課程は、修士課程のいずれからでも進学できる材料・環境工学専攻の1専攻のみで構成されており、大学院工学研究科の教育理念・目標をもとに、材料・環境工学専攻の教育理念・教育方針を次のように定めている。

- ①材料・環境工学の高度な専門知識を有し、未知の分野を開拓しうる能力を育成できるように、特論、輪講を設けている。
- ②幅広い基礎知識と視野を有し、課題を総合的に理解し追求する能力を育成するために、特別講義を全学科目の分野にわたって行う。
- ③特別研究および論文作成を通じて、創造性豊かな個性を有し、主体的にかつ柔軟に行動する能力を養成する。
- ④上記の授業科目に加えて、学外研修と特別調査演習を設けて、産業界において技術をリードできる高級な技術を養成する。
- ⑤授業科目の選択にあたっては指導教員が、本学および外国人留学生を含む他大学出身者、あるいは社会人それぞれに応じて、きめ細かく個別的に指導する。

4. 情報学研究科の教育目標・教育方針

(1) 修士課程

情報学専攻

近年、情報科学および情報通信技術は飛躍的に発展し、その応用分野を急速に拡大し、さらには我々のライフスタイルにも大きな変化をもたらしている。このような情勢において情報学に課せられる多様な社会的要請に応えるため、本専攻では情報システムコース、情報デザインコース、経営情報コースの3コースを設けて、専門的かつ体系的な教育を多面的に行う。情報システムコースでは、コンピュータとネットワークの基本原則と先進技術を習得し、様々な分野で情報システムの開発・運用に携わることができる人材を育成する。情報デザインコースでは、複雑化・多様化したメディア社会において、情報コンテンツの質的向上ならびに量的拡大を図っていくことができる人材を育成する。経営情報コースでは、経営と情報の複眼的な視点から社会や経済・経営における様々な問題に対して現実的な解決方法に結び付けることができる人材を育成する。

5. 学位授与の方針及び教育課程編成・実施の方針

(1) 工学研究科修士課程

機械工学専攻

[学位授与の方針]

下記の能力を備え、国際的視点に立った幅広い見識と専門知識を生かして地域社会や国際社会で幅広く活躍できる高度な技術者を育成する。

- ・機械工学における高い専門知識を生かして機械および機械システムを総合的に捉え、問題解決が行える。
- ・設計・製作・解析・評価・管理が行えるための機械工学の知識を有している。
- ・先端技術を理解し、新技術に関して興味を持ち続ける。
- ・グローバルな視点に立った幅広い知識を修得する。
- ・柔軟な発想とリーダーシップを発揮して問題が解決できる人間性を有する。

[教育課程編成・実施の方針]

- ・機械工学の専門知識を得るため、機械4力学(材料力学、流体力学、熱力学、機械力学)、および設計工学、生産工学、エネルギー工学、材料工学、環境工学、制御工学、メカトロニクス工学の各分野の講義から所定の科目を修得する。
- ・特別研究および特論・演習により機械工学に関する課題を発見し、新しい技術の調査研究を行い、問題解決策を考え実践する能力を身につける。
- ・修士論文の作成および研究成果の学内外での発表を通じ、論理的思考能力を養うとともに、文章作成と口頭発表による表現能力を培う。

電気・電子工学専攻

[学位授与の方針]

下記の能力を備え、電気電子工学分野において高度で専門的な技術者として認められる者に対して学位を授与する。

- ・電気電子工学分野の基礎的専門知識および技術を持ち、多様な社会に柔軟に対応できる。
- ・目標設定とそのため課題解決ができる。
- ・先端技術分野を理解し、新技術に対して興味・関心を持ち続ける。

[教育課程編成・実施の方針]

- ・電気電子工学の専門知識を得るため、電気エネルギー分野、コンピュータ制御分野、電子材料・デバイス分野の講義と演習から所定の科目を修得する。これらは、学部教育のつながりを重視し、学部で修得した幅広い知識の強化と応用を目指す。
- ・各分野の特別演習と特別研究は、特に専門とする領域の課題に対して、問題解決能力と創造性を育成する。
- ・修士論文の作成と発表を通じ、論理的思考能力を養うとともに、文章及びプレゼンテーションといった表現能力を培う。

建築学専攻

[学位授与の方針]

建築学専攻では、以下に示す高度な能力を備えていることを修士学位授与の方針とする。

- ・建築またはインテリアデザイン分野の先進的な専門知識を、建築生産活動の実践を通して社会に還元できる能力。
- ・建築またはインテリアデザイン分野の先進的な専門知識を、建築生産活動の現場において、さらに発展させることのできる能力。
- ・建築またはインテリアデザイン分野の幅広い基礎知識を有し、社会人としての健全な倫理観に基づいて行動できる能力。
- ・建築家、インテリアデザイナー、あるいは建築技術者として幅広い関心を持ち、地域社会のみならず国際社会においても活躍できる能力。

[教育課程編成・実施の方針]

学位授与方針の達成のため、論理的思考力、創造力、自発性、実践能力の開発を重視し、以下の科目を配置する。

- ・工学分野を取り巻く社会環境の幅広い理解のための全研究科共通科目および語学演習科目
- ・建築およびインテリアデザイン分野の先進的技術と理論を学修する専攻科目（特論）
- ・建築およびインテリアデザイン分野の先進的技術と理論を実践的に応用する演習科目
- ・セミナー形式等による修士論文作成のための学修・研究科目
- ・建築生産活動の先端的現場における実践方法を修得する学外実習科目

都市環境デザイン学専攻

[学位授与の方針]

下記の能力を備え、都市環境デザインの分野において高度で専門的な技術者として認められる者に対して学位を授与する。

- ・実験や調査を計画・遂行してデータを正確に分析、論理的に考察し、それらを整理して発表できる能力を有している。
- ・課題を探究して自主的、継続的に学習でき、与えられた制約の下で解決のための過程を構築できる実践的能力があるとともに、それらのリーダーシップがとれる。
- ・学際的な視点に立って、安全で快適な都市環境、とりわけ持続的発展可能な社会基盤の整備、またはにおい・かおりを考慮した快適な住環境の整備に必要な工学的手法を修得している。
- ・倫理観に根ざした責任感を持ち、社会に貢献したいという高い意欲を有している。

[教育課程編成・実施の方針]

- ・基礎となる学部からの教育の継続性・関係を重視して、都市環境の多様化に積極的に対応できるように、専門性が高く、社会の発展に寄与できる教育・研究を、2コース制により

遂行する。

- ・土木・環境コースでは、持続的発展可能な社会基盤を創造していくために必要な構造工学、地盤工学、水・環境工学、都市・交通計画学等の分野に関する科目を配置し、横断的な教育を行う。
- ・かおりデザインコースでは、におい・かおりを考慮した快適な住環境を創造していくために必要な測定、成分分析、心身への影響等に関する科目を配置し、におい・かおり環境の調査分析手法を主とした教育を行う。
- ・講義部類（共通科目および各コース科目）、演習部類（共通科目および各コース科目）、研究部類から、部類ならびにコースごとに所定の科目修得を図る。
- ・研究部類の特別研究は、特に専門とする領域の課題に対して、問題解決能力と創造性を育成する。
- ・修士論文の作成・発表を通して、論理的思考能力および文章、口頭発表による表現能力を養成する。

（２）工学研究科博士後期課程

材料・環境工学専攻

[学位授与の方針]

下記の能力を備え、材料及び環境工学の分野において、社会で幅広く柔軟に活躍できる高度な技術者として認められる者に学位を授与する。

- ・基盤的・先端的な専門知識を有し、材料・環境システムを総合的に考え、設計・製作・評価・管理する能力を有する。
- ・先端技術や新技術に対して、他分野の技術者・科学者と協働して取り組むことができるコミュニケーション能力を有する。
- ・グローバルな視点から物事を考え、協調性と高い倫理観をもって自ら行動する力を有する。

博士後期課程においては、当該研究科の定める期間在学して、工学研究科の教育と研究の理念や目的に沿った研究指導を受け、所定の授業科目を履修して、基準となる単位数以上を修得し、かつ所定年限内に工学研究科が行う博士論文の審査及び試験に合格し、課程を修了することが学位授与の要件である。

[教育課程編成・実施の方針]

博士後期課程材料・環境工学専攻では、大学院工学研究科の教育理念・目標をもとに、「機能材料工学」、「電子デバイス工学」、「熱プロセス工学」、「環境材料工学」、「電磁・環境工学」、「環境デザイン工学」の6学科目を設けて、以下の教育課程編成と実施の方針を定めている。

- ・材料・環境工学の高度な専門知識を有し、未知の分野を開拓しうる能力を育成できるように、特論、輪講を設けている。
- ・幅広い基礎知識と視野を有し、課題を総合的に理解し追求する能力を育成するために、特別講義を全学科目の分野にわたって行う。
- ・産業界において技術をリードできる高級な技術を養成するために、学外研修と特別調査演習を設けている。
- ・特別研究および論文作成を通じて、創造性豊かな個性を有し、主体的にかつ柔軟に行動する能力を養成する。

(3) 情報学研究科修士課程

情報学専攻

[学位授与の方針]

専門分野に応じた下記の能力を備え、高度で専門的な情報システム技術者として認められる者、情報コンテンツに対する社会的要請に応えることができる者、または経営と情報の視点から様々な問題の解決に当たることができる者に対して学位を授与する。

- ・コンピュータとネットワークの基本原則と先進技術を理解し、情報システムを開発・運用することができる。
- ・コンピュータを駆使して、情報コンテンツの制作、製品のデザイン、情報戦略の企画を行なうことができる。
- ・経営分野や情報分野の専門的な知識を持ち、社会や経済・経営における様々な問題に対して、現実的な解決方法に結び付けることができる。

[教育課程編成・実施の方針]

学位授与の方針に従って、論理的思考能力、チャレンジ精神、広い視野と豊かな人間性を身につけさせることを念頭に、以下の科目を配置する。

- ・特論として、情報システム・情報デザイン・経営情報の各コースに特化した専門的講義科目を、各コースに共通となる専門的講義科目を開設する。
- ・特別演習と特別研究では、専門領域における課題を発見し、それに対する解決策を見出し、実践していくことを通して、創造的な問題解決能力の養成を目的とする。
- ・修士論文の作成・発表を通して、論理的思考能力を養うとともに、文章作成とプレゼンテーションに係る表現能力を修得する。

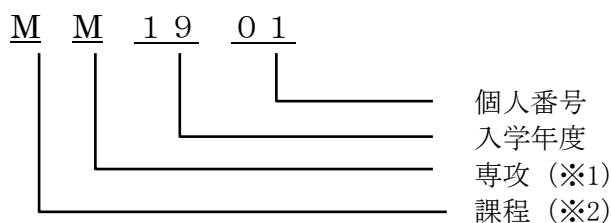
履 修 要 綱

工学研究科・情報学研究科共通等

1. 学籍番号
2. 履修の方法
3. 学位審査論文の申請・提出等
4. 教職課程

工学研究科・情報学研究科共通等

1. 学籍番号



(※1)

M：機械工学専攻
E：電気・電子工学専攻
A：建築学専攻
C：都市環境デザイン学専攻
B：情報学専攻
Z：材料・環境工学専攻

(※2)

M：修士課程
D：博士後期課程

2. 履修の方法

(1) 履修登録

学生は履修しようとする授業科目を所定の用紙（大学院履修登録申告書）により、指導教員の承認を受け、所定の期日までに教務室に提出しなければならない。この手続きを経ない授業科目は受講しても単位は与えられない。

(2) 指導教員

- ① 学位論文の作成等に対して指導する大学院担当教員を指導教員という。
- ② 指導教員の決定は入学時に行なう。
- ③ 授業科目の選択は指導教員の承認を必要とする。

(3) 履修に関する注意

<修士課程>

- ① 大学院研究科履修規程に定められているとおり、在学期間中に所定の授業科目を履修し、30 単位以上を修得するほか、指導教員による研究指導を受けなければならない。
- ② 履修する授業科目は、「教育課程表」の中から選択し履修する。
- ③ 教育課程表中の毎週授業時間数で◎印は、大学設置基準に定める所定の授業時間数以上の授業を実施することを意味する。
- ④ 第1年次において、できる限り20 単位以上を修得しておくこと。
- ⑤ 二重履修は認められない。
- ⑥ 一度合格した授業科目を再度履修することはできない。

<博士後期課程>

- ① 大学院研究科履修規程に定められているとおり、在学期間中に所定の授業科目を履修し、8 単位以上を修得するほか、指導教員による研究指導を受けなければならない。
- ② 履修する授業科目は、「教育課程表」の中から選択し履修する。

(4) 試験

- ① 試験は、科目の担当教員の指示により学期末に行なわれる。
- ② 担当教員によっては、授業期間中適当な時期に試験を行なうことがある。また、レポート等の提出をもって試験の成績に代えることがある。

(5) 成績評価

- ① 成績評価は、優・良・可・不可の4段階とし、可以上を合格とする。
- ② 研究指導の成績評価は、合・否とし、合を合格とする。
- ③ 学位論文及び最終試験の成績評価は、合・否とし、合を合格とする。

3. 学位審査論文の申請・提出等

<修士課程>

(1) 学位審査の申請

- ① 修士課程修了の要件を満たす見込みが付き、学位審査論文の審査を受けようとする者は、学位審査の申請を行わなければならない。
- ② 申請者は、指導教員及び専攻長の承認を得た上、学位審査申請書を教務室に提出しなければならない。
- ③ 学位審査の申請は在学中に行なうものとし、申請書等の提出時期は、1月の所定の期間とする。
- ④ 修士課程に2年を超えて在学する見込みの者で、指導教員の判断により論文受理が可能となった場合は、次の時期に学位審査の申請をすることができる。

3月修了予定者	1月	9月修了予定者	7月
6月修了予定者	4月	12月修了予定者	10月

(2) 学位審査論文の提出

- ① 申請者は、論文及び論文要旨それぞれ正1通、副2通を所定の期日までに、研究科長に提出しなければならない。
- ② 論文及び論文要旨は、「学位論文作成要領」により作成するものとする。

(3) 学位論文作成要領

- ① 提出論文 1編とする。ただし参考論文を添付することができる。(正1通、副2通)
- ② 規 格 A4版とする。
- ③ 表 紙 表紙には下記事項を記載すること。

大同大学大学院			
○○論文			
論文題目			
指導教員			
指導補助			
提出年月日	年	月	日
○○研究科			
課 程	課程		
専 攻		専攻	
学籍番号			
氏 名			

ただし、「指導補助」は必要に応じ記載する。

④本文

- ・横書きとする。
- ・ページ数を記入し、目次を作成すること。
- ・インキは黒とする。
- ・図表や写真等添付の際は、良質のもので後日、変質・変色しない接着テープ・糊を使用のこと。

⑤論文要旨 所定の用紙を使用し、論文内容を1,000字程度にまとめること。

<博士後期課程>

(1) 学位審査の申請

- ① 博士論文提出予定者は論文予備審査を受けなければならない。
- ② 論文予備審査会において博士論文の申請が可能となった場合には、学位審査の申請をすることができる。

(2) 学位審査論文の提出

- ① 申請者は、論文及び論文要旨それぞれ正1通、副3通及び履歴書、論文目論、単位取得証明書を添えて所定の期日までに、学長に提出しなければならない。
- ② 博士(工学)の学位審査の申請は、「学位審査申請の手引」による。

4. 教職課程

(1) 大学院生が取得できる教員免許状は、次のとおりである。

研究科名	専攻名	免許状の種類	免許の 教科	備考 【教科に関する科目】
工学研究科	機械工学専攻	高等学校教諭専修免許状	工業	【別表1】
	電気・電子工学専攻	高等学校教諭専修免許状	工業	【別表2】
	建築学専攻	高等学校教諭専修免許状	工業	【別表3】
	都市環境デザイン学専攻	高等学校教諭専修免許状	工業	【別表4】
情報学研究科	情報学専攻	高等学校教諭専修免許状	情報	【別表5】

(2) 高等学校教諭専修免許状を取得するための基礎資格と修士課程における最低取得単位数は次のとおりである。

- ・ 修士の学位を有すること。
- ・ 取得しようとする高等学校教諭専修免許状の同じ教科の高等学校教諭1種免許状を取得するための基礎資格を取得していること。
または、同じ教科の高等学校教諭1種免許状を有すること。
- ・ 大学院修士課程の各研究科において、取得しようとする各専攻の【教科に関する科目】(各別表参照)から24単位以上修得すること。

(3) 各専攻の【教科に関する科目】は、次のとおりである。

【別表1】 《機械工学専攻》

授業科目	備考
材料力学特論 材料強度学特論 環境材料工学特論 溶融成形加工学特論 先端加工学特論 航空熱流体力学特論 変形加工学特論 材料力学特別演習 材料強度学特別演習 環境材料工学特別演習 溶融成形加工学特別演習 先端加工学特別演習 航空熱流体力学特別演習 変形加工学特別演習 熱流体シミュレーション特論 環境流体力学特論 トライボロジー設計学特論 変形解析シミュレーション特論 信号処理特論 制御工学特論 アクチュエータ工学特論 燃焼工学特論 コンピュータビジョン特論 情報処理技術特論 情報機械特論 熱流体シミュレーション特別演習 環境流体力学特別演習 トライボロジー設計学特別演習 変形解析シミュレーション特別演習 信号処理特別演習 制御工学特別演習 アクチュエータ工学特別演習 情報処理技術特別演習 燃焼工学特別演習 情報機械特別演習	左記の科目から24単位以上修得すること。

【別表2】 《電気・電子工学専攻》

授業科目	備考
エネルギー変換工学特論 エネルギー伝送工学特論 制御工学特論 分析・計測工学特論 固体電子工学特論 デバイス工学特論 画像情報学特論 電気・電子回路特論 エレクトロニクス実装特論 電気・電子工学特別演習Ⅰ 電気・電子工学特別演習Ⅱ 電気・電子工学特別演習Ⅲ 電気・電子工学特別演習Ⅳ 電気・電子回路特別演習	左記の科目から24単位以上修得すること。

【別表3】 《建築学専攻》

授業科目	備考
建築史特別演習 建築生産特論 建築構造学特論 建築史特論 建築設計特論 空間計画学特論 建築環境学特論Ⅰ 建築環境学特論Ⅱ 建築生産・構造学特別演習 建築設計特別演習Ⅰ 建築設計特別演習Ⅱ 建築設計特別演習Ⅲ 建築環境学特別演習Ⅰ 建築環境学特別演習Ⅱ	左記の科目から24単位以上修得すること。

【別表4】 《都市環境デザイン学専攻》

授業科目	備考
構造学特論	左記の科目から24単 位以上修得すること。
環境地盤工学特論	
土壌・地下水工学特論	
水圏環境学特論	
環境工学特論	
都市政策特論	
交通政策特論	
構造学特別演習	
環境地盤工学特別演習	
土壌・地下水工学特別演習	
水圏環境学特別演習	
環境工学特別演習	
統計解析特別演習	
都市・交通計画特別演習	

【別表5】 《情報学専攻》

授業科目	備考
コンピュータシステム特論	左記の科目から24単 位以上修得すること。
コンピュータビジョン特論	
情報統計学特論	
音響情報学特論	
情報ネットワーク特論	
制御システム特論	
音声音楽情報処理特論	
センシングシステム特論	
データ工学特論	
システムプログラミング特論	
情報社会倫理特論	
情報学特別演習Ⅰ	
情報学特別演習Ⅱ	
情報学特別演習Ⅲ	
情報学特別演習Ⅳ	

工 学 研 究 科

修士課程・博士後期課程

修士課程 講義要綱等

1. 機械工学専攻
2. 電気・電子工学専攻
3. 建築学専攻
4. 都市環境デザイン学専攻

博士後期課程 講義要綱等

1. 材料・環境工学専攻
 - ・ 学位審査申請の手引き
 - ・ 学位審査様式
 - ・ 「論文目録」記入例
 - ・ 学位論文の様式

担当教員一覧

1. 修士課程
2. 博士後期課程

修士課程 講義要綱等

1. 機械工学専攻

(1) 教育課程表

大学院学則 別表(1)

部類	コース	授 業 科 目	単 位 数	毎週授業時間数				備 考
				1年次		2年次		
				1	2	3	4	
[1] 講義	コース 共通	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			集中
		経済学特論	1	1	<1>			集中
		地球環境科学特論	1	1	<1>			集中
		外国文化特論	1	1	<1>			集中
		機械工学特別講義Ⅰ	1	1	<1>			集中
		機械工学特別講義Ⅱ	1			1	<1>	集中
		航空宇宙工学特論	1	1	<1>			集中
		生産管理特論	1	1	<1>			集中
	情報数理解析学特論	1		1			集中	
	機械工学 コース	材料力学特論	2	2				
		材料強度学特論	2		2			
		環境材料工学特論	2	2				
		機械システム制御特論	2		2			
		溶融成形加工学特論	2	2				
		先端加工学特論	2		2			
		自動車運動力学特論	2		2			
		航空熱流体力学特論	2	2				
		熱流体シミュレーション特論	2		2			
		環境流体力学特論	2	2				
		トライボロジー設計学特論	2		2			
		アクチュエータ工学特論	2		2			
		強度設計学特論	2	2				
		熱エネルギーシステム設計学特論	2	2				
	変形加工学特論	2	2					
	総合機械 工学 コース	変形解析シミュレーション特論	2	2				
		機械システム材料学特論	2		2			
		信号処理特論	2	2				
		制御工学特論	2	2				
		コンピュータビジョン特論	2	2				
		情報処理技術特論	2		2			
情報機械特論		2		2				
燃焼工学特論		2		2				
熱流体計測特論	2	2						
[2] 演習	機械工学 コース	材料力学特別演習	2		2			
		材料強度学特別演習	2			2		
		環境材料工学特別演習	2		2			
		機械システム制御特別演習	2			2		
		溶融成形加工学特別演習	2		2			
		先端加工学特別演習	2			2		
		自動車運動力学特別演習	2			2		
		航空熱流体力学特別演習	2		2			
		熱流体シミュレーション特別演習	2			2		
		環境流体力学特別演習	2		2			
		トライボロジー設計学特別演習	2			2		
		アクチュエータ工学特別演習	2			2		
		強度設計学特別演習	2		2			
		熱エネルギーシステム設計学特別演習	2		2			
	変形加工学特別演習	2		2				
	総合機械 工学 コース	変形解析シミュレーション特別演習	2		2			
		機械システム材料学特別演習	2			2		
		信号処理特別演習	2		2			
		制御工学特別演習	2		2			
		情報処理技術特別演習	2			2		
情報機械特別演習		2			2			
燃焼工学特別演習	2			2				
熱流体計測特別演習	2		2					
[3] 研究	コース 共通	特別研究Ⅰ	1.5	◎				
		特別研究Ⅱ	1.5		◎			
		特別研究Ⅲ	1.5			◎		
		特別研究Ⅳ	1.5				◎	
		学外研修	2	◎	<◎>			

(2) 教育内容

自動車産業や航空機産業をはじめとして、機械工学が広い範囲に主体的な関わりを持っていきます。これらの産業では、専門知識を修得した高度な機械技術者を強く求めています。本専攻では、このような社会的要請に応えるために、機械工学の基盤的分野での学力を高度に充実させるとともに、現実の複雑な諸課題に対する問題解決能力を育成します。さらに、創造性、コミュニケーション能力、リーダーシップの涵養にも配慮しています。

近年、機械システムに関する関心が高まっており、これに関する知識や技術が注目されています。本専攻では、機械工学コースのほかに総合機械工学コースを設け、自動車工学、航空宇宙工学、ロボット工学などの機械システムの教育・研究を行っています。

各界の先端的研究者や実務家による講義を専攻内共通科目や全専攻共通科目の中から受講でき、幅広い知識の修得に配慮しています。また、国公立の研究機関や企業の研究所で研究指導を受ける連携大学院方式も採用しています。

(3) 履修上の心得

2つのコースはそれぞれ特徴あるカリキュラムで構成されています。今日の科学技術や社会システムの高度化、専門化に対応した最新の知識や技術の習得が可能なように、「特論」は専門的知識の修得、「特別演習」は課題解決への意欲と方法の習得、「特別研究」は課題解決の実践と位置づけられます。各特別演習はそれぞれ特論と関連付けて実施されます。まずコースの特徴をよく理解して、履修科目を指導教員と相談の上選定して下さい。

また機械工学の分野において将来発展の可能性のある専門領域の科目として設定された「専攻内共通科目」や豊かな人間性と社会常識の会得を目指した「全専攻共通科目」の履修を強く薦めます。

(4) 授業科目・担当教員等

機械工学専攻

コース	授業科目	単位数	毎週授業時間数				担当教員
			1年次		2年次		
			1	2	3	4	
機械工学コース	材料力学特論	2	2				町屋准教授
	材料力学特別演習	2		2			町屋准教授
	材料強度学特論	2		2			高田教授
	材料強度学特別演習	2			2		高田教授
	環境材料工学特論	2	2				徳納教授
	環境材料工学特別演習	2		2			徳納教授
	機械システム制御特論	2		2			杉谷准教授
	機械システム制御特別演習	2			2		杉谷准教授
	溶融成形加工学特論	2	2				前田教授
	溶融成形加工学特別演習	2		2			前田教授
	先端加工学特論	2		2			田中教授
	先端加工学特別演習	2			2		田中教授
	自動車運動力学特論	2		2			
	自動車運動力学特別演習	2			2		
	航空熱流体力学特論	2	2				白石教授
	航空熱流体力学特別演習	2		2			白石教授
	熱流体シミュレーション特論	2		2			坪井准教授
	熱流体シミュレーション特別演習	2			2		坪井准教授
	環境流体力学特論	2	2				神崎教授
	環境流体力学特別演習	2		2			神崎教授
	トライボロジー設計学特論	2		2			宮本講師
	トライボロジー設計学特別演習	2			2		宮本講師
	アクチュエータ工学特論	2		2			萩野講師
	アクチュエータ工学特別演習	2			2		萩野講師
	強度設計学特論	2	2				西脇教授
	強度設計学特別演習	2		2			西脇教授
熱エネルギーシステム設計学特論	2	2					
熱エネルギーシステム設計学特別演習	2		2				
変形加工学特論	2	2				葛森教授	
変形加工学特別演習	2		2			葛森教授	
総合機械工学コース	変形解析シミュレーション特論	2	2				小森教授
	変形解析シミュレーション特別演習	2		2			小森教授
	機械システム材料学特論	2		2			吉田准教授
	機械システム材料学特別演習	2			2		吉田准教授
	信号処理特論	2	2				大嶋教授
	信号処理特別演習	2		2			大嶋教授
	制御工学特論	2	2				尾形教授
	制御工学特別演習	2		2			尾形教授
	コンピュータビジョン特論	2	2				溝口教授
	情報処理技術特論	2		2			坂倉教授
	情報処理技術特別演習	2			2		坂倉教授
	情報機械特論	2		2			篠原准教授
	情報機械特別演習	2			2		篠原准教授
	燃焼工学特論	2		2			井原准教授
	燃焼工学特別演習	2			2		井原准教授
	熱流体計測特論	2	2				小里教授
熱流体計測特別演習	2		2			小里教授	
専攻内共通科目	特別研究Ⅰ	1.5	◎				各教員
	特別研究Ⅱ	1.5		◎			
	特別研究Ⅲ	1.5			◎		
	特別研究Ⅳ	1.5				◎	
	機械工学特別講義Ⅰ	1	1	<1>			未定
	機械工学特別講義Ⅱ	1			1	<1>	未定
	航空宇宙工学特論	1	1	<1>			魚野非常勤講師
	生産管理特論	1	1	<1>			
	情報数理解析学特論	1		1			
	学外研修	2	◎	<◎>			
全研究科 共通科目	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			武藤非常勤講師
	経済学特論	1	1	<1>			八木非常勤講師
	地球環境科学特論	1	1	<1>			加藤非常勤講師
	外国文化特論	1	1	<1>			クレムス・メッツァー非常勤講師

材料力学特論 (Mechanics of Materials)

選択 2単位 1期 准教授 町屋 修太郎

授業時間内の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

材料力学は、各種構造物や機器の強度設計上必要となる工学の基礎学問である。その内容は引張・圧縮、曲げおよびねじり荷重等を受ける基本形状部材の力学的解析法、または各種荷重が複合したり、2次元、3次元の物体形状に対する力学的解析手法、材料の各種機械的性質とそれを支配する法則、特に材料がどのような条件の下で破損や破壊するかの基準などについて、また残留応力の影響とその実測と応用の方法論などを含む。材料力学の基礎に加えて、以上に関連した以下の四つの分野について講義する。

- I. 応力・ひずみ場の解析法
- II. 疲労破壊
- III. 破壊力学
- IV. X線応力測定法

【授業の内容】

- ①基本用語と法則
- ②引張・圧縮問題
- ③応力・ひずみ場の理論的解析法
- ④応力・ひずみ場の数値的解析法
- ⑤応力・ひずみ場の実験的解析法
- ⑥まとめ1
- ⑦疲労破壊 I
- ⑧疲労破壊 II
- ⑨疲労破壊 III
- ⑩疲労破壊 IV
- ⑪破壊力学 I
- ⑫破壊力学 II
- ⑬残留応力の測定法の原理
- ⑭残留応力の測定法とその応用
- ⑮まとめ2

【学修到達目標】

- ①三軸応力状態の概念が理解できる。
- ②疲労における応力寿命の概念が理解できる。

【成績評価の方法】 課題提出(50%)、演習問題(50%)として評価する。

【教科書】 プリント配布

【参考書】

材料力学特別演習 (Seminar on Mechanics of Materials)

選択 2単位 2期 准教授 町屋 修太郎

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

材料力学特別演習は、材料力学特論に続く授業であり、各種構造物や機器の強度設計上必要となる工学の応用演習である。材料力学特論では、以下の内容を中心に講義したが、これらに関連する問題解決の解析演習を、ケーススタディーを取り入れ実施する。また、専門英語に慣れるために英語の演習問題による課題演習を行う。

- I. 応力・ひずみ場の解析法
- II. 疲労破壊 (応力寿命)
- III. 疲労破壊 (ひずみ寿命)
- IV. X線応力測定法とその応用

【授業の内容】

- ①基本演習
- ②応力寿命演習 I
- ③応力寿命演習 II
- ④応力寿命演習 III
- ⑤応力寿命演習 IV
- ⑥ひずみ寿命演習 I
- ⑦ひずみ寿命演習 II
- ⑧ひずみ寿命演習 III
- ⑨ひずみ寿命演習 IV
- ⑩破壊力学演習 I
- ⑪破壊力学演習 II
- ⑫破壊力学演習 III
- ⑬残留応力の測定法演習 I
- ⑭残留応力の測定法演習 II
- ⑮総合演習

【学修到達目標】

- ①疲労におけるひずみ寿命の概念が理解できる。
- ②応力拡大係数を説明できる。
- ③き裂進展の概念が理解できる。

【成績評価の方法】 課題提出(50%)、演習問題(50%)として評価する。

【教科書】 プリント配布

【参考書】

材料強度学特論 (Applied Strength of Materials)

選択 2単位

2期

教授 高田 健

授業時間内の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

工業における材料開発現場では、今後、従来よりもマイクロ視点での材料強度の理解が必要となる傾向にある。理解に必要な知識は結晶材料中の原子間結合状態の電子論的描写である。本講義では、電子状態を記述する量子力学の基礎とこれに基づいた結晶材料中原子の結合と材料特性を論じる。さらに、結晶材料の解析技術も論じる。

【学修到達目標】

- ① 結晶材料中原子間の結合を量子力学視点で説明できる。
- ② 結晶材料の各種特性を電子状態の視点で説明できる。
- ③ 結晶材料の解析技術を論じることができる。

【授業の内容】

- ① 量子力学における電子の描写
- ② 一粒子の波動関数
- ③ 波動関数と物理量
- ④ 中心力場の一体問題
- ⑤ 多粒子系の波動関数
- ⑥ 結晶構造
- ⑦ 結晶中原子の結合状態
- ⑧ 格子振動
- ⑨ 金属の自由電子論
- ⑩ バンド理論
- ⑪ 格子欠陥
- ⑫ 原子の構造
- ⑬ 結晶材料の解析技術 1
- ⑭ 結晶材料の解析技術 2
- ⑮ 結晶材料の解析技術 3

【成績評価の方法】 レポート(60%)、演習(40%)

【教科書】 プリント配布

【参考書】 物性論(裳華房)、量子力学(1)(裳華房)

材料強度学特別演習 (Seminar on Material Science and Engineering)

選択 2単位

3期

教授 高田 健

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

材料強度の解釈に必要な固体物性を概観する。続いて、材料強度に影響を及ぼす析出物や固溶原子の形成と存在状態、および水素脆性の基礎として金属中の水素の存在状態について論じる。最後に、これらに関する最近の論文を解説する。論文解説を通じて、材料強度に関する知識の活用方法と研究開発課題の設定手法の習得を行う。

【学修到達目標】

- ① 最近の材料強度に関する研究開発レベルについて論じることができる。
- ② 析出・固溶強化による材料強度を論じることができる。
- ③ 金属中の水素の存在状態について論じることができる。

【授業の内容】

- ① 結晶の構造と結合力
- ② 結晶の電子状態
- ③ 転位論の基礎
- ④ 転位の弾性論
- ⑤ 降伏と加工硬化
- ⑥ 固溶強化
- ⑦ 析出強化
- ⑧ 金属中の原子の拡散 1
- ⑨ 金属中の原子の拡散 2
- ⑩ 金属中の水素の存在状態 1
- ⑪ 金属中の水素の存在状態 2
- ⑫ 析出強化論文の解説 1
- ⑬ 析出強化論文の解説 2
- ⑭ 固溶強化論文の解説 1
- ⑮ 固溶強化論文の解説 2

【成績評価の方法】 レポート(40%)、演習(60%)

【教科書】 プリントと公開論文コピーの配布

【参考書】 材料強度の原子論(日本金属学会)、金属物理学序論(コロナ社)、物性論(裳華房)

環境材料工学特論 (Eco-Conscious Materials)

選択 2単位

1期

教授 徳納 一成

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

社会基盤を支える構造用金属材料の特徴である「強度」と「加工性」を具備した信頼性おける実用材料の設計のためには、「原子構造」および「結晶構造」の本質を理解したうえで材料の「変形」を支配する因子を俯瞰し、需要家のニーズに応えるべく如何なる因子を機能させていくかを念頭におかねばならない。

本講義では、原子構造、結晶構造の基本を理解したうえで「格子欠陥」の概念を学習し、これらをもとに、変形の支配因子である「転位」を力点として塑性変形を考える基礎を学習することを目的とする。加えて、格子欠陥を媒介とした「拡散」についても学び、材料の状態図、マルテンサイト変態についての基礎も理解していく。

【学修到達目標】

- ① 代表的金属材料の結晶構造について説明できる。
- ② 金属材料中の格子欠陥の役割について説明できる。
- ③ 金属材料における転位と塑性変形の関係について説明できる。
- ④ 鉄鋼の状態図の詳細が説明できる。

【成績評価の方法】 演習 (40%)、レポート (60%)

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】 金属物理学序論 (コロナ社)

【授業の内容】

- ① 原子構造
 - ② 金属の結晶構造
 - ③ 実在の金属の構造
 - ④ 格子欠陥
 - ⑤ 拡散
 - ⑥ 塑性変形
 - ⑦ 転位の基礎
 - ⑧ 転位と塑性変形
 - ⑨ 転位の観察
 - ⑩ 金属の強さ
 - ⑪ 材料の熱力学
 - ⑫ 状態図
 - ⑬ マルテンサイト変態
 - ⑭ 実用材料 (鉄鋼材料)
 - ⑮ 実用材料 (非鉄金属材料、非金属材料)
-

環境材料工学特別演習 (Seminar on Eco-Conscious Materials)

選択 2単位

2期

教授 徳納 一成

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

環境材料工学特論での基礎学習をもとに、結晶中線状格子欠陥の「転位」の挙動把握を基軸として、実用構造材料に対して「強度」と「加工性」を与えるためのスキルを、ケーススタディを交えて学習する。

【学修到達目標】

- ① ピーチとケラーの式について説明できる。
- ② 刃状転位とらせん転位の応力場について説明できる。
- ③ 転位間の相互作用について説明できる。
- ④ 金属の加工硬化について具体的例を挙げて説明できる。
- ⑤ 金属材料の強化機構について説明できる。

【授業の内容】

- ① 転位の概念
 - ② 転位の弾性論 I
 - ③ 転位の弾性論 II
 - ④ 転位にはたらく力
 - ⑤ 転位の結晶学 I
 - ⑥ 転位の結晶学 II
 - ⑦ 転位の結晶学 III
 - ⑧ 塑性変形の転位論 I
 - ⑨ 塑性変形の転位論 II
 - ⑩ 材料の強化機構 I
 - ⑪ 材料の強化機構 II
 - ⑫ 疲労と破壊の基礎
 - ⑬ ケーススタディ I
 - ⑭ ケーススタディ II
 - ⑮ ケーススタディ III
-

【成績評価の方法】 演習 (40%)、レポート (60%)

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】 入門転位論 (裳華房)

機械システム制御特論 (Mechanical Systems Control)

選択 2 単位 2 期 准教授 杉谷 啓 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

現代では、様々な機械装置が制御によって仕様要求通りの動作を実現している。大半の場合は学部にて学んだ伝達関数によってシステムを表現する古典的制御でも十分であるが、近年では相互に作用する複数のパラメータを同時に制御する多入力多出力が求められる機会が多くなっており、状態方程式を用いてシステムを表現する現代制御の考え方が重要になってきている。そこで本講義では、古典的制御の設計法とともに現代制御理論について学ぶことで現代機械システムの制御の基礎および制御機構設計法の習得することとする。

【学修到達目標】

- ①状態方程式を用いた動的システムのモデル化ができる。
- ②機械システムの安定性解析ができる。
- ③機械の基本的制御システムを設計できる。

【授業の内容】

- 1.制御の基礎
- 2.システムの状態方程式表現①
- 3.システムの状態方程式表現②
- 4.システムの伝達関数
- 5.位相面軌道
- 6.システムの安定性①
- 7.システムの安定性②
- 8.PID 制御①
- 9.PID 制御②
- 10.可制御性と可観測性①
- 11.可制御性と可観測性②
- 12.状態フィードバック制御とオブザーバ①
- 13.状態フィードバック制御とオブザーバ②
- 14.最適制御①
- 15.最適制御②

【成績評価の方法】講義での課題(50%)とレポート(20%)、期末試験(30%)の評価、*出席は欠かせない必要要件

【教科書】

【参考書】JSME テキストシリーズ「制御工学」, 「演習制御工学」, 吉川・井村著「現代制御論」昭晃堂

機械システム制御特別演習 (Seminar on Mechanical Systems Control)

選択 2 単位 3 期 准教授 杉谷 啓 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

本講義ではシミュレーションおよび設計・実装を通して機械システム制御特論および学部の講義で学んだ制御設計法の習得を目的とする。ここでは主に基本的な位置決め機構の一つである直動システムをベースにモデル化・解析・設計・実装・性能試験を通して行い、制御設計の一連の流れを学ぶ。

【学修到達目標】

- ①制御系技術文書を読むことができる。
- ②機械システムの安定性解析ができる。
- ③コンピュータを活用して機械の基本的制御システムを設計できる。

【授業の内容】

- 1.制御の理論と概要
- 2.コンピュータによる機械システムのモデル表現①
- 3.コンピュータによる機械システムのモデル表現②
- 4.コンピュータによる制御系解析①
- 5.コンピュータによる制御系解析②
- 6.コンピュータによる制御系設計
- 7.コンピュータを用いたサーボ制御
- 8.直動システムのモデリング・解析①
- 9.直動システムのモデリング・解析②
- 10.PID 制御による直動システムのサーボ制御
- 11.最適制御による直動システムのサーボ制御
- 12.倒立振子のモデリング・解析
- 13.倒立振子を用いた総合実習①
- 14.倒立振子を用いた総合実習②
- 15.倒立振子を用いた総合実習③

【成績評価の方法】講義での課題(60%)とレポート(40%)の評価、*出席は欠かせない必要要件

【教科書】

【参考書】

溶融成形加工学特論 (Casting and Solidification Processing)

選択 2 単位

1 期

教授 前田 安郭

授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

ものづくりの基本となる金属の溶融凝固現象を主軸として、溶融及び凝固現象を用いた成形加工法の特徴、技術、理論について学ぶ。加えて、その周辺の加工技術や支援ツールについても学習する。

【学習到達目標】

- ① 鑄造 CAE を概説できる。
- ② 鑄造 CAE の伝熱・凝固解析を理解している。
- ③ 鑄造 CAE の湯流れ解析を理解している。

【授業の内容】

- ① 鑄造 CAE とは
- ② 表面積、体積、モジュラスなど基本情報計算
- ③ 熱伝導解析の基礎
- ④ 熱伝導の数値解析
- ⑤ 凝固解析の基礎
- ⑥ 凝固の数値解析
- ⑦ 引け巣の推定
- ⑧ ケーススタディ 1
- ⑨ 流動の基礎方程式
- ⑩ 通気性物質内流れの解析
- ⑪ 自由表面を伴う流れ解析の基礎
- ⑫ 表面張力と背圧
- ⑬ 熱を伴う流動の解析
- ⑭ ケーススタディ 2
- ⑮ 総合討議

【成績評価の方法】 講義での課題(80%)とレポート(20%)の評価

【教科書】 コンピュータ伝熱・凝固解析入門—鑄造プロセスへの応用 大中逸雄著(丸善)※絶版に付きコピー配布

【参考書】 鑄造工学、金属凝固に関する書籍、学術雑誌

溶融成形加工学特別演習 (Seminar on Casting and Solidification Processing)

選択 2 単位

2 期

教授 前田 安郭

授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

ものづくりの基本となる金属の溶融凝固現象を主軸として、溶融及び凝固現象を用いた成形加工法、周辺技術、支援ツールの現状と動向について輪講と演習を交えて学習する。

【学習到達目標】

- ① 押湯方案を説明できる。
- ② 砂型鑄物鑄造方案を説明できる。
- ③ 鑄造 CAE のシミュレーション結果を説明できる。

【授業の内容】

- ① 鑄造方案とは
- ② 湯口設計
- ③ 鑄込み時間と湯流れ
- ④ 押湯方案
- ⑤ 凝固時間と引け巣
- ⑥ 鑄鉄鑄物の概要
- ⑦ 砂型鑄造法の概要
- ⑧ 生型鑄造とその他の砂型鑄造
- ⑨ 鑄鉄鑄物の方案
- ⑩ 鑄造 CAE 演習 (1)
- ⑪ 鑄造 CAE 演習 (2)
- ⑫ 鑄造 CAE 演習 (3)
- ⑬ 鑄造 CAE 演習 (4)
- ⑭ 鑄造 CAE 演習 (5)
- ⑮ 鑄込み演習
- ⑯ 鑄物観察とシミュレーションによる検証

【成績評価の方法】 講義での課題(80%)とレポート(20%)の評価

【教科書】 学術雑誌

【参考書】 鑄造工学、金属凝固に関する書籍、学術雑誌

先端加工学特論 (Progress Machining)

選択 2 単位 2 期 教授 田中 浩司

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

機械部品の生産は、今後ますます精密化と資源・エネルギー利用の高効率化が求められる情勢にある。このため、切削加工に代表される除去加工と、様々な接合原理による付加工が用いられる。

本講義では切削加工と接合加工を中心として、その原理と実施に関わる基本知識を解説する。特に加工品質に大きく影響する被加工材の挙動として、前者では加工変質層、後者では熱影響部の本質を理解することに主眼を置く。

【学修到達目標】

2 次元切削理論を理解し、切削力に関わる各加工条件の影響を説明できる。

切削で材料が受ける歪み・熱が過大になる要因を知り、加工変質層の微視的特徴と長短所を説明できる。

一般的な溶接部の組織分布と靱性の関係、およびこれにもとづく靱性確保のための方策を理解している。

- ① ろう付け面、拡散接合面の品質に関わる諸現象（溶質拡散、界面移動、酸化）とパラメータ（圧力、温度、表面粗さ等）を説明できる。

【成績評価の方法】 提出された課題レポートの内容により評価する

【教科書】 講義資料の配布およびダウンロード

【参考書】 機械加工学の基礎（森北出版）など

【授業の内容】

- ① 近年の生産技術における先端加工
- ② せん断変形と切削力 -2 次元切削理論-
- ③ 被削性に影響する因子 -切削の実際-
- ④ 切削温度
- ⑤ 工具損傷と加工変質層
- ⑥ 関連知識：マルテンサイト変態・高温酸化
- ⑦ 論文研究 -加工変質層は本当に厄介者か？-
- ⑧ 自動車に必要な接合技術の開発状況
- ⑨ レーザー加工の原理と特徴・応用
- ⑩ 入熱・溶融・凝固偏析と欠陥
- ⑪ 演習：熱間鍛造組織にみるフェライト組織
- ⑫ 溶接金属部/熱影響部の組織と靱性
- ⑬ ろう付け -多元素拡散による界面移動-
- ⑭ 拡散接合の基礎と実際
- ⑮ 総括・課題説明・Q&A

先端加工学特別演習 (Seminar on Progress Machining)

選択 2 単位 3 期 教授 田中 浩司

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

機械部品の加工技術は、新たな素材の登場や迅速化・精密化の要求に合わせて進化している。今後の機能部品の創出や部品統合化に向けては、歩留まりやコストが最善となるよう加工法を設計する必要がある。

本演習では、個々の材料の切削や接合において、どんな課題に直面しているかを解説し、技術論文を題材とした事例学習を行う。また産業界で、加熱をともなう加工現象の解析に用いられる実験的手法や、シミュレーション技術を体験することを目的に、実際に機器を用いた演習を行う。

【学修到達目標】

難削性のもととなる材料ごとの要因を理解している。

集中熱源で加熱したワークの温度分布をシミュレーションするソフトウェアの仕組みが分かる。

- ① 溶接部の熱履歴によってフェライト主体の組織が形状を変え、脆化の原因を生み出すことを理解する。そのための再現実験手法を習得する。

【授業の内容】

- ① 切削加工をめぐる最近の取り組み
- ② 難削材の加工(1)：加工硬化
- ③ 難削材の加工(2)：焼付き
- ④ 難削材の加工(3)：断続切削 他
- ⑤ 演習：熱影響部(HAZ)再現試験(1)
- ⑥ 演習：熱影響部(HAZ)再現試験(2)
- ⑦ 演習：熱影響部(HAZ)再現試験(3)
- ⑧ 接合の課題(1)：スポット溶接
- ⑨ 接合の接合(2)：Fe/Al 異材接合
- ⑩ 接合の接合(3)：電子部品の耐熱接合
- ⑪ 集中熱源加熱シミュレーション(1)
- ⑫ 集中熱源加熱シミュレーション(2)
- ⑬ 集中熱源加熱シミュレーション(3)
- ⑭ 集中熱源加熱シミュレーション(4)
- ⑮ A4 一枚のレポートとは・課題説明

【成績評価の方法】 提出された演習レポートにより評価する

【教科書】 講義資料の配布およびダウンロード

【参考書】 難削材・新素材の切削加工ハンドブック（工業調査会）など

航空熱流体力学特論 (Advanced Thermofluid Dynamics)

選択 2単位

1期

教授 白石 裕之

授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

学部(機械工学科)の開講科目「航空熱流体力学／航空宇宙工学」と関連して、宇宙機・航空機の熱流体・音響現象、特に推進システムの最新の動向について理解を深めてもらうため、まずは気体の圧縮性についての基本的事項を整理する。その上で、最新の動向や具体的な工学応用例について論じる。

【学習到達目標】

- ① 機械工学に必要なエネルギーについての大分類ができる。
- ② 航空機と宇宙機の違いを理解し、具体例を正確に挙げることができる。
- ③ 航空騒音の原因および対策について簡単に述べるができる。
- ④ 非化学(非燃焼)推進システムの具体例を挙げることができる。

【授業の内容】

- ① エネルギーの分類
- ② 航空熱力学／航空宇宙工学の概要
- ③ 航空機と宇宙機
- ④ 化学エンジンと非化学エンジン
- ⑤ 打ち上げロケットと軌道
- ⑥ 海外出張報告・最新トピックの紹介など(1)
- ⑦ 空力音の基礎と航空騒音
- ⑧ 衝撃波・爆轟波と原子力発電
- ⑨ 爆轟波の推進システムへの応用と問題点
- ⑩ 光エネルギーの特徴と利用法
- ⑪ 光宇宙推進システムの概要と分類
- ⑫ 電磁波宇宙推進システムの概要と動向
- ⑬ その他の先端宇宙推進システムの動向
- ⑬ 海外出張報告・最新トピックの紹介など(2)
- ⑭ まとめ・課題発表
- ⑮ 課題精説

【成績評価の方法】 平常点(小テスト・受講態度など) 50%及び課題提出 50%による総合評価

【教科書】 なし

【参考書】 特に指定しない。

航空熱流体力学特別演習 (Seminar on Thermofluid Dynamics)

選択 2単位

2期

教授 白石 裕之

授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

航空熱流体力学特論と関連して、航空宇宙工学のトピック紹介およびそれに関する具体的な問題を演習する。その上で、航空宇宙技術を念頭に置いた工学用語についての確認を行う。なお、宇宙機・航空機システムなどの動向について理解を深めてもらうため、希望に応じて英文購読やコンピュータ演習の実施も考えている。

【学習到達目標】

- ① 科学技術英語について理解し、具体的な事例に対して英文和訳ができる。
- ② 航空宇宙工学に特有の技術英語を有するパンフレットやマニュアルを理解できる。
- ③ 航空宇宙シミュレーションの例について述べ、その必要性について簡単に述べるができる。

【授業の内容】

- ① 航空宇宙の最新動向と演習テーマの選定(1)
- ② 航空宇宙の最新動向と演習テーマの選定(2)
- ③ 航空宇宙工学トピック紹介及び演習(1)
- ④ 航空宇宙工学トピック紹介及び演習(2)
- ⑤ 航空宇宙工学トピック紹介及び演習(3)
- ⑥ 航空宇宙工学トピック紹介及び演習(4)
- ⑦ 航空宇宙工学トピック紹介及び演習(5)
- ⑧ 航空宇宙工学購読テーマの選定(1)
- ⑨ 航空宇宙工学購読テーマの選定(2)
- ⑩ 航空宇宙工学関連講読(1)
- ⑪ 航空宇宙工学関連講読(2)
- ⑫ 航空宇宙工学関連講読(3)
- ⑬ 航空宇宙工学関連講読(4)
- ⑭ 航空宇宙工学関連講読(5)
- ⑮ まとめ・課題精説

【成績評価の方法】 英文など講読 40%および航空宇宙工学関連の演習 60%による総合評価

【教科書】 なし

【参考書】 なし

熱流体シミュレーション特論 (Heat Transfer Simulation)

選択 2 単位 2 期 准教授 坪井 涼

授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

熱流体シミュレーションの基礎となる、熱工学・流体工学の支配方程式の基礎から復習を行い、数値計算法によるシミュレーションの方法を学ぶ。また、自作のプログラムおよび商用ソフトウェアを用い、実際にシミュレーションを行う手法を学び、その手法について知識を深める。

【学習到達目標】

- ⑤ 数値計算の概要を説明できる。
- ⑥ 熱流体工学で用いられる基礎方程式を理解している。
- ⑦ 差分法を用いたプログラムが作成できる。

【授業の内容】

- ① 数値計算・計算工学の概要 (1)
- ② 数値計算・計算工学の概要 (2)
- ③ 伝熱工学で用いる支配方程式 (1)
- ④ 伝熱工学で用いる支配方程式 (2)
- ⑤ 流体工学で用いる支配方程式 (1)
- ⑥ 流体工学で用いる支配方程式 (2)
- ⑦ 数値計算の基礎 (1)
- ⑧ 数値計算の基礎 (2)
- ⑨ 熱伝導方程式を用いたシミュレーション (1)
- ⑩ 熱伝導方程式を用いたシミュレーション (2)
- ⑪ レイノルズ方程式を用いたシミュレーション (1)
- ⑫ レイノルズ方程式を用いたシミュレーション (2)
- ⑬ ナビエ・ストークス方程式を用いたシミュレーション (1)
- ⑭ ナビエ・ストークス方程式を用いたシミュレーション (2)
- ⑮ 総括

【成績評価の方法】 演習・レポート (100%)

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】

熱流体シミュレーション特別演習 (Seminar on Heat Transfer Simulation)

選択 2 単位 3 期 准教授 坪井 涼

授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

熱流体シミュレーション特論で講義した内容に関する演習を行い、理解を深め、自ら課題を解決する能力を養う。また、最近の学術的研究資料の輪講を適宜行う。

【学習到達目標】

- ① マルチフィジックスについて説明ができる。
- ② 熱流体シミュレーションと実験の関係について説明ができる。
- ③ 学术界・産業界で用いられている最先端の熱流体シミュレーションについて説明ができる。

【授業の内容】

- ① 数値計算 (シミュレーション) の基礎
- ② マルチフィジックス現象のシミュレーション (1)
- ③ マルチフィジックス現象のシミュレーション (2)
- ④ 熱流体シミュレーションの実例 (1)
- ⑤ 熱流体シミュレーションの実例 (2)
- ⑥ 熱流体シミュレーションの実例 (3)
- ⑦ 熱流体シミュレーションの実例 (4)
- ⑧ 熱流体工学におけるシミュレーションと実験の関係 (1)
- ⑨ 熱流体工学におけるシミュレーションと実験の関係 (2)
- ⑩ 熱流体工学におけるシミュレーションと実験の関係 (3)
- ⑪ 熱流体工学におけるシミュレーションと実験の関係 (4)
- ⑫ 熱流体シミュレーションの最先端 (1)
- ⑬ 熱流体シミュレーションの最先端 (2)
- ⑭ 熱流体シミュレーションの最先端 (3)
- ⑮ 総括

【成績評価の方法】 演習・レポート (100%)

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】

環境流体力学特論 (Environmental Fluid Dynamics)

選択 2 単位 1 期 教授 神崎 隆男 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

大気・海洋中や工業装置内の流動現象は、乱流である場合が多く、流体中で物質移動・熱移動・化学反応を伴うケースが多い。

本講義では、学部で学習した流体力学をもとに、時間的・空間的に変化する乱流現象の工学的な取扱い方を輸送現象の観点から学習する。

講義の前半では、基礎的な乱流輸送現象・乱流理論等について学習し、後半では、実用的な実験手法やデータ解析手法、数値予測手法等を学習する。適宜、受講生のプレゼンテーション、演習、レポート提出を実施する。

【学修到達目標】

- ①運動量・熱・物質の輸送方程式を理解できる。
- ②連続の式と Navier-Stokes 方程式を導出できる。
- ③Navier-Stokes 方程式から Reynolds 方程式を導出できる。
- ④乱流モデルを説明できる。

【成績評価の方法】 演習・レポート提出(40%)とプレゼンテーション内容(60%)

【教科書】 適宜プリントを配付

【参考書】 機械系講義シリーズ⑬流体力学の基礎(1) 中林功一 他 コロナ社
機械系講義シリーズ⑭流体力学の基礎(2) 中林功一 他 コロナ社
Transport Phenomena R.B.Bird 他 WILEY
Turbulent Flows Stephen B. Pope, Cambridge University Press

【授業の内容】

- ①輸送現象 1 (運動量輸送)
- ②輸送現象 2 (熱輸送)
- ③輸送現象 3 (物質輸送)
- ④輸送現象に関する演習
- ⑤乱流現象 1
- ⑥乱流現象 2
- ⑦乱流理論
- ⑧乱流現象に関する演習
- ⑨実験手法概説 1
- ⑩実験手法概説 2
- ⑪実験手法・実験データ解析に関する演習
- ⑫数値解析手法概説 1
- ⑬数値解析手法概説 2
- ⑭数値解析手法に関する演習
- ⑮環境流体力学全般に関する演習

環境流体力学特別演習 (Seminar on Environmental Fluid Dynamics)

選択 2 単位 2 期 教授 神崎 隆男 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

環境流体力学特論で学習した内容に基づき、学術雑誌等より、環境流体力学に関するトピックスを選定し、各回毎に受講学生に割り当てる。担当の学生は、演習として、内容に関するプレゼンテーションを行い、その内容について全員で討議を行う。専門的・技術的な内容について適宜、講義を行う。

【学修到達目標】

- ①乱流の特徴を説明できる。
- ②乱流の拡散性を説明できる。
- ③乱流の時間スケール・長さスケールを説明できる。
- ④乱流輸送現象を説明できる。

【授業の内容】

- ①乱流輸送現象
- ②気相中の乱流輸送現象 1
- ③気相中の乱流輸送現象 2
- ④気相中の乱流輸送現象 3
- ⑤液相中の乱流輸送現象 1
- ⑥液相中の乱流輸送現象 2
- ⑦液相中の乱流輸送現象 3
- ⑧混相流中の乱流輸送現象 1
- ⑨混相流中の乱流輸送現象 2
- ⑩混相流中の乱流輸送現象 3
- ⑪混相流中の乱流輸送現象 4
- ⑫反応乱流中の輸送現象 1
- ⑬反応乱流中の輸送現象 2
- ⑭反応乱流中の輸送現象 3
- ⑮総合討議

【成績評価の方法】 レポート提出 (40%) とプレゼンテーション内容 (60%)

【教科書】 適宜プリントを配付

【参考書】 A First Course in Turbulence Henk Tennekes, John L. Lumley, The MIT Press
Turbulent Flows Stephen B. Pope, Cambridge University Press

トライボロジー設計学特論 (Tribological Designing)

選択 2単位 2期 講師 宮本 潤示 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

トライボロジーとは、摺動部における摩擦・摩耗潤滑を総合的にとらえた学問と技術である。機械システムには必ず摺動部が存在し、適切な状態で運転をしないと、効率の低下ばかりでなく機械システムそのものの破損に至る場合もある。また、機械システムの省エネルギー化や地球環境への負担低減などの製品への付加価値を高める即効的な技術として考えられる。

本特論では摺動部の適切な設計能力を養うために、摩擦・摩耗・潤滑の基礎について適宜受講者のプレゼンテーションを交えて学ぶ。

【学修到達目標】

- ① 固体表面の接触状態について説明できる。
- ② 摩擦および摩耗の理論を説明できる。
- ③ ストライベック線図を説明できる。
- ④ 流体潤滑、弾性流体潤滑を説明できる。

【授業の内容】

- ① トライボロジーとは
- ② 表面形状および粗さ曲線
- ③ 表面の性質、固体表面の接触
- ④ 固体表面の摩擦 (1)
- ⑤ 固体表面の摩擦 (2)
- ⑥ 固体表面の摩擦 (3)
- ⑦ 固体表面の摩耗 (1)
- ⑧ 固体表面の摩耗 (2)
- ⑨ 流体潤滑と弾性流体潤滑 (1)
- ⑩ 流体潤滑と弾性流体潤滑 (2)
- ⑪ 境界潤滑と混合潤滑 (1)
- ⑫ 境界潤滑と混合潤滑 (2)
- ⑬ 潤滑剤
- ⑭ トライボロジーの応用 (1)
- ⑮ トライボロジーの応用 (2)

【成績評価の方法】 演習・レポート (100%)

【教科書】 基礎から学ぶトライボロジー： 橋本巨 森北出版

【参考書】 はじめてのトライボロジー： 佐々木信也、他 講談社

トライボロジー設計学特別演習 (Seminar on Tribological Designing)

選択 2単位 3期 講師 宮本 潤示 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

トライボロジー設計学特論で学習した内容に基づき、表面の分析法や表面改質法などの応用について学ぶ。内容については受講者のプレゼンテーションを交えて学習を行う。また、最近のトライボロジー研究の資料の輪講を行う。

【学修到達目標】

- ① 表面観察分析法について説明できる。
- ② 表面化学分析法について説明できる。
- ③ 表面改質法について説明できる。

【授業の内容】

- ① トライボロジーの基礎
- ② 表面観察分析法 (1)
- ③ 表面観察分析法 (2)
- ④ 表面観察分析法 (3)
- ⑤ 表面化学分析法 (1)
- ⑥ 表面化学分析法 (2)
- ⑦ 表面化学分析法 (3)
- ⑧ 表面化学分析法 (4)
- ⑨ 摩擦摩耗試験法
- ⑩ トライボマテリアルと表面改質法 (1)
- ⑪ トライボマテリアルと表面改質法 (2)
- ⑫ トライボマテリアルと表面改質法 (3)
- ⑬ 近年のトライボロジー研究 (1)
- ⑭ 近年のトライボロジー研究 (2)
- ⑮ 近年のトライボロジー研究 (3)

【成績評価の方法】 演習・レポート (100%)

【教科書】 基礎から学ぶトライボロジー： 橋本巨 森北出版

【参考書】 はじめてのトライボロジー： 佐々木信也、他 講談社

アクチュエータ工学特論 (Actuator Engineering)

選択 2 単位 2 期 講師 萩野 将広 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

機械の駆動源には様々なアクチュエータが使われている。そのうち、まず、油圧式・空圧式・電気式アクチュエータを取上げて概論し、次いで、特に電気式アクチュエータについて詳述する。そして電源としての制御装置についても触れる。

電気式アクチュエータのうち今日最も多用されている、電磁力によって動力を生ずる電動機はモータと愛称されているが、数Wの電池駆動のマイクロモータから、家電・OA用の小型モータ、更には工業用の大型誘導電動機まで存在し、これらについて講述を行う。

【学習到達目標】

- ① DCモータの電子制御について説明できる。
- ② DCモータの電子制御による交流運転について説明できる。
- ③ インダクションモータの電子制御について説明できる。

【成績評価の方法】小テスト (30%) とレポート (70%) による評価

【教科書】プリント

【参考書】

【授業の内容】

- ① 油圧・空圧・電気式アクチュエータ概説
 - ② 特徴と応用
 - ③ 特徴と応用
 - ④ 電気式アクチュエータ (電動機) 概説
 - ⑤ 電動機に必要な電磁気学
 - ⑥ 同上
 - ⑦ DCモータの設計法
 - ⑧ DCモータの設計演習
 - ⑨ 各種モータの特徴 (ブラシレスDCモータほか)
 - ⑩ 同上
 - ⑪ 同上
 - ⑫ 特殊モータ
 - ⑬ モータの実用例
 - ⑭ モータの制御電源
 - ⑮ 同上
-

アクチュエータ工学特別演習 (Seminar on Actuator Engineering)

選択 2 単位 3 期 講師 萩野 将広 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

現在多くの機械の中にさまざまなアクチュエータが使用されている。これらのアクチュエータの内、精密制御など機械加工等に利用されているものを中心にアクチュエータの応用について理論と応用について学習する。

【学習到達目標】

- ① 静電アクチュエータについて説明できる。
- ② 球面電磁モータについて説明できる。
- ③ 超音波モータについて説明できる。
- ④ 光アクチュエータについて説明できる。

【授業の内容】

- ① 微小変位の検出方法 (1)
 - ② 微小変位の検出方法 (2)
 - ③ アクチュエータの駆動・制御方法 (1)
 - ④ アクチュエータの駆動・制御方法 (2)
 - ⑤ 動力的制御 (1)
 - ⑥ 動力的制御 (2)
 - ⑦ 動力的制御 (3)
 - ⑧ フィードバック制御 (1)
 - ⑨ フィードバック制御 (2)
 - ⑩ アクチュエータの応用 (1)
 - ⑪ アクチュエータの応用 (2)
 - ⑫ アクチュエータの応用 (3)
 - ⑬ アクチュエータの応用 (4)
 - ⑭ アクチュエータの応用 (5)
 - ⑮ アクチュエータの応用 (6)
-

【成績評価の方法】小テスト (30%) とレポート (70%) による評価

【教科書】プリント

【参考書】

強度設計学特論 (Strength Design)

選択 2 単位 1 期 教授 西脇 武志

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

機械部品の設計においては、CAD と容易に連携できる線形の構造解析が多く活用されている。これらの設計手段を有効に活用するためには、応力やひずみなどの理解が不可欠である。その基礎となっている固体力学を学び、構造解析の理解を深める。

【学習到達目標】

- ① 応力の座標変換ができる。
- ② 応力の不変量、ミーゼス応力が説明できる。
- ③ ひずみについて説明できる。
- ④ 構成式について説明できる。
- ⑤ 仮想仕事の原理について説明できる。

【授業の内容】

- ① CAE による部品の強度設計
- ② 力学、数学の基礎
- ③ コーシーの式
- ④ 応力の定義
- ⑤ 力のつりあい
- ⑥ 応力の座標変換
- ⑦ 応力の不変量
- ⑧ 色々な応力
- ⑨ 変位と変形
- ⑩ 変位勾配
- ⑪ 微小ひずみ、有限ひずみ
- ⑫ 応力とひずみの関係（構成式）
- ⑬ エネルギー
- ⑭ 仮想仕事の原理
- ⑮ まとめと総合演習

【成績評価の方法】 レポートの提出

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】 講談社 はじめての固体力学 有光隆

強度設計学特別演習 (Seminar on Strength Design)

選択 2 単位 2 期 教授 西脇 武志

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

強度設計学特論で学習した固体力学が、CAE のソフトウェアでどのように利用されているかを学ぶ。また、ソフトウェアの実習を通じて、部品の強度の設計、評価方法を学ぶ。

【学習到達目標】

- ① 有限要素法の仕組みが分かる。
- ② CAE ソフトウェアの基本的な使い方が理解できる。
- ③ CAE ソフトウェアによる線形静解析ができる。

【授業の内容】

- ① 弾性力学の基礎
- ② 形状関数
- ③ 1次元問題と有限要素法
- ④ 2次元問題と有限要素法 1
- ⑤ 2次元問題と有限要素法 2
- ⑥ 有限要素法の演習
- ⑦ アイソパラメトリック要素
- ⑧ ソフトウェアの操作方法
- ⑨ ソフトウェアを用いた構造解析の演習 1
- ⑩ ソフトウェアを用いた構造解析の演習 2
- ⑪ ソフトウェアを用いた構造解析の演習 3
- ⑫ ソフトウェアを用いた構造解析の演習 4
- ⑬ ソフトウェアを用いた構造解析の演習 5
- ⑭ ソフトウェアを用いた構造解析の演習 6
- ⑮ まとめと総合演習

【成績評価の方法】 レポートの提出

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】 日刊工業新聞社 CAE のための材料力学 遠田治正

変形加工学特論 (Sheet Metal Forming)

選択 2 単位 1 期 教授 蔦森 秀夫 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

自動車は省燃費と衝突安全性の相反する課題を克服するべく、自動車ボディの構成・材料が大きく変わり、グローバルで激しく競争している。一部の高級車では構造部材として炭素繊維強化プラスチックが採用され、量販車であっても 1300MPa 級程度の高張力鋼板の採用も当たり前になっている。本講義では、自動車ボディを構成する高張力鋼板や軟鋼板などに求められる性能やプレス成形の難しさを理解するために必要な知識について解説する。近年のプレス技術に不可欠なプレス成形シミュレーションの利用および研究のために必要な基本知識と弾塑性力学について学ぶ。

【学習到達目標】

- ① 応力テンソルを理解し応力・ひずみの座標変換ができる。
- ② 弾性変形および塑性変形について説明できる。
- ③ 塑性ポテンシャルと関連流動則を説明できる。
- ④ 板材成形の異方性について説明できる。
- ⑤ Hill の局部くびれ理論に基づき、板のくびれ方向を計算できる。

【成績評価の方法】 レポートの提出

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】 共立出版 弾塑性力学の基礎 吉田総仁

【授業の内容】

- ① 自動車ボディプレス部品の成形シミュレーション
- ② 材料の塑性変形挙動
- ③ 単純な応力状態における弾塑性問題
- ④ 2次元応力テンソル
- ⑤ ひずみテンソルと座標変換
- ⑥ 降伏条件
- ⑦ 応力ひずみ解析の基礎方程式
- ⑧ ひずみ増分理論と全ひずみ理論
- ⑨ 加工硬化の表現
- ⑩ 塑性ポテンシャルと関連流動則
- ⑪ 弾塑性変形に関するドラッカーの仮説と最大塑性仕事の原理
- ⑫ 薄板の塑性不安定問題
- ⑬ 異方性降伏条件
- ⑭ 2軸応力下の不安定
- ⑮ まとめと総合演習

変形加工学特別演習 (Seminar on Sheet Metal Forming Simulation)

選択 2 単位 2 期 教授 蔦森 秀夫 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

本演習は変形加工学特論の内容を受けて、プレス成形シミュレーションソフトを実際に使ってみる。材料特性、工具の形状、工具の動き、などの条件を入力し、その解析結果を発表し、議論する。解析条件や材料特性値を変更してその影響を確認する。

【学習到達目標】

- ① 動的陽解法有限要素ソフト LS-DYNA の基本的な使い方を理解し、簡単なキーワード入力ができる。
- ② 適切なモデルの作成とメッシュ分割ができる。
- ③ 解析を通じて材料特性と異方性の関係について説明できる。
- ④ 解析を通じてスプリングバックと材料特性の関係、およびプレス条件の関係について説明できる。
- ⑤ 解析を通じて歩留まりとプレス条件の関係について説明できる。

【授業の内容】

- ① 解析目的の理解とソフトウェア操作方法
- ② 引張試験モデルの解析 1
- ③ 引張試験モデルの解析 2
- ④ 引張試験モデルの解析 3
- ⑤ 引張試験モデルの解析 4
- ⑥ 引張試験モデルのプレゼンテーション
- ⑦ ハット絞りモデルのスプリングバック解析 1
- ⑧ ハット絞りモデルのスプリングバック解析 2
- ⑨ ハット絞りモデルのスプリングバック解析 3
- ⑩ ハット絞りモデルのスプリングバック解析 4
- ⑪ ハット絞りモデルのプレゼンテーション
- ⑫ 歩留まり検討モデルの解析 1
- ⑬ 歩留まり検討モデルの解析 2
- ⑭ 歩留まり検討モデルの解析 3
- ⑮ 歩留まり検討モデルのプレゼンテーション

【成績評価の方法】 解析内容のプレゼンテーションにより評価する

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】

変形解析シミュレーション特論 (Deformation Analysis Simulation)

選択 2 単位 1 期 教授 小森 和武 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

材料力学や材料加工の分野で広く用いられている、弾性、弾塑性そして剛塑性有限要素法の基礎である弾塑性力学の基礎を学習する。

【学修到達目標】

- ①日本語の論文を読める。
- ②総和規約を理解している。
- ③テンソルを理解している。
- ④テンソル表記の式を変形できる。

【授業の内容】

- ① 弾塑性変形
- ② 総和規約
- ③ ベクトル
- ④ テンソル
- ⑤ ひずみ
- ⑥ 応力
- ⑦ フックの法則
- ⑧ ミーゼスの降伏関数
- ⑨ ヒルの降伏関数
- ⑩ ドラッカーの仮説
- ⑪ 相当応力と相当ひずみ
- ⑫ プラントルーロイスの式
- ⑬ レビミーゼスの式
- ⑭ 弾性体の変分原理
- ⑮ 塑性体の変分原理

【成績評価の方法】 レポート (100%)

【教科書】 富田佳宏著 弾塑性力学の基礎と応用 森北出版

【参考書】 弾性力学及び塑性力学に関する本

変形解析シミュレーション特別演習 (Seminar on Deformation Analysis Simulation)

選択 2 単位 2 期 教授 小森 和武 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

弾塑性力学の基礎である連続体力学の基礎を演習により学習する。

【学修到達目標】

- ①英語の専門用語を理解している。
- ②英語の教科書を理解している。
- ③英語の演習問題を理解している。
- ④英語の演習問題を解ける。

【授業の内容】

- ① Mathematical Foundations
- ② Mathematical Foundations
- ③ Mathematical Foundations
- ④ Analysis of Stress
- ⑤ Analysis of Stress
- ⑥ Deformation and Strain
- ⑦ Deformation and Strain
- ⑧ Motion and Flow
- ⑨ Motion and Flow
- ⑩ Fundamental Laws of Continuum Mechanics
- ⑪ Fundamental Laws of Continuum Mechanics
- ⑫ Linear Elasticity
- ⑬ Linear Elasticity
- ⑭ Plasticity
- ⑮ Plasticity

【成績評価の方法】 レポート (100%)

【教科書】 George E. Mase 著 Continuum Mechanics McGraw-Hill 社

【参考書】 連続体力学に関する本

機械システム材料学特論 (Material for Mechanical System)

選択 2単位 2期 准教授 吉田 昌史

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

機械、構造物を構成する材料は、種々のシステムの構成要素として位置づけられる。このため、システムの立場から材料をとらえることが重要となる。この講義では、機械システムに要求される材料の性質を学び、材料の性質が実際にどのような工業材料に利用され、活用されているのかを学ぶ。

【学修到達目標】

- ①機械システムのための材料の重要性、利用分野を理解している
- ②材料の物理的・化学的性質を理解している
- ③材料の機械的性質を理解している
- ④鉄鋼、非鉄金属、無機・有機材料の特徴を理解し、設計や加工などに利用できる

【授業の内容】

- ①材料の目的と機能
- ②材料の加工法 (1)
- ③材料の加工法 (2)
- ④材料の物理的性質 (1)
- ⑤材料の物理的性質 (2)
- ⑥材料の化学的性質 (1)
- ⑦材料の化学的性質 (2)
- ⑧金属材料の基礎 (1)
- ⑨金属材料の基礎 (2)
- ⑩工業材料の機械的性質 (1)
- ⑪工業材料の機械的性質 (2)
- ⑫鉄鋼材料
- ⑬非鉄材料
- ⑭無機材料
- ⑮有機材料

【成績評価の方法】課題レポート (100%)

【教科書】適宜プリントを配布

【参考書】W. D. キャリスター著 材料の科学と工学 培風館

[1] 材料の微細構造 [2] 金属材料の力学的性質 [3] 材料の物理的・化学的性質 [4] 材料の構造・製法・設計

機械システム材料学特別演習 (Seminar on Material for Mechanical System)

選択 2単位 3期 准教授 吉田 昌史

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

機械システム材料学特論で学んだ内容を基礎とし、論文輪読を通して理解を深める。

【学修到達目標】

- ①文献調査内容を理解し、正しく説明できる。
- ②最近の研究開発事例についての知識を持っている。

【授業の内容】

- ①材料と加工技術に関する演習
- ②材料の加工法に関する演習 (1)
- ③材料の加工法に関する演習 (2)
- ④材料の物理的性質に関する演習 (1)
- ⑤材料の物理的性質に関する演習 (2)
- ⑥材料の化学的性質に関する演習 (1)
- ⑦材料の化学的性質に関する演習 (2)
- ⑧金属材料の基礎に関する演習 (1)
- ⑨金属材料の基礎に関する演習 (2)
- ⑩工業材料の機械的性質に関する演習 (1)
- ⑪工業材料の機械的性質に関する演習 (2)
- ⑫鉄鋼材料に関する演習
- ⑬非鉄材料に関する演習
- ⑭無機材料に関する演習
- ⑮有機材料に関する演習

【成績評価の方法】課題レポート (100%)

【教科書】適宜プリントを配布

【参考書】W. D. キャリスター著 材料の科学と工学 培風館

[1] 材料の微細構造 [2] 金属材料の力学的性質 [3] 材料の物理的・化学的性質 [4] 材料の構造・製法・設計

信号処理特論 (Signal Processing)

選択 2 単位 1 期 教授 大嶋 和彦 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

自動制御に関連する技術のうち、観測信号を処理して雑音を除去する技術や、予備実験から得られるデータを統計的に処理して制御対象の数式モデルの近似式を作成する技術は、非常に重要なものである。これらの基礎となる信号処理を講義する。

はじめに、連続時間信号のもつ周波数成分を解析する方法を述べ、それに基づいて希望する周波数特性をもつアナログフィルタの設計方法を説明する。

次に、時系列信号（離散時間データ）を用いた周波数解析（離散フーリエ変換）を学ぶ。さらに、連続時間信号をサンプルし、それを復元する際に生じる現象を述べ、その注意事項を説明する。

【学修到達目標】

- ①正弦波信号の直交性が説明できる。
- ②フーリエ級数展開の意義が説明できる。
- ③矩形波信号をフーリエ級数展開できる。
- ④エリアシングについて説明できる。
- ⑤デジタル信号処理の有効性が説明できる。

【成績評価の方法】 中間レポート（30%）、期末レポート（70%）

【教科書】

【参考書】 岩田彰編著「デジタル信号処理」コロナ社、浜田望著「よくわかる信号処理」オーム社

信号処理特別演習 (Seminar on Signal Processing)

選択 2 単位 2 期 教授 大嶋 和彦 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

序盤では制御工学特論で学んだ内容を制御系設計用 CAD である MATLAB/SIMULINK を用いて実際に信号処理を行ない、その内容を確認する。

中盤では離散時間信号（時系列）処理のためのシステムの表現方法を解説する。また、終盤では希望する入出力特性を持つデジタルフィルタの設計法を解説する。これらの解説の際には、序盤と同様に MATLAB/SIMULINK を利用して演習を行い、その有効性を確認する。

入出力信号からシステムの特性を推定するための最小二乗法についても演習を交えて簡単に解説する。

【学修到達目標】

- ①時系列データを FFT 処理により周波数成分に変換できる。
- ②任意の周波数の正弦波形が作成できる。
- ③FFT 処理における時系列信号のデータ数とサンプリング周波数との関係を説明できる。
- ④バンドパスフィルタを作成できる。
- ⑤バンドパスフィルタを用いてノイズ除去ができる。

【成績評価の方法】 レポート評価

【教科書】

【参考書】 岩田彰編著「デジタル信号処理」コロナ社、小林一行著「MATLAB ハンドブック」秀和システム

【授業の内容】

- ① 信号処理の概要
- ② 連続時間信号の解析（信号の周波数成分）
- ③ 周期信号のフーリエ級数展開 1
- ④ 周期信号のフーリエ級数展開 2
- ⑤ 信号のフーリエ変換 1
- ⑥ 信号のフーリエ変換 2
- ⑦ アナログ信号のフィルタリング
- ⑧ アナログフィルタの設計法
- ⑨ 信号のデジタル化
- ⑩ 離散フーリエ変換 1
- ⑪ 離散フーリエ変換 2
- ⑫ 高速フーリエ変換
- ⑬ 標本化信号の復元
- ⑭ システム同定
- ⑮ まとめ

【授業の内容】

- ① 制御工学特論のまとめ
- ② 連続時間信号の解析
- ③ 周期信号のフーリエ級数展開
- ④ 信号のフーリエ変換
- ⑤ アナログフィルタの設計
- ⑥ 離散フーリエ変換
- ⑦ 離散時間信号の扱い
- ⑧ z 変換
- ⑨ 伝達関数と差分方程式
- ⑩ デジタルフィルタの設計 1
- ⑪ デジタルフィルタの設計 2
- ⑫ デジタルフィルタのシミュレーション 1
- ⑬ デジタルフィルタのシミュレーション 2
- ⑭ システム同定
- ⑮ まとめ

制御工学特論 (Control Engineering)

選択	2 単位	1 期	教授	尾形 和哉	授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)
----	------	-----	----	-------	--------------------------

【授業の概要】

マイクロエレクトロニクス革命によって、今日の自動制御はシステム制御の様相を一段と高めつつある。その理論が現代制御理論である。状態空間法に基づく現代制御理論は多変数系を扱えることから、その適用範囲はサーボ系からプロセス制御系まで広く及んでいる。また状態空間表現は動的シミュレーションのための重要な概念となる。

本講義では、状態方程式によるモデル表現方法をできる限り平易に解説する。そのために必要となる常微分方程式、行列を復習する。その後、状態フィードバック法によるシステムの安定化、希望する制御性能の達成方法について解説する。さらに、倒立振子を例題として簡単な数値シミュレーションを行い、制御系設計の評価方法を学ぶ。

【学修到達目標】

- ① 動的システムの特性と状態方程式表現する手順を理解している。
- ② 状態方程式の一般解を理解している。
- ③ システムの極を説明できる。
- ④ 最低レギュレータの考え方を説明できる。
- ⑤ オブザーバの設計手順を説明できる。
- ⑥ 制御系の実装方法を説明できる。

【授業の内容】

- ① はじめに
- ② 動的システムと状態方程式
- ③ 状態方程式の一般解
- ④ 状態軌跡
- ⑤ システムの極
- ⑥ 状態フィードバック制御と極配置
- ⑦ 最適レギュレータ (1)
- ⑧ 最適レギュレータ (2)
- ⑨ 最適レギュレータ (3)
- ⑩ 倒立振子モデルの作成
- ⑪ 同一次元オブザーバによる状態推定
- ⑫ 最小次元オブザーバによる状態推定
- ⑬ 制御則の実装
- ⑭ モータの位置決め制御シミュレーション
- ⑮ 倒立振子の状態フィードバック制御シミュレーション

【成績評価の方法】 レポート評価 50% ならびに期末試験 50%

【教科書】

【参考書】 小郷, 美多著 「システム制御理論入門」 実教出版株式会社 吉川, 井村著 「現代制御論」 昭晃堂

制御工学特別演習 (Seminar on Control Engineering)

選択	2 単位	2 期	教授	尾形 和哉	授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)
----	------	-----	----	-------	--------------------------

【授業の概要】

制御工学特論で学んだ理論をシミュレータにより検証する。MATLAB は行列演算にすぐれた数値演算アプリケーションであり、豊富な数値関数をもつ。そこでは制御系設計に役立つ関数群があるので、これらを紹介する。SIMULINK は常微分方程式の数値計算ソルバを持ち、高精度のシミュレーションができる。制御系設計の検証を短時間で行うことができる。

このようなアプリケーションを利用し、設定値の変化に応じて理想的な目標起動や入力信号を生成するフィードフォワードコントローラの構成を学ぶ。次に、定常変化を零とするためのサーボシステムの構成を学ぶ。後半では、制御対象の数式モデルに誤差がある場合に安定性や制御性能が劣化する現象を学ぶ。これらの性能低下を最小にとどめることができるようなロバスト設計法を紹介する。

【授業の概要】

- ① 制御系設計解析のためのアプリケーションの概要を理解している。
- ② 制御系の数値シミュレーションの方法を理解している
- ③ 制御対象のモデル作成とモデル化誤差の大きさの評価方法を説明できる。
- ④ 制御系のロバスト安定のための条件を説明できる。
- ⑤ ロバスト制御設計の手順を説明できる。

【授業の内容】

- ① はじめに
- ② 制御系設計解析アプリケーション 1
- ③ 制御系設計解析アプリケーション 2
- ④ フィードフォワードコントローラ的设计
- ⑤ フィードフォワードコントローラの構成
- ⑥ サーボシステムの設計
- ⑦ モータの位置決め PID 制御 1
- ⑧ モータの位置決め PID 制御 2
- ⑨ 制御対象のモデル作成とモデル化誤差
- ⑩ ロバスト制御 1
- ⑪ ロバスト制御 2
- ⑫ ロバスト制御 2
- ⑬ 総合演習 1
- ⑭ 総合演習 2
- ⑮ 総合演習 3

【成績評価の方法】 レポート評価

【教科書】

【参考書】 小郷, 美多著 「システム制御理論入門」 実教出版株式会社 吉川, 井村著 「現代制御論」 昭晃堂

コンピュータビジョン特論 (Computer Vision)

選択 2単位 1期 教授 溝口 正信 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

コンピュータビジョン(画像処理工学)は、工場における組立てや検査の自動化、ロボットの知能化などを実現するためのコア技術であり、産業界からのニーズが高まっている。

本特論では画像処理装置の構成、カメラからの画像入力、各種画像処理、そして画像認識などビジョンデータ処理に必要なハードウェア、ソフトウェアを解説する。さらに、汎用画像処理装置の使用法や産業用ロボットへの適用を、デモンストレーションを通して理解する。

さらに、受講生が最新のコンピュータビジョンシステムを調査し報告を行うことで、理解を深める。

【学修到達目標】

- ①画像処理ハードウェアの概要が理解できる。
- ②二値化・ラベリングを説明できる。
- ③ノイズ除去の方法を説明できる。
- ④エッジ検出の方法を説明できる。
- ⑤画像処理システムを調べ、説明することができる。

【授業の内容】

- ①コンピュータビジョン概論・ガイダンス
- ②画像処理の基礎(1) 画像処理装置、画像データ構成、カラー画像
- ③画像処理の基礎(2) 輝度UP/DOWN、輝度反転
- ④画像処理の基礎(3) 二値化、ヒストグラム
- ⑤画像処理の基礎(4) ラベリング、特徴量
- ⑥画像処理手法(1) ノイズ除去
- ⑦画像処理手法(2) エッジ検出
- ⑧画像処理手法(3) フーリエ変換
- ⑨画像処理手法(4) 点、直線の検出
- ⑩応用事例(1) 金属破断面解析
- ⑪画像処理手法(5) パターンマッチング
- ⑫応用事例(2) 産業用ロボット
- ⑬応用事例(3) 画像計測
- ⑭調査報告会(1)
- ⑮調査報告会(2)

【成績評価の方法】 調査報告(30%)とレポート(70%)で評価

【教科書】 大崎崎一, 神代充, 宗澤良臣, 梶原康博, 「画像認識システム学」, 共立出版(2005)

【参考書】 谷内田正彦, 「ロボットビジョン」, 昭晃堂(1990)

情報処理技術特論 (Information Processing Technology)

選択 2単位 2期 教授 坂倉 守昭 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

経済活動への情報処理技術の浸透および社会インフラ化、産業全般のグローバル大競争の激化等の構造変化の中で、情報処理技術はあらゆる技術者に必須のものとなっている。本講義では、情報処理技術について、背景となっている原理や基礎理論、最新のハードウェア・ソフトウェア技術、本格的なシステム開発技術、実践的かつ先端的なシステム戦略などについて、毎回受講者がテーマを選び、調査してプレゼンテーションとディスカッションを行う形式で学習する。

【学修到達目標】

- ① 情報処理技術の歴史を、例を挙げて説明することができる。
- ② 最新のハードウェア技術の例を挙げて説明することができる。
- ③ 最新のソフトウェア技術の例を挙げて説明することができる。
- ④ 最新の情報処理システムの例を挙げて説明することができる。

【授業の内容】

- ① 基礎理論
- ② アルゴリズムとプログラミング
- ③ コンピュータ構成要素
- ④ システム構成要素
- ⑤ ソフトウェア
- ⑥ ハードウェア
- ⑦ ヒューマンインタフェースとマルチメディア
- ⑧ データベース
- ⑨ ネットワーク
- ⑩ セキュリティ
- ⑪ システム開発技術
- ⑫ プロジェクトマネジメント
- ⑬ サービスマネジメント
- ⑭ システム戦略
- ⑮ 経営戦略と法務

【成績評価の方法】 受講状況(30%)とレポート(70%)で評価

【教科書】 なし

【参考書】

情報処理技術特別演習 (Seminar on Information Processing Technology)

選択 2 単位 3 期 教授 坂倉 守昭 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

経済活動への情報処理技術の浸透及び社会インフラ化、産業全般のグローバル大競争の激化等の構造変化の中で、情報処理技術はあらゆる技術者に必須のものとなっている。本講義では、各種のアルゴリズムを理解し、それを応用した数値解析手法などの実用的なプログラミングを C 言語を用いて演習し、情報処理技術の習得を目指す。

【学修到達目標】

- ① 配列データの中から最大値・最小値を探索するプログラムを書くことができる。
- ② メモリの動的管理を行うプログラムを書くことができる。
- ③ ソートのアルゴリズムの例を説明することができる。
- ④ サーチのアルゴリズムの例を説明することができる。

【授業の内容】

- ① 演算，分岐処理，繰返し処理の展開
- ② マクロ定義，配列，ユーザ関数の展開
- ③ 標準ライブラリ関数の展開
- ④ ユーザ関数，外部変数の展開
- ⑤ 2次元配列と最大値・最小値探索アルゴリズム
- ⑥ メモリの動的管理
- ⑦ ベクトル計算
- ⑧ 行列計算
- ⑨ ファイル入出力
- ⑩ ソート (1)バブルソート
- ⑪ ソート (2)マージソート
- ⑫ ソート (3)クイックソート
- ⑬ サーチ (1)リニアサーチ
- ⑭ サーチ (2)バイナリサーチ
- ⑮ サーチ (3)ハッシュテーブルによるサーチ

【成績評価の方法】 受講状況(30%)とレポート(70%)で評価

【教科書】 なし

【参考書】

情報機械特論 (Information and mechanics)

選択 2 単位 2 期 准教授 篠原 主勲 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

コスト低減を目指した“ものづくり”の開発は重要な課題である。近年、コンピュータが安価になり、手軽に購入できるため、設計開発の現場で CAE(Computer Aided Engineering)ソフトを使う設計者が著しく増加した。また CAE ソフトも進化し、ユーザが CAE ソフトの仕組みを理解せずとも、解析結果を得ることができるようになった。一方で適切な解析条件ではなくとも、なにかしらの計算結果を出力するため、計算した結果が正しいかどうかかわからず、判断できないユーザが増加している。本講義では、適切な解析を行うことができるように、CAE ソフトで用いる有限要素法(FEM: Finite Element Method)と、その方法で用いる数学の素養を身につける。CAE ソフトのアルゴリズムを総合的に理解する。本授業は輪講形式で行う。

【学修到達目標】

- ① FEM のアルゴリズムの基礎がわかる。
- ② FEM で用いる数学の基礎がわかる。

【授業の内容】

- ① 有限要素法の概要
- ② 有限要素法の予備知識
- ③ 有限要素法の原理
- ④ 有限要素法の特徴
- ⑤ 有限要素法で用いる数学
- ⑥ ベクトルとマトリックス
- ⑦ 剛性マトリックス
- ⑧ 応力，ひずみ，振動
- ⑨ 要素剛性マトリックスと全体剛性マトリックス
- ⑩ ガウスの消去法
- ⑪ プレゼン発表および演習
- ⑫ プレゼン発表および演習
- ⑬ プレゼン発表および演習
- ⑭ プレゼン発表および演習
- ⑮ プレゼン発表および演習

【成績評価の方法】 プレゼンによる発表，レポート，中間テスト，期末テストの総合評価

【教科書】 やさしい有限要素法の計算．日刊工業新聞社，小田政明，1990

【参考書】 Excel による有限要素法—弾性・弾塑性・ポアソン方程式，塾長秘伝 有限要素法の学び方!—設計現場に必要な CAE の基礎知識，図解 設計技術者のための有限要素法はじめての一步，ベクトル解析，線形代数，現代工学のための変分学入門など

情報機械特別演習 (Seminar on information and mechanics)

選択 2単位 3期 准教授 篠原 主勲 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

前期で開講した情報機械特論の復習も含め、プレゼン発表および演習を行う。そのため情報機械特論を受講していることが望ましい。本演習を開講することで、有限要素法を体得することを目指す。本授業は輪講形式で行う。

【学修到達目標】

① FEMによる計算結果を評価できる。

【授業の内容】

- ① 有限要素法の基礎
- ② 有限要素法で用いる解析技術
- ③ 有限要素法による定式化
- ④ 有限要素法によるアルゴリズム
- ⑤ 有限要素法で用いる数値計算法
- ⑥ プレゼン発表および演習
- ⑦ プレゼン発表および演習
- ⑧ プレゼン発表および演習
- ⑨ プレゼン発表および演習
- ⑩ プレゼン発表および演習
- ⑪ プレゼン発表および演習
- ⑫ プレゼン発表および演習
- ⑬ プレゼン発表および演習
- ⑭ プレゼン発表および演習
- ⑮ プレゼン発表および演習

【成績評価の方法】 プレゼンによる発表、レポート、中間テスト、期末テストの総合評価

【教科書】 講義日に説明する。

【参考書】 Excelによる有限要素法—弾性・弾塑性・ポアソン方程式、塾長秘伝 有限要素法の学び方!—設計現場に必要なCAEの基礎知識、図解 設計技術者のための有限要素法はじめての一步、ベクトル解析、線形代数、現代工学のための変分学入門など

燃焼工学特論 (Combustion Engineering)

選択 2単位 2期 准教授 井原 禎貴 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

燃焼現象は、極めて急激な化学反応、発熱、流れ、伝熱などの物理・化学過程が複雑に干渉し合いながら進行する。工業的には、熱機関を駆動したり物体を加熱・加工するために様々な手法で燃焼を利用しており、限りある燃料資源を有効活用するには燃焼の省エネルギー技術が必須である。

本講義では、燃焼現象について基礎的な内容を広く理解する。

【学修到達目標】

- ① 燃焼現象の分類を理解している。
- ② 予混合燃焼について、化学的・物理的に説明できる。
- ③ 拡散燃焼について、予混合燃焼と対比させながら説明できる。
- ④ 燃焼に関連する熱力学、化学平衡、燃焼排出物について説明できる。

【授業の内容】

- ① 燃焼の歴史
- ② 燃焼の開始
- ③ 燃焼現象の分類
- ④ 予混合燃焼 (1)層流燃焼速度
- ⑤ 予混合燃焼 (2)層流火炎
- ⑥ 予混合燃焼 (3)乱流火炎
- ⑦ 予混合燃焼 (4)火炎安定化
- ⑧ 予混合燃焼 (5)Rankin-Hugoniot 方程式
- ⑨ 拡散燃焼 (1)層流拡散火炎
- ⑩ 拡散燃焼 (2)乱流拡散火炎
- ⑪ 反応熱と生成熱
- ⑫ 化学平衡
- ⑬ 断熱火炎温度
- ⑭ 燃焼排出物
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 レポート評価(100%)

【教科書】 プリント

【参考書】

燃焼工学特別演習 (Seminar on Combustion Engineering)

選択 2単位 3期 准教授 井原 禎貴 授業時間外の学修 60時間(毎週 4時間)

【授業の概要】

燃焼工学特論で学習した内容の理解を深めるため、燃焼工学に関連する学術論文の調査を受講学生に割り当て、調査内容に関するプレゼンテーションと全員での質疑応答・討論を行う。

また、基本的な化学平衡・断熱火炎速度について実際に解析する。

【学修到達目標】

- ①文献調査内容を理解し、正しく説明できる。
- ②化学平衡・断熱火炎速度の計算手法について理解し、説明できる。

【授業の内容】

- ① 燃焼工学に関する文献調査 1
- ② 燃焼工学に関する文献調査 2
- ③ 燃焼工学に関する文献調査 3
- ④ 燃焼工学に関する文献調査 4
- ⑤ プレゼンテーションと討論 1
- ⑥ プレゼンテーションと討論 2
- ⑦ プレゼンテーションと討論 3
- ⑧ プレゼンテーションと討論 4
- ⑨ 化学平衡の計算 1
- ⑩ 化学平衡の計算 2
- ⑪ 化学平衡の計算 3
- ⑫ 断熱火炎温度の計算 1
- ⑬ 断熱火炎温度の計算 2
- ⑭ 断熱火炎温度の計算 3
- ⑮ まとめと総合演習

【成績評価の方法】 プレゼンテーションおよび討論(50%)と解析演習(50%)で評価

【教科書】 プリント

【参考書】

熱流体計測特論 (Thermal Fluid Measurement)

選択 2単位 1期 教授 小里 泰章 授業時間外の学修 60時間(毎週 4時間)

【授業の概要】

目に見えない熱や流れ現象を正確に理解することは、エネルギーの有効利用やそれらの制御分野において重要な役割を担う。

本特論では、様々な熱流体計測技術について、測定原理とその手法、そして実際の応用例や問題点を学習し、さらに先端的計測法についても適宜解説を交え、研究遂行等への一助とする。

【学修到達目標】

- ①熱流体現象の基礎を理解している。
- ②各種熱流体計測技術について説明できる。
- ③各計測技術の問題点を理解している。

【授業の内容】

- ① 流体現象の基礎
- ② 熱現象の基礎
- ③ 流体現象の計測 (1) (ピトー管, 熱線流速計)
- ④ 流体現象の計測 (2) (LDV, UVP, LIF)
- ⑤ 流体現象の計測 (3) (PIV, PTV)
- ⑥ 流体現象の計測 (4) (圧力の計測)
- ⑦ 流体現象の計測 (5) (流量計測)
- ⑧ 流体現象の計測に関する演習
- ⑨ 熱現象の計測 (1) (温度計)
- ⑩ 熱現象の計測 (2) (温度分布の測定)
- ⑪ 熱現象の計測 (3) (熱流量の測定)
- ⑫ 熱現象の計測 (4) (高温, 極低温の測定)
- ⑬ 熱現象の計測に関する演習
- ⑭ 流れの可視化と画像処理
- ⑮ まとめと総合演習

【成績評価の方法】 小テスト(30%)とレポート(70%)による評価

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】 熱流体の可視化と計測 藤澤延行 コロナ社
流体実験ハンドブック 笠木伸英他 4名編 朝倉書店

熱流体計測特別演習 (Seminar on Thermal Fluid Measurement)

選択 2 単位

2 期

教授 小里 泰章

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

熱流体計測特論で学習した内容の理解を深めるため、熱流体計測技術に関して受講学生ごとに割り当てられたテーマに基づいた学術論文を調査し、調査内容に関するプレゼンテーションと全員での討議を行う。

次に、実験計測に対して、数値熱流体解析の実際についても理解を深めるため、シミュレーションソフトウェアを活用した演習を行い、実験計測と数値解析のそれぞれの利点や注意点について討論する。

【学修到達目標】

- ①文献調査内容を理解し、正しく説明できる。
- ②数値熱流体解析の基本を理解している。

【授業の内容】

- ① 流体現象の計測技術に関する演習 1
- ② 流体現象の計測技術に関する演習 2
- ③ 流体現象の計測技術に関する演習 3
- ④ 熱現象の計測技術に関する演習 1
- ⑤ 熱現象の計測技術に関する演習 2
- ⑥ 熱現象の計測技術に関する演習 3
- ⑦ 熱流体現象計測の総括
- ⑧ 数値熱流体解析演習 1
- ⑨ 数値熱流体解析演習 2
- ⑩ 数値熱流体解析演習 3
- ⑪ 数値熱流体解析演習 4
- ⑫ 数値熱流体解析演習 5
- ⑬ 数値熱流体解析演習 6
- ⑭ 解析演習の総括
- ⑮ まとめと総合演習

【成績評価の方法】 プレゼンテーション (60%) と課題 (40%) による評価

【教科書】 適宜プリントを配布

【参考書】

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 高田 健 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

金属材料の強度に影響を及ぼす微量添加元素とそれら添加元素で構成される微細析出物と原子クラスタに対して、その形成・成長および強化機構発現の調査・解明を実験により実施する。

【学修到達目標】

- (1)工業用金属材料の各種強化機構が説明できる。
- (2)各種金属材料に応じた、材料強化機構と金属材料中の析出物と固溶元素の存在状態の解析方法が提案できる。
- (3)微量添加元素による固溶状態と拡散状態を把握し、それらを調査する手段が提案できる。

【授業の内容】

以下の技術および測定・解析方法を習得する。

- ・金属材料の硬さ測定
- ・金属板材料の引張測定
- ・電気抵抗率測定
- ・真空技術
- ・X線解析技術
- ・拡散係数導出のための解析技術

上記技術を複数活用することで、以下の現象の理解の深化と新規現象の解明を行う。

- ・金属中添加元素（水素を含む）による固溶強化と拡散現象
- ・金属中微細クラスタの形成と強化機構
- ・金属中微細析出物の形成と強化機構

【成績評価の方法】 実験による新規知見の獲得とその技術報告（学会発表、論文）をもって評価する。

【教科書】

【参考書】

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 徳納 一成 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

結晶中線状格子欠陥の「転位」の挙動把握を基軸として、社会基盤を支える構造用金属材料の「強度」に関する研究テーマについて、実験と過去の知見の吟味検討を中心として推進する。

【学修到達目標】

- ① 金属材料の機械的特性と社会インフラとの関連性について理解している。
- ② 金属材料の機械的特性における問題点を説明できる。
- ③ 金属材料の機械的特性における問題点を実験的に再現できる。
- ④ 再現した金属材料の機械的性質の問題点について具体的に説明できる。
- ⑤ 再現した金属材料の機械的性質の問題点の解決法について考察することができる。

【授業の内容】

社会基盤を支える構造用金属材料開発に関する以下の研究テーマについて、内外の文献調査や周辺知見を吟味検討しつつ、継続的な研究を推進する。

- ・金属材料の塑性変形挙動（降伏強さ、加工硬化、すべり帯形成挙動等）におよぼす点欠陥集合体の影響
- ・高強度アルミニウム合金等の非鉄金属材料の疲労挙動におよぼすマイクロ組織（結晶粒界、析出物、再結晶組織等）の影響
- ・鉄鋼材料の疲労挙動におよぼす鋼中微量水素の影響
- ・鉄鋼材料および非鉄金属材料の新たな強化因子の探索

【成績評価の方法】 研究の実施状況および中間報告（文書および口頭）により総合的に評価する

【教科書】

【参考書】

<機械工学専攻：特別研究>

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 西脇 武志 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

塑性変形および塑性加工法に関するテーマについて、実験および数値シミュレーションを活用して研究を行う。特に、金属板の加工技術、利用技術を中心とした研究を実施する。

【授業の内容】

以下の研究テーマに関連した内容について、理解を深めるとともに研究を行う。

- ・アルミニウム合金板や高張力鋼板の加工技術の研究
- ・複雑形状の一体化成形技術の研究
- ・最適化を活用した金型設計技術の研究
- ・逆解析による材料パラメータの同定技術
- ・多軸応力下での材料試験の研究
- ・軽量化材料の利用技術に関する研究

【学修到達目標】

- ① 研究目的を深く理解し説明できる。
- ② 研究を遂行するための方法を自ら考案し、実行することができる。
- ③ 実験結果に対する考察ができ、論理的に結論を導くことができる。
- ④ 研究成果を文書にまとめることができる。
- ⑤ 研究成果をプレゼンテーションによって説明できる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況および学会発表などにより総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 前田 安郭 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

鋳造 CAE の中の、湯流れ、凝固に関する研究を中心に研究を行う。解析精度、欠陥予測精度を向上させるためには実験とシミュレーションの両面からの研究実施が重要である。加えて、その他の鋳造 CAE ソフトに関する調査及び適用研究も実施する。

【授業の内容】

以下の研究テーマに関連した内容について、理解を深めることを重視して研究を遂行する。

- ・鋳造 CAE における湯流れ・凝固解析精度の向上
- ・鋳造 CAE を用いた欠陥予測方法
- ・鋳造 CAE の解析条件と欠陥予測精度
- ・砂型造型プロセスの搦き固め機構
- ・鋳造 CAE におけるラグランジュ手法の有効性
- ・離散要素法 DEM を用いたシミュレーション

【学習到達目標】

- ① 鋳造 CAE の全般を説明できる。
- ② 鋳造 CAE を用いた鋳造方案設計を理解している。

【成績評価の方法】 研究の実施状況、学会発表、質疑応答などにより総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

<機械工学専攻：特別研究>

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期

講師 宮本 潤示

授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

プラズマを用いた鋼の表面改質処理法や、滅菌法の研究を行う。研究の中で、大気圧プラズマ装置や真空プラズマ装置を主に用いて実験を行う。

【授業の内容】

・以下の研究テーマに関連した内容について、文献調査、計画、実験、分析、評価といった一連の研究を行う。必要に応じて装置の設計も行う。

- ・大気圧プラズマを用いた窒化処理に関する研究
- ・大気圧プラズマを用いた DLC 薄膜の成膜に関する研究
- ・プラズマを用いた切削液の滅菌に関する研究
- ・複雑形状を有する部材に対する新しい窒化処理法の開発
- ・高速光輝窒化処理法の開発
- ・金属の水に対する表面親和性に関する研究

【学修到達目標】

- ①研究テーマについて計画を立て、必要な実験を提案し、実行できる。
- ②窒化層や薄膜、微生物などテーマに沿った測定対象の適切な分析、評価が行える。
- ③分析結果の妥当性を判断できる。
- ④研究で得られた成果を説明することができる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況および学会発表などにより総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期

准教授 吉田 昌史

授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

材料の表面処理に関する研究を行う。特に、放電および熱処理を利用した金属材料の表面硬化・表面高機能化に関する研究を行う。

【授業の内容】

指導教員による指導の下に、以下の研究課題の中のいずれかの研究課題に関して研究する。

- ・放電現象を利用した表面処理に関する研究
- ・熱処理を利用した表面処理に関する研究
- ・材料の機械的特性に及ぼす表面処理の影響
- ・表面微細構造による機能の発現とその発現機構の解明

【学修到達目標】

1. 機械材料における表面処理技術とその特徴について説明できる。
2. 表面処理技術に関して、その作用や効果について、また諸特性に及ぼす影響など基本的な知識を説明できる。
3. 表面処理した材料の評価技術について説明できる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況および中間報告により総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】 機械材料学，材料加工学に関連した図書

<機械工学専攻：特別研究>

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 小里 泰章 授業時間外の学修 45 時間 (毎週 3 時間)

【授業の概要】

自動車や各種構造物、さらにはスポーツにおける飛翔物体に至るまで、様々な物体まわりの流れに生じるはく離を伴うせん断流れに関して、物体まわりの流れを正しく理解し、所望の状態へ導くためにはどうすべきか、如何にスマートに効率良く制御するにはどうしたらよいかについて探求する。

【学修到達目標】

- ① 研究対象の流れ場を正しく理解している。
- ② 流れ制御の指針について説明できる。
- ③ 研究成果を論理立てて説明できる。

【授業の内容】

以下の研究テーマについて、実験および数値シミュレーションの両側面から研究を行う。指導教員と十分に打合せを行い、計画的に研究を進める。

- ・ 柱状物体まわりの流れの制御
- ・ 後向きステップ流れの制御
- ・ 鈍頭物体の空気抵抗低減に関する研究
- ・ 車両の空力安定性改善に関する研究
- ・ 弱電離プラズマを利用した流れの制御に関する研究

【成績評価の方法】 研究の実施状況と中間報告により総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 溝口 正信

【授業の概要】

産業界では生産の自動化が進み、それを支えるメカトロニクス機器やロボットの技術革新が進んでいる。本授業ではその中でも重要なコンピュータビジョンの研究、また組込み型制御システムの研究を、試作・実験を中心に研究する。

【授業の内容】

指導教員と十分に議論を行いつつ、以下の研究テーマに関連する文献調査、研究内容の理解、さらには試作システムの開発、実験を通し研究を実施する。

- ・ 人工衛星の開発
- ・ 2次元/3次元のロボットビジョンの研究
- ・ 画像パターンマッチングの研究
- ・ ハードウェア記述言語による制御システムのアーキテクチャに関する研究
- ・ 組込み型マイコンシステムのアーキテクチャに関する研究
- ・ 遺伝的アルゴリズムによる知能化技術の研究

【成績評価の方法】 研究の実施状況および中間報告（文書および口頭）により総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

1単位は、45時間の学修を必要とする内容をもって構成することとなっています。本学では、授業の方法に応じ、授業時間内の学修と授業時間外の学修を次のとおり定めています。

(1) 講義及び演習(1単位科目) 授業時間内の学修15時間(毎週1時間)、授業時間外の学修30時間(毎週2時間)

(2) 講義及び演習(2単位科目) 授業時間内の学修 30 時間(毎週 2 時間)、授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

<機械工学専攻：特別研究>

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 准教授 篠原 主勲

【授業の概要】

ものづくりの開発に必要なシミュレーション技術の修得を目指す。シミュレーション技術は計算力学と深く関わっている。計算力学とは、力学的挙動を、数学という道具を用いてモデル化し、その挙動を擬似的にコンピュータ上で再現する研究分野である。力学現象は、熱力学、機械力学、流体力学、材料力学など多岐にわたる。計算力学の研究分野では、更なる力学的挙動の高精度化を目指し、離散化手法、ソルバーなどの数値計算スキームや計算機ハードウェアを含む並列分散処理技術など幅広い分野を網羅するようになった。本特別研究では、計算力学によるノウハウを駆使し、主にもものづくりの現場で抱えている問題を解決するための開発研究を行う。

【授業の内容】

以下の研究テーマに関連する文献を収集することおよび研究内容の理解を深めることを重視して、指導教員と十分に打合せを行いつつ、計画的に継続的に研究する。

- ・宇宙機器（展開構造物）に関する構造解析の研究
- ・大規模並列処理技術を用いた人工衛星微小擾乱(振動)に関する研究
- ・電気-熱-構造連成解析技術を用いた半導体チップ信頼性評価技術に関する研究
- ・乱流流れ場に置かれた構造物の形状最適化に関する研究
- ・物理現象の類似性を利用したイノベーション普及の現象解明に関する研究

【成績評価の方法】 研究の実施状況、中間報告および研究活動（学会活動等）より総合的に評価する。

【教科書】 計算力学（有限要素法・有限差分法、粒子法、分子動力学などの離散化解析手法）に関する文献等

【参考書】 有限要素法、CFD、最適設計、プログラミング言語（Fortran, C++）、Linux, UNIX 等に関する書籍

1単位は、45時間の学修を必要とする内容をもって構成することとなっています。本学では、授業の方法に応じ、授業時間内の学修と授業時間外の学修を次のとおり定めています。

(1) 講義及び演習(1単位科目) 授業時間内の学修15時間(毎週1時間)、授業時間外の学修30時間(毎週2時間)

(2) 講義及び演習(2単位科目) 授業時間内の学修 30 時間(毎週 2 時間)、授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

特別研究 I ～IV (Research in Mechanical Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 准教授 井原 禎貴 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

内燃機関に対する効率向上・排気ガス中有害成分低減の要求は今後も絶えることなく続く。これらの要求に答えるべく燃焼工学の立場から、新燃焼方式の実用化、低コスト排気浄化装置の開発、熱効率向上の追求に関する研究を行う。

【授業の内容】

以下の研究テーマについて、研究を行う。定期的に指導教員と打ち合わせを行う。

- ・HCCI 燃焼のノッキングに関する研究
- ・酸化チタン素材を用いた排気浄化に関する研究
- ・PPC エンジンの効率向上に関する研究

【学修到達目標】

- ① 研究背景、目的、成果について簡潔に説明できる。
- ② 研究内容を論理立てて説明できる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況と中間報告により総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

生産管理特論 (Production Management & Control Systems)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 魚野 剣太郎 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

- ・ トヨタ生産システムの取り組みを題材に、事業経営という視点から生産管理を概観する。
- ・ 毎時間、基本概念の意味や意義、具体例の説明を行うとともに、問いかけやディスカッションを主体とした授業進行を行う。
- ・ 最終週までに取り組みたいテーマを見つけ、レポートを作成、提出する。

【学修到達目標】

- ①TPS と TOC の概要を説明できる。
- ②TPS の適用のしやすさが、どんな要素で決まるかを理解している。
- ③プロジェクト型業務に関する生産管理の方法を説明できる。
- ④実際にプロジェクト型業務の生産管理を適切に行える。

【授業の内容】

- ① ガイダンス, 序論
 - ・ 講義方針・内容の紹介
 - ・ 概念定義 (生産, 管理, 生産性他)
- ② 経営戦略と生産管理
 - ・ 経営戦略のエッセンス (環境分析, ドメイン, 成長戦略, 競争戦略)
 - ・ マーケティングのエッセンス (マーケティング戦略, 需要の三要素)
 - ・ 生産管理をどう結びつけるか
- ③ トヨタ生産システム(TPS)における生産統制の特徴と前提条件
 - ・ JIT, 自動化, 需要駆動
 - ・ 需要の平準化と小ロット混流生産
- ④ 生産の全体最適
 - ・ TPS と TOC(制約理論)の対比
 - ・ SCM, グローバル化する市場と生産拠点の立地
- ⑤ プロジェクト型業務の生産管理
 - ・ 生産計画と生産統制
 - ・ 経営資源と生産管理
- ⑥ 生産管理の実務
 - ・ PDCA サイクル
 - ・ 改善活動と生産システム

【成績評価の方法】 ディスカッションでの参加態度(50%)とレポート評価(50%)

【教科書】 特になし。

【参考書】 「トヨタ生産システム」 (大野耐一)

<全研究科共通科目>

学外研修 (Internship)

選択	2 単位	1(2)期	専攻長	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
【実習の概要】 <p>企業または官公庁において、実務に関する研修を行う。実務には、生産、設計・監理、調査計画等広範な分野があり、希望する分野で最適な研修先を選定する。本学のキャリアセンターでは、研修先の事前登録制度があり密接な連携をとるようにする。</p>			【授業の内容】 <p>実務の理解とともに自身の方向付けやスキルアップを目的とし、将来をより良くすることに役立つように受け入れ先と研修内容を十分協議して計画する。</p> <p>実際の学外研修は以下の3段階で行う。</p> <ul style="list-style-type: none">・受け入れ先との事前研修・受け入れ先での学外研修・学外研修報告	
【学修到達目標】 <ol style="list-style-type: none">① 企業または官公庁における実務の概要について説明できる。② 企業または官公庁における実務の一部について詳細に説明できる。③ 企業または官公庁における実務を理解したうえで、将来の自らの社会活動のあるべき姿について説明できる。				
【成績評価の方法】 受け入れ企業等からの評価、研修報告書、研修報告				
【教科書】				
【参考書】				

ベンチャービジネス特論 (Venture Business)

授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

選択	1 単位	1 期	非常勤講師	武藤 郷史	
【授業の概要】 <p>我が国のイノベーションを牽引するベンチャービジネスの必要性を理解するとともに、実例やワークを元にベンチャービジネス成功のエッセンスを学ぶ。</p> <ol style="list-style-type: none">(1)我が国の経済環境から、ベンチャービジネスおよびベンチャー支援政策のメガトレンドを理解する。(2)その上で、成功するベンチャー起業家の特性を把握し、どのようにしてビジネスモデルを構築していくかを考える。(3)ベンチャーマネジメントは一般企業と特性が異なり、また成長過程ごとに課題が変化する。そのポイントを考察する。(4)ベンチャービジネス成功のためのエッセンスを理解し、ビジネスプランの書き方を学ぶ。			【授業の内容】 <ol style="list-style-type: none">① 我が国におけるベンチャー企業の必要性<ul style="list-style-type: none">・我が国経済におけるベンチャービジネスの役割② イノベーションをおこすベンチャー企業<ul style="list-style-type: none">・ベンチャービジネスがおこすイノベーションとは。③ 成功するベンチャー起業家の特性<ul style="list-style-type: none">・成功する起業家のエッセンス④ ベンチャーマネジメントの留意点<ul style="list-style-type: none">・ベンチャーマネジメントの特性・成長ステージごとの経営のポイント⑤ ビジネスプランの役割<ul style="list-style-type: none">・ベンチャー戦略とビジネスプラン⑥ ビジネスプランの書き方<ul style="list-style-type: none">・ビジネスプランの展開方法⑦ 発表		
【学修到達目標】 <ol style="list-style-type: none">①ベンチャー戦略の概要を理解し、戦略設計の基本フレームを使った事業コンセプト設計を実践できる②基本的なビジネスプランの骨子が描けるようになる					
【成績評価の方法】 講義での討論(30%)とレポート評価(70%)					
【教科書】 資料配布					
【参考書】					

<全研究科共通科目>

経済学特論 (Economics)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 八木エドワード 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

バブル景気とは、1986 年 12 月から 1991 年 2 月までの 51 か月間、日本で起こった資産価格の上昇や好景気のことである。バブル崩壊後のいわゆる「失われた 10 年」は「失われた 20 年」となり、今現在は「失われた 30 年」の途中である。人口減少、少子化、超高齢化社会の課題を考慮すると、「失われた 100 年」となる可能性がある。25 年以上に渡り低迷する結果を招いた、根本的な問題点、解決策は何か。

【学修到達目標】

学生達が来るべき就職活動や卒業後の人生にどう対応すれば良いかについて役立つ知識を得ている。

【授業の内容】

7 回の授業では、日本経済の推移、グローバル化、アジアの時代(特に中国の躍進と中間層・富裕層の拡大)、東海地区の経済(トヨタ依存症)等を検討し、「MBA 研究方法」で行う：

1. 課題を認識する
2. 問題点などを指摘(定義)する
3. 問題解決を目的とし、仮説を立てる
4. データを収集する
5. 客観的に情報を分析する
6. 妥当性のある結論(提案)を出す

【成績評価の方法】 講義での討論参加 (70%)、レポート(30%)

【教科書】 特になし

【参考書】 授業で配布

地球環境科学特論 (Global Environmental Science)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 加藤 俊夫 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【講義の概要】

- (1) 地球が直面している環境問題について、科学の視点から考える。
 - ・「地球環境」の内容と変遷
 - ・「地球環境」の視点から捉えた問題とその解決方法
 - ・「京都議定書〜パリ協定」の解説
- (2) 講師が携わっている土木コンサルタントの立場での経験等に基づき、土木(社会資本整備〜インフラ整備)に関連する環境を学ぶ。
 - ・災害対策(洪水、地震、液状化、津波、土石流、流木)と環境
 - ・河川改修やダム開発、水力発電開発などの環境への負荷
- (3) 地球環境変化により、世界や日本で近年自然災害が激甚化している。河川・海岸・砂防・港湾・耐震の技術、防災士の立場から、「防災・減災」についての考えや技術を学ぶ。
- (4) 地球環境を、自分の学問分野、将来の職業、自分の生活など、視点の設定をかえて考えることを学ぶ。また、地球規模の環境と身近な環境の関係についても同様に考える。
 - ・上記の視点から捉えた地球環境
 - ・上記の視点から捉えた身近な環境
 - ・日本が直面している環境
- (5) 地球環境を捉える技術的手法の一手法として、技術士部門の総合技術監理手法(リスク管理、リスクマネジメントなど)を学ぶ。
- (6) 技術者が地球環境問題、環境問題についてどのように取り組むことが期待されているかを考える。

【講義の内容】

- ①地球環境問題の動向(「パリ協定」を題材)
- ②社会資本整備関係のコンサルタントの立場からの「環境問題」「対応方法や考え方」
- ③防災、減災について
- ④地球を取りまく環境の実態
- ⑤リスク管理手法、クライシスマネジメント
- ⑥技術倫理観、これからの時代を担う技術者に求められる環境への取り組み方

【学修到達目標】

- ①環境をフレキシブルに捉える視点の習得
- ②環境の持つ多面的な視点の習得
- ③リスクマネジメント、クライシスマネジメントという技術の習得
- ④自分の専門以外の研究と交流の意義の発見より新しいアイディアの展開の経験

【成績評価の方法】 講義での討論(20%)とレポート評価(80%)

【教科書】 配付資料

【参考書】

外国文化特論 (Foreign Culture)

選択 1 単位 2 期 非常勤講師 クレメンズ メツラー 授業時間外の学修 30 時間 (毎週 2 時間)

【講義の概要】

西洋の映像文化を多様な角度から分析・解明する。学生の外国文化への幅を広げる。

文化的要素が人々の生活を形成する際に重要な役割を演じる事の理解度を深める。自分の国の文化に対する新しい展望を提供する。

ヨーロッパと日本で得た経験・知見を織り込んだ講義内容

【学修到達目標】

- ①ヨーロッパ文化の社会、宗教、歴史的な背景を理解することができる。
- ②ヨーロッパの建築様式および美術様式を概説することができる。
- ③現代ドイツの経済や産業の源泉について探ることができる。
- ④日本文化を海外の視点で見ることができる。

【講義の内容】

- ①オリエンテーション、「キリスト教ギリシャ、古代ローマ、キリスト教」、「キリスト教：源泉／歴史／文化的影響、ユダヤ教／イスラム教」
- ②ドイツの日常生活：民族の祭りと風俗慣、食文化、伝統、学制、西ドイツ・東ドイツ、ドイツの方言、新聞、本の見本市、他について
- ③欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィ を比べる、その1「古代ギリシアから中世、ルネサンス、バロック」
- ④製品のデザイン史、イギリス産業革命、大量生産性と美、ドイツのデザインの始まり、ポルシェ と フォルクスワーゲン社、「Made in Germany」から「Designed in Germany」へ、バウハウス から アップル まで、他
- ⑤欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィ を比べる、その2「アール・ヌーヴからモダン、ポスト・モダン、現在まで」
- ⑥現在のヨーロッパ：「イギリスとヨーロッパ」、「ドイツとフランス」、「北欧」、「ロシアと東ヨーロッパ」、「ギリシャクライシス」、「難民を受け入れる伝統」、他
- ⑦ まとめと自由討論
講義の最後は全員で自由討論、意見交換する。
注：外国人留学生が出席する場合には、英語（及ドイツ語）での説明も可能。

【成績評価の方法】 講義での討論(30%)、レポート提出及びショートレクチャー(70%)による総合評価

【教科書】 使用しない

【参考書】 特になし (授業の中で紹介する)

【連絡先】 メール：hello@clemensmetzler.com

2. 電気・電子工学専攻

(1) 教育課程表

大学院学則 別表(1)

部類	授 業 科 目	単 位 数	毎週授業時間数				備 考
			1年次		2年次		
			1	2	3	4	
[1] 講義	エネルギー伝送工学特論	2	2				
	エネルギー変換工学特論	2		2			
	制御工学特論	2	2				
	分析・計測工学特論	2		2			
	固体電子工学特論	2	2				
	デバイス工学特論	2		2			
	画像情報学特論	2		2			
	電気・電子回路特論	2	2				
	エレクトロニクス実装特論	2		2			
	電気・電子特別講義Ⅰ	1	1	<1>			集中
	電気・電子特別講義Ⅱ	1			1	<1>	集中
	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			集中
	経済学特論	1	1	<1>			集中
	地球環境科学特論	1	1	<1>			集中
外国文化特論	1	1	<1>			集中	
[2] 演習	電気・電子工学特別演習Ⅰ	2	2				
	電気・電子工学特別演習Ⅱ	2		2			
	電気・電子工学特別演習Ⅲ	2			2		
	電気・電子工学特別演習Ⅳ	2				2	
	電気・電子回路特別演習	2	2				
[3] 研究	電気・電子工学特別研究Ⅰ	1.5	◎				
	電気・電子工学特別研究Ⅱ	1.5		◎			
	電気・電子工学特別研究Ⅲ	1.5			◎		
	電気・電子工学特別研究Ⅳ	1.5				◎	
	学外研修	2	◎	<◎>			

(2) 教育内容

本専攻では、学部教育とのつながりを重視し、学部で修得した知識の深化と応用力の涵養、さらに高度・専門化した知識の修得と、特別研究を通しての問題解決能力と創造性の育成を行う。

授業科目は、電気エネルギーの発生・伝送・利用や電子・コンピュータ制御から、新材料・デバイスの開発まで幅広く網羅しており、学生の専門分野に合わせて最先端の内容を学ぶことができる。

また、本専攻では連携大学院の協定が締結されている学外研究機関の研究者を大学院客員教授として委嘱している。このため本専攻における特別研究は、学外の各研究機関において、大学院客員教授により指導を受けることもできる。

(3) 履修上の心得

本専攻のカリキュラムは、教育目標に基づいた内容の特論、特別演習および特別研究により、体系的に構成されている。また、各分野の講義および演習とは別に専攻内共通の特論、特別演習および特別講義が準備されている。これらの科目は本専攻の大学院生には不可欠な知識の習得を目標とするものであり、本専攻の全員が履修する事が望ましい。全専攻共通の特論および集中講義は、専攻における専門教育とは直接関係しない専攻の枠を越えた科目である。専門教育を受ける大学院生が、高度の専門的能力を修得すると同時に、実社会で活躍する上で必要な教養を身に付けることを目標にしたものである。カリキュラムの精神が有効に活かされるような履修計画を是非立てていただきたい。

(4) 授業科目・担当教員等

電気・電子工学専攻

授 業 科 目		単 位 数	毎週授業時間数				担 当 教 員
			1 年 次		2 年 次		
			1	2	3	4	
電気・電子工学専攻科目	エネルギー伝送工学特論	2	2				植田教授
	エネルギー変換工学特論	2		2			加納准教授
	制御工学特論	2	2				川福教授
	分析・計測工学特論	2		2			堀尾教授
	固体電子工学特論	2	2				橋本教授
	デバイス工学特論	2		2			赤池教授
	画像情報学特論	2		2			大澤教授
	電気・電子回路特論	2	2				高木教授
	エレクトロニクス実装特論	2		2			山田教授
	電気・電子特別講義Ⅰ	1	1	<1>			入山客員教授・高橋客員教授 安井客員教授・専攻長
	電気・電子特別講義Ⅱ	1			1	<1>	入山客員教授・高橋客員教授 安井客員教授・専攻長
	電気・電子工学特別演習Ⅰ	2	2				各指導教員
	電気・電子工学特別演習Ⅱ	2		2			各指導教員
	電気・電子工学特別演習Ⅲ	2			2		各指導教員
電気・電子工学特別演習Ⅳ	2				2	各指導教員	
電気・電子回路特別演習	2	2				山田教授	
電気・電子工学特別研究Ⅰ	1.5	◎				各指導教員	
電気・電子工学特別研究Ⅱ	1.5		◎			各指導教員	
電気・電子工学特別研究Ⅲ	1.5			◎		各指導教員	
電気・電子工学特別研究Ⅳ	1.5				◎	各指導教員	
全研究科 共通科目	学外研修	2	◎	<◎>			専攻長
	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			武藤非常勤講師
	経済学特論	1	1	<1>			八木非常勤講師
	地球環境科学特論	1	1	<1>			加藤非常勤講師
	外国文化特論	1	1	<1>			クレムス・メツラー非常勤講師

<電気・電子工学専攻科目>

エネルギー伝送工学特論 (Energy Transmission Engineering)

選択 2単位 1期 教授 植田 俊明 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

本講では、電力機器や電力系統における高電圧技術を理解し設計に反映させるための知識を得ることを目的とする。気体・固体・液体の絶縁特性を把握し、電力系統における雷過電圧対策および雷サージ過電圧解析手法について学習する。また高電圧の発生や測定方法を理解し、高電圧機器に対する試験方法について学習する。

【学修到達目標】

- ① 電力系統や電力機器について説明できる。
- ② 気体・液体・固体の絶縁特性について説明できる。
- ③ 雷過電圧対策や絶縁協調について説明できる。
- ④ 高電圧の発生および測定について説明できる。

【授業の内容】

- ① 高電圧工学の必要性
- ② 電力工学の基礎
- ③ 電力系統の基礎
- ④ 電力機器の基礎
- ⑤ 放電現象の基礎課程
- ⑥ 雷過電圧対策および絶縁協調
- ⑦ 定常気体放電
- ⑧ 前半まとめ
- ⑨ 液体・固体の放電
- ⑩ 複合誘電体の放電
- ⑪ 高電圧の発生
- ⑫ 高電圧の測定
- ⑬ 高電圧機器
- ⑭ 雷サージ解析
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】講義はゼミ形式で行う。レポート、ゼミ中の質疑応答・プレゼンテーション結果の総合評価とする。

【教科書】「高電圧工学」<オーム社>

【参考書】「高電圧工学」<数理工学社>、「系統絶縁論」<コロナ社>など

エネルギー変換工学特論 (Energy Conversion Engineering)

選択 2単位 2期 准教授 加納 善明 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

地球温暖化防止のためCO₂排出低減の要求に対し、自動車では、ハイブリッド車、電気自動車が実用化されている。これらの自動車では永久磁石形同期モータによる電機駆動で力行を得ている。一方、車内ではワイパーやパワーウインドウなどの補機モータとして、現在も多数の直流モータが使用されている。その一方、電動エアコンなど大容量補機モータでは、永久磁石形同期モータの採用が進んでいる。

本講義では、自動車に使用されているモータの種類と構造原理およびパワーエレクトロニクス技術を用いたこれらモータの駆動方法を中心に解説し、電機駆動の得失を踏まえてその応用をイメージできる能力の修得を目的とする。

【学修到達目標】

- ① 直流モータの構造、動作原理、電子制御を理解できる
- ② インバータを電源とする交流で動作する永久磁石同期モータの構造、動作原理、インバータによる制御、モータモデリング、電流・速度制御法、位置センサレス制御法を理解できる。

【授業の内容】

- ① 授業の進め方。
モータドライブ&パワーエレクトロニクス概論
- ② 直流モータの構造と種類・動作原理
- ③ 永久磁石界磁直流モータの電流・速度制御
- ④ 直流モータの電子制御
- ⑤ 永久磁石形同期モータの基本構造と種類・動作原理1
- ⑥ 永久磁石形同期モータの基本構造と種類・動作原理2
- ⑦ インバータによるPWM制御1
- ⑧ インバータによるPWM制御2
- ⑨ 矩形波(120°)通電制御
- ⑩ 正弦波通電制御時のモデリングとベクトル制御1
- ⑪ 正弦波通電制御時のモデリングとベクトル制御2
- ⑫ 電流制御と速度制御
- ⑬ MPUによるデジタル制御
- ⑭ 位置センサレス制御1
- ⑮ 位置センサレス制御2

【成績評価の方法】レポート(100%)による評価

【教科書】電気機器学基礎論 多田隈進、石川芳博、常広譲著 株式会社オーム社、配布プリント

【参考書】

制御工学特論 (Control Engineering)

選択 2単位

1期

教授 川福 基裕

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

自動制御技術は、一般家庭の炊飯器、エアコン、冷蔵庫などから、製鉄所、火力、原子力発電、人工衛星打ち上げにいたるまで、あらゆる分野に使われている。ここでは、最も広く使用され、圧倒的なシェアを持っているPID制御を正しく理解し、シミュレーションおよびシステムの構築を通して理解を深める。

【学修到達目標】

- ①制御の概念について説明できる。
- ②フィードバック制御の特徴と欠点について説明できる。
- ③PID制御について説明できる。

【授業の内容】

- ①サーボシステムとその要素
- ②ラプラス変換と伝達関数
- ③フィードバック制御系の表現と応答(1)
- ④フィードバック制御系の表現と応答(2)
- ⑤周波数応答
- ⑥制御系の安定性と過渡制御系の解析・設計
- ⑦制御系の周波数特性・過渡特性-シミュレーション-
- ⑧制御系の安定性-シミュレーション-
- ⑨制御パラメータのチューニング-シミュレーション-
- ⑩PID制御器実装演習-モデリング-
- ⑪PID制御器実装演習-一次遅れフィルタ-
- ⑫PID制御器実装演習-制御系設計-
- ⑬PID制御器実装演習-電流フィードバック-
- ⑭状態方程式と伝達関数
- ⑮まとめ

【成績評価の方法】レポート評価

【教科書】プリント

【参考書】「制御基礎理論 [古典から現代まで]」中野道雄、美多勉 共著 (昭晃堂)

分析・計測工学特論 (Analytical and Instrumentation Engineering)

選択 2単位

2期

教授 堀尾 吉巳

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

ナノ科学技術分野ではナノ構造の形成技術と同時にナノ構造体の計測・分析・評価が求められる。ここでは単結晶表面やその上に形成される薄膜の構造を解析するための計測・分析手法について、基礎から学ぶ。

【学修到達目標】

- ①各種表面分析法の装置を説明できる。
- ②各種表面分析法の特徴を説明できる。
- ③回折図形を説明できる。

【授業の内容】

- ① Surface Analysis by Microscopy
- ② Field Emission Microscopy
- ③ Field Ion Microscopy
- ④ Transmission Electron Microscopy
- ⑤ Reflection Electron Microscopy
- ⑥ Low-Energy Electron Microscopy
- ⑦ Scanning Electron Microscopy
- ⑧ Scanning Tunneling Microscopy
- ⑨ Constant-Current Mode and Constant-Height Mode
- ⑩ Scanning Tunneling Spectroscopy
- ⑪ Atomic Force Microscopy
- ⑫ Contact Mode and Non-Contact Mode
- ⑬ Reflection High-Energy Electron Diffraction
- ⑭ Low-Energy Electron Diffraction
- ⑮ Summary

【成績評価の方法】輪番による英文和訳 (1/2) とレポート (1/2)

【教科書】プリント (Surface Science by K. Oura et al., Springer (2003))

【参考書】

固体電子工学特論 (Solid State Physics)

選択 2 単位 1 期 教授 橋本 雄一 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

パソコンや携帯電話など我々が使用している製品群は、材料と呼ばれる「物質」によって構成されている。固体電子工学特論は、「物質」の性質を固体における電子の振る舞いに基づいて考える学問であり、その電子モデルから導かれる結果が応用事例と如何に結びついているのかについて、最近の話題を含めて学習する。

【学修到達目標】

- ①物質の凝集機構が説明できる
- ②物質 (金属・半導体・誘電体) における電子のエネルギーバンド理論が説明できる
- ③有機半導体における電子のエネルギー状態を理解している
- ④固体の光学的性質 (光子エネルギーの概念・光の吸収と発光・光電効果) が説明できる

【授業の内容】

- ① 原子の電子構造
- ② 物質の凝集機構
- ③ 格子振動と固体の熱的性質
- ④ 固体の不完全性
- ⑤ 金属の自由電子論
- ⑥ プラズマ振動
- ⑦ 半導体の電子状態
- ⑧ 誘電体の電子状態
- ⑨ 強誘電性
- ⑩ 電子放出
- ⑪ 表面準位
- ⑫ 固体の光学的性質
- ⑬ 有機半導体
- ⑭ イオン液体
- ⑮ 新しい材料と応用

【成績評価の方法】 日頃の学習状況、最終レポートを 1/2 の重みで評価

【教科書】 プリント

【参考書】 「固体物理学入門」 C.Kittel 著 (訳本：丸善)、「物性論」黒沢達美著 (裳華房)

デバイス工学特論 (Electronics and Optical Devices)

選択 2 単位 2 期 教授 赤池 宏之 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

半導体デバイスを知るにはその基礎的特性と p n 接合を理解することが必要である。それらの特性をはじめに復習し、主な電子・光デバイスへの応用を学習する。

【学修到達目標】

- ①半導体の特性を理解している。
- ②トランジスタの動作を説明できる。
- ③レーザーの動作を説明できる。

【授業の内容】

- ① 半導体の基礎的特性 (I)
- ② 半導体の基礎的特性 (II)
- ③ p n 接合の基礎的性質
- ④ 金属-半導体接触
- ⑤ バイポーラトランジスタ
- ⑥ 電界効果トランジスタ
- ⑦ マイクロウェーブデバイス
- ⑧ 半導体の光学的性質 (I)
- ⑨ 半導体の光学的性質 (II)
- ⑩ 発光ダイオード
- ⑪ レーザダイオード (I)
- ⑫ レーザダイオード (II)
- ⑬ 受光デバイス (I)
- ⑭ 受光デバイス (II)
- ⑮ パワーデバイス

【成績評価の方法】 レポート (約 50%)、学習状況 (約 50%)

【教科書】 プリント

【参考書】 プリント

画像情報学特論 (Image Informatics)

選択 2単位 2期 教授 大澤 文明

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

画像処理は代表的なコンピュータ応用の情報処理である。本講義では、計算機における像情報の表現方法、特徴の抽出方法と前処理、パターン認識、3次元計測法等の静止画像および動画像における像情報処理について学ぶ。さらに、プログラミング課題および文献輪講を通して理解を深める。

【学修到達目標】

- ①空間フィルタの役割を説明することができる。
- ②2値画像処理の概要を説明することができる。
- ③画像照合の基本的な手法を説明することができる。
- ④動画像処理の概要を説明することができる。

【授業の内容】

- ①基本概念
- ②文献講読 (1)
- ③空間フィルタ
- ④2値化/特徴抽出
- ⑤演習 1
- ⑥演習 2
- ⑦文献講読 (2)
- ⑧画像照合
- ⑨演習 3
- ⑩演習 4
- ⑪文献講読 (3)
- ⑫総合課題 1
- ⑬総合課題 2
- ⑭総合課題 3
- ⑮総合課題 4

【成績評価の方法】 プログラム課題の発表・レポートで評価

【教科書】 プリント

【参考書】 「コンピュータ画像処理」田村秀行 編著 (Ohmsha)

電気・電子回路特論 (Electrical and Electronic Circuits)

選択 2単位 1期 教授 高木 康夫

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

現代の社会では携帯電話、TV など様々な電気機器が広く使われている。本授業では、学部で学習した電気・電子回路の基礎知識と実用製品との間をつなぐ実用技術、特に多くの実用電気・電子回路のトラブルの原因となりうる高周波を中心に学習する。

【学修到達目標】

- ①電波の伝搬・反射・透過を理解している。
- ②伝送線理論を理解している。
- ③スミスチャート・Sパラメータを説明できる。

【授業の内容】

- ① 授業の進め方、高周波とは何か、道具立ての準備
- ② ベクトル演算子
- ③ マクスウェルの方程式
- ④ 真空中の平面電磁波
- ⑤ 偏波と任意方向への電磁波
- ⑥ 媒質中電磁波
- ⑦ 電磁波の反射と透過
- ⑧ 伝送線理論
- ⑨ 前半のまとめ
- ⑩ 各種TEM線路
- ⑪ 導波管
- ⑫ 共振路
- ⑬ 電波の放射
- ⑭ スミスチャート、Sパラメータ
- ⑮ 全体のまとめ

【成績評価の方法】 レポート (100%) による評価

【教科書】 高周波の基礎 三輪進著 東京電機大学出版局

【参考書】 続 電気回路の基礎 西巻正郎・下川博文・奥村万規子著 森北出版

<電気・電子工学専攻科目>

エレクトロニクス実装特論 (Electronics Packaging)

選択 2単位 2期 教授 山田 靖

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

トランジスタやダイオードなどの電子デバイスを用いた回路では、配線、放熱、絶縁、信頼性などのために、実装が必要となる。本特論では、実装に用いられる、構造、材料、工程、試験方法、解析技術などに関して、最近の話題を含めて学ぶ。

【学修到達目標】

- ①エレクトロニクス実装技術の必要性について、理解している。
- ②実装に用いる材料、工程、試験方法、解析技術などに関して、説明できる。
- ③最近の技術動向について述べることができる。

【授業の内容】

- ① 実装技術の概要
- ② 集積回路の動向
- ③ 配線板
- ④ 組立技術 (ソルダリング)
- ⑤ 組立技術 (表面実装)
- ⑥ 封止技術
- ⑦ 解析技術 (回路解析)
- ⑧ 解析技術 (熱解析)
- ⑨ 解析技術 (構造解析)
- ⑩ 超高密度実装
- ⑪ パワー半導体実装
- ⑫ 信頼性試験方法 (冷熱サイクル試験)
- ⑬ 信頼性試験方法 (パワーサイクル試験)
- ⑭ 信頼性予測
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 講義における、討論(50%)、調査(30%)、レポート(20%)などにより総合的に評価する。

【教科書】 資料配布

【参考書】 適宜提示する。

電気・電子特別講義 I (Selected Topics in Electrical and Electronic Engineering I)

選択 1単位 1期 客員教授 安井 久一

客員教授 入山 恭彦

客員教授 高橋 誠治

専攻長

授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

電気・電子工学に関連する広い範囲から最新の話題を選び、技術や応用の実績を連携大学院の客員教授が紹介する。

【学修到達目標】

- ①超音波技術を理解している
- ②磁性体を説明できる

【授業の内容】

- ① 本講義の概要と技術動向
- ② 超音波技術(1)
- ③ 超音波技術(2)
- ④ 磁性体(1)
- ⑤ 磁性体(2)
- ⑥ 電気・電子周辺の分野に於ける最新技術(1)
- ⑦ 電気・電子周辺の分野に於ける最新技術(2)
- ⑧ まとめ

【成績評価の方法】 レポート (50%) および授業中の討論 (50%) などにより総合的に評価する。

【教科書】 指定なし

【参考書】 指定なし

<電気・電子工学専攻科目>

電気・電子特別講義 II (Selected Topics in Electrical and Electronic Engineering II)

選択	1 単位	3 期	客員教授 安井 久一	客員教授 入山 恭彦	客員教授 高橋 誠治	専攻長
----	------	-----	------------	------------	------------	-----

授業時間外の学修 30 時間 (毎週 2 時間)

【授業の概要】

電気・電子工学に関連する広い範囲から最新的话题を選び、技術や応用の実績を連携大学院の客員教授が紹介する。

【学修到達目標】

- ・電子分野の動向を説明できる

【授業の内容】

- ① 本講義の概要と技術動向
- ② 超音波技術(1)
- ③ 超音波技術(2)
- ④ 磁性体(1)
- ⑤ 磁性体(2)
- ⑥ 電気・電子周辺の分野に於ける最新技術(1)
- ⑦ 電気・電子周辺の分野に於ける最新技術(2)
- ⑧ まとめ

【成績評価の方法】 レポート (50%) および授業中の討論 (50%) などにより総合的に評価する。

【教科書】 指定なし

【参考書】 指定なし

電気・電子回路特別演習 (Seminar on Electrical and Electronic Circuits)

選択 2単位 1期 教授 山田 靖 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

学部で学修した電気・電子回路の基礎知識をベースに、実用的な電気・電子回路の設計や動作解析ができることを目標に、演習問題に取り組むことにより理解を深める。

【学修到達目標】

- ①複雑な電気回路の解析ができる
- ②電子回路の応用を説明できる
- ③最近の電気・電子回路のトピックスを述べられる

【授業の内容】

- ① 本授業の進め方、電気回路演習(1) 直流回路網
- ② 電気回路演習 (2) 直流回路の諸定理
- ③ 電気回路演習 (3) 交流回路網
- ④ 電気回路演習 (4) 交流回路の諸定理
- ⑤ 電気回路演習 (5) 周波数解析
- ⑥ 電子回路演習 (1) 電源回路
- ⑦ 電子回路演習 (2) 通信回路
- ⑧ 電子回路演習 (3) 発振回路
- ⑨ 電子回路演習 (4) トピックス紹介
- ⑩ 電子回路演習 (5) 高周波回路
- ⑪ 電子回路演習 (6) パワー半導体回路
- ⑫ 電子回路演習 (7) 電子実装
- ⑬ 電子回路演習 (8) 電子回路シミュレーション(1)
- ⑭ 電子回路演習 (9) 電子回路シミュレーション(2)
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 演習(50%)、レポート(30%)、口頭報告(20%)により総合的に評価する。

【教科書】 電気回路の基礎第3版 西巻正朗ら 森北出版、電子回路概論 高木茂孝ら 実教出版、配布プリント

【参考書】 適宜提示する。

<電気・電子工学専攻：特別研究>

電気・電子工学特別研究 I ～IV (Research in Electrical and Electronic Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 堀尾 吉巳 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

ナノ技術分野では、原子レベルの構造体を設計図どおり構築する技術と、その構造体を分析・評価する技術が求められる。本研究室ではナノサイズの構造分析手法の開発と機能性デバイスの形成を目的とし、主に実験的手法を用いて研究する。

【学修到達目標】

- ①研究遂行上の問題点や課題を提起できる。
- ②実験技術を修得し、実験結果を考察できる。
- ③実験結果をまとめて報告できる。

【授業の内容】

以下の研究テーマに関して、実験装置や制御システムを自作し、それを用いて実験データの収集を行う。このような研究を進める過程で、多くの問題が発生するが、指導教員と議論を重ねることにより障壁を乗り越える。また、研究の方向性や計画性について指導する。

- ・ プラズマ CVD を用いた炭素構造体の形成
- ・ 反射回折電子のエネルギー損失に関する研究
- ・ カーボンナノチューブからの電界放射電子の観察
- ・ 電界放射電子源を用いた中速電子回折実験装置の製作
- ・ 結晶表面からの電子回折図形の観察と評価

【成績評価の方法】 実験に取り組む姿勢、意欲、理解度そして研究経過の報告内容による総合的評価

【教科書】

【参考書】

電気・電子工学特別研究 I ～IV (Research in Electrical and Electronic Engineering I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 准教授 加納 善明 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

ハイブリッド車、電気自動車実用化され、モータ開発に関する新たな技術が求められている。本特別研究では、インバータ、巻線、磁石材料、モータ電磁構造などに関して、調査、実験、解析等により研究を進める。

【学修到達目標】

- ①最先端の技術動向を自ら調査し、技術課題を理解している。
- ②課題に対して自ら研究を推進し、その方法や結果を報告し、討議できる。
- ③研究内容をわかりやすく発表できる。

【授業の内容】

以下の研究テーマに関する調査、実験、解析に関して、指導教員と議論を重ね、計画的かつ継続的に行う。

- ・ モータを駆動するインバータ技術、制御技術に関する研究
- ・ 永久磁石同期モータの電磁構造に関する研究
- ・ 永久磁石同期モータの性能評価法に関する研究
- ・ 機器定数を可変するモータ電磁構造に関する研究

【成績評価の方法】 研究の実施状況(70%)、文書・口頭による研究発表(30%)により総合的に評価する。

【教科書】 資料配付

【参考書】 適宜提示する。

<全研究科共通科目>

学外研修 (Internship)

選択	2 単位	1(2)期	専攻長	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	------	-------	-----	-------------------------

【実習の概要】

企業または官公庁において、実務に関する研修を行う。実務には、研究・開発、生産、設計・監理、調査計画等広範な分野があり、希望する分野で最適な研修先を選定する。大学のキャリアセンターでは、研修先の事前登録制度があり密接な連携をとるようにする。

【授業の内容】

実務の理解とともに自身の方向付けやスキルアップを目的とし、将来をより良くすることに役立つように受け入れ先と研修内容を十分協議して計画する。

実際の学外研修は以下の3段階で行う。

- ・受け入れ先との事前研修
- ・受け入れ先での学外研修
- ・学外研修報告

【学修到達目標】

- ①受け入れ企業の業務を説明できる
- ②研修内容を説明できる
- ③研修の企業における位置付けを理解している

【成績評価の方法】 受け入れ企業等からの評価 (50%)、研修報告書 (20%)、研修報告 (30%)

【教科書】

【参考書】

ベンチャービジネス特論 (Venture Business)

授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

選択	1 単位	1 期	非常勤講師	武藤 郷史
----	------	-----	-------	-------

【授業の概要】

我が国のイノベーションを牽引するベンチャービジネスの必要性を理解するとともに、実例やワークを元にベンチャービジネス成功のエッセンスを学ぶ。

- (1)我が国の経済環境から、ベンチャービジネスおよびベンチャー支援政策のメガトレンドを理解する。
- (2)その上で、成功するベンチャー起業家の特性を把握し、どのようにしてビジネスモデルを構築していくかを考える。
- (3)ベンチャーマネジメントは一般企業と特性が異なり、また成長過程ごとに課題が変化する。そのポイントを考察する。
- (4)ベンチャービジネス成功のためのエッセンスを理解し、ビジネスプランの書き方を学ぶ。

【授業の内容】

- ① 我が国におけるベンチャー企業の必要性
 - ・我が国経済におけるベンチャービジネスの役割
- ② イノベーションをおこすベンチャー企業
 - ・ベンチャービジネスがおこすイノベーションとは。
- ③ 成功するベンチャー起業家の特性
 - ・成功する起業家のエッセンス
- ④ ベンチャーマネジメントの留意点
 - ・ベンチャーマネジメントの特性
 - ・成長ステージごとの経営のポイント
- ⑤ ビジネスプランの役割
 - ・ベンチャー戦略とビジネスプラン
- ⑥ ビジネスプランの書き方
 - ・ビジネスプランの展開方法
- ⑦ 発表

【学修到達目標】

- ①ベンチャー戦略の概要を理解し、戦略設計の基本フレームを使った事業コンセプト設計を実践できる
- ②基本的なビジネスプランの骨子が描けるようになる

【成績評価の方法】 講義での討論(30%)とレポート評価(70%)

【教科書】 資料配布

【参考書】

<全研究科共通科目>

経済学特論 (Economics)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 八木エドワード 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

バブル景気とは、1986 年 12 月から 1991 年 2 月までの 51 か月間、日本で起こった資産価格の上昇や好景気のことである。バブル崩壊後のいわゆる「失われた 10 年」は「失われた 20 年」となり、今現在は「失われた 30 年」の途中である。人口減少、少子化、超高齢化社会の課題を考慮すると、「失われた 100 年」となる可能性がある。25 年以上に渡り低迷する結果を招いた、根本的な問題点、解決策は何か。

【学修到達目標】

学生達が来るべき就職活動や卒業後の人生にどう対応すれば良いかについて役立つ知識を得ている。

【授業の内容】

7 回の授業では、日本経済の推移、グローバル化、アジアの時代(特に中国の躍進と中間層・富裕層の拡大)、東海地区の経済(トヨタ依存症)等を検討し、「MBA 研究方法」で行う：

1. 課題を認識する
2. 問題点などを指摘(定義)する
3. 問題解決を目的とし、仮説を立てる
4. データを収集する
5. 客観的に情報を分析する
6. 妥当性のある結論(提案)を出す

【成績評価の方法】 講義での討論参加 (70%)、レポート(30%)

【教科書】 特になし

【参考書】 授業で配布

地球環境科学特論 (Global Environmental Science)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 加藤 俊夫 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【講義の概要】

- (1) 地球が直面している環境問題について、科学の視点から考える。
 - ・「地球環境」の内容と変遷
 - ・「地球環境」の視点から捉えた問題とその解決方法
 - ・「京都議定書〜パリ協定」の解説
- (2) 講師が携わっている土木コンサルタントの立場での経験等に基づき、土木(社会資本整備〜インフラ整備)に関連する環境を学ぶ。
 - ・災害対策(洪水、地震、液状化、津波、土石流、流木)と環境
 - ・河川改修やダム開発、水力発電開発などの環境への負荷
- (3) 地球環境変化により、世界や日本で近年自然災害が激甚化している。河川・海岸・砂防・港湾・耐震の技術、防災士の立場から、「防災・減災」についての考えや技術を学ぶ。
- (4) 地球環境を、自分の学問分野、将来の職業、自分の生活など、視点の設定をかえて考えることを学ぶ。また、地球規模の環境と身近な環境の関係についても同様に考える。
 - ・上記の視点から捉えた地球環境
 - ・上記の視点から捉えた身近な環境
 - ・日本が直面している環境
- (5) 地球環境を捉える技術的手法の一手法として、技術士部門の総合技術監理手法(リスク管理、リスクマネジメントなど)を学ぶ。
- (6) 技術者が地球環境問題、環境問題についてどのように取り組むことが期待されているかを考える。

【講義の内容】

- ①地球環境問題の動向(「パリ協定」を題材)
- ②社会資本整備関係のコンサルタントの立場からの「環境問題」「対応方法や考え方」
- ③防災、減災について
- ④地球を取りまく環境の実態
- ⑤リスク管理手法、クライシスマネジメント
- ⑥技術倫理観、これからの時代を担う技術者に求められる環境への取り組み方

【学修到達目標】

- ①環境をフレキシブルに捉える視点の習得
- ②環境の持つ多面的な視点の習得
- ③リスクマネジメント、クライシスマネジメントという技術の習得
- ④自分の専門以外の研究と交流の意義の発見より新しいアイディアの展開の経験

【成績評価の方法】 講義での討論(20%)とレポート評価(80%)

【教科書】 配付資料

【参考書】

外国文化特論 (Foreign Culture)

選択

1 単位

2 期

非常勤講師

クレメンズ メツラー

授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【講義の概要】

西洋の映像文化を多様な角度から分析・解明する。学生の外国文化への幅を広げる。

文化的要素が人々の生活を形成する際に重要な役割を演じる事の理解度を深める。自分の国の文化に対する新しい展望を提供する。

ヨーロッパと日本で得た経験・知見を織り込んだ講義内容

【学修到達目標】

- ①ヨーロッパ文化の社会、宗教、歴史的な背景を理解することができる。
- ②ヨーロッパの建築様式および美術様式を概説することができる。
- ③現代ドイツの経済や産業の源泉について探ることができる。
- ④日本文化を海外の視点で見ることができる。

【講義の内容】

- ①オリエンテーション、「キリスト教ギリシャ、古代ローマ、キリスト教」、「キリスト教：源泉／歴史／文化的影響、ユダヤ教／イスラム教」
- ②ドイツの日常生活：民族の祭りと風俗慣、食文化、伝統、学制、西ドイツ・東ドイツ、ドイツの方言、新聞、本の見本市、他について
- ③欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィを比べる、その1「古代ギリシアから中世、ルネサンス、バロック」
- ④製品のデザイン史、イギリス産業革命、大量生産性と美、ドイツのデザインの始まり、ポルシェ と フォルクスワーゲン社、「Made in Germany」から「Designed in Germany」へ、バウハウス から アップル まで、他
- ⑤欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィを比べる、その2「アール・ヌーヴオーからモダン、ポスト・モダン、現在まで」
- ⑥現在のヨーロッパ：「イギリスとヨーロッパ」、「ドイツとフランス」、「北欧」、「ロシアと東ヨーロッパ」、「ギリシャクライシス」、「難民を受け入れる伝統」、他
- ⑦ まとめと自由討論
講義の最後は全員で自由討論、意見交換する。
注：外国人留学生が出席する場合には、英語（及ドイツ語）での説明も可能。

【成績評価の方法】 講義での討論(30%)、レポート提出及びショートレクチャー(70%)による総合評価

【教科書】 使用しない

【参考書】 特になし（授業の中で紹介する）

【連絡先】 メール：hello@clemensmetzler.com

3. 建築学専攻

(1) 教育課程表

大学院学則 別表(1)

部類	授業科目	単位数	毎週授業時間数				備考
			1年次		2年次		
			1	2	3	4	
[1] 講義	建築生産特論	2	2				
	建築構造学特論	2		2			
	建築史特論	2	2				
	建築設計特論	2		2			
	空間計画学特論	2			2		
	建築環境学特論Ⅰ	2	2				
	建築環境学特論Ⅱ	2		2			
	建築設計特別講義	1		1			
	建築生産特別講義	1			1		
	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			集中
	経済学特論	1	1	<1>			集中
	地球環境科学特論	1	1	<1>			集中
	外国文化特論	1	1	<1>			集中
[2] 演習	建築生産・構造学特別演習	2			2		
	建築史特別演習	2		2			
	建築設計特別演習Ⅰ	2	2				
	建築設計特別演習Ⅱ	2		2			
	建築設計特別演習Ⅲ	2			2		
	建築環境学特別演習Ⅰ	2	2				
	建築環境学特別演習Ⅱ	2		2			
	実用英語特別演習Ⅰ	2	2				
	実用英語特別演習Ⅱ	2		2			
[3] 研究	建築学特別研究Ⅰ	1.5	◎				
	建築学特別研究Ⅱ	1.5		◎			
	建築学特別研究Ⅲ	1.5			◎		
	建築学特別研究Ⅳ	1.5				◎	
	学外研修	4	◎	<◎>			

※ 一級建築士受験資格に関わる履修条件

以下の科目のうちから、次の履修条件を満たして単位を取得した場合に、当該修得科目は、建築士法施行第10条第1項に定める実務経験年数（一級建築士受験資格に必要な実務経験年数2年）のうちの1年分に該当する（大学院修了後1年の実務経験が必要）。

履修条件

- ・「学外研修」（インターンシップに相当）：4単位（必修）
- ・「学外研修」以外の科目（インターンシップ関連科目に該当）：11単位以上

部類	授業科目	単位数	1年次		2年次		
			1	2	3	4	
講義	建築生産特論	2	2				
	建築設計特論	2		2			
	建築設計特別講義	1		1			
	建築生産特別講義	1			1		
演習	建築設計特別演習Ⅰ	2	2				
	建築設計特別演習Ⅱ	2		2			
	建築設計特別演習Ⅲ	2			2		
	建築環境学特別演習Ⅰ	2	2				
研究	学外研修	4	◎	<◎>			

(2) 教育内容

建築は人間生活に最も身近な工学と位置づけられる。近年、建築構造物の規模の大型化、新材料・新工法の開発および地球環境問題がクローズアップされている。特に、東海地域では大地震が予想され、防災、耐震面での新たな研究開発が求められている。また、高齢化や福祉社会に対応した建築住環境の安全快適化、ゆとりのある美的空間の創出、環境に配慮した町作りや地域計画、環境汚染問題など多くの課題が提起されている。さらに、長年にわたって築いてきた建築文化を継承し、建築施設をどのように維持管理・再生していくかが、21世紀の建築学の担う役割の一つにもなっている。建築学専攻は、より高いレベルで上記の課題に対処できる能力を養成するためのカリキュラムを編成している。その内容は、材料・構造分野では、学部で学んだ構造力学やコンクリート工学等の基礎学力を強化しつつ、コンクリート構造物の耐震挙動に関する実験と解析を行い、大空間の構造的な安定性などの先端的内容を学ぶ。建築計画・歴史分野では、学部で学んだ建築設計、建築計画、建築史等の基礎学力を強化しつつ、建築設計理論、建築史学の先端的内容を会得する。建築環境分野では、学部教育では十分に触れられることのなかった広い範囲の環境問題を視野に入れ、地球規模にまで及ぶ様々の問題に対し、先端的内容とその方法を学ぶ。

(3) 履修上の心得

現在、多くの企業あるいは社会が求めている理想の人物像は、「創造性豊かで、何事にも積極的に取り組む情熱のある人物」である。授業および研究活動を通して少しでも理想の人物像に近づけるよう、カリキュラムは各専門分野の特徴を明確にして構成されている。したがって、選択した専門分野を中心に、関連する他の専門科目を選択することは、「建築」の全体像を把握するうえで極めて重要である。講義内容は、高度の問題発見能力・解決能力を備えた技術者・研究者にふさわしい構成となっている。産業界で求められる一級建築士あるいは一級施工管理技士を取得できるためにも、特定の学科目に偏らない幅のある科目選択が必要である。すなわち、開講されている特論は全て履修するほどの心構えが望ましい。

(4) 授業科目・担当教員等

建築学専攻

授 業 科 目		単 位 数	毎週授業時間数				担 当 教 員
			1年次		2年次		
			1	2	3	4	
建築学専攻科目	建築生産特論	2	2				高橋講師
	建築構造学特論	2		2			萩原教授
	建築史特論	2	2				高柳准教授
	建築設計特論	2		2			宇野教授・船橋准教授
	空間計画学特論	2			2		武藤(隆)教授・中島准教授
	建築環境学特論Ⅰ	2	2				渡邊教授
	建築環境学特論Ⅱ	2		2			岡本講師
	建築設計特別講義	1		1			阿竹非常勤講師
	建築生産特別講義	1			1		沖田非常勤講師
	建築生産・構造学特別演習	2			2		萩原教授・藤森准教授
	建築史特別演習	2		2			高柳准教授
	建築設計特別演習Ⅰ	2	2				宇野教授・中島准教授
	建築設計特別演習Ⅱ	2		2			武藤(隆)教授・米澤講師
	建築設計特別演習Ⅲ	2			2		米澤講師・船橋准教授
	建築環境学特別演習Ⅰ	2	2				岡本講師
	建築環境学特別演習Ⅱ	2		2			渡邊教授
	実用英語特別演習Ⅰ	2	2				佐藤(裕)非常勤講師
	実用英語特別演習Ⅱ	2		2			佐藤(裕)非常勤講師
	建築学特別研究Ⅰ	1.5	◎				各指導教員
建築学特別研究Ⅱ	1.5		◎			各指導教員	
建築学特別研究Ⅲ	1.5			◎		各指導教員	
建築学特別研究Ⅳ	1.5				◎	各指導教員	
全 研 究 科 目	学外研修	4	◎	<◎>			専攻長
	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			武藤(郷)非常勤講師
	経済学特論	1	1	<1>			八木非常勤講師
	地球環境科学特論	1	1	<1>			加藤非常勤講師
	外国文化特論	1	1	<1>			クレムス・メツァー非常勤講師

<建築学専攻科目>

建築生産特論 (Construction Engineering)

選択 2単位 1期 准教授 高橋 之 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

建築生産の各プロセスと管理技術について、建築企画、建築契約、建築基準法等関連諸法規、設計、発注、施工、維持管理の各段階ごとに、工事監理・数量把握・コスト管理を通して理解する。

工事監理・コスト管理の、建築生産における、構工法、工程計画、リスク管理、環境計画、法規、情報技術、PM・CM、PFI等の知識理論・技術手法について目標設定し、その達成を図る一連の管理活動能力を育成する。

【学修到達目標】

- ① 建築物が出来上がる過程の中での建築生産の位置付けと重要性を理解している。
- ② 各種工事の監理上の要点を理解している。
- ③ 建築学の様々な専門的な知識を、施工の効率化、コスト管理に生かすことができる。

【授業の内容】

- ① 建築コスト管理の概要
- ② 建築産業・生産とコスト管理
- ③ 設計計画、企画
- ④ 設計計画、コストデータ
- ⑤ 設計計画、VE・LCC
- ⑥ 設備計画・発注方式・契約
- ⑦ 工事監理・施工・維持管理
- ⑧ 工事監理・仮設・構工法・工程計画
- ⑨ 工事監理・解体・リスク管理・環境計画
- ⑩ 工事監理・法規・情報技術
- ⑪ PM・CM、PFI
- ⑫ BIM
- ⑬ 評価鑑定・法的責任・事例
- ⑭ 積算基準
- ⑮ 積算実技・まとめ

【成績評価の方法】 レポート(50%)と講義への取り組み状況(50%)とにより評価する。

【教科書】 テキストを配布する。

【参考書】

建築構造学特論 (Architectural Structural Engineering)

選択 2単位 2期 教授 萩原 伸幸 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

構造設計においては、安全性・施工性・経済性などのバランスの中で、要求される性能をいかに実現していくかということが重要となる。この講義では、建築物の安全性または機能性の確保を念頭において、構造物の荷重抵抗機構の仕組みとその特性、終局状態において現れる種々の力学的挙動を説明するとともに、線形から非線形に至るまでの振動学の基礎的理論とその応用について講義を行う。

【学修到達目標】

- ① 耐震規定の枠組みとその本質的な意味を説明できる。
- ② 構造物の荷重抵抗の仕組みと終局挙動について説明できる。
- ③ 振動学の基礎的な知識を運用して簡単な建物の応答を概算できる。
- ④ 性能設計のプロセスと意義を理解している。

【授業の内容】

- ① 概論
- ② 構造物の抵抗機構
- ③ 構造規定の変遷と地震力
- ④ 建築物の終局挙動と弾塑性復元力モデル
- ⑤ 1自由度線形振動の運動方程式とその性質
- ⑥ 多自由度線形振動の運動方程式と固有モード(1)
- ⑦ 多自由度線形振動の運動方程式と固有モード(2)
- ⑧ 多自由度系のモード分解と地震波の応答スペクトル
- ⑨ SRSS法
- ⑩ Ai分布に基づく地震力や応答解析結果との比較
- ⑪ 非線形運動方程式と構造物の弾塑性振動
- ⑫ 履歴減衰と等価線形化法
- ⑬ Capacity Spectrum Method
- ⑭ 限界耐力計算法
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 レポートにより成績を評価(100%)する。なお、出席については10回以上を合格の最低条件とする。

【教科書】 プリントを配布する

【参考書】

<建築学専攻科目>

建築設計特論 (Theory on Architectural design)

選択	2単位	2期	教授 宇野 享 准教授 船橋 仁奈	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	-----	----	----------------------	-------------------------

【授業の概要】

建築計画の基礎理論に加えて、居住環境や建築生産の現在的变化を踏まえた最新の計画理論を応用しながら、居住空間、立地、施設、建築物の再生に関わる講義を輪講形式で行う。また商業施設計画の2つ領域である業態計画、空間計画について時系列的に重要な計画内容を講義し、設計演習を通じて商業施設の特徴を解明する。

【学修到達目標】

- ① 様々な施設の建築計画を理解し、各施設のゾーニングを説明することができる。
- ② 時代とともに変化する施設系建築の新たなモデルを理解し、説明することができる。
- ③ 商業施設のおかれた環境を理解し、実態計画を説明することができる。
- ④ 商業施設の実態、外構、建築、サイン計画を踏まえた設計をすることができる。

授業の内容】

- ① 施設空間の表と裏 (各施設のゾーニング)
- ② 機能の解体と再編
- ③ 施設系建築の新たなモデル考察1 (学校・幼稚園)
- ④ 施設系建築の新たなモデル考察2 (病院・福祉施設)
- ⑤ 施設系建築の新たなモデル考察3 (劇場)
- ⑥ 施設系建築の新たなモデル考察4 (図書館) / 課題「施設空間への考察」
- ⑦ 課題講評、中間審査
- ⑧ 商業施設計画の領域性と段階性
- ⑨ 業態計画1 (マーケティングからコンセプト・ワーク)
- ⑩ 業態計画2 (対象者、商品、サービス、空間の設定) — 飲食、物販、サービス、複合商業 —
- ⑪ 外構計画、建築計画 (新築、テナント、リノベーション)
- ⑫ インテリア計画、サイン計画
- ⑬ 商業施設設計演習・課題「プランニング」
- ⑭ 商業施設設計演習・課題「デザイン」
- ⑮ 商業施設設計演習・課題評価、まとめ

【成績評価の方法】 講義への取り組み状況(20%)、プレゼンテーション(50%)、ディスカッション(30%)

【教科書】 適宜、指示する

【参考書】 適宜、指示する

<建築学専攻科目>

空間計画学特論 (Planning & Management of Architectural Space)

選択	2単位	3期	教授 武藤 隆	准教授 中島 貴光	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	-----	----	---------	-----------	-------------------------

【授業の概要】

建築計画の基礎理論を踏まえながら、居住環境の構想から計画、実現に至るまでに必要とされる各種リサーチ、サーヴェイ、フィールドワークに関して講義を行う。

【学修到達目標】

- ① 現地調査・実測ができる。
- ② 現地のデータを入手・分析ができる。
- ③ 法規に基づいて空間を提案できる。
- ④ 上記に基づいたプレゼンテーションができる。

【授業の内容】

- ① 土地の文脈を読む 1
- ② 土地の文脈を読む 2
- ③ 演習
- ④ 実測の方法 1
- ⑤ 実測の方法 2
- ⑥ 演習
- ⑦ 構法と構造 1
- ⑧ 構法と構造 2
- ⑨ 演習
- ⑩ フィールドワークの技法 1
- ⑪ フィールドワークの技法 2
- ⑫ 総合演習
- ⑬ 課題発表
- ⑭ 質疑応答
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 講義への取り組み状況(20%)、プレゼンテーション(50%)、ディスカッション(30%)で評価する

【教科書】 適宜、指示する

【参考書】 適宜、指示する

建築環境学特論 I (Architectural Environmental Engineering I)

選択	2単位	1期	教授 渡邊 慎一	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	-----	----	----------	-------------------------

【授業の概要】

前半：持続可能な社会の構築が求められている現在、建築に携わる我々は何を考え、何を実践していくべきか、サステイナブル建築の視点から議論を行なう。

後半：都市・建築空間に関する科学的研究において、環境心理生理学分野に対する関心は年々高まっている。様々な切り口から環境心理生理学研究についてアプローチした論文を取り上げ、内容について議論し、この分野の研究動向を知り、具体的な研究方法を学ぶ。

【学修到達目標】

- ① サステイナブル建築の実践例を説明できる。
- ② 持続可能な社会を構築するために建築の専門家として何を実践すべきか自分の考えを述べることができる。
- ③ 建築・都市空間を対象とした環境心理生理学研究の事例を説明できる。
- ④ 建築・都市空間における環境心理生理学の役割について自分の考えを述べるができる。

【授業の内容】

- ① サステイナブル建築の系譜
- ② グローカル・アプローチ
- ③ サステイナビリティの評価
- ④ エコロジカルなアプローチ
- ⑤ 技術的なアプローチ
- ⑥ 保全・再生的なアプローチ
- ⑦ 社会・文化的なアプローチ
- ⑧ 音環境と心理・生理研究
- ⑨ 熱環境と心理・生理研究
- ⑩ 空気環境と心理・生理研究 (1)
- ⑪ 空気環境と心理・生理研究 (2)
- ⑫ 視環境と心理・生理研究 (1)
- ⑬ 視環境と心理・生理研究 (2)
- ⑭ 心理・生理研究の総合的アプローチ
- ⑮ プレゼンテーション

【成績評価の方法】 講義への取り組み状況(20%)、プレゼンテーション(50%)、ディスカッション(30%)で評価する

【教科書】 プリントを配布する

【参考書】

<建築学専攻科目>

建築環境学特論Ⅱ (Architectural Environmental Engineering Ⅱ)

選択 2単位 2期 講師 岡本 洋輔 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

建築空間における環境要素の特徴を表す物理量や各種指標の算出方法およびその意味については、これまでの学部・大学院での授業を通じて修得している。そこで本授業では、実際に良好な建築環境の実現を果たしている優れた建築作品を対象として、環境の特徴とその操作・設計手法について学ぶ。さらに、ここで得た環境の操作・設計手法に関する知識を基にして自身が考えた案を模型作品として表現する。

【学修到達目標】

- ①建築環境の特徴を定量的に説明できる。
- ②優れた建築環境を有する作品例を説明できる。
- ③建築環境の具体的操作・設計手法について説明できる。
- ④模型作成行為を通して環境の操作を実践することができる。

【授業の内容】

- ① 概論
- ② 光環境的事例分析 1
- ③ 光環境的事例分析 2
- ④ 音環境的事例分析 1
- ⑤ 音環境的事例分析 2
- ⑥ 熱環境的事例分析 1
- ⑦ 熱環境的事例分析 2
- ⑧ 事例分析のまとめ
- ⑨ 計画立案 1
- ⑩ 計画立案 2
- ⑪ 模型作成 1
- ⑫ 模型作成 2
- ⑬ 模型撮影
- ⑭ 発表資料作成
- ⑮ プレゼンテーション

【成績評価の方法】 毎回の授業での取り組み (50%) とプレゼンテーションの内容(50%)

【教科書】 『光の建築を読み解く』、日本建築学会【編】、彰国社

【参考書】

建築設計特別講義 (Architectural Design)

選択 1単位 2期 非常勤講師 阿竹 克人 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

実務設計者により、最近の設計例に基づいて実際の設計方法を講義する。

【学修到達目標】

- ①実務設計の各段階において検討すべき具体的な問題を説明できる。
- ②設計事例を通して、今後の建築設計の可能性について説明できる。

【授業の内容】

- ① 建物概要
- ② 建築企画
- ③ 建築基本設計
- ④ 建築実施設計
- ⑤ 構造計画
- ⑥ 設備計画
- ⑦ 環境対策
- ⑧ まとめ

【成績評価の方法】 レポート(50%)と講義への取り組み状況(50%)とにより評価する。

【教科書】

【参考書】

<建築学専攻科目>

建築生産特別講義 (Construction Practice)

選択 1単位 3期 非常勤講師 沖田 正夫 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

鉄骨工事の施工について、工事監理の立場より、製作から建方までの一連の流れを解説する。

【学修到達目標】

- ① 工事監理の実際的な要点を理解している。
- ② テーマに沿った建築施工の流れを理解している。

【授業の内容】

- ① 鉄骨工事の工場加工
- ② 鉄骨工事の建方
- ③ 鉄骨工事の床工事
- ④ 鉄骨工事の耐火被覆
- ⑤ 鉄骨工事関連の免許・資格
- ⑥ 作業所（もしくはファブリケータ）施工見学
- ⑦ レポート作成

【成績評価の方法】 講義参加への取り組み状況(50%)とレポート提出(50%)とにより評価する。

【教科書】

【参考書】 鉄骨工事ガイドブック (公社) 日本積算協会

建築生産・構造学特別演習 (Seminar on Structural and Construction Engineering)

選択 2単位 2期 教授 萩原 伸幸 准教授 藤森 繁 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

建築生産に関する演習では、生産施工に関わる材料設計・品質管理、維持：保全手法の文献購読・演習を通して、建築物の生産における材料の品質と維持保全のための実践的な手法を理解する。

構造学に関する演習では、S 造または RC 造の具体的な建築物の立体構造モデルを作成し、計算機を用いた静的および動的解析を行う。この結果を通して、構造物の力学挙動と設計上の要点を理解する。

【学修到達目標】

- ① 設計で留意すべき建築生産の課題と監理上の要点を理解している。
- ② 構造解析のプロセスを理解している。
- ③ 地震時などの構造物の力学挙動を具体的にイメージできる。

【授業の内容】

- ① 建築生産の概要
- ② コンクリートの調合設計
- ③ 調合設計演習
- ④ 建築材料の品質管理
- ⑤ 品質管理、維持・保全手法
- ⑥ 各種試験方法の演習と結果の考察
- ⑦ 建築生産まとめ
- ⑧ 構造学演習の概要と解析ソフトウェアの使用法説明
- ⑨ 例題とする構造モデルについて
- ⑩ 入力データの作成
- ⑪ 線形解析による応力・変形
- ⑫ 漸増および交番載荷による弾塑性解析とその結果の分析
- ⑬ 固有モード・固有周期・刺激係数の計算
- ⑭ 地震応答解析とその結果の分析
- ⑮ 構造演習まとめ

【成績評価の方法】 レポート(50%)と演習の取り組み状況(50%)とにより評価する。

【教科書】 プリントを配布する。

【参考書】 青山博之、上村智彦：マトリックス法による構造解析、培風館、木村欣一：振動と力、丸善、T. Paulay and M.J.N. Priestley: Seismic Design of Reinforced Concrete and Masonry Buildings, Wiley & Sons, Inc

<建築学専攻科目>

建築史特別演習 (Seminar on Architectural History)

選択 2単位 2期 准教授 高柳 伸一 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

本講義の前半では、「一次資料の用い方」、「西洋建築史の研究」、「都市史研究の方法」について講じる。「一次資料の用い方」については、西欧を代表するシマンカス公文書館(スペイン)とインディアス公文書館(同)の史料を中心に古図面を含む一次資料をどのように活かして、研究が進められるのかを説明する。続いて「西洋建築史の研究」では、19世紀末から本格的に開始した近代的な研究の主要なものを紹介し、建築史学がどのような学説(学派)や方法によって成立しているのかを概説する。その後、「都市史研究の方法」についても講じる。後半は、受講者が事例を挙げて、歴史や文化といった外的文脈と建築の関係に関して、文献等を中心に調査をおこない、その結果はレポートとして提出する。

【学修到達目標】

- ①建築史研究における一次資料の活用法を理解できる。
- ②幾つかの西洋建築史研究の学説を理解できる。
- ③幾つかの都市史研究の方法を理解できる。
- ④外的文脈と建築の関係について自己の意見を述べることができる。

【成績評価の方法】 演習の取り組み状況とレポートをそれぞれ同等に勘案し総合的に評価する。

【教科書】 参考資料の配布

【参考書】

【授業の内容】

- ① 概要
- ②都市・建築史研究における一次資料の用い方(1)
- ③都市・建築史研究における一次資料の用い方(2)
- ④ 西洋建築史の研究：様式論(1)
- ⑤ 西洋建築史の研究：様式論(2)
- ⑥ 西洋建築史の研究：空間論
- ⑦ 西洋建築史の研究：意味論
- ⑧ 都市史研究の方法(1)
- ⑨ 都市史研究の方法(2)
- ⑩ 外的文脈と建築に関する事例調査
- ⑪ 同上
- ⑫ 同上
- ⑬ 同上
- ⑭ 同上
- ⑮ 総括

建築史特論 (Architectural History)

選択 2単位 1期 准教授 高柳 伸一 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

西洋建築史に関して、「建築理論の歴史」、「都市の歴史」、「近世の軍事都市」の3つの分野から考察する。「建築理論の歴史」では、各時代の建築家が表している特徴的な考え方に関して建築書を通して概説する。続いて「都市の歴史」を学ぶことで、建築と同様に、各時代特有の政治、文化、経済などが都市にも反映されることを確認する。そして「近世の軍事都市」では、世界史的な視点に立脚した都市建築史の研究として、16世紀から17世紀のスペイン帝国の要塞化事業を説明する。当時のスペインは、帝国の維持拡大のため、地中海沿岸部の都市から新大陸を含む大西洋沿岸部の都市に向けて防衛整備を進めていた。その築城の専門家が「工兵 military engineer」であった。当時を代表する工兵の活動を系譜的に理解することで、都市は歴史と連動して変容していった経緯を具体的に紹介する。

【学修到達目標】

- ①建築美は歴史的に変化してきたことを理解できる。
- ②古代、中世、近世、近代といった各時代の建築家が示している特徴的な考え方を理解できる。
- ③各時代の都市の様相やその計画の特徴を理解できる。
- ④都市や建築は時代の変化に連動していることが理解できる。

【成績評価の方法】 講義に対する取り組み状況と口頭設問をそれぞれ同等に評価する。

【教科書】 プリント配布

【参考書】

【授業の内容】

- ① 概要
- ② 建築美の歴史の変遷：近世から近代へ
- ③ 建築理論の歴史(1)：古代、そして中世から近世の建築書
- ④ 建築理論の歴史(2)：近世から近代に向かう建築書
- ⑤ 古典古代の都市
- ⑥ 西洋の中世都市
- ⑦ 西洋の近世都市
- ⑧ 近代の都市
- ⑨ 稜堡式築城術の誕生
- ⑩ 工兵の出現とその職能：近世国家の成立
- ⑪ スペイン帝国による都市の防衛整備(1)：地中海から大西洋へ
- ⑫ スペイン帝国による都市の防衛整備(2)：地中海から大西洋へ
- ⑬ 軍事都市の類型学
- ⑭ 新大陸の植民都市と築城
- ⑮ まとめ

<建築学専攻科目>

建築設計特別演習 I (Seminar on Space Planning I)

選択	2単位	1期	教授	宇野 享	准教授	中島 貴光	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	-----	----	----	------	-----	-------	-------------------------

【授業の概要】

前半は、建築物やその部分、例えば屋根や外壁、地下街や高架下、パーキングなど街を構成する要素を敷地と捉え、潜在的な場の力や魅力、問題点を発見し、その敷地特性を生かして街に直接作用するようなアイデア＝「寄生する仕掛け」を予算も含めて提案する。このように緩やかに街を再構成する都市再生手法を「パラサイトアーキテクチャ」と呼ぶことにする。この演習課題を通して、街や建築に対する観察力、洞察力、考察力を養い発展させることを目的とする。

後半では、椅子の製作を通して、家具デザインに求められる知識・技術を幅広く理解し、身体的寸法に基づいた詳細な設計を行うことを主眼に置く。製作に用いる素材や力学的な特性にも配慮し、実際に座ることができる椅子としての機能を満たすことが肝要である。身体的寸法に即したオリジナルの椅子を実作することで、1/1のささやかな建築を実現し、応用的に建築設計の手法を体得することを目的とする。

また、前半後半を通して、建築設計実務における設計図書の作成業務を想定したプレゼンテーションの知識及び技能の修得を目指す。

【学修到達目標】

- ①街や建築を独自の視点で観察・洞察・考察することができる。
- ②街で発見した問題点や課題に対する解決策を提案することができる。
- ③様々な椅子の実例及び実測から、椅子と身体寸法の関係性を説明できる。
- ④椅子の構造、素材特性、快適性を踏まえた椅子を製作することができる。

【授業の内容】

- ①「パラサイトアーキテクチャ」の事例紹介とガイダンス
- ②敷地の選定 (各自発表+討論)
- ③アイデアの提案 (各自発表+討論)
- ④プレゼンテーション (ドローイング)
- ⑤プレゼンテーション (模型+提案書)
- ⑥プレゼンテーション (模型+提案書)
- ⑦中間講評
- ⑧名作椅子の事例紹介およびガイダンス
- ⑨事例調査 (各自発表+討論)
- ⑩コンセプトモデル提案、身体寸法の実測
- ⑪図面および模型提出
- ⑫椅子製作1
- ⑬椅子製作2
- ⑭プレゼンテーション (椅子およびパネル)
- ⑮総合評価と講評会

【成績評価の方法】出席率80%以上を評価対象とし、成績評価の比重は、演習の取り組み状況 (30%)、提案内容 (70%) で評価する。

【教科書】なし

【参考書】『10+1 NO.32 特集80年代建築／可能性としてのポストモダン』 (INAX 出版)
『リノベーションの現場』 (彰国社刊)

建築設計特別演習 II (Seminar on Space Planning II)

選択	2単位	2期	教授	武藤 隆	講師	米澤 隆	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	-----	----	----	------	----	------	-------------------------

【授業の概要】

産業を発達させることにより生活の豊かさを獲得してきた先進諸国において、供給が需要を上回り出して久しい。建築業界も同様であり、定形化した建物の建設は求められておらず、新しい需要を喚起する提案が求められている。

本授業では、建築計画学や設計論を応用・活用し、集住系建築物に関する新しい生活提案を伴った建築設計提案を行う。授業の後半の本課題は、ミラノ工科大学との合同課題とし、これを「Dラーニング」方式で行う。「Dラーニング」とは、実際の課題を授業の課題とし、課題依頼者に提案する授業を言う。

【学修到達目標】

- ①課題条件に基づいたコンセプトの立案ができる。
- ②社会状況に基づいたプログラムの立案ができる。
- ③周辺状況に基づいた総合的な設計ができる。
- ④上記に基づいたプレゼンテーションができる。

【授業の内容】

- ① ガイダンス、
- ② 演習課題1 説明、スケッチ提出
- ③ 演習課題1 の最終スケッチ案提出
- ④ 演習課題2 説明、スケッチ提出
- ⑤ 演習課題2 の最終スケッチ案提出
- ⑥ 演習課題3 説明、スケッチ提出
- ⑦ 演習課題3 の最終スケッチ案提出
- ⑧ 課題1、2、3の清書図面提出、最終課題説明
- ⑨ 作品研究提出・説明
- ⑩ スケッチ提出、発表、ディスカッション
- ⑪ スケッチ提出、発表、ディスカッション
- ⑫ スケッチ提出、発表、ディスカッション
- ⑬ 最終スケッチ提出、発表、ディスカッション
- ⑭ ドローイングと中継経過報告
- ⑮ 提出

【成績評価の方法】12回以上を評価対象とし、成績評価は、演習の取り組み状況 (30%)、提案内容 (70%) とする。

【教科書】なし

【参考書】学部の時代に使用した各教科の教科書及び最新の雑誌等の情報

<建築学専攻科目>

建築設計特別演習Ⅲ (Seminar on Space Planning Ⅲ)

選択	2単位	3期	講師 准教授	米澤 隆 船橋 仁奈	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	-----	----	-----------	---------------	-------------------------

【授業の概要】

建築設計の実務の際に必要な時代的、社会的、周囲環境の把握がなされ、用途性(使用性、利用性、生活)、身体性、心理性から建築を空間化することができるように、新築、既存建築物のコンバージョン・リノベーション等を通じて実務レベルの設計手法を習得させる。

またこの時期に開催されている建築設計コンペ等に応募し上記で学んだ知識が第3者に伝わり説得することができるかを体得させる。

【学修到達目標】

- ① コンペの趣旨を多角的に理解できる。
- ② 時代的背景、社会的背景、敷地の周囲性を読み取ることができる。
- ③ 用途性(生活、使用性、利用性等)、意味性を空間化できる。
- ④ 5W1Hをプレゼン・パネルから伝達できる。

【授業の内容】

- ① 設計実務の基礎
- ② 設計実務の基礎/コンペの選定
- ③ コンペの趣旨、入賞者作品の分析
- ④ 設計実務の基礎
- ⑤ 設計実務の基礎/コンペ/WHO、WHAT、WHY
- ⑥ コンペ/WHO(対象者)、WHAT(用意、空間)、WHY(社会的必然性)
- ⑦ 敷地設定
- ⑧ コンセプト、イメージ、ラフスケッチ、ラフ模型
- ⑨ コンセプト、イメージ、ラフスケッチ、ラフ模型
- ⑩ 中間発表・講評
- ⑪ パネル・プレゼンFW /正式模型
- ⑫ パネル・プレゼンFW /正式模型
- ⑬ パネル・プレゼンFW /正式模型
- ⑭ 最終発表・講評・評価
- ⑮ 修正・提出パネル完成

【成績評価の方法】出席(要2/3以上)と作品

【教科書】日本建築学会設計競技優秀作品集

【参考書】日本建築学会設計競技優秀作品集

建築環境学特別演習Ⅰ (Seminar on Architecture and Architectural Engineering I)

選択	2単位	1期	講師	岡本 洋輔	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	-----	----	----	-------	-------------------------

【授業の概要】

建築空間内の環境を分析・評価する方法について学ぶことを目的とする。

前半では、光の物理的特徴や評価指標および評価手法について概説する。また、室内の光を測定し分析を行う。さらに、波長や明るさを操作した光環境が物や色の見えに与える影響について評価を実施し、考察を行う。

後半では、音の物理的特徴や評価指標および評価手法について概説する。また、実環境での音や騒音を測定し分析を行う。さらに、大きさや周波数特性を操作した音環境が聞き取りやすさや不快感に与える影響について評価を実施し、考察を行う。

【学修到達目標】

- ① 光の物理的特徴と評価指標について説明できる。
- ② 光環境の評価を実践することができる。
- ③ 音の物理的特徴と評価指標について説明できる。
- ④ 音環境の評価を実践することができる。

【授業の内容】

- ① 光の物理的特徴の解説
- ② 光の測光量とその他の評価指標の解説
- ③ 光環境の測定と分析
- ④ 光環境の評価手法の解説
- ⑤ 光環境の操作と選定
- ⑥ 光環境評価の実施
- ⑦ 光環境評価結果の解析と考察
- ⑧ 音の物理的特徴と評価指標の解説
- ⑨ 音環境の測定と分析
- ⑩ 音環境の評価手法の解説
- ⑪ 音環境の操作と選定
- ⑫ 音環境評価の実施
- ⑬ 音環境評価結果の解析と考察
- ⑭ 環境評価のまとめとディスカッション
- ⑮ プレゼンテーション

【成績評価の方法】毎回の授業での取り組み(50%)とプレゼンテーションの内容(50%)

【教科書】適宜資料を配付する

【参考書】適宜資料を配付する

建築環境学特別演習Ⅱ (Seminar on Architecture and Architectural EngineeringⅡ)

選択 2単位

2期

教授 渡邊 慎一

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

省エネルギーを実現するためのパッシブ手法を用いた建築デザインについて、その理論と設計手法を学ぶ。さらに、それらを応用した建築を設計し提案する。

【学修到達目標】

- ①建築・都市空間の防暑計画について説明できる。
- ②建築・都市空間の採涼計画について説明できる。
- ③パッシブ手法を用いた建築デザインを提案できる。

【授業の内容】

- ① 防暑計画 (日射遮蔽)
- ② 防暑計画 (通風の促進)
- ③ 防暑計画 (排熱の促進)
- ④ 採涼計画 (放射冷却)
- ⑤ 採涼計画 (蒸発冷却)
- ⑥ 採涼計画 (地中熱利用)
- ⑦ 敷地の選定
- ⑧ コンセプトの提案
- ⑨ エスキスチェック 1
- ⑩ エスキスチェック 2
- ⑪ エスキスチェック 3
- ⑫ ドローイングと模型製作 1
- ⑬ ドローイングと模型製作 2
- ⑭ ドローイングと模型製作 3
- ⑮ プレゼンテーション

【成績評価の方法】 演習の取り組み状況とディスカッション (50%) ,プレゼンテーション (50%) で評価する

【教科書】 プリントを配付する

【参考書】 「住宅のパッシブクーリング ～自然を活かした涼しい住まいづくり」 (浦野良美 編著, 森北出版)
「Heating, Cooling, Lighting」 (Norbert Lechner, John Wiley & Sons)

<建築学専攻科目>

実用英語特別演習Ⅰ (Seminar on Practical English I)

選択	2単位	1期	非常勤講師	佐藤 裕子	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
【授業の概要】 現代ビジネス社会において、大学院卒業者に要求される実践的な英語能力のうち (1) 長文読解力(Reading) (2) 聴解力(Listening) の習得・向上を図る。 その為英字新聞、雑誌・スピーチ・インタビューを教材とし (1) 英文を読み、その大意を把握する 及び (2) スピーチ・インタビューを聞いて、その大意を把握する能力の習得・育成を狙った演習を行う。 尚その過程で、検定問題にて基本語彙、文法及び文章構造に関する知識や、英語の発音に関する知識や技法も確認する。 【学修到達目標】 ① 英字新聞、雑誌等の記事を読み、その内容を理解することが出来る。 ② スピーチ、インタビューを聞き、その大意を把握することが出来る。 ③ スピーチ、インタビューを聞き、それについて自分の意見を述べる事が出来る。 【成績評価の方法】 授業参加度 (50%)、課題レポート (50%) 【教科書】 オバマ演説集 <i>CMN English Express</i> 編集部編 朝日新聞社、インタビュー等のプリント 【参考書】 特になし。			【授業の内容】 ①オリエンテーション・自己紹介 Listening・Reading演習 ②オバマ元大統領の生い立ち・検定問題 ③オバマ元大統領基調スピーチ・検定問題 ④オバマ元大統領指名受諾スピーチ・検定問題 ⑤オバマ元大統領勝利スピーチ・検定問題 ⑥大統領としての功績・検定問題 ⑦スピーチを聞き、それについて自分の意見を述べる。 Listening演習 ⑧JICA, ODAの紹介・検定問題 ⑨緒方貞子さんインタビュー (1) ・検定問題 ⑩緒方貞子さんインタビュー (2) ・検定問題 ⑪設問に答える・検定問題 ⑫インタビューを聞き、それについて自分の意見を述べる。 Reading演習 ⑬英字新聞の読み方について・検定問題 ⑭雑誌の読み方について・検定問題 ⑮まとめ		

実用英語特別演習Ⅱ (Seminar on Practical English II)

選択	2単位	2期	非常勤講師	佐藤 裕子	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
【授業の概要】 現代ビジネス社会において、大学院卒業者に要求される実践的な英語能力のうち (1) 英文ビジネスレター・Eメール作成力 (2) 英語プレゼンテーション力 (3) 長文読解力・聴解力のさらなる習得・向上を図る。 英語プレゼンテーション力習得の前段階として、英語による著名なスピーチを材料として文章の組み立て方・話し方・強調方法等を習得する。 尚その過程で、検定問題にて基本語彙、文法及び文章構造に関する知識、英語の発音に関する技法も再度確認する。 【学修到達目標】 ① 英文ビジネスレター・Eメールに関する基礎知識を身に付け、ビジネスレター・Eメールを作成することが出来る。 ② スピーチを聞き、その内容を把握することが出来る。 ③ 英語によるスピーチや話し言葉の特徴を理解し、それを踏まえた英語による基礎的なプレゼンテーションが出来る。 【成績評価の方法】 授業貢献度 (50%)、課題レポート (50%) 【教科書】 <i>The Legendary Speeches and Presentations of Steve Jobs</i> 朝日出版社編 朝日出版社 ビジネスレター演習・Eメール演習ハンドアウト、インタビュー・スピーチ記事等のプリント 【参考書】 特になし。			【授業の内容】 ①オリエンテーション、ビジネスレター作成演習 ②ビジネスレター作成—提出・検定問題 ③Eメール作成演習—提出・検定問題 ④スティーブ・ジョブズの生涯・検定問題 ⑤スティーブ・ジョブズスピーチ I・検定問題 ⑥スティーブ・ジョブズスピーチ II・検定問題 ⑦スティーブ・ジョブズスピーチ III・検定問題 ⑧スティーブ・ジョブズの軌跡・検定問題 ⑨スティーブ・ジョブズの功績・検定問題 ⑩スティーブ・ジョブズの素顔・検定問題 ⑪ケネディ元大統領スピーチ I・検定問題 ⑫ケネディ元大統領スピーチ II・検定問題 ⑬プレゼンテーション演習Ⅰ・検定問題 ⑭プレゼンテーション演習Ⅱ・検定問題 ⑮まとめ		

<建築学専攻科目>

建築学特別研究 I ～IV (Research in Planning & Design I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 宇野 享 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

敷地特性の分析、様々な分野の動向を視野に入れたコンセプトメイキングおよび建築設計など、設計プロセスを重視したリアリティの高い修士設計を行う。さらに、設計プロセスの段階でのフィールドワーク、文献収集等により、建築設計・デザインの方法論を研究する。

【学修到達目標】

- ①フィールドワークにより、隠れた都市構造の発見ができる。
- ②デザインコンペに参加し、独自のアイデアによる建築を設計できる。
- ③インターンシップの実務経験を生かし、具体的かつ現実的な視点で観察できる。
- ④修士設計を通して、独自のデザイン方法論を確立できる。

【授業の内容】

建築設計・デザインを重視し、実社会で即戦力となりうる人材育成を視野に入れた授業を進める。

- 1)デザインコンペへの積極的な参加。
- 2)インターンシップによる実務の経験。
- 3)フィールドワークによる隠れた都市構造の発見。
- 4)修士設計。
- 5)独自の建築設計・デザイン方法論の確立。

【成績評価の方法】コンペの参加回数（30%）と修士設計の提案内容（70%）により総合的に評価する。

【教科書】「建築家なしの建築」〈鹿島出版会〉B・ルドルフスキー著 渡辺武信訳

【参考書】「集落への旅」〈岩波新書〉原広司著、「集落の教え 100」〈彰国社〉原広司著

建築学特別研究 I ～IV (Research in Planning & Design I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 武藤 隆 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

建築やインテリアの視点から、アートにおける展示空間についての調査・分析、計画による研究を行う。

【学修到達目標】

- ①課題条件に基づいたリサーチができる。
- ②社会状況に基づいたリサーチができる。
- ③上記に基づいたプレゼンテーションができる。

【授業の内容】

- ・美術館の展示空間
- ・ギャラリーの展示空間
- ・国際展における展示空間
- ・まちとアート
- ・建築とアート

上記に関して、調査・分析し、今までにどんな空間が使われてきたか、これからはどんな空間が必要になるかを、研究と計画とで、年間を通して実践的な検証を行なう。

【成績評価の方法】文献調査への取り組み（30%）、現地調査への取り組み（30%）、設計・提案を含めた研究成果の公表（40%）の総合評価

【教科書】随時指定する。

【参考書】随時指定する。

<建築学専攻科目>

建築学特別研究 I～IV (Research in Planning & Design I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 萩原 伸幸 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

構造物の耐震性能を考える際の基礎となる動的な非線形挙動の性質とその応答推定法についての研究、および構造物の合理的な力学的振る舞いを考える形態システムの創生・最適化解析に関する研究を行う。

【授業の内容】

以下の研究テーマに関連する文献の収集と通読により理論的な基礎知識と構造工学上の位置づけを理解し、それによって浮かび上がってくる課題について数値解析、実験などの遂行計画を立案し、具体的な検討を進める。また得られた成果については、積極的に学会発表を行う。

- ・構造物の振動性状の分析法と応答解析の理論
- ・非線形振動論に基づく構造物の動的挙動の性質
- ・近年記録された強震動の性質とその被害性状の分析
- ・エネルギー論に基づく耐震設計手法
- ・等価線形化法に基づく非線形応答の計算手法
- ・構造物の最適化手法とその応用
- ・構造システムに求められる荷重抵抗機構
- ・構造形態創生に関する実験的な手法

【成績評価の方法】研究の実施状況(50%)と学会発表を含めた成果報告内容(50%)により総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】構造工学系の論文等。国立情報学研究所/学術コンテンツ・ポータル「GeNii」(<http://ge.nii.ac.jp/genii/jsp/index.jsp>) より自発的に関連する資料の情報を収集する。

1単位は、45時間の学修を必要とする内容をもって構成することとなっています。本学では、授業の方法に応じ、授業時間内の学修と授業時間外の学修を次のとおり定めています。

(1) 講義及び演習(1単位科目) 授業時間内の学修15時間(毎週1時間)、授業時間外の学修30時間(毎週2時間)

(2) 講義及び演習(2単位科目) 授業時間内の学修 30 時間(毎週 2 時間)、授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

建築学特別研究 I～IV (Research in Planning & Design I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 講師 米澤 隆 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

建築やインテリアの視点から、アートにおける展示空間についての調査・分析、計画による研究を行う。

【授業の内容】

- ・美術館の展示空間
- ・ギャラリーの展示空間
- ・国際展における展示空間
- ・まちとアート
- ・建築とアート

【学修到達目標】

- ①課題条件に基づいたリサーチができる。
- ②社会状況に基づいたリサーチができる。
- ③上記に基づいたプレゼンテーションができる。

上記に関して、調査・分析し、今までにどんな空間が使われてきたか、これからはどんな空間が必要になるかを、研究と計画とで、年間を通して実践的な検証を行なう。

【成績評価の方法】文献調査への取り組み(30%)、現地調査への取り組み(30%)、設計・提案を含めた研究成果の公表(40%)の総合評価

【教科書】随時指定する。

【参考書】随時指定する。

<全研究科共通科目>

学外研修 (Practice in Architectural Job)

選択 4単位 1(2)期 教授 萩原 伸幸 授業時間外の学修 120 時間(毎週 8 時間)

【実習の概要】

建築に関連する企業または建築士事務所において、建築設計の実務経験が豊富な一級建築士の指導の下に建築の実務に関する研修を行う。建築実務には、建築生産、建築設計・監理、建築調査計画等広範な分野があり、希望する分野で最適な研修先を選定する。本学のキャリアセンターでは、研修先の事前登録制度があり密接な連携をとるようにする。

【学修到達目標】

- ①実習先企業の業務内容や、建築業界の中での位置付けを説明できる。
- ②実務で発生する具体的な問題点の一例とその解決策について説明できる。
- ③机上の知識と現実の問題の格差を説明できる。
- ④将来の進路に対する自分の考え方を述べることができる。

【授業の内容】

建築実務の理解とともに自身の方向付けやスキルアップを目的とし、将来の建築をより良くすることに役立つように受け入れ先と研修内容を十分協議して計画する。実際の学外研修は以下の3段階で行う。

- ・受け入れ先との事前研修
- ・受け入れ先での学外研修
- ・学外研修報告

研修時間は、学外研修 20 日間（各日：8 時間+研修報告書作成 0.5 時間、計 170 時間）、及び事前研修・終了後の報告会（10 時間）とする。

[例] 設計事務所を研修先とする場合の研修内容

- ・建築設計事務所における建築設計という実務全体の理解
- ・設計条件をクリアするためのさまざまなスタディの手法の理解
- ・空間計画と構造計画、環境計画等の密接な関係、建築設計の工程手順等の把握と理解

具体的には、計画地の法規の調査、建築主・施工者との定例会議への出席、実施設計の補助、現場監理への随行など。

【成績評価の方法】 受け入れ企業、建築事務所等からの評価（50%）、研修報告書（25%）、研修報告（25%）

【教科書】

【参考書】

ベンチャービジネス特論 (Venture Business)

授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

選択 1単位 1期 非常勤講師 武藤 郷史

【授業の概要】

我が国のイノベーションを牽引するベンチャービジネスの必要性を理解するとともに、実例やワークを元にベンチャービジネス成功のエッセンスを学ぶ。

- (1)我が国の経済環境から、ベンチャービジネスおよびベンチャー支援政策のメガトレンドを理解する。
- (2)その上で、成功するベンチャー起業家の特性を把握し、どのようにしてビジネスモデルを構築していくかを考える。
- (3)ベンチャーマネジメントは一般企業と特性が異なり、また成長過程ごとに課題が変化する。そのポイントを考察する。
- (4)ベンチャービジネス成功のためのエッセンスを理解し、ビジネスプランの書き方を学ぶ。

【学修到達目標】

- ①ベンチャー戦略の概要を理解し、戦略設計の基本フレームを使った事業コンセプト設計を実践できる
- ②基本的なビジネスプランの骨子が描けるようになる

【授業の内容】

- ① 我が国におけるベンチャー企業の必要性
 - ・我が国経済におけるベンチャービジネスの役割
- ② イノベーションをおこすベンチャー企業
 - ・ベンチャービジネスがおこすイノベーションとは。
- ③ 成功するベンチャー起業家の特性
 - ・成功する起業家のエッセンス
- ④ ベンチャーマネジメントの留意点
 - ・ベンチャーマネジメントの特性
 - ・成長ステージごとの経営のポイント
- ⑤ ビジネスプランの役割
 - ・ベンチャー戦略とビジネスプラン
- ⑥ ビジネスプランの書き方
 - ・ビジネスプランの展開方法
- ⑦ 発表

【成績評価の方法】 講義での討論(30%)とレポート評価(70%)

【教科書】 資料配布

【参考書】

<全研究科共通科目>

経済学特論 (Economics)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 八木エドワード 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

バブル景気とは、1986 年 12 月から 1991 年 2 月までの 51 か月間、日本で起こった資産価格の上昇や好景気のことである。バブル崩壊後のいわゆる「失われた 10 年」は「失われた 20 年」となり、今現在は「失われた 30 年」の途中である。人口減少、少子化、超高齢化社会の課題を考慮すると、「失われた 100 年」となる可能性がある。25 年以上に渡り低迷する結果を招いた、根本的な問題点、解決策は何か。

【学修到達目標】

学生達が来るべき就職活動や卒業後の人生にどう対応すれば良いかについて役立つ知識を得ている。

【授業の内容】

7 回の授業では、日本経済の推移、グローバル化、アジアの時代(特に中国の躍進と中間層・富裕層の拡大)、東海地区の経済(トヨタ依存症)等を検討し、「MBA 研究方法」で行う：

1. 課題を認識する
2. 問題点などを指摘(定義)する
3. 問題解決を目的とし、仮説を立てる
4. データを収集する
5. 客観的に情報を分析する
6. 妥当性のある結論(提案)を出す

【成績評価の方法】 講義での討論参加 (70%)、レポート(30%)

【教科書】 特になし

【参考書】 授業で配布

地球環境科学特論 (Global Environmental Science)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 加藤 俊夫 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【講義の概要】

- (1) 地球が直面している環境問題について、科学の視点から考える。
 - ・「地球環境」の内容と変遷
 - ・「地球環境」の視点から捉えた問題とその解決方法
 - ・「京都議定書～パリ協定」の解説
- (2) 講師が携わっている土木コンサルタントの立場での経験等に基づき、土木(社会資本整備～インフラ整備)に関連する環境を学ぶ。
 - ・災害対策(洪水、地震、液状化、津波、土石流、流木)と環境
 - ・河川改修やダム開発、水力発電開発などの環境への負荷
- (3) 地球環境変化により、世界や日本で近年自然災害が激甚化している。河川・海岸・砂防・港湾・耐震の技術、防災士の立場から、「防災・減災」についての考えや技術を学ぶ。
- (4) 地球環境を、自分の学問分野、将来の職業、自分の生活など、視点の設定をかえて考えることを学ぶ。また、地球規模の環境と身近な環境の関係についても同様に考える。
 - ・上記の視点から捉えた地球環境
 - ・上記の視点から捉えた身近な環境
 - ・日本が直面している環境
- (5) 地球環境を捉える技術的手法の一手法として、技術士部門の総合技術監理手法(リスク管理、リスクマネジメントなど)を学ぶ。
- (6) 技術者が地球環境問題、環境問題についてどのように取り組むことが期待されているかを考える。

【講義の内容】

- ① 地球環境問題の動向(「パリ協定」を題材)
- ② 社会資本整備関係のコンサルタントの立場からの「環境問題」「対応方法や考え方」
- ③ 防災、減災について
- ④ 地球を取りまく環境の実態
- ⑤ リスク管理手法、クライシスマネジメント
- ⑥ 技術倫理観、これからの時代を担う技術者に求められる環境への取り組み方

【学修到達目標】

- ① 環境をフレキシブルに捉える観点の習得
- ② 環境の持つ多面的な視点の習得
- ③ リスクマネジメント、クライシスマネジメントという技術の習得
- ④ 自分の専門以外の研究と交流の意義の発見より新しいアイデアの展開の経験

【成績評価の方法】 講義での討論(20%)とレポート評価(80%)

【教科書】 配付資料

【参考書】

<全研究科共通科目>

外国文化特論 (Foreign Culture)

選択 1 単位 2 期 非常勤講師 ルメンズ メツラー 授業時間外の学修 30 時間 (毎週 2 時間)

【講義の概要】

西洋の映像文化を多様な角度から分析・解明する。学生の外国文化への幅を広げる。

文化的要素が人々の生活を形成する際に重要な役割を演じる事の理解度を深める。自分の国の文化に対する新しい展望を提供する。

ヨーロッパと日本で得た経験・知見を織り込んだ講義内容

【学修到達目標】

- ①ヨーロッパ文化の社会、宗教、歴史的な背景を理解することができる。
- ②ヨーロッパの建築様式および美術様式を概説することができる。
- ③現代ドイツの経済や産業の源泉について探ることができる。
- ④日本文化を海外の視点で見ることができる。

【講義の内容】

- ①オリエンテーション、「キリスト教ギリシャ、古代ローマ、キリスト教」、「キリスト教：源泉／歴史／文化的影響、ユダヤ教／イスラム教」
- ②ドイツの日常生活：民族の祭りと風俗慣、食文化、伝統、学制、西ドイツ・東ドイツ、ドイツの方言、新聞、本の見本市、他について
- ③欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィを比べる、その1「古代ギリシアから中世、ルネサンス、バロック」
- ④製品のデザイン史、イギリス産業革命、大量生産性と美、ドイツのデザインの始まり、ポルシェとフォルクスワーゲン社、「Made in Germany」から「Designed in Germany」へ、バウハウスからアップルまで、他
- ⑤欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィを比べる、その2「アール・ヌーヴからモダン、ポスト・モダン、現在まで」
- ⑥現在のヨーロッパ：「イギリスとヨーロッパ」、「ドイツとフランス」、「北欧」、「ロシアと東ヨーロッパ」、「ギリシャクライシス」、「難民を受け入れる伝統」、他
- ⑦まとめと自由討論
講義の最後は全員で自由討論、意見交換する。
注：外国人留学生が出席する場合には、英語（及ドイツ語）での説明も可能。

【成績評価の方法】講義での討論(30%)、レポート提出及びショートレクチャー(70%)による総合評価

【教科書】使用しない

【参考書】特になし（授業の中で紹介する）

【連絡先】メール：hello@clemensmetzler.com

4. 都市環境デザイン学専攻

(1) 教育課程表

大学院学則 別表(1)

部類	コース	授業科目	単位数	毎週授業時間数				備考
				1年次		2年次		
				1	2	3	4	
[1] 講義	コース共通	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			集中
		経済学特論	1	1	<1>			集中
		地球環境科学特論	1	1	<1>			集中
		外国文化特論	1	1	<1>			集中
		都市環境デザイン学特別講義Ⅰ	1	1	<1>			集中
		都市環境デザイン学特別講義Ⅱ	1			1	<1>	集中
	土木・環境 コース	構造学特論	2	2				
		環境地盤工学特論	2	2				
		土壌・地下水工学特論	2	2				
		水圏環境学特論	2	2				
		環境工学特論	2	2				
		都市政策特論	2	2				
かおり デザイン コース	交通政策特論	2		2				
	嗅覚測定法特論	2	2					
	においの心理生理評価特論	2	2					
	臭気の制御法特論	2		2				
[2] 演習	コース共通	におい・かおり成分分析法特論	2		2			
		実用英語特別演習Ⅰ	2	2				
	土木・環境 コース	実用英語特別演習Ⅱ	2		2			
		構造学特別演習	2		2			
		環境地盤工学特別演習	2		2			
		土壌・地下水工学特別演習	2		2			
		水圏環境学特別演習	2		2			
		環境工学特別演習	2		2			
	かおり デザイン コース	統計解析特別演習	2	2				
		都市・交通計画特別演習	2		2			
[3] 研究	コース共通	脱臭性能評価特別演習	2	2				
		におい・かおり測定特別演習	2		2			
		都市環境デザイン学特別研究Ⅰ	1.5	◎				
		都市環境デザイン学特別研究Ⅱ	1.5		◎			
		都市環境デザイン学特別研究Ⅲ	1.5			◎		
		都市環境デザイン学特別研究Ⅳ	1.5				◎	
学外研修	2	◎	<◎>					

(2) 教育内容

従来、道路、鉄道、空港、港湾といった交通施設、自然災害から都市を守る護岸や堤防などの防災施設、毎日の生活に欠かせない上下水道や電力・ガス・通信施設等の社会基盤施設を整備するための学問は「土木工学」「都市工学」として発展し、人々に安全で快適な暮らしを保障してきました。社会基盤には、これらの施設だけでなく、水や土壌の浄化施設、多自然型の川や水辺空間、生活の利便性と環境への配慮を両立させたまちづくりなど、人々が豊かに、かつ安全に生活するために必要な施設や機能も含まれます。

1990年代のバブル経済崩壊後、社会基盤の整備・生活環境の創造に対する社会の要請は厳しくなって多様化しています。たとえば、i)戦後建設されて寿命が近づいている多くの社会基盤諸施設を適切に維持管理して再生させること、ii)集中豪雨や地震等の自然災害による被害を軽減すること、iii)エネルギーの大量消費に伴う廃棄物に起因した環境汚染問題を解決すること、iv)急速な情報化、国際化、少子高齢化等の社会経済情勢の変化に十分対応できるようにするための都市の再生を図り、快適な生活環境を創造すること等の問題があります。

このような問題に対処するために、大学院では、学部で勉強したよりもさらに高度な知識とともに、環境保全に関する幅広い知識を身につけ、人間の生活・生産活動の場である「都市」において、持続的発展可能な「環境」を創出するために、社会基盤施設や快適な住環境をどのように創るのかを明確な思想と知恵をもって決定できる人材を養成しています。

こうした新しい「都市環境デザイン」を創造していくときに、土木・環境コースでは、問題解決に必要な構造工学、地盤工学、水・環境工学、都市・交通計画学等の学問を横断的に再編する緻密な教育を行っています。また、国土・都市・地域の望ましい未来を想定して公共性の高い社会基盤整備に取り組む技術者の大学院教育プログラムを提供しています。基礎となる学部の建築学科土木・環境専攻からの教育の継続性・関係を明確にして、社会基盤整備の多様化に積極的に対応できるように、より専門性が高く、大学を取り巻く地域の発展に寄与できる教育・研究を遂行しています。

専攻の科目は、社会基盤デザイン系、都市環境システム系、専攻内共通科目、全専攻共通科目に分類されています。社会基盤デザインと都市環境システムの2つの系は、学部教育の延長上に位置づけた科目であり、その内容は以下のとおりです。

社会基盤デザイン系：持続的発展可能な社会を目指すために、構造工学を駆使して、社会基盤施設としての建造物の適切な建設と維持管理を行い、地震・洪水等に対する防災対策を計画・設計・施工するための知識・能力を身に付けます。また、地盤工学に基づいて、都市の再生に支障をきたす土壌・地下水汚染を分析し、地盤汚染の除去・浄化方法と社会資本のリスク低減措置を提案するための能力を養います。

都市環境システム系：安全かつ快適な生活環境を創造するため、水・環境工学に基づき、水循環現象や環境汚染の機構の解明と環境の修復・保全を行い、持続可能な発展を支える都市システムを構築していくための能力を養います。また、都市・交通計画学に基づき、都市環境整備に関わる問題の把握、調査・分析、計画立案に至るプロセスを習得し、都市・交通施設を戦略的に再生創出するための立案能力を養います。

かおりデザインコースでは、におい・かおりの測定・評価、成分分析、におい・かおりの制御法、心理生理的影響等に関する科目を配置し、快適な住環境が創造できる力を身に付けるための教育を行っています。

におい・かおりの測定・評価法、におい・かおりの成分分析法、不快なにおいの除去法、心身への影響などについて基礎理論から応用・実践に至る教育・研究を行います。また、嗅覚によるにおいの測定方法の歴史、個別のにおいに適した濃縮法、成分分析法の基礎やにおい・かおりの制御方法に関する基本的な考え方や手法のメカニズムを基に、測定対象に応じた高精度かつ簡易的な嗅覚測定法や適切なにおい・かおりの制御方法の開発ができる能力を養います。

(3) 履修上の心得

土木・環境コースの主要開講科目は、社会基盤デザイン系、都市環境システム系、および専攻内共通科目に分類されています。また、かおりデザインコースの主要科目は、かおりデザイン系と専攻内共通科目に分類されています。自分が選んだ専門分野を中心にした科目だけでなく、関連する専門分野科目、全専攻共通科目も積極的に履修することが望まれます。

大学院における授業科目の履修は大学院修了のための最低要件です。特別研究による研究活動、学会での研究発表を通じて、自己研鑽の蓄積、ならびに、いろいろな人との出会いは、将来における各自の貴重な糧になるでしょう。都市環境デザイン専攻土木・環境コースを修了した後の一つの目標として、「技術士」資格の取得があります。目標達成のためには普段の勉強と旺盛な興味を持続が欠かせません。そのためにも、毎日自然に勉強する習慣を大学院の間にしつかり体得することが大事です。

(4) 授業科目・担当教員等

都市環境デザイン学専攻

学 科 目 等	授 業 科 目	単 位 数	毎週授業時間数				担 当 教 員
			1年次		2年次		
			1	2	3	4	
土 木 ・ 環 境 コ ー ス	構造学特論	2	2				木全講師
	構造学特別演習	2		2			木全講師
	環境地盤工学特論	2	2				大東教授
	土壌・地下水工学特論	2	2				棚橋教授
	環境地盤工学特別演習	2		2			大東教授
	土壌・地下水工学特別演習	2		2			棚橋教授
	水圏環境学特論	2	2				鷺見教授
	環境工学特論	2	2				堀内教授
	水圏環境学特別演習	2		2			鷺見教授
	環境工学特別演習	2		2			堀内教授・高山教授
	都市政策特論	2	2				樋口講師
	交通政策特論	2		2			嶋田教授
	統計解析特別演習	2	2				嶋田教授
	都市・交通計画特別演習	2		2			樋口講師
か お り デ ザ イ ン コ ー ス	嗅覚測定法特論	2	2				棚村准教授
	においの心理生理評価特論	2	2				山口教授
	臭気の制御法特論	2		2			光田教授
	におい・かおり成分分析法特論	2		2			棚村准教授
	脱臭性能評価特別演習	2	2				光田教授
	におい・かおり測定特別演習	2		2			山口教授
専 攻 内 共 通 科 目	都市環境デザイン学特別研究Ⅰ	1.5	◎				各指導教員
	都市環境デザイン学特別研究Ⅱ	1.5		◎			各指導教員
	都市環境デザイン学特別研究Ⅲ	1.5			◎		各指導教員
	都市環境デザイン学特別研究Ⅳ	1.5	2	2		◎	各指導教員
	実用英語特別演習Ⅰ	2	2				佐藤(裕)非常勤講師
	実用英語特別演習Ⅱ	2		2			佐藤(裕)非常勤講師
	都市環境デザイン学特別講義Ⅰ	1	1	<1>			未定
	都市環境デザイン学特別講義Ⅱ	1			1	<1>	未定
共 通 科 目	学外研修	2	◎	<◎>			専攻長
	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			武藤非常勤講師
	経済学特論	1	1	<1>			八木非常勤講師
	地球環境科学特論	1	1	<1>			加藤非常勤講師
	外国文化特論	1	1	<1>			クレムス・メツラー非常勤講師

<都市環境デザイン学専攻科目：土木・環境コース>

構造学特論 (Structural Engineering)

選択	2単位	1期	講師	木全 博聖	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
【授業の概要】 当科目では、コンクリートの材料的・構造的特性を幅広く学びます。学部で開講されている「建設材料学(4期)」、「RC 構造デザイン工学(5期)」、「維持管理工学(7期)」の内容が基礎知識となりますので、これら科目の内容を十分に学んでいない受講生には、徹底した予習・復習を求めます。			【授業の内容】 ① 総説 ② コンクリート用材料(1) ③ コンクリート用材料(2) ④ フレッシュコンクリートの性質 ⑤ 硬化コンクリートの性質 ⑥ コンクリートの耐久性(1) ⑦ コンクリートの耐久性(2) ⑧ コンクリートの配合設計 ⑨ コンクリートの製造管理 ⑩ コンクリートの施工 ⑪ 特殊なコンクリート ⑫ コンクリート構造の設計(1) ⑬ コンクリート構造の設計(2) ⑭ コンクリート構造の設計(3) ⑮ コンクリート構造の設計(4) ⑯ 期末試験		
【学習到達目標】 ① コンクリート用材料およびフレッシュコンクリートの性能に関する重要ポイントについて、説明できる。 ② 硬化コンクリートの性能およびコンクリートの耐久性に関する重要ポイントについて、説明できる。 ③ コンクリートの配合・製造・施工に関する重要ポイントについて、説明できる。 ④ コンクリート構造物の設計に関する重要ポイントについて、説明できる。					
【成績評価の方法】 期末試験(100点)による評価。時間外学習の課題は提出を義務とし、未提出・未完成の場合は期末試験の得点から減点する。					
【教科書】 『コンクリート技術の要点(日本コンクリート工学会)』を教科書とするが、購入は任意とする。					
【参考書】 『コンクリートを学ぶ・構造編/施工編(理工図書)』					

構造学特別演習 (Seminar on Structural Analysis)

選択	2単位	2期	講師	木全 博聖	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
【授業の概要】 当科目では、コンクリート構造物(RC はり)の設計および構造解析の基本を学びます。1期『構造学特論』に加え、学部で開講されている「形と力1(1期)」、「形と力2(2期)」、「建設材料学(4期)」、「RC 構造デザイン工学(5期)」、「維持管理工学(7期)」、「基礎情報処理(1期)」、「応用情報処理(6期)」の内容が基礎知識となりますので、これら科目の内容を十分に学んでいない受講生には、徹底した予習・復習を求めます。			【授業の内容】 ① 総説 ② はりの力学の理論(1) ③ はりの力学の理論(2) ④ はりの力学の理論(3) ⑤ はりの力学の理論(4) ⑥ はりの力学の理論(5) ⑦ コンクリートと鋼の応力-ひずみ関係(1) ⑧ コンクリートと鋼の応力-ひずみ関係(2) ⑨ コンクリートと鋼の応力-ひずみ関係(3) ⑩ 有限要素法(1) ⑪ 有限要素法(2) ⑫ 有限要素法(3) ⑬ 有限要素法(4) ⑭ 有限要素法(5) ⑮ 有限要素法(6) ⑯ 期末試験		
【学修到達目標】 ① はりの曲げ・せん断理論について、説明できる。 ② コンクリートと鋼の応力-ひずみ特性について、説明できる。 ③ 鉄筋コンクリート構造の力学的特性について、説明できる。 ④ 有限要素法を用いて、はりの構造解析をすることができる。					
【成績評価の方法】 期末試験(100点)による評価。時間外学習の課題は提出を義務とし、未提出・未完成の場合は期末試験の得点から減点する。					
【教科書】 講義プリントを配布する。					
【参考書】 構造工学における計算力学の基礎と応用, 土木学会					

環境地盤工学特論 (Environmental Geotechnics)

選択 2単位 1期 教授 大東 憲二 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

地球環境の保全と創造には、地盤環境が大きく関与してくる。21世紀の持続的発展のために重要な環境地盤工学について、その理念と構成について講義する。また、地盤環境に大きく影響する地盤・地下水の汚染、廃棄物減量のためのリサイクル、安全な地盤環境を保つための軟弱地盤対策について講義を行う。

【授業の運営方法】

毎回の講義の後、それぞれの講義内容について討論を行う。そして、討論内容をふまえたレポートを毎回提出する。

【学修到達目標】

- ①環境地盤工学の理念を説明できる。
- ②地盤・地下水汚染対策について説明できる。
- ③廃棄物の適正処理について説明できる。
- ④安全な地盤環境を保つための軟弱地盤対策について説明できる。
- ⑤地盤環境保全に関連した法律や制度について説明できる。

【授業の内容】

- ① 開発と環境保全の両立
- ② 地盤情報の権利と利用
- ③ 開発がもたらす砂漠化
- ④ 酸性雨による地盤の酸性化
- ⑤ 酸性雨と黄砂現象
- ⑥ 広域地盤沈下防止と地下水有効利用
- ⑦ 地下開発と地下水保全
- ⑧ 地盤・地下水汚染の調査方法
- ⑨ 汚染地盤・地下水の浄化方法
- ⑩ 一般廃棄物と産業廃棄物
- ⑪ 廃棄物処分場の構造
- ⑫ 建設副産物のリサイクル
- ⑬ 環境基本法と環境基本計画
- ⑭ 土木学会地球環境行動計画
- ⑮ 環境管理規格 ISO14000

【成績評価の方法】 講義内容についての討論 40%、課題レポート 60%による総合評価

【教科書】 プリントを配布する

【参考書】

土壌・地下水工学特論 (Soil and Groundwater)

選択 2単位 1期 教授 棚橋 秀行 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

個々の技術・理論を詳細に理解することも大切であるが、この講義では大学院生としての知識の幅を広げることを主眼におきたいと考えている。生きた最新技術の知識を得るための題材として、ここ数年の地盤工学会・土木学会C部門・汚染防止研究集会の中から、この講義内容に関係した研究発表論文に目を通し、それぞれの研究者が何を問題としてとらえているのか、という「着眼点」を抽出する取り組みを行う予定である。学生一名当たり論文概要を目標50件作成させ、各自の研究における文献調査のトレーニングにもなるような講義を目指したいと考えている。

【学修到達目標】

- ①地盤の強度と設計手法について説明できる。
- ②地盤改良と地盤調査技術について説明できる。
- ③地盤の透水性の解析的評価について説明できる。

【授業の内容】

- ① ガイダンス
- ② 地盤の強度と設計手法 (地盤工学会論文1)
- ③ 地盤の強度と設計手法 (地盤工学会論文2)
- ④ 地盤の強度と設計手法 (土木学会C部門論文1)
- ⑤ 地盤の強度と設計手法 (土木学会C部門論文2)
- ⑥ 地盤改良と地盤調査技術 (地盤工学会論文1)
- ⑦ 地盤改良と地盤調査技術 (地盤工学会論文2)
- ⑧ 地盤改良と地盤調査技術 (土木学会C部門論文1)
- ⑨ 地盤改良と地盤調査技術 (土木学会C部門論文2)
- ⑩ 地盤改良と地盤調査技術 (汚染研究集会論文1)
- ⑪ 地盤改良と地盤調査技術 (汚染研究集会論文2)
- ⑫ 地盤の透水性の解析的評価 (地盤工学会論文)
- ⑬ 地盤の透水性の解析的評価 (土木学会C部門論文)
- ⑭ 地盤の透水性の解析的評価 (汚染研究集会論文)
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 論文概要の完成度(80%)と、これに関する説明・討論における理解度(20%)で総合的に評価

【教科書】 近年の地盤工学会・土木学会C部門・汚染防止研究集会の研究概要集を配布

【参考書】

環境地盤工学特別演習 (Seminar on Environmental Geotechnics)

選択 2単位 2期 教授 大東 憲二 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

近年、工場跡地や農地での土壌・地下水汚染が社会問題となっているが、汚染物質が地盤内をどのように移動するかを解析することは、汚染された土壌や地下水の浄化対策を検討する上で重要である。

この授業は、地盤内の汚染物質移動のメカニズムを理解し、汚染物質移動解析ソフトウェアを使用できるようになることを目的とする。

【授業の運営方法】

地盤内の汚染物質移動のメカニズムを学習した後、各自が簡単な地盤モデルを作り、汚染物質移動解析ソフトウェアを使用して汚染物質移動のシミュレーションを行い、その結果を発表する。

【学修到達目標】

- ①地下水汚染物質の種類と特性について説明できる。
- ②汚染物質移動のメカニズムについて説明できる。
- ③汚染物質移動の数値モデルについて説明できる。
- ④汚染物質移動シミュレーションモデルの作成方法を説明できる。
- ⑤汚染物質移動シミュレーションを実行し、その結果を評価することができる。

【成績評価の方法】 課題レポート 30%、プレゼンテーション 70%による総合評価

【教科書】 プリントを配布する

【参考書】

【授業の内容】

- ① 地下水汚染のイントロダクション
- ② 地下水流動と井戸理論
- ③ 地下水汚染物質の種類
- ④ 汚染物質移動のメカニズム
- ⑤ 汚染物質の変化のプロセス
- ⑥ 微生物分解と自然希釈のモデル化
- ⑦ 不飽和域の流れと汚染物質の移動
- ⑧ 汚染物質移動の数値モデル
- ⑨ 非水溶性液体の移動
- ⑩ 汚染地下水の浄化対策
- ⑪ 汚染物質移動シミュレーションモデルの作成 (その1)
- ⑫ 汚染物質移動シミュレーションモデルの作成 (その2)
- ⑬ 汚染物質移動シミュレーションモデルの作成 (その3)
- ⑭ シミュレーション結果のプレゼンテーション (その1)
- ⑮ シミュレーション結果のプレゼンテーション (その2)

土壌・地下水工学特別演習 (Seminar on Soil and Groundwater)

選択 2単位 2期 教授 棚橋 秀行 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

この講義では大学院生としての知識の幅を広げることを主眼に、教科書として地盤・環境用語辞典をとりあげ、3000語に及ぶ専門用語を正確に暗記・説明できずとも、社会に出るから聞いたことがある、というレベルに指導したいと考えている。

専門用語のなかで重要と思われるもの、特に工法などで理解のために図解が必要なものは重点的に説明する。

【学修到達目標】

- ①土質力学に関する専門用語を説明できる。
- ②地盤工事に関する施工技術を説明できる。
- ③地下水水質など環境に関する専門用語を説明できる。
- ④地質学および地質調査に関する専門用語を説明できる。

【授業の内容】

- ① 地盤・環境用語辞典の輪読-1
- ② 地盤・環境用語辞典の輪読-2
- ③ 地盤・環境用語辞典の輪読-3
- ④ 地盤・環境用語辞典の輪読-4
- ⑤ 地盤・環境用語辞典の輪読-5
- ⑥ 地盤・環境用語辞典の輪読-6
- ⑦ まとめ
- ⑧ 中間試験
- ⑨ 地盤・環境用語辞典の輪読-7
- ⑩ 地盤・環境用語辞典の輪読-8
- ⑪ 地盤・環境用語辞典の輪読-9
- ⑫ 地盤・環境用語辞典の輪読-10
- ⑬ 地盤・環境用語辞典の輪読-11
- ⑭ 地盤・環境用語辞典の輪読-12
- ⑮ まとめ
- ⑯ 期末試験

【成績評価の方法】 中間試験 (50%)、期末試験 (50%)による総合評価

【教科書】 実用 地盤・環境用語辞典 小林康昭ほか・山海堂

【参考書】

水圏環境学特論 (Water Environmental Engineering)

選択 2単位 1期 教授 鷲見 哲也 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

河川管理に必要な事柄として、(1)河川の場合や生態系形成機構、(2)現行の河川の計画立案の手順の考え方を説明する。その上で、(3)河川管理の諸目的において発生する諸問題の構造を明らかにし、その中でも特に(4)河川環境(生態系・水質)の改善に役立つ物理場の変化による生態系や水質への応答の様子を示し、そこから導き出される河川の役割を解説する。

また、現地見学を行い、講義の内容の一部現地で解説する。

【学習到達目標】

- ①河川計画の基本的な考え方を理解している。
- ②河道の相互作用系について理解している。
- ③水文観測手法と原理を理解している。
- ④流出解析と河道解析の位置づけを理解している。

【授業の内容】

- ①流域・河川管理の基本的な考え方
- ②河川整備基本方針と河川整備計画
- ③治水計画
- ④利水と河川環境
- ⑤河道の場の形成機構
- ⑥河道の地形変化と植生の役割
- ⑦河川生態系と河川管理
- ⑧ダム役割と影響
- ⑨河川と流域対応
- ⑩水文観測
- ⑪流出解析
- ⑫河床材料と移動床流れ
- ⑬現地見学(1)
- ⑭現地見学(2)
- ⑮まとめ

【成績評価の方法】出席を前提とし、演習およびレポート 100%

【教科書】適宜プリント配布(矢作川河川整備基本方針、矢作川河川整備計画、ほか)

【参考書】適宜指示する。

環境工学特論 (Environmental Engineering)

選択 2単位 1期 教授 堀内 将人 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

科学技術が高度に発達した現代、人々の暮らしを便利にするために様々な工業製品が開発され、多くの人工化学物質が利用されている。それらのうち、人や生態系への毒性の有無が定性的・定量的にはっきりしているものはごくわずかであり、多くは毒性の有無、毒性の内容、程度が不明なままである。この問題に対処するには、まず、それらの影響を評価する共通のものさしが必要となる。そのものさしとなるものが「環境リスク」の考え方である。本講では、環境リスクの概念、曝露評価法、リスク管理法等について解説を行う。

【学修到達目標】

- ①環境リスクの評価手順を説明できる。
- ②曝露量を見積もる手法を説明できる。
- ③用量-反応関係を推定する手法を説明できる。
- ④環境リスク管理の考え方を理解しており、問題点を列挙することができる。
- ⑤Risk Learning を用いて有害物質の健康リスクを計算することができる。

【授業の内容】

- ① 環境リスクの概念
- ② 環境リスクの評価手法
- ③ 用量-反応モデルⅠ
- ④ 用量-反応モデルⅡ
- ⑤ 曝露評価手法Ⅰ
- ⑥ 曝露評価手法Ⅱ
- ⑦ 曝露経路(重金属)
- ⑧ 曝露経路(有機物)
- ⑨ 健康リスク評価法Ⅰ
- ⑩ 健康リスク評価法Ⅱ
- ⑪ リスク認知
- ⑫ リスクトレードオフ
- ⑬ リスク管理
- ⑭ Risk Learning による健康リスク評価Ⅰ
- ⑮ Risk Learning による健康リスク評価Ⅱ

【成績評価の方法】レポート(70%)、討議への参加度(30%)

【教科書】プリント

【参考書】

水圏環境学特別演習 (Seminar on Water Environmental Engineering)

選択 2単位 2期 教授 鷲見 哲也 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

本授業では、河川や流域の治水・利水・環境の機能について取り扱う上で必要な物理的・数理的な知識を学ぶとともにその適用につき演習を行う。中でも特に、ソフトウェアを用いた河道の流れ・流砂・地形変化の計算、貯留施設の最適化、タンクモデルを用いた長期流出解析の3つ演習を中心とする。

【学習到達目標】

- ①河道の水・土砂・地形変化のツールの基本的な使い方理解している。
- ②利水用貯留施設の計画と最適化の具体的な計算の基本について理解している。
- ③長期流出解析を行うことができる。

【授業の内容】

- ①流域の数理的取扱いの概要(1)
- ②流域の数理的取扱いの概要(2)
- ③河道の水・土砂輸送モデル(1)
- ④河道の水・土砂輸送モデル(2)
- ⑤河道の水・土砂輸送計算演習(1)
- ⑥河道の水・土砂輸送計算演習(2)
- ⑦河道の水・土砂輸送計算演習(3)
- ⑧河道の水・土砂輸送計算演習(4)
- ⑨貯留施設の最適化演習(1)
- ⑩貯留施設の最適化演習(2)
- ⑪貯留施設の最適化演習(3)
- ⑫長期流出解析の演習(1)
- ⑬長期流出解析の演習(2)
- ⑭長期流出解析の演習(3)
- ⑮まとめと総合演習

【成績評価の方法】出席を前提とし、演習およびレポートで評価(100%)

【教科書】適宜プリントを配布

【参考書】基礎水理学(林泰造, 鹿島出版会)

環境工学特別演習 (Seminar on Environmental Engineering)

選択 2単位 2期 教授 堀内 将人 教授 高山 努 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

前半(堀内担当)は、環境・健康・技術問題におけるリスクの科学的な解析手法を学ぶ。健康リスクを評価するためには、有害物質の用量-反応関係を低用量レベルで把握する必要がある。本講では、用量-反応モデルの考え方や、人が有害物質を取り込んだ場合の臓器・組織中濃度を推定するための数学モデルの構築、解析を演習形式で学ぶ。さらに、健康リスクに対する人の認知について、社会心理学的アプローチを行い、現実的な問題解決に資する知識を養う。

後半(高山担当)は、環境中で重要な役割を果たしている物質としての水について、その重要な役割が、水のどのような化学的性質に基づくのか、水の分子にまで立ち返り学ぶ。

また水溶液が、物質循環におけるキーであることは論を俟たない。水溶液の成り立ち、性質、環境中での役割についても学習する。

【学修到達目標】

- ①身近な事象に対して用量-反応モデルを推定することができる。
- ②ストックフローモデルを構築し、環境中の有害物質濃度を計算することができる。
- ③体内代謝モデルを構築して定式化し、臓器・組織中の有害物質濃度を計算することができる。
- ④環境問題で重要な物質の化学的性質を理解し、それに基づいた環境中での動態を説明できる。

【授業の内容】

- ①用量-反応モデルの推定
- ②ストックフローモデル
- ③暴露評価手法
- ④体内代謝モデルI
- ⑤体内代謝モデルII
- ⑥環境リスク認知の社会心理学的考察I
- ⑦環境リスク認知の社会心理学的考察II
- ⑧水における化学結合/分子の形
共有結合と水素結合
- ⑨水の物性と水分子の成り立ちの関係
- ⑩環境中での水の循環と物性との関連
- ⑪水溶液とは、性質・構造
- ⑫水溶液の酸性・塩基性と環境
- ⑬生命と水
- ⑭宇宙空間における水
- ⑮環境中の水に関する総合的検討

【成績評価の方法】発表(40%)、レポート(60%)の総合評価

【教科書】プリント

【参考書】

都市政策特論 (Urban and Transportation Policy)

選択 2単位 1期 講師 樋口 恵一 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

成熟社会への移行、少子・高齢化や国際化の進展、ICT技術の進歩、環境問題への対応など社会環境をめぐる変化は、都市整備の各種政策にも多大なインパクトを与えている。

ここでは、近年の都市に関する課題と、そのための主な政策について扱う。

【学習到達目標】

- ①都市政策に関わる社会環境の変化について概説できる。
- ②近年施行された主な都市政策関連法制度について概説できる。
- ③官民連携のまちづくり事業について説明できる。
- ④近年の都市政策の課題について説明できる。

【授業の内容】

- ① 都市政策に関わる社会環境の変化 I
- ② 都市政策に関わる社会環境の変化 II
- ③ 事例報告 I
- ④ 近年の関連法制度の動向
- ⑤ 事例報告 II
- ⑥ 事例報告 III
- ⑦ 最近の都市・公共政策のトピックス I
- ⑧ 事例報告 IV
- ⑨ 最近の都市・公共政策のトピックス II
- ⑩ 事例報告 V
- ⑪ 官民連携のまちづくりと PFI 及び PPP 事業
- ⑫ 事例報告 VI
- ⑬ 公共空間の利活用
- ⑭ 政策評価
- ⑮ 総括

【成績評価の方法】 事例報告 (80%) とその発表・討論 (20%) による総合評価

【教科書】 随時プリントを配布

【参考書】

交通政策特論 (Transportation Policy)

選択 2単位 2期 教授 嶋田 喜昭 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

成熟社会への移行、少子・高齢化や国際化の進展、ICT技術の進歩、環境問題への対応など社会環境をめぐる変化は、都市交通の各種政策にも多大なインパクトを与えている。

ここでは、近年の交通に関する課題と、そのための主な政策について扱う。

【学習到達目標】

- ①交通政策に関わる社会環境の変化と課題について概説できる。
- ②近年施行された主な交通政策関連法制度について概説できる。
- ③主な TDM 施策について説明できる。
- ④最近の ITS の内容について概説できる。
- ⑤自動車の自動運転化における課題について説明できる。

【授業の内容】

- ① 交通政策に関わる社会環境の変化
- ② まちづくりと交通
- ③ 事例報告 I
- ④ 近年の関連法制度の動向
- ⑤ 事例報告 II
- ⑥ TDM (Transportation Demand Management) および MM (Mobility Management)
- ⑦ 事例報告 III
- ⑧ ITS (Intelligent Transportation Systems)
- ⑨ 事例報告 IV
- ⑩ 超小型モビリティ
- ⑪ 事例報告 V
- ⑫ 自動運転化の進展
- ⑬ 事例報告 VI
- ⑭ 自転車利用環境の整備
- ⑮ 総括

【成績評価の方法】 事例報告 (80%) とその発表・討論 (20%) による総合評価

【教科書】 随時プリントを配布

【参考書】

統計解析特別演習 (Seminar on Statistical Analysis)

選択	2単位	1期	教授	嶋田 喜昭	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	-----	----	----	-------	-------------------------

【授業の概要】

社会基盤施設の計画に際しては、さまざまな社会現象等の統計解析（分析）が不可欠となる。
ここでは、主要な統計分析手法や事例等について扱う。

【学習到達目標】

- ①データの種類・尺度について説明できる。
- ②主な確率分布について説明できる。
- ③推測統計について説明できる。
- ④母平均等の統計的推定ができる。
- ⑤主な統計的検定ができる。
- ⑥2変数以上の関連性について算出できる。
- ⑦主な多変量解析について説明できる。

【授業の内容】

- ① 統計学および統計データの概要
- ② データ整理 I
- ③ データ整理 II
- ④ 確率分布 I
- ⑤ 確率分布 II
- ⑥ 推測統計
- ⑦ 統計的推定 I
- ⑧ 統計的推定 II
- ⑨ 統計的検定 I
- ⑩ 統計的検定 II
- ⑪ 統計的検定 III
- ⑫ 相関分析
- ⑬ 分散分析
- ⑭ 多変量解析
- ⑮ 総括

【成績評価の方法】 演習（80%）とレポート課題（20%）による総合評価

【教科書】 随時プリントを配布

【参考書】 伊豆原浩二、嶋田喜昭共編「土木計画学」オーム社、市原清志著「バイオサイエンスの統計学」南江堂

都市・交通計画特別演習 (Seminar on City and Transportation Planning)

選択	2単位	2期	講師	樋口 恵一	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
----	-----	----	----	-------	-------------------------

【授業の概要】

国や地方自治体等が実施している様々な調査結果（統計指標）が、インターネットを介して容易に入手できるようになった。
ここでは、都市や交通に関連する既存統計指標の収集を行い、エクセルやGIS、SPSS等を使った解析技術を学習する。

【学習到達目標】

- ①各種基本統計指標を収集することができる。
- ②各種データを集計し、実態や課題を論理的に考察できる。

【授業の内容】

- ① 既存統計指標の概説 I
- ② 既存統計指標の概説 II
- ③ 演習 A：都市や地域を対象とした演習（課題設定）
- ④ 演習 A：都市や地域を対象とした課題整理
- ⑤ 演習 A：GIS等を活用した高度な解析
- ⑥ 演習 A：GIS等を活用した高度な解析
- ⑦ 演習 A：GIS等を活用した高度な解析
- ⑧ 演習 A：プレゼンテーション
- ⑨ 演習 B：交通に関連する統計指標の入手
- ⑩ 演習 B：エクセル等を使った集計分析
- ⑪ 演習 B：解析ソフトを使った高度な演算
- ⑫ 演習 B：解析ソフトを使った高度な演算
- ⑬ 演習 B：解析ソフトを使った高度な演算
- ⑭ 演習 B：プレゼンテーション
- ⑮ 総括

【成績評価の方法】 事例報告（80%）とその発表・討論（20%）による総合評価

【教科書】 随時プリントを配布

【参考書】

<都市環境デザイン学専攻科目：かおりデザインコース>

嗅覚測定法特論 (Odor Measurement Method by Olfaction)

選択 2単位 1期 准教授 棚村 壽三 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

においはひとの嗅覚で知覚する感覚事象であることから、嗅覚に基づいた感覚的指標を用いたにおいの測定・評価を行うことは重要である。しかし、嗅覚測定法には多くの手間とコストがかかる上、嗅覚パネルの個人差、個人内変動などを考慮した実験計画とデータ解析が必要となる。そのため、嗅覚測定法はにおいの測定・評価において必要不可欠とされながらも、用いられにくい面がある。

本特論では、国内外の嗅覚測定法の歴史から最新の技術を学び、嗅覚測定法に関する研究を調査することで、精度が高く簡易的な方法の開発につながる知見を整理する。

【学修到達目標】

- ① 嗅覚測定法を用いた臭気の測定方法を説明できる。
- ② 属性に応じた嗅覚パネルの選定方法を設定できる。
- ③ 物質濃度と感覚の関係について評価方法を説明できる。
- ④ 臭気質の評価尺度を設定し評価を実行できる。

【成績評価の方法】 プレゼンテーション(30%)、ディスカッション(30%)、レポート(40%)での総合評価とする。

【教科書】 資料を配布する

【参考書】 適宜紹介する

【授業の内容】

- ① 嗅覚測定法の歴史(1)
- ② 嗅覚測定法の歴史(2)
- ③ 量的指標(1)
- ④ 量的指標(2)
- ⑤ 質的指標(1)
- ⑥ 質的指標(2)
- ⑦ 嗅覚測定法の歴史と最新技術のまとめと発表・討論
- ⑧ 嗅覚測定法に関する研究事例調査(1)
- ⑨ 嗅覚測定法に関する研究事例調査(2)
- ⑩ 研究事例紹介・討論(1)
- ⑪ 嗅覚測定法に関する研究事例調査(3)
- ⑫ 嗅覚測定法に関する研究事例調査(4)
- ⑬ 研究事例紹介・討論(2)
- ⑭ 嗅覚測定法に関する研究事例のまとめ・資料作成
- ⑮ 嗅覚測定法に関する研究事例の発表・討論

においの心理生理評価法特論 (Sensory Evaluation and Physiological Measurement of Odor and Aroma)

選択 2単位 1期 教授 山口 一 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

におい・かおりに関する心理・生理反応を対象とした研究計画の構築や、適切な評価方法の選択について修得することを目的に、関連する研究事例を取り上げて議論を行う中で、心理・生理評価法について深く学ぶ。

【学修到達目標】

- ① においの心理評価へ及ぼす影響要因について説明できる。
- ② パネルの属性がにおいの心理評価へ及ぼす影響を説明できる。
- ③ においの順応特性について説明できる。
- ④ 味覚と嗅覚の関係について説明できる。

【授業の内容】

- ① パネル属性とにおいの心理評価 1
- ② パネル属性とにおいの心理評価 2
- ③ パネル属性とにおいの心理評価 3
- ④ パネル属性とにおいの心理評価 4
- ⑤ 周辺環境とにおいの心理評価 1
- ⑥ 周辺環境とにおいの心理評価 2
- ⑦ 周辺環境とにおいの心理評価 3
- ⑧ においの心理評価と記憶・経験
- ⑨ 心理・生理面から見るにおいの順応 1
- ⑩ 心理・生理面から見るにおいの順応 2
- ⑪ おいしさとにおいの心理評価 1
- ⑫ おいしさとにおいの心理評価 2
- ⑬ おいしさとにおいの心理評価 3
- ⑭ 屋外におい評価
- ⑮ 総括

【成績評価の方法】 プレゼンテーション (30%)、ディスカッション (30%)、レポート (40%)

【教科書】 なし

【参考書】 随時紹介する

<都市環境デザイン学専攻科目：かおりデザインコース>

臭気の制御法特論 (Odor Control Method)

選択 2単位 2期 教授 光田 恵 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

臭気対策については、臭気の発生量、臭気発生状況(環境条件等)、臭気の質を把握し、効率よく対策が行える方法を用いる必要がある。いくつかの方法を組み合わせると有効な場合もあり、各臭気対策技術の原理、特徴を学び、においの特性に応じた臭気対策技術の効果的な組み合わせを事例から学ぶ必要がある。本特論では、各臭気の特徴を把握した上で、適切な臭気制御法を提案するために必要な知見を整理する。

【学修到達目標】

- ①生活環境中におけるにおいの発生源と主要臭気成分について説明できる。
- ②臭気対策の基本的な考え方を説明できる。
- ③室内臭気対策のための基準値について説明できる。
- ④いくつかの臭気対策技術の特徴と性能について説明できる。

【成績評価の方法】 プレゼンテーション (30%)、ディスカッション (30%)、レポート (40%)

【教科書】 プリントを配布する

【参考書】 適宜紹介する

【授業の内容】

- ①臭気対策の基本的な考え方
- ②生活環境におけるにおいの発生源
- ③主要な臭気発生源と発生量、許容レベル
- ④臭気対策技術 (1)
- ⑤臭気対策技術 (2)
- ⑥臭気対策技術 (3)
- ⑦臭気対策技術のまとめ・資料作成
- ⑧臭気源と臭気対策の適用事例調査 (1)
- ⑨臭気源と臭気対策の適用事例調査 (2)
- ⑩事例紹介・討論 (1)
- ⑪臭気源と臭気対策の適用事例調査 (3)
- ⑫臭気源と臭気対策の適用事例調査 (4)
- ⑬事例紹介・討論 (2)
- ⑭臭気源と臭気対策の適用事例のまとめ・資料作成
- ⑮臭気源と臭気対策の適用事例の発表・討論

におい・かおり成分分析法特論 (Analysis Method of Odor Components)

選択 2単位 2期 准教授 棚村 壽三 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

においの成分は、生活環境や食品であれば複数の化合物で構成されていることが多く、主となる化合物を同定するには分析機器を用いて測定し、そのデータを解析する必要がある。分析をおこなう際は、機器の選定、試料の採取・前処理、データ解析などそれぞれに知識と技術が必要である。

本特論ではクロマトグラフを中心に、においの成分分析に必要な基礎から最新の分析技術を学び、においに関わる分析化学の知見を身に着ける。

【学修到達目標】

- ①ガスクロマトグラフ質量分析計を用いて臭気成分の定性分析ができる。
- ②高速液体クロマトグラフを用いて臭気成分の定量分析ができる。
- ③におい嗅ぎクロマトグラフを用いて臭気物質の評価ができる。
- ④測定試料の分析条件を適切に設定することができる。

【成績評価の方法】 プレゼンテーション(30%)、ディスカッション(30%)、レポート(40%)での総合評価とする

【教科書】 資料を配布する

【参考書】 適宜紹介する

【授業の内容】

- ①においの成分分析の基礎(1)
- ②においの成分分析の基礎(2)
- ③においの成分分析の基礎(3)
- ④クロマトグラフィーの理論(1)
- ⑤クロマトグラフィーの理論(2)
- ⑥クロマトグラフィーの理論(3)
- ⑦クロマトグラフィーの理論(4)
- ⑧においの成分分析に関わる文献調査(1)
- ⑨においの成分分析に関わる文献調査(2)
- ⑩においの成分分析に関わる文献調査(3)
- ⑪分析機器の高度化と最新動向(1)
- ⑫分析機器の高度化と最新動向(2)
- ⑬分析機器の高度化と最新動向(3)
- ⑭分析機器の高度化と最新動向(4)
- ⑮プレゼンテーション・討論

脱臭性能評価特別演習 (Seminar on Evaluation of Deodorization Efficiency)

選択 2 単位 1 期 教授 光田 恵 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

消臭・脱臭関連商品開発を行う中で、開発品の消臭・脱臭性能を正しく評価することは重要である。本講では、国内外で用いられている空気清浄機、消臭剤、脱臭剤、芳香剤の消臭性能を評価する方法を学び、それぞれの課題を抽出し、より実態に即した評価を行うための方法を検討する。

【学修到達目標】

- ①国内外における主要な消臭性能評価法の概要を説明できる。
- ②空気清浄機の脱臭性能を評価し、脱臭効率を求めることができる。
- ③消臭剤、脱臭剤、芳香剤の分類と特徴を説明できる。
- ④消臭剤、脱臭剤、芳香剤の消臭性能評価ができる。

【授業の内容】

- (1) 国内外の消臭性能評価法の解説
- (2) 空気清浄機の性能評価法
- (3) 空気清浄機の脱臭性能評価法
- (4) 空気清浄機の脱臭効率
- (5) 現在の空気清浄機の脱臭性能評価法の課題 (1)
- (6) 現在の空気清浄機の脱臭性能評価法の課題 (2)
- (7) 空気清浄機の脱臭性能評価法に関する発表
- (8) 消臭剤・脱臭剤・芳香剤の性能評価法の解説
- (9) 消臭剤・脱臭剤・芳香剤の分類と特徴
- (10) 消臭剤の消臭性能評価法
- (11) 脱臭剤の消臭性能評価法
- (12) 芳香剤の消臭性能評価法
- (13) 消臭剤・脱臭剤・芳香剤の性能評価法の課題 (1)
- (14) 消臭剤・脱臭剤・芳香剤の性能評価法の課題 (2)
- (15) 消臭剤・脱臭剤・芳香剤の性能評価法の発表・総括

【成績評価の方法】 レポート (60%)、発表 (40%) の総合評価

【教科書】 プリントを配布する

【参考書】 適宜紹介する

におい・かおり測定特別演習 (Seminar on Measurement Method of Odor)

選択 2 単位 2 期 教授 山口 一 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

身近な空間・食品を対象として、これまでに学んだにおい・かおりの測定、分析に関する総合演習を行う。測定対象を選定し、試料の特性に適した採取法、前処理法、測定法を決めて実践する。得られたデータの整理、解析方法についても復習し、精度の高いより高度なデータ収集能力を身に付ける。

【学修到達目標】

- ①飲料 (液体) の香料成分の分析ができる。
- ②食品 (固体) の香料成分の分析ができる。
- ③室内空気環境の臭気成分の分析が実行できる。
- ④屋外大気環境の臭気成分の分析が実行できる。

【授業の内容】

- (1) におい・かおりの測定・成分分析方法の解説
- (2) 測定場所の選定
- (3) 測定計画の立案
- (4) 試料の採取と前処理
- (5) 分析
- (6) 分析データ整理・解析
- (7) 分析結果の考察・まとめ
- (8) 測定試料の選定
- (9) 測定計画の立案
- (10) 試料の採取と前処理
- (11) 分析
- (12) 分析データ整理・解析
- (13) 分析結果の考察・まとめ
- (14) 分析結果のまとめと発表用資料の作成
- (15) 発表・総括

【成績評価の方法】 レポート (80%)、発表 (20%) での総合評価とする。

【教科書】 適宜紹介する。

【参考書】 適宜紹介する。

＜都市環境デザイン学専攻科目：特別研究＞

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Urban Environmental System I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 嶋田 喜昭 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

都市環境整備の計画に関わる各種テーマに対して、都市および交通計画的視点から研究を行う。特に、21 世紀のまちづくりの重要なキーワードである「安心・安全」を念頭に置き、より良い住環境の創造を目指して研究を行うものである。

【学習到達目標】

- ①調査を計画・遂行してデータを正確に集計・分析し、論理的に考察できる。
- ②研究内容をまとめ、学会等で発表できる。
- ③主体的に研究課題を探求し、継続して研究できる。

【授業の内容】

以下の研究テーマに関連する文献を収集することおよび研究内容の理解を深めることを重視して、指導教員と十分に打合せを行いつつ、計画的かつ継続的に研究する。

- ・生活道路における安全性の確保
- ・各種都市施設の環境評価手法
- ・自転車通行環境整備の課題

【成績評価の方法】 研究の実施状況および中間報告（文書および口頭）による総合評価

【教科書】

【参考書】

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Civil Engineering Design I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 大東 憲二 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

地盤工学的立場から調査研究する地下水の問題は、大きく分類して二つある。一つは、飲料水や工業・農業用水などの水資源としての地下水開発に伴う井戸水の枯渇や地盤沈下等の問題であり、もう一つは、建設工事を安全に行うための排水や遮水に伴う地下水状態の変化や、化学物質の地盤・地下水汚染などによる自然や生活環境への悪影響の問題である。これらの問題の解決策について、実験や数値解析を用いて研究する。また、都市河川の水質悪化の原因となっているヘドロの堆積状況調査方法や効果的な除去方法、および水質改善方法についても研究する。

【学修到達目標】

- ①地盤工学的立場から地下水問題を説明することができる。
- ②地下水問題を解決するための実験や数値解析を行うことができる。
- ③実験や数値解析の結果を多面的に評価することができる。

【授業の内容】

以下から研究テーマを選択し、教員の指導の下で自主的に研究を遂行する。研究成果は学会等で発表し、参加者と意見交換を行うことで自らの研究の意義を確認する。同時に、新たな研究課題を見出す努力をする。

- 1) 濃尾平野における広域地盤沈下防止と地下水資源利用を考慮した地下水管理計画に関する研究
- 2) リモートセンシングを用いた広域地盤変動調査に関する研究
- 3) 土壌・地下水汚染を含む地盤環境データベースの構築と利用方法に関する研究
- 4) 名古屋市内の新堀川における水質改善方法に関する研究

【成績評価の方法】 研究の実施状況 50%および中間報告(文書および口頭)50%による総合評価

【教科書】

【参考書】

＜都市環境デザイン学専攻科目：特別研究＞

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Civil Engineering Design I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 高山 努 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

地球環境および都市環境においては様々な物質が、多様な状態で循環している。

ある物質の濃度の測定と、化学的・物理学的状態の同定は環境の状態・動態を解き明かすために大変重要なことである。特に、金属イオンとその他の小分子が配位結合することで形成される金属錯体は、地球環境および都市環境に大きな影響を与える物質である。

本研究では、環境に存在する特定の金属錯体に注目し、複数の分光学的分析法を駆使して、その化学的・物理的挙動の解明を行う。

【学修到達目標】

- ①環境中での物質の動態を化学分析技術をとおして知る手法を学び、実際の研究に応用できる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況とその定期的なデータ解析・考察・報告によって総合的に判断する。

【教科書】

【参考書】

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Urban Environmental System I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 棚橋 秀行 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

大きな環境問題となっている土壌・地盤汚染の解決策に関するテーマに対し、主として油による汚染地盤の非掘削と掘削洗浄の2つの角度から研究する。非掘削浄化では迅速かつ環境リスクの少ない施工プロセスの提案および浄化予測の解析を中心に、いっぽう掘削洗浄では新たな洗浄剤の開発・リサイクル・既存の製品に勝るポータブル洗浄装置など、現場に応用可能な基礎技術の開発について、主に実験的手法を用いて研究する。

【学修到達目標】

- ①地盤環境問題の社会的背景についての知識を有している。
- ②地盤内における汚染物質の物理・化学的挙動についての知識を有している。
- ③地盤環境浄化対策についての専門的な知識を有している。
- ④室内実験の結果に対し専門的な知識に基づいた考察を行うことができる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況および中間報告（文書および口頭）により総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

【授業の内容】

地球環境および都市環境にとって重要な金属錯体（または金属元素）を選択し、その化学的・物理学的形態を分光学的手法を主な手段として調査する。また、その金属錯体の環境中での濃度を調べるための分析手法を開発し、環境中での動態を理解する。

【授業の内容】

以下の研究テーマに関連する実験を、指導教員はもとよりチームとしての4年生ともよく相談し、自立して計画的に遂行できる力を養成する。研究成果は精力的に学会で発表を行い、専門家と議論を行うことで各自の研究の位置づけを再認識すると同時に次に取り組むべき課題を自ら設定できる力を育む。

- ・油汚染地盤の非掘削浄化技術の開発
- ・矢板に代わる新素材での地中壁作成の新技術の開発
- ・油による汚染地盤の非掘削浄化進行予測解析
- ・油汚染土壌の掘削洗浄装置の開発
- ・リサイクル素材を活用した新しい土壌洗浄技術の開発

<都市環境デザイン学専攻科目：特別研究>

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Urban Environmental System I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 堀内 将人 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

大気－土壌－水環境における微量有害物質汚染に注目し、試料採取から濃度分析、動態把握、形態分析等を実施することで、汚染の現状や影響の程度を評価する手法を学ぶ。そのためには、環境化学・分析化学の知識が必須である。それらの基礎知識を学び、現実の汚染問題を様々な角度から評価することで、環境汚染問題を科学的に扱う能力を養う。

微量有害物質による環境問題は、最終的には、人や生態系にどのような影響を及ぼすのかを評価することが重要である。そのために、環境リスクの考え方を学び、リスク評価を実践する。

【学修到達目標】

- ①環境工学的見地から環境汚染問題を捉え、調査計画を立案することができる。
- ②分析結果から環境汚染の程度を評価し、対策の必要性について考察することができる。
- ③環境汚染に対する既存の浄化対策を調査するとともに対象場において有効な対策を提案することができる。
- ④環境を守り、資源を有効に活用するための工学的方策について検討することができる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況および定期的な報告（文書および口頭）による総合評価

【教科書】

【参考書】

【授業の内容】

研究は、問題の背景をしっかりと調査し、まとめることから始まる。自ら積極的に文献調査を行い、これまで何が研究され、何が不明なのかを知ることが重要である。定期的に、文献調査の進捗状況を報告するゼミを開催する。研究に終わりはない。常に問題意識を持ち、得られたデータが持つ意味を考え、データの信頼性を考慮しながら、次の実験へと展開することが必要である。そのようなダイナミックな研究が行えるよう指導していく。以下の研究テーマを設定している。

- ・都市域での微量有害重金属汚染の実態と動態把握
- ・微量有害重金属汚染の健康リスク評価
- ・有害重金属を含む排水の浄化法の開発
- ・下水汚泥焼却灰の環境負荷低減手法の開発
- ・下水汚泥焼却灰の新たなリサイクル利用の検討

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Urban Environmental System I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 鷲見 哲也 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

河川と、都市流域に関するテーマのうち、(1)河川水と地下水伏流水との交換現象と、それによる水温・水質環境の安定性への影響、(2)都市の水環境と水害安全度に考慮したまちづくり、というテーマのいずれかについて研究を行う。

【学修到達目標】

- ①河川等に関する既往研究のレビューを行うことができる。
- ②河川等に関する研究の計画を立て管理することができる。
- ③河川等に関する研究の具体的な手法を蓄積し、応用することができる。
- ④河川等に関する研究を取りまとめ、質の高いアウトプットとすることができる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況により総合的に評価する。

【教科書】 適宜提示する。

【参考書】 適宜指示する。

【授業の内容】

以下の作業のいずれかについて、指導教員と十分に打合せを行いつつ、計画的に継続的に研究する。

- ・現地観測・数値計算に基づき、河川水と砂州や河床の伏流水交換現象と、それによる水温・水質環境の安定性への影響を定量的に明らかにする。
- ・資料調査・現地調査等を通して、都市の水環境と水害安全度に考慮したまちづくりのよりよい在り方を模索・提示する。

<都市環境デザイン学専攻科目：特別研究>

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Urban Environmental System I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 講師 木全 博聖 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

硬化コンクリート中の物質移動とそれに伴う体積変化やひび割れの発生に関する詳細な数値解析モデルの構築を目指した研究を行う。

【学修到達目標】

- ①拡散現象を理論的に説明することができる。
- ②水分移動に伴うコンクリートの体積変化のメカニズムについて説明することができる。

【授業の内容】

以下の研究テーマに関連する文献の調査および数値解析を行う。目的や背景を含めた研究内容の理解を深めることに重点を置いて、指導教員と綿密な打ち合わせを行いつつ、計画的に研究活動を行う。

- ・ コンクリート中の物質移動と体積変化に関する数値解析モデルの構築
- ・ コンクリートの体積変化に伴うひび割れ進展解析モデルの構築

【成績評価の方法】 研究活動への取り組み状況および報告（文書およびプレゼンテーション）による総合評価
ゼミ等の遅刻・欠席，報告書の未提出などが多い場合は単位を認定しない

【教科書】

- 【参考書】 1) 「コンクリート技術の要点」 (社) 日本コンクリート工学協会
2) 「コンクリート診断技術」 (社) 日本コンクリート工学協会

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Urban Environmental System I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 講師 樋口 恵一 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

超高齢社会であるわが国における持続可能な都市づくり・まちづくりについて、実践的かつ論理的に研究を行う。

【学習到達目標】

- ①主体的に研究課題を探求し、継続して研究できる。
- ②調査を計画・遂行してデータを正確に集計・分析し、論理的に考察できる。
- ③研究内容をまとめ、学会等で発表できる。

【授業の内容】

研究テーマに関連する文献の収集および、調査・実験等に基づいてデータを取得し解析を行う。研究内容の理解を深めることを重視して、指導教員と十分に打合せを行いつつ、計画的かつ継続的に研究する。

【成績評価の方法】 研究の実施状況および中間報告（文書および口頭）による総合評価

【教科書】

【参考書】

<都市環境デザイン学専攻科目：特別研究>

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Urban Environmental System I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 光田 恵 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

昭和 46 年に悪臭防止法が制定されたことにより悪臭対策が進み、生活環境の臭気問題は解決したかに思われていたが、生活環境の快適性への意識の高まりなどから、近年、悪臭苦情件数が再び増加してきた。悪臭苦情の対象は、飲食店からのにおい、近隣住宅からのにおいなどにも向けられ、身近な環境の臭気を対象として対策を考えていく必要が生じてきた。におい環境の快適性を考えるとき、まずは不快なにおい(臭気)対策を検討する必要がある。また、積極的にかおりを用いて、快適な環境創造に役立てようとする動きが出てきている。

本特別研究では、においを不快臭とかおりの両側面から捉え、真に快適なにおい環境の創造につながる研究・開発を行う。

【学修到達目標】

- ①におい・かおり分野の既往の研究調査から研究動向を説明できる。
- ②におい・かおり分野における新たな研究の立案ができる。
- ③研究目的を達成するために必要な実験・調査の組み立てができ、実施できる。
- ④実験・調査によって得られたデータを解析し、考察できる。
- ⑤研究論文を構成し、執筆でき、研究成果を発表できる。

【成績評価の方法】論文の内容(70%) 学会発表を含めた研究成果の公表(30%)

【教科書】研究対象ごとに決定する

【参考書】研究対象ごとに決定する

【授業の内容】

研究の方法は以下のとおりである。

- (1) 既往の研究調査
- (2) 研究対象の選定
- (3) 実験計画の立案
- (4) 実験準備
- (5) 実験
- (6) データ解析
- (7) 分析・考察
- (8) 論文執筆
- (9) 研究成果発表資料の作成
- (10) 研究成果の発表

都市環境デザイン学特別研究 I～IV (Research in Urban Environmental System I～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 教授 山口 一 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

においを評価する際には、その目的に応じて適切な測定方法を選択・実施する知識と技術が必要となる。

本特別研究では、室内外のにおい環境を連続的にモニタリングするセンサー評価方法を研究する。

【学修到達目標】

- ①かおりデザイン分野における既往の研究を理解し、現状を説明できる。
- ②かおりデザイン分野における問題点を抽出し、課題を適切に設定できる。
- ③抽出された問題点を解決するために必要な研究の立案・実施ができる。
- ④得られた知見を研究論文にまとめ成果を発表できる。

【成績評価の方法】研究の実施状況および成果から総合的に評価する。

【教科書】研究対象ごとに設定する。

【参考書】研究対象ごとに設定する。

【授業の内容】

主な研究テーマ

- (1) におい物質の捕集・分析法の開発
- (2) ガスセンサと官能評価の比較検証
- (3) 室内外のにおい環境解析

<都市環境デザイン学専攻科目：特別研究>

都市環境デザイン学特別研究 I ～IV (Research in Urban Environmental System I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期 准教授 棚村 壽三 授業時間外の学修 45 時間(毎週 3 時間)

【授業の概要】

においを評価するには、その目的に応じて適切な測定方法を選択・実施する知識と技術が必要となる。

本特別研究では、室内外のにおい環境を定量的に評価する効率的な方法を研究する。

【学修到達目標】

- ①かおりデザイン分野における既往の研究を理解し、現状を説明できる。
- ②かおりデザイン分野における問題点を抽出し、課題を適切に設定できる。
- ③抽出された問題点を解決するために必要な研究の立案・実施ができる。
- ④得られた知見を研究論文にまとめ成果を発表できる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況および成果から総合的に評価する。

【教科書】 研究対象ごとに設定する。

【参考書】 研究対象ごとに設定する。

【授業の内容】

主な研究テーマ

- (1) におい物質の捕集・分析法の開発
- (2) ガスセンサと官能評価の比較検証
- (3) 自動車室内のにおい環境解析

<都市環境デザイン学専攻科目>

実用英語特別演習Ⅰ (Seminar on Practical English I)

選択 2単位 1期 非常勤講師 佐藤 裕子 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

現代ビジネス社会において、大学院卒業者に要求される実践的な英語能力のうち

- (1) 長文読解力(Reading)
- (2) 聴解力(Listening) の習得・向上を図る。

その為英字新聞、雑誌・スピーチ・インタビューを教材とし

- (1) 英文を読み、その大意を把握する 及び
- (2) スピーチ・インタビューを聞いて、その大意を把握する能力の習得・育成を狙った演習を行う。

尚その過程で、検定問題にて基本語彙、文法及び文章構造に関する知識や、英語の発音に関する知識や技法も確認する。

【学修到達目標】

- ① 英字新聞、雑誌等の記事を読み、その内容を理解することが出来る。
- ② スピーチ、インタビューを聞き、その大意を把握することが出来る。
- ③ スピーチ、インタビューを聞き、それについて自分の意見を述べる事が出来る。

【成績評価の方法】 授業参加度 (50%)、課題レポート (50%)

【教科書】 オバマ演説集 *CNN English Express* 編集部編 朝日新聞社、インタビュー等のプリント

【参考書】 特になし。

【授業の内容】

- ①オリエンテーション・自己紹介
Listening・Reading演習
- ②オバマ元大統領の生い立ち・検定問題
- ③オバマ元大統領基調スピーチ・検定問題
- ④オバマ元大統領指名受諾スピーチ・検定問題
- ⑤オバマ元大統領勝利スピーチ・検定問題
- ⑥大統領としての功績・検定問題
- ⑦スピーチを聞き、それについて自分の意見を述べる。
Listening演習
- ⑧JICA, ODAの紹介・検定問題
- ⑨緒方貞子さんインタビュー (1) ・検定問題
- ⑩緒方貞子さんインタビュー (2) ・検定問題
- ⑪設問に答える・検定問題
- ⑫インタビューを聞き、それについて自分の意見を述べる。
Reading演習
- ⑬英字新聞の読み方について・検定問題
- ⑭雑誌の読み方について・検定問題
- ⑮まとめ

実用英語特別演習Ⅱ (Seminar on Practical English II)

選択 2単位 2期 非常勤講師 佐藤 裕子 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

現代ビジネス社会において、大学院卒業者に要求される実践的な英語能力のうち

- (1) 英文ビジネスレター・Eメール作成力
- (2) 英語プレゼンテーション力
- (3) 長文読解力・聴解力のさらなる習得・向上を図る。

英語プレゼンテーション力習得の前段階として、英語による著名なスピーチを材料として文章の組み立て方・話し方・強調方法等を習得する。

尚その過程で、検定問題にて基本語彙、文法及び文章構造に関する知識、英語の発音に関する技法も再度確認する。

【学修到達目標】

- ① 英文ビジネスレター・Eメールに関する基礎知識を身に付け、ビジネスレター・Eメールを作成することが出来る。
- ② スピーチを聞き、その内容を把握することが出来る。
- ② 英語によるスピーチや話し言葉の特徴を理解し、それを踏まえた英語による基礎的なプレゼンテーションが出来る。

【成績評価の方法】 授業貢献度 (50%)、課題レポート (50%)

【教科書】 *The Legendary Speeches and Presentations of Steve Jobs* 朝日出版社編 朝日出版社
ビジネスレター演習・Eメール演習ハンドアウト、インタビュー・スピーチ記事等のプリント

【参考書】 特になし。

【授業の内容】

- ①オリエンテーション、ビジネスレター作成演習
- ②ビジネスレター作成—提出・検定問題
- ③Eメール作成演習—提出・検定問題
- ④スティーブ・ジョブズの生涯・検定問題
- ⑤スティーブ・ジョブズスピーチⅠ・検定問題
- ⑥スティーブ・ジョブズスピーチⅡ・検定問題
- ⑦スティーブ・ジョブズスピーチⅢ・検定問題
- ⑧スティーブ・ジョブズの軌跡・検定問題
- ⑨スティーブ・ジョブズの功績・検定問題
- ⑩スティーブ・ジョブズの素顔・検定問題
- ⑪ケネディ元大統領スピーチⅠ・検定問題
- ⑫ケネディ元大統領スピーチⅡ・検定問題
- ⑬プレゼンテーション演習Ⅰ・検定問題
- ⑭プレゼンテーション演習Ⅱ・検定問題
- ⑮まとめ

<全研究科共通科目>

学外研修 (Internship)

授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

選択 2 単位 1(2)期 専攻長

【実習の概要】

企業または官公庁において、実務に関する研修を行う。実務には、生産、設計・監理、調査計画等広範な分野があり、希望する分野で最適な研修先を選定する。本学のキャリアセンターでは、研修先の事前登録制度があり密接な連携をとるようになる。

【授業の内容】

実務の理解とともに自身の方向付けやスキルアップを目的とし、将来をより良くすることに役立つように受け入れ先と研修内容を十分協議して計画する。

実際の学外研修は以下の 3 段階で行う。

- ・受け入れ先との事前研修
- ・受け入れ先での学外研修
- ・学外研修報告

【学習到達目標】

- ①実務の現場で行われる専門領域の職務を理解し、教育研究内容との関係を含めて説明できる。
- ②自己の適性に合った職業選択の方向性を検討できる。
- ③社会人として必要なマナーや、技術者として必要な能力・責任感について把握している。
- ④研修報告書を作成し、研修内容を発表できる。

【成績評価の方法】 受け入れ企業等からの評価、研修報告書、研修報告

【教科書】

【参考書】

ベンチャービジネス特論 (Venture Business)

授業時間外の学修 30 時間 (毎週 2 時間)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 武藤 郷史

【授業の概要】

我が国のイノベーションを牽引するベンチャービジネスの必要性を理解するとともに、実例やワークを元にベンチャービジネス成功のエッセンスを学ぶ。

- (1)我が国の経済環境から、ベンチャービジネスおよびベンチャー支援政策のメガトレンドを理解する。
- (2)その上で、成功するベンチャー起業家の特性を把握し、どのようにしてビジネスモデルを構築していくかを考える。
- (3)ベンチャーマネジメントは一般企業と特性が異なり、また成長過程ごとに課題が変化する。そのポイントを考察する。
- (4)ベンチャービジネス成功のためのエッセンスを理解し、ビジネスプランの書き方を学ぶ。

【学修到達目標】

- ①ベンチャー戦略の概要を理解し、戦略設計の基本フレームを使った事業コンセプト設計を実践できる
- ②基本的なビジネスプランの骨子が描けるようになる

【授業の内容】

- ① 我が国におけるベンチャー企業の必要性
 - ・我が国経済におけるベンチャービジネスの役割
- ② イノベーションをおこすベンチャー企業
 - ・ベンチャービジネスがおこすイノベーションとは。
- ③ 成功するベンチャー起業家の特性
 - ・成功する起業家のエッセンス
- ④ ベンチャーマネジメントの留意点
 - ・ベンチャーマネジメントの特性
 - ・成長ステージごとの経営のポイント
- ⑤ ビジネスプランの役割
 - ・ベンチャー戦略とビジネスプラン
- ⑥ ビジネスプランの書き方
 - ・ビジネスプランの展開方法
- ⑦ 発表

【成績評価の方法】 講義での討論(30%)とレポート評価(70%)

【教科書】 資料配布

【参考書】

<全研究科共通科目>

経済学特論 (Economics)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 八木エドワード 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

バブル景気とは、1986 年 12 月から 1991 年 2 月までの 51 か月間、日本で起こった資産価格の上昇や好景気のことである。バブル崩壊後のいわゆる「失われた 10 年」は「失われた 20 年」となり、今現在は「失われた 30 年」の途中である。人口減少、少子化、超高齢化社会の課題を考慮すると、「失われた 100 年」となる可能性がある。25 年以上に渡り低迷する結果を招いた、根本的な問題点、解決策は何か。

【学修到達目標】

学生達が来るべき就職活動や卒業後の人生にどう対応すれば良いかについて役立つ知識を得ている。

【授業の内容】

7 回の授業では、日本経済の推移、グローバル化、アジアの時代(特に中国の躍進と中間層・富裕層の拡大)、東海地区の経済(トヨタ依存症)等を検討し、「MBA 研究方法」で行う：

1. 課題を認識する
2. 問題点などを指摘(定義)する
3. 問題解決を目的とし、仮説を立てる
4. データを収集する
5. 客観的に情報を分析する
6. 妥当性のある結論(提案)を出す

【成績評価の方法】 講義での討論参加 (70%)、レポート(30%)

【教科書】 特になし

【参考書】 授業で配布

地球環境科学特論 (Global Environmental Science)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 加藤 俊夫 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【講義の概要】

- (1) 地球が直面している環境問題について、科学の視点から考える。
 - ・「地球環境」の内容と変遷
 - ・「地球環境」の視点から捉えた問題とその解決方法
 - ・「京都議定書〜パリ協定」の解説
- (2) 講師が携わっている土木コンサルタントの立場での経験等に基づき、土木(社会資本整備〜インフラ整備)に関連する環境を学ぶ。
 - ・災害対策(洪水、地震、液状化、津波、土石流、流木)と環境
 - ・河川改修やダム開発、水力発電開発などの環境への負荷
- (3) 地球環境変化により、世界や日本で近年自然災害が激甚化している。河川・海岸・砂防・港湾・耐震の技術、防災士の立場から、「防災・減災」についての考えや技術を学ぶ。
- (4) 地球環境を、自分の学問分野、将来の職業、自分の生活など、視点の設定をかえて考えることを学ぶ。また、地球規模の環境と身近な環境の関係についても同様に考える。
 - ・上記の視点から捉えた地球環境
 - ・上記の視点から捉えた身近な環境
 - ・日本が直面している環境
- (5) 地球環境を捉える技術的手法の一手法として、技術士部門の総合技術監理手法(リスク管理、リスクマネジメントなど)を学ぶ。
- (6) 技術者が地球環境問題、環境問題についてどのように取り組むことが期待されているかを考える。

【講義の内容】

- ① 地球環境問題の動向(「パリ協定」を題材)
- ② 社会資本整備関係のコンサルタントの立場からの「環境問題」「対応方法や考え方」
- ③ 防災、減災について
- ④ 地球を取りまく環境の実態
- ⑤ リスク管理手法、クライシスマネジメント
- ⑥ 技術倫理観、これからの時代を担う技術者に求められる環境への取り組み方

【学修到達目標】

- ① 環境をフレキシブルに捉える視点の習得
- ② 環境の持つ多面的な視点の習得
- ③ リスクマネジメント、クライシスマネジメントという技術の習得
- ④ 自分の専門以外の研究と交流の意義の発見より新しいアイディアの展開の経験

【成績評価の方法】 講義での討論(20%)とレポート評価(80%)

【教科書】 配付資料

【参考書】

外国文化特論 (Foreign Culture)

選択 1 単位 2 期 非常勤講師 クレムス メツラー 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【講義の概要】

西洋の映像文化を多様な角度から分析・解明する。学生の外国文化への幅を広げる。

文化的要素が人々の生活を形成する際に重要な役割を演じる事の理解度を深める。自分の国の文化に対する新しい展望を提供する。

ヨーロッパと日本で得た経験・知見を織り込んだ講義内容

【学修到達目標】

- ①ヨーロッパ文化の社会、宗教、歴史的な背景を理解することができる。
- ②ヨーロッパの建築様式および美術様式を概説することができる。
- ③現代ドイツの経済や産業の源泉について探ることができる。
- ④日本文化を海外の視点で見ることができる。

【講義の内容】

- ①オリエンテーション、「キリスト教ギリシャ、古代ローマ、キリスト教」、「キリスト教：源泉／歴史／文化的影響、ユダヤ教／イスラム教」
- ②ドイツの日常生活：民族の祭りと風俗慣、食文化、伝統、学制、西ドイツ・東ドイツ、ドイツの方言、新聞、本の見本市、他について
- ③欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィを比べる、その1「古代ギリシアから中世、ルネサンス、バロック」
- ④製品のデザイン史、イギリス産業革命、大量生産性と美、ドイツのデザインの始まり、ポルシェとフォルクスワーゲン社、「Made in Germany」から「Designed in Germany」へ、バウハウスからアップルまで、他
- ⑤欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィを比べる、その2「アール・ヌーヴからモダン、ポスト・モダン、現在まで」
- ⑥現在のヨーロッパ：「イギリスとヨーロッパ」、「ドイツとフランス」、「北欧」、「ロシアと東ヨーロッパ」、「ギリシャクライシス」、「難民を受け入れる伝統」、他
- ⑦まとめと自由討論
講義の最後は全員で自由討論、意見交換する。
注：外国人留学生が出席する場合には、英語（及ドイツ語）での説明も可能。

【成績評価の方法】講義での討論(30%)、レポート提出及びショートレクチャー(70%)による総合評価

【教科書】使用しない

【参考書】特になし(授業の中で紹介する)

【連絡先】メール：hello@clemensmetzler.com

博士後期課程 講義要綱等

1. 材料・環境工学専攻

(1) 教育課程表

大学院学則 別表(2)

学科目	部類	授 業 科 目	単位数	履修年次	備 考
機能材料工学	特論	機能材料工学特論Ⅰ	2	1～3	・履修年次「1～3」は、1年次から3年次までのいずれかで開講することを意味する。 ・履修年次「1・2・3」は、原則として1年次から3年次まで、全て履修することを意味する。
		機能材料工学特論Ⅱ	2	1～3	
	輪講	機能材料工学輪講Ⅰ	2	1～3	
		機能材料工学輪講Ⅱ	2	1～3	
機能材料工学輪講Ⅲ		2	1～3		
特別研究	機能材料工学特別研究		1・2・3		
電子デバイス工学	特論	電子デバイス工学特論Ⅰ	2	1～3	
		電子デバイス工学特論Ⅱ	2	1～3	
		電子デバイス工学特論Ⅲ	2	1～3	
	輪講	電子デバイス工学輪講Ⅰ	2	1～3	
		電子デバイス工学輪講Ⅱ	2	1～3	
		電子デバイス工学輪講Ⅲ	2	1～3	
特別研究	電子デバイス工学特別研究		1・2・3		
熱プロセス工学	特論	熱プロセス工学特論Ⅰ	2	1～3	
		熱プロセス工学特論Ⅱ	2	1～3	
		熱プロセス工学特論Ⅲ	2	1～3	
	輪講	熱プロセス工学輪講Ⅰ	2	1～3	
		熱プロセス工学輪講Ⅱ	2	1～3	
		熱プロセス工学輪講Ⅲ	2	1～3	
特別研究	熱プロセス工学特別研究		1・2・3		
環境材料工学	特論	環境材料工学特論Ⅰ	2	1～3	
		環境材料工学特論Ⅱ	2	1～3	
		環境材料工学特論Ⅲ	2	1～3	
	輪講	環境材料工学輪講Ⅰ	2	1～3	
		環境材料工学輪講Ⅱ	2	1～3	
		環境材料工学輪講Ⅲ	2	1～3	
特別研究	環境材料工学特別研究		1・2・3		
電磁・環境工学	特論	電磁・環境工学特論Ⅰ	2	1～3	
		電磁・環境工学特論Ⅱ	2	1～3	
		電磁・環境工学特論Ⅲ	2	1～3	
	輪講	電磁・環境工学輪講Ⅰ	2	1～3	
		電磁・環境工学輪講Ⅱ	2	1～3	
		電磁・環境工学輪講Ⅲ	2	1～3	
特別研究	電磁・環境工学特別研究		1・2・3		
環境デザイン工学	特論	環境デザイン工学特論	2	1～3	
		環境デザイン学特論Ⅰ	2	1～3	
		環境デザイン学特論Ⅱ	2	1～3	
	輪講	環境デザイン工学輪講Ⅰ	2	1～3	
		環境デザイン工学輪講Ⅱ	2	1～3	
		環境デザイン工学輪講Ⅲ	2	1～3	
特別研究	環境デザイン工学特別研究		1・2・3		
共通	特別講義	材料・環境工学特別講義	2	1～3	
	/	学 外 研 修	2	1～3	
		特 別 調 査 演 習	2	1～3	

(2) 教育内容

博士後期課程材料・環境工学専攻は「機能材料工学」、「電子デバイス工学」、「熱プロセス工学」、「環境材料工学」、「電磁・環境工学」、「環境デザイン工学」の6学科目に分かれ、具体的な学科目の教育課程の内容は次のとおりである。

①機能材料工学

様々な材料の作製法の開発およびその電氣的・磁氣的性質の新しい機能性を追求するとともに、それに伴う新しい評価法の開発についての教育と研究を行う。取り扱うのは、金属・セラミックス複合薄膜、磁性・非磁性金属薄膜、金属および合金のメゾスコピック粒子、磁性、非磁性人工多層薄膜等である。

②電子デバイス工学

固体物性理論を基礎として、新しい電子材料の開発、また、電子デバイスの諸問題を学術的立場から追求する。同時にその応用としてメカトロニクスの立場から、知能ロボットおよび要素技術についての教育と研究を行う。

③熱プロセス工学

環境問題と密接に関わる熱エネルギーの有効利用の観点から、熱プロセス工学に関連した基礎的および総合的な教育と研究を行う。伝熱工学的な解析や材料加工プロセス（熱間加工）のシミュレーション等が主なテーマである。

④環境材料工学

耐環境性材料、構造物の解析、開発に関わる基礎的および応用的諸問題についての教育と研究を行う。材料の強度、変形挙動、破壊等と環境因子、材料学的因子および力学的因子の相互作用の解明にも取り組む。

⑤電磁・環境工学

放電・プラズマの基礎課程の解明を通して、これらを利用した環境保全技術、高電圧ガス絶縁技術の開発・改良に取り組む。また、波動現象の解明を通して、電磁波環境の悪化、騒音による都市環境問題への対応についての教育と研究を行う。

⑥環境デザイン工学

雨水流・土石流の災害や利水問題の解明、現代の都市環境を形成する建築群の再開発、現代の都市環境の住まい方の問題、生活環境全般に関する先人の知恵と技術に関する考察等、人と環境に関する教育と研究を行う。

(3) 授業科目・担当教員等

【機能材料工学】

金属—セラミックス複合薄膜、磁性—非磁性金属人工格子膜、金属および合金のナノ粒子の作製法の開発およびその電気的、磁気的性質の新しい機能性を追求するとともに、それに伴う新しい評価法の開発について教育と研究を行う。

授 業 科 目	担 当 教 員	要 旨
機能材料工学特論 I		
機能材料工学特論 II	高 山 教 授 堀 尾 教 授	(オムニバス方式) 【放射線を用いる分析法】 【電子回折法による結晶表面構造解析】
機能材料工学輪講 I	高 山 教 授	【放射線を用いる分析法】について輪講を行う。
機能材料工学輪講 II	堀 尾 教 授	【薄膜の成長様式及び結晶性】について輪講を行う。
機能材料工学輪講 III	高 山 教 授	次の領域について輪講を行う。 【放射線を用いる分析法】
機能材料工学特別研究	高 山 教 授 堀 尾 教 授	機能材料工学の特定の分野の研究課題について研究を行い論文を作成する。

【電子デバイス工学】

固体物性理論を基礎として、新しい電子材料の開発、電子デバイスの諸問題を学術的立場から追求するとともに、その応用としてメカトロニクスの立場から、知能ロボットおよび要素技術について教育と研究を行う。

授 業 科 目	担 当 教 員	要 旨
電子デバイス工学特論Ⅰ	赤 池 教 授 川 福 教 授 橋 本 教 授 山 田 教 授	【超伝導電子デバイスに関する技術】 【有機材料を用いた機能性電子デバイスに関する技術】 【電子デバイスの実装、回路、システムに関する技術】 【モーションコントロールに関する技術】
電子デバイス工学特論Ⅱ	尾 形 教 授 坂 倉 教 授	【システム制御に関する技術】 【ロボット・メカトロニクス制御システムの知能化】
電子デバイス工学特論Ⅲ	大 嶋 教 授	【圧電素子を利用したスマート材料・構造物の開発と現代制御理論に基づくその制御】
電子デバイス工学輪講Ⅰ	赤 池 教 授 川 福 教 授 橋 本 教 授 山 田 教 授	次の領域について輪講を行う。 【超伝導電子デバイスに関する技術】 【有機材料を用いた機能性電子デバイスに関する技術】 【電子デバイスの実装、回路、システムに関する技術】 【モーションコントロールに関する技術動向】
電子デバイス工学輪講Ⅱ	尾 形 教 授 坂 倉 教 授	次の領域について輪講を行う。 【システム制御に関する技術】 【ロボット・メカトロニクス制御システムの知能化】
電子デバイス工学輪講Ⅲ	大 嶋 教 授	【圧電素子を利用したスマート材料・構造物の開発と現代制御理論に基づくその制御】について輪講を行う。
電子デバイス工学特別研究	赤 池 教 授 大 嶋 教 授 尾 形 教 授 川 福 教 授 坂 倉 教 授 橋 本 教 授 山 田 教 授	電子デバイス工学の特定の分野の研究課題について研究を行い論文を作成する。

【熱プロセス工学】

環境問題と密接に関わる熱エネルギーの有効利用の観点から伝熱工学的な解析、燃焼工学並びに熱間加工等材料加工プロセスのシミュレーションなど、熱プロセス工学に関連した基礎的および総合的な教育と研究を行う。

授 業 科 目	担 当 教 員	要 旨
熱プロセス工学特論Ⅰ	井 原 准 教 授 坪 井 准 教 授	【熱機関における流体と化学反応を含めた燃焼に関する数値計算】 【熱流体の移流拡散シミュレーションの工業的応用】
熱プロセス工学特論Ⅱ	小 里 教 授 白 石 教 授	【はく離せん断流の計測と先端的制御】 【輻射吸収を伴う熱プラズマ流の物理流体解析】
熱プロセス工学特論Ⅲ	小 森 教 授 篠 原 准 教 授	【熱間加工プロセスにおける被加工材料の変形並びに温度に関するシミュレーション解析】 【伝熱解析に必要なプログラミング技術および計算手法】
熱プロセス工学輪講Ⅰ	井 原 准 教 授 坪 井 准 教 授	次の領域について輪講を行う。 【熱機関における流体と化学反応】 【熱流体の移流拡散シミュレーションの工業的応用】
熱プロセス工学輪講Ⅱ	小 里 教 授 白 石 教 授	【はく離せん断流の計測と制御技術】について輪講を行う。 【電離気体の原子・分子過程】について輪講を行う。
熱プロセス工学輪講Ⅲ	小 森 教 授 篠 原 准 教 授	【熱プロセス工学に関する研究課題のうち、熱間加工プロセスにおける被加工材料の変形】について輪講を行う。 【力学現象（熱、流体、振動など）を模擬する数理モデルの構築方法】について輪講を行う。
熱プロセス工学特別研究	小 里 教 授 小 森 教 授 白 石 教 授 井 原 准 教 授 篠 原 准 教 授 坪 井 准 教 授	熱プロセス工学の特定の分野の研究課題について研究を行い論文を作成する。

【環境材料工学】

構造材料および構造物の強度、変形挙動、破壊などに及ぼす環境因子と材料学的因子、力学的因子の相互作用の効果の解明並びに耐環境性材料・構造物の開発に係わる基礎的、応用的諸問題について教育と研究を行う。

授 業 科 目	担 当 教 員	要 旨
環境材料工学特論Ⅰ	高 田 教 授 田 中 教 授 蔦 森 教 授 西 脇 教 授 前 田 教 授 徳 納 教 授 町 屋 准 教 授	(オムニバス方式) 【金属材料中固溶原子の存在状態と拡散】 【金属の腐食と高温酸化】 [板成形シミュレーション用異方性降伏関数とそのパラメータ同定方法] [塑性加工における金属材料の変形挙動] [鋳造加工における流動・伝熱・凝固挙動] 【金属材料の高強度化設計の考え方と実際】 【量子ビームを用いた金属材料のひずみ測定】
環境材料工学特論Ⅱ	藤 森 准 教 授 吉 田 准 教 授	【各種構造材料の非・微破壊検査方法と耐久性評価への適用】 【金属材料の表面改質プロセス】
環境材料工学特論Ⅲ	萩 原 教 授 柚 谷 准 教 授	【構造物の非線形動的応答の簡易測定法と耐震性評価への応用】 【ダンピング要素と構造物への応用】
環境材料工学輪講Ⅰ	高 田 教 授 田 中 教 授 蔦 森 教 授 西 脇 教 授 前 田 教 授 徳 納 教 授 町 屋 准 教 授	次の領域について輪講を行う。 【金属中固溶原子の存在状態と拡散】 【耐熱材料の種類と熱力学計算による合金設計】 [板成形シミュレーション用異方性降伏関数] 【塑性加工法とその応用】 [鋳造加工技術と素形材] 【金属材料の高強度化設計の考え方と実際】 【放射光および中性子を用いた応力・ひずみ測定】
環境材料工学輪講Ⅱ	藤 森 准 教 授 吉 田 准 教 授	次の領域について輪講を行う。 【構造材料の長期耐久性評価手法】 【金属材料の表面改質プロセス】
環境材料工学輪講Ⅲ	萩 原 教 授 柚 谷 准 教 授	次の領域について輪講を行う。 【構造物の非線形動的応答の簡易推定法と耐震性評価への応用】 【ダンピング要素設計の考え方と実際】
環境材料工学特別研究	高 田 教 授 田 中 教 授 蔦 森 教 授 徳 納 教 授 西 脇 教 授 萩 原 教 授 前 田 教 授 柚 谷 准 教 授 藤 森 准 教 授 町 屋 准 教 授 吉 田 准 教 授	環境材料工学の特定の分野の研究課題について研究を行い論文を作成する。

【電磁・環境工学】

放電・プラズマの基礎過程の解明を通じて、これらを利用した環境保全技術、高電圧ガス絶縁技術の開発・改良並びに波動現象の解明を通じて電磁波環境の悪化、騒音による都市環境問題への対応および、環境が生体情報に及ぼす影響について教育と研究を行う。

授 業 科 目	担 当 教 員	要 旨
電磁・環境工学特論Ⅰ	大澤教授 高木教授 加納准教授	(オムニバス方式) 【電磁アクチュエータとその応用】 【スマートコミュニティと電磁環境両立性】 【電気機器とモータ・発電機の制御】
電磁・環境工学特論Ⅱ	桑野教授 竹内教授 荻野准教授 宮島准教授	(オムニバス方式) 【ネットワーク構成技術とその応用】 【映像情報処理とその応用】 【計算科学のための大規模・高性能な数値計算法開発とその応用】 【行動情報処理とその応用】
電磁・環境工学特論Ⅲ	上田教授 不破教授 柘植准教授	(オムニバス方式) 【センシング技術とその応用】 【外乱抑制のための制御系設計法の開発とその応用】 【音声情報処理とその応用】
電磁・環境工学輪講Ⅰ	大澤教授 高木教授 加納准教授	次の領域について輪講を行う。 【電磁アクチュエータとその応用】 【スマートコミュニティと電磁環境両立性】 【電気機器とモータ・発電機の制御】
電磁・環境工学輪講Ⅱ	桑野教授 竹内教授 荻野准教授 宮島准教授	次の領域について輪講を行う。 【ネットワーク構成技術とその応用】 【映像情報処理とその応用】 【計算科学のための大規模・高性能な数値計算法の先端知識習得】 【行動情報処理とその応用】
電磁・環境工学輪講Ⅲ	上田教授 不破教授 柘植教授	次の領域について輪講を行う。 【センシング技術とその応用】 【外乱抑制のための制御系設計法の開発とその応用】 【音声情報処理とその応用】
電磁・環境工学特別研究	大澤教授 高木教授 上田教授 桑野教授 竹内教授 柘植教授 不破教授 荻野准教授 加納准教授 宮島准教授	電磁・環境工学の特定の分野の研究課題について研究を行い論文を作成する。

【環境デザイン工学】

雨水流・土石流の災害・利水問題の解明、現代の都市環境を形成する建築群の再開発、現代の都市生活の住まい方の問題、生活環境全般に関する先人の知恵と技術に関する考察について教育と研究を行う。

授 業 科 目	担 当 教 員	要 旨
環境デザイン工学特論	棚 橋 教 授 光 田 教 授 渡 邊 教 授 堀 内 教 授 山 口 教 授 鷺 見 教 授 棚 村 准 教 授	(オムニバス方式) 【地下水汚染メカニズムとその浄化対策】 【室内空気質の基準、評価方法、制御方法】 【室内および屋外における温熱環境の基準と快適性評価】 【環境リスクの評価・管理手法】 【室内環境の基礎、化学・生物学的評価と制御】 【流域や河川の水・環境の管理・評価手法】 【においの測定・評価法】
環境デザイン学特論Ⅰ	嶋 田 教 授	【都市・交通施策と都市施設整備の評価】
環境デザイン学特論Ⅱ		
環境デザイン工学輪講Ⅰ	棚 橋 教 授 光 田 教 授 渡 邊 教 授 堀 内 教 授 山 口 教 授 鷺 見 教 授 棚 村 准 教 授	次の領域について輪講を行う。 【地下水汚染メカニズムとその浄化対策】 【室内空気質の評価と制御方法】 【室内および屋外における温熱環境の基準と快適性評価】 【環境リスクの評価・管理手法】 【室内環境の化学・生物学的評価と制御】 【流域や河川の水・環境の管理・評価手法】 【においの測定・評価法】
環境デザイン工学輪講Ⅱ	嶋 田 教 授	【都市・交通施策と都市施設整備の評価】
環境デザイン工学輪講Ⅲ		次の領域について輪講を行う。
環境デザイン工学特別研究	嶋 田 教 授 棚 橋 教 授 光 田 教 授 渡 邊 教 授 堀 内 教 授 山 口 教 授 鷺 見 教 授 棚 村 准 教 授	環境デザイン工学の特定の分野の研究課題について研究を行い論文を作成する。

【共通】

授 業 科 目	担 当 教 員	要 旨
材料・環境工学特別講義	<p>(オムニバス方式)</p> <p>幅広い視野と知識を養うために、全学科目の分野に亘って、特別講義担当の15名が順次それぞれの内容に関する講義を行う。</p> <p>上 田 教 授 萩 原 教 授 大 澤 教 授 堀 内 教 授 嶋 田 教 授 光 田 教 授 鷺 見 教 授 渡 邊 教 授 高 田 教 授 棚 村 准 教 授 高 山 教 授 坪 井 准 教 授 棚 橋 教 授 宮 島 准 教 授 徳 納 教 授</p>	
学 外 研 修	<p>赤 池 教 授 上 田 教 授 大 澤 教 授 大 嶋 教 授 尾 形 教 授 桑 野 教 授 桑 野 教 授 川 福 教 授 小 森 教 授 坂 倉 教 授 嶋 田 教 授 白 石 教 授 鷺 見 教 授 高 木 教 授 高 田 教 授 高 山 教 授 竹 内 教 授 田 中 教 授 棚 橋 教 授 葛 森 教 授 柘 植 教 授 徳 納 教 授 西 脇 教 授 萩 原 教 授 橋 本 教 授 不 破 教 授 堀 内 教 授 堀 尾 教 授 前 田 教 授 光 田 教 授 山 口 教 授 山 田 教 授 渡 邊 教 授 井 原 准 教 授 萩 野 准 教 授 加 納 准 教 授 篠 原 准 教 授 柚 谷 准 教 授 棚 村 准 教 授 坪 井 准 教 授 藤 森 准 教 授 町 屋 准 教 授 宮 島 准 教 授 吉 田 准 教 授</p>	<p>学外の研究機関（国立および企業の研究機関）で一定期間、特定の研修テーマについての実験、実習、調査を行い、実務的な経験を積ませる。主として修士課程から進学した学生が履修し、実習計画の管理と単位認定は研究指導教員が担当する。</p>

授 業 科 目	担 当 教 員	要 旨
特別調査演習	赤池教授 上田教授 大澤教授 大嶋教授 尾形教授 桑野教授 桑野教授 川福教授 小森教授 坂倉教授 嶋田教授 白石教授 鷲見教授 高木教授 高山教授 高山教授 竹内教授 田中教授 棚橋教授 蔦森教授 柘植教授 徳納教授 西脇教授 萩原教授 橋本教授 不破教授 堀内教授 堀尾教授 前田教授 光田教授 山口教授 山田教授 渡邊教授 井原准教授 荻野准教授 加納准教授 篠原准教授 柚谷准教授 棚村准教授 坪井准教授 藤森准教授 町屋准教授 宮島准教授 吉田准教授	<p>特定のテーマを取り上げ、その進展経過の調査・報告を行わせる。</p> <p>テーマとして、過去に完成した技術、製品・作品・システムなど、あるいは、その分野で基礎となっている論文、法則、固有の式などを対象とする。前者の場合は、歴史的経緯、その時期における社会的背景や技術等の状況、その効果や影響等を調査する。後者の場合は歴史的背景、独創性の源泉、研究の経緯、歴史的意義・評価などを調査する。半年間にわたる調査の結果を報告書としてまとめると共に口頭で発表する。研究を行うための調査の仕方、論文のまとめ方、発表の仕方などの訓練のために行う。主として社会人学生が履修する。</p>

(4) 学位審査申請の手引

1. 課程博士

大同大学学位規程第4条の2第1項の「博士の学位授与の要件」の規定に基づき、同規程第5条第1項により、博士（工学）の学位審査の申請をする者は、本学の関係諸規程によるほか、この申請の手引により、所定の手続を行う。

I. 論文予備審査の申請

1. 博士（工学）の学位審査の申請をする者は、大同大学大学院規則第21条の「博士後期課程修了の要件」の規定に基づき、課程修了に必要な所定の単位を修得した者又は修得見込みの者で、原則として、博士後期課程の当該年度前期末までに、指導教員による必要な研究指導を受け、修了していることが必要である。

2. 学位審査の申請をする者は、申請に先立ち、3の提出書類を指導教員に提出し、「論文予備審査会の審査」を受ける。

3. 提出書類及び部数等

指導教員は、次の提出書類を当該の副専攻長に提出する。

- | | |
|--------------------------|-----|
| (1) 博士論文の草稿 | 1通 |
| (2) 論文内容の要旨（所定用紙） | 1通 |
| (3) 履歴書（所定用紙） | 1通 |
| (4) 論文目録（所定用紙） | 1通 |
| (5) 論文の別刷り | 各1通 |
| (6) 「博士論文予備審査会」設置届（所定用紙） | 1通 |

注：上記(2)、(3)、(4)及び(6)の所定用紙は、教務室で配布する。

また、提出については、所定用紙に貼り込みコピーしたもの又は様式が同じであれば、ワープロを用いて作成したものも可とする。

4. 前記3の提出書類は、原則として、学位授与の申請時期の2ヶ月前の専攻の定める時期に提出する。

なお、論文予備審査会の審査に必要な事項は、専攻から指示されるので、注意する。

II. 学位審査の申請

論文予備審査会の審査の結果、論文申請の仮決定が可となった者は、次の書類を指導教員の確認を得て、教務室に提出する。

1. 提出書類及び部数等

- | | |
|--|-----------|
| (1) 学位審査申請書（所定用紙） | 1通 |
| (2) 博士論文 1編（A4判、原則として横書き、仮製本したもの） | 4通（正1、副3） |
| (3) 論文目録（所定用紙） | 1通 |
| (4) 論文内容の要旨（所定用紙、2,000字程度） | 1通 |
| (5) 履歴書（所定用紙） | 1通 |
| (6) 外国語の能力に関する申告書（大学等における外国語単位取得状況及び本人の自己申告） | 1通 |

注：上記(1)、(3)、(4)及び(5)の所定用紙は、教務室で配布する。

なお、提出については、所定用紙に貼り込みコピーしたもの又は様式が同じであれば、ワープロを用いて作成したものも可とする。

2. 学位審査の申請時期

(1) 学位審査の申請は、在学中に行い、学位審査申請書等を提出する時期は、1月の所定の期間とする。

(2) 博士後期課程に3年を超えて在学する見込みの者又は単位取得満了後3年以内の者の内で、論文予備審査会の審査を受け論文申請の仮決定が可となった者は、指導教員の判断により次の時期に学位審査申請をすることができる。

4月の所定の期間（学位授与：6月） 10月の所定の期間（学位授与：12月）

7月の所定の期間（学位授与：9月） 1月の所定の期間（学位授与：3月）

(3) 上記(1)及び(2)の各月の所定の期間は、概ね当該月の5日間程度を、所定の期間として、その都度定める。

(4) 受付時間は、午前9時～正午、午後1時～4時

Ⅲ. 提出書類の作成要領等

1. 博士論文の草稿

- (1) 草稿を外国語で記述する場合は、事前に指導教員の下承及び指導を受ける。
- (2) 記述に当たっては、ワープロを用いることが望ましい。
なお、手書きによる場合は、楷書で記述する。特に欧文等の記述に当たっては、正確に記述する。
- (3) 大文字・小文字の区別、数式・化学式・記号等及び数量を表す単位等は、正確に記述する。
- (4) ページ数を付け、また図番、式番は通し番号又は各章ごとに章番を付した通し番号とする。
- (5) 文献は論文目録の記述例に従って記述する。

2. 論文内容の要旨

- (1) 書類の※印欄は、記入しない。
- (2) 博士論文の内容を、2, 000字程度の要旨にまとめて記述する。
- (3) 論文内容の要旨は、学位審査の資料とするので、ワープロを用いることが望ましい。
なお、手書きによる場合は、楷書で記述する。特に欧文等の記述に当たっては、正確に記述する。

3. 履歴書

- (1) 本籍は、都道府県名のみを記入する（外国人は、国籍を記入する。）。
- (2) 現住所は、住民票に記載されている住所を記入する。
- (3) 学歴欄は、大学卒業以降について、順を追って記入する。
- (4) 職歴欄は、勤務先、職名を順を追って教育・研究に関する履歴を中心に記入する。
なお、現職については、「現在に至る」と明示する。
- (5) 研究歴欄は、研究課題（共同研究を含む。）、研修、学術調査及び学術奨励金等に関するものについて、順を追って事項別に記入する。

4. 論文目録（研究業績目録）

- (1) 博士論文に使用する共著者の論文については、共著者の同意を得ておく。
- (2) 書類の※印欄は、記入しない。
- (3) 氏名は、謄本記載のとおり記入する。
- (4) 押印箇所は、必要部数に同一の印鑑で朱肉を用いて押印すること。ただし、外国人はサインを可とする。
- (5) 論文題目が外国語の場合は、題目の下に、和訳を（ ）を付して併記する。
- (6) 印刷公表の方法及び時期欄
博士論文の印刷公表の状況については、論文の構成（編、章等）の順に記入する。
また、Ⅳの「学位論文等の公表及び電子データの提出」並びに別紙記入例を参照の上、記入する。
- (7) 参考論文欄
 - 1) 博士論文に参考論文を添付する場合は、上記論文に準じ、題目、印刷公表の方法、時期を記入する。
 - 2) 参考論文がない場合は、「なし」と記入する。
- (8) 論文目録の記述に関する留意事項
論文目録の記述は、論文目録記入例の書式に従う。

5. 論文の別刷り

論文目録（研究業績目録）に記載された論文の別刷りを提出する。

6. 「博士論文予備審査会」設置届

「博士論文予備審査会」設置届は副専攻長が作成し、博士後期課程の専攻長に提出する。

7. 学位審査申請書

- (1) 書類の※印欄は、記入しない。
- (2) 申請年月日は、申請時に記入する。
- (3) 申請者欄及び論文題目欄を記入する。

- (4) 氏名は、謄本記載のとおり記入する。
- (5) 論文題目が外国語の場合は、題目の下に、和訳を（ ）を付して併記する。
- (6) 指導教員の確認欄は、申請書等の提出に先立ち、予め指導教員の承認を受けておく。

8. 博士論文

- (1) 論文中に他者の著作物が含まれる場合は、事前にその権利者から許諾を得る。
- (2) 論文を外国語で記述する場合は、事前に指導教員の下承及び指導を得る。
- (3) 規格・様式はA4判、原則として横書・両面印刷とし、フラットファイル等を使用して綴じる。
- (4) 印刷に当たっては、ワープロを用いることが望ましい。なお、手書きによる場合は、楷書で記述する。
- (5) 大文字・小文字の区別、数式・化学式・記号等及び数量を表す単位等は、正確に記述する。
- (6) 論文の表紙及び背表紙には、論文題目・氏名及び年号(年又は年月)以外は表示しない。
- (7) ページ数を付け、また図番、式番は通し番号又は各章ごとに章番を付した通し番号とする。
- (8) 文献は論文目録の記述例に従って記述する。

IV. 学位論文等の公表及び電子データの提出

1. 学位論文等の公表

- (1) 本学は、学位を授与した日から3ヶ月以内に、学位論文の要旨及び論文審査結果をインターネットの利用により公表する。
- (2) 学位を授与されたものは、1年以内に学位論文の全文を本学の協力を得て、インターネットの利用により公表する。
- (3) 学位論文は、学位の授与以前に、その全文を印刷公表(単行の書籍又は学術雑誌等の公刊行物に登載すること)することができる。
また、その研究事項の区分(論文構成上の区分：編、章等)により分割した論文をもって、数次に印刷公表することもできる。
- (4) 学位授与以後において公表する場合は、「大同大学学位審査論文」と明記する。
- (5) 学位が授与された後の公表で、やむを得ない理由がある場合、学長の承認を得て、学位論文の全文に代えてその内容を要約したものを公表することができる。
この場合、本学は学位論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。
注：申請時においては、未公表あるいは部分的な公表済みも可とする。
[大同大学学位規程第10条]
- (6) 本学は、学位授与以後、電子化された学位論文の全文を国立国会図書館へ提出する。

2. 電子データの提出

学位論文等をインターネットの利用により公表するため、次の電子データ等を学位授与日までに教務室へ提出する。

- (1) 学位論文の全文(PDF形式：紙媒体をスキャンするのではなく、Word等から直接変換したもの)及び機関リポジトリへの登録許諾書(所定用紙)
- (2) 学位論文の要旨(Word形式)

学位審査申請に関する照会先 大同大学 教務室 TEL 052-612-6204

2. 論文博士

大同大学学位規程第4条の2第2項の「博士の学位授与の要件」の規定に基づき、同規程第5条第1項により、博士（工学）の学位審査の申請をする者は、本学の関係諸規程によるほか、この申請の手引により、所定の手続を行う。

I. 論文予備審査の申請

1. 博士（工学）の学位審査の申請をする者は、予め関連のある教員（世話指導教員）を定める。
2. 博士（工学）の学位授与の申請をする者は、申請に先立ち、3の提出書類を世話指導教員に提出し、「論文予備審査会の審査」を受ける。

3. 提出書類及び部数等

世話指導教員は、次の提出書類を当該の副専攻長に提出する。

- | | |
|--|-----|
| (1) 博士論文の草稿 | 1通 |
| (2) 論文内容の要旨（所定用紙） | 1通 |
| (3) 履歴書（所定用紙） | 1通 |
| (4) 論文目録（所定用紙） | 1通 |
| (5) 論文の別刷り | 各1通 |
| (6) 最終学歴を証明する書類 | 1通 |
| (7) 外国語の能力に関する申告書（大学等における外国語単位取得状況及び本人の自己申告） | 1通 |
| (8) 研究歴 | 1通 |
| (9) 「博士論文予備審査会」設置届（所定用紙） | 1通 |

注：上記(2)、(3)、(4)及び(9)の所定用紙は、教務室で配布する。

また、提出については、所定用紙に貼り込みコピーしたもの又は様式が同じであれば、ワープロを用いて作成したのも可とする。

4. 前記3の提出書類は、専攻の定める時期に提出する。

なお、論文予備審査会の審査に必要な事項は、専攻から指示されるので、注意する。

II. 学位審査の申請

論文予備審査会の審査の結果、論文申請の仮決定が可となった者は、次の書類を世話指導教員の確認を得て、教務室に提出する。

1. 提出書類及び部数等

- | | |
|--|-----------|
| (1) 学位審査申請書（所定用紙） | 1通 |
| (2) 博士論文 1編（A4判、原則として横書き、仮製本したもの） | 4通（正1、副3） |
| (3) 論文目録（所定用紙） | 1通 |
| (4) 論文内容の要旨（所定用紙、2,000字程度） | 1通 |
| (5) 履歴書（所定用紙） | 1通 |
| (6) 最終学歴を証明する書類 | 1通 |
| (7) 外国語の能力に関する申告書
（大学等における外国語単位取得状況及び本人の自己申告） | 1通 |
| (8) 学位論文審査手数料 | 150,000円 |

注：上記(1)、(3)、(4)及び(5)の所定用紙は、教務室で配布する。

なお、提出については、所定用紙に貼り込みコピーしたもの又は様式が同じであれば、ワープロを用いて作成したのも可とする。

2. 学位審査の申請時期

- (1) 学位審査の申請は、論文予備審査会の審査を受け、論文申請の仮決定が可となった者は、次の時期に学位審査申請をすることができる。
 - 4月の所定の期間（学位授与：6月）
 - 7月の所定の期間（学位授与：9月）
 - 10月の所定の期間（学位授与：12月）
 - 1月の所定の期間（学位授与：3月）
- (2) 上記(1)の各月の所定の期間は、概ね当該月の5日間程度を、所定の期間として、その都度定める。
- (3) 受付時間は、午前9時～正午、午後1時～4時

Ⅲ. 提出書類の作成要領等

1. 博士論文の草稿

- (1) 草稿を外国語で記述する場合は、事前に世話指導教員の了承及び指導を受ける。
- (2) 記述に当たっては、ワープロを用いることが望ましい。
なお、手書きによる場合は、楷書で記述する。特に欧文等の記述に当たっては、正確に記述する。
- (3) 大文字・小文字の区別、数式・化学式・記号等及び数量を表す単位等は、正確に記述する。
- (4) ページ数を付け、また図番、式番は通し番号又は各章ごとに章番を付した通し番号とする。
- (5) 文献は論文目録の記述例に従って記述する。

2. 論文内容の要旨

- (1) 書類の※印欄は、記入しない。
- (2) 博士論文の内容を、2, 000字程度の要旨にまとめて記述する。
- (3) 論文内容の要旨は、学位審査の資料とするので、ワープロを用いることが望ましい。
なお、手書きによる場合は、楷書で記述する。特に欧文等の記述に当たっては、正確に記述する。

3. 履歴書

- (1) 本籍は、都道府県名のみを記入する（外国人は、国籍を記入する。）。
- (2) 現住所は、住民票に記載されている住所を記入する。
- (3) 学歴欄は、大学卒業以降について、順を追って記入する。
- (4) 職歴欄は、勤務先、職名を順を追って教育・研究に関する履歴を中心に記入する。なお、現職については、「現在に至る」と明示する。
- (5) 研究歴欄は、研究課題（共同研究を含む。）、研修、学術調査及び学術奨励金等に関するものについて、順を追って事項別に記入する。

4. 論文目録（研究業績目録）

- (1) 博士論文に使用する共著者の論文については、共著者の同意を得ておく。
- (2) 書類の※印欄は、記入しない。
- (3) 氏名は、謄本記載のとおり記入する。
- (4) 押印箇所は、必要部数に同一の印鑑で朱肉を用いて押印する。ただし、外国人はサインを可とする。
- (5) 論文題目が外国語の場合は、題目の下に、和訳を（ ）を付して併記すること。
- (6) 印刷公表の方法及び時期欄
博士論文の印刷公表の状況については、論文の構成（編、章等）の順に記入する。
また、Ⅳの「学位論文等の公表及び電子データの提出」並びに別紙記入例を参照の上、記入する。
- (7) 参考論文欄
 - 1) 博士論文に参考論文を添付する場合は、上記論文に準じ、題目、印刷公表の方法、時期を記入する。
 - 2) 参考論文がない場合は、「なし」と記入する。
- (8) 論文目録の記述に関する留意事項
論文目録の記述は、論文目録記入例の書式に従う。

5. 論文の別刷り

論文目録（研究業績目録）に記載された論文の別刷りを提出する。

6. 最終学歴を証明する書類

卒業証明書等

7. 外国語の能力に関する申告書（大学等における外国語単位取得状況及び本人の自己申告）

- (1) 大学等における外国語単位取得状況
大学等における外国語の単位の取得状況を証明するもの
単位修得証明書、成績証明書等
- (2) 本人の自己申告
次のいずれかに該当する書類をもって、本人の自己申告書とする。
 - 1) 外国での学位取得
 - 2) 海外留学の経験を証明するもの
 - 3) 外国語で記載された論文（別刷り又は写しでも可）
 - 4) 翻訳した論文・解説記事等（写しでも可）
 - 5) 外国での研究活動を証明するもの

- 6) 外国での調査実績を証明するもの
- 7) 国際会議での研究発表実績を証明するもの
- 8) 上記に相当する語学力を証明できるもの

8. 研究歴

研究歴は、研究課題（共同研究を含む。）、研修、学術調査及び学術奨励金等に関するものについて、順を追って事項別に記入する。

9. 「博士論文予備審査会」設置届

「博士論文予備審査会」設置届は副専攻長が作成し、博士後期課程の専攻長に提出する。

10. 学位審査申請書

- (1) 書類の※ 印欄は、記入しない。
- (2) 申請年月日は、申請時に記入する。
- (3) 申請者欄及び論文題目欄を記入する。
- (4) 氏名は、謄本記載のとおり記入する。
- (5) 論文題目が外国語の場合は、題目の下に、和訳を（ ）を付して併記する。
- (6) 世話指導教員の確認欄は、申請書等の提出に先立ち、予め世話指導教員の承認を受けておく。

11. 博士論文

- (1) 論文中に他者の著作物が含まれる場合は、事前にその権利者から許諾を得る。
- (2) 論文を外国語で記述する場合は、事前に世話指導教員の了承及び指導を得る。
- (3) 規格・様式はA4判、原則として横書・両面印刷とし、フラットファイル等を使用して綴じる。
- (4) 印刷に当たっては、ワープロを用いることが望ましい。なお、手書きによる場合は、楷書で記述する。
- (5) 大文字・小文字の区別、数式・化学式・記号等及び数量を表す単位等は、正確に記述する。
- (6) 論文の表紙及び背表紙には、論文題目・氏名及び年号(年又は年月)以外は表示しない。
- (7) ページ数を付け、また図番、式番は通し番号又は各章ごとに章番を付した通し番号とする。
- (8) 文献は論文目録の記述例に従って記述する。

IV. 学位論文等の公表及び電子データの提出

1. 学位論文等の公表

- (1) 本学は、学位を授与した日から3ヶ月以内に、学位論文の要旨及び論文審査結果をインターネットの利用により公表する。
- (2) 学位を授与されたものは、1年以内に学位論文の全文を本学の協力を得て、インターネットの利用により公表する。
- (3) 学位論文の印刷公表は、学位の授与以前に、その全文を印刷公表（単行の書籍又は学術雑誌等の公刊行物に登載すること）することができる。
また、その研究事項の区分（論文構成上の区分：編、章等）により分割した論文をもって、数次に印刷公表することもできる。
- (4) 学位授与以後において公表する場合は、「大同大学学位審査論文」と明記すること。
- (5) 学位が授与された後の公表で、やむを得ない理由がある場合、学長の承認を得て、学位論文の全文に代えてその内容を要約したものを公表することができる。
この場合、本学は学位論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。

注：申請時においては、未公表あるいは部分的な公表済みも可とする。

[大同大学学位規程第10条]

- (6) 本学は、学位授与以後、電子化された学位論文の全文を国立国会図書館へ提出する。

2. 電子データの提出

学位論文等をインターネットの利用により公表するため、次の電子データ等を学位授与日までに教務室へ提出する。

- (1) 学位論文の全文（PDF形式：紙媒体をスキャンするのではなく、Word等から直接変換したもの）及び機関リポジトリへの登録許諾書（所定用紙）
- (2) 学位論文の要旨（Word形式）

3. 学位審査様式

(1) 論文予備審査の申請提出書類

<論文内容の要旨>

課程博士

様式は全て A4 判の所定様式に統一する

<論文内容の要旨>

論文博士

課程博士			
*学位授与年度	年度	甲第	号

論文内容の要旨

申請者	印
専攻	
指導教授	
論文題目:	

要旨

--

24×10

論文博士		
*学位授与年度	年度	乙第号

論文内容の要旨

申請者	印
最終学歴	
現職	
生括指導専攻	生括指導教授
論文題目:	

要旨

--

24×10

(課程博士・論文博士：共通)

<履歴書> (課程博士・論文博士：共通)

申請者 ()		

24×25

履 歴 書

ふりがな		男	本籍	都道府県
氏名	年月日生	女	又は国籍	国
生年月日	〒 Tel	〒 Tel ()		
〒 Tel	〒 Tel			
現住所				

区分	年月日	事項
学歴	. .	大学 学部 学科 卒業
	. .	
	. .	
	. .	
職歴	. .	
	. .	
	. .	
	. .	
研 究 歴	. .	
	. .	
	. .	
	. .	

以上のとおり相違ありません

年 月 日 氏名： 印

〈「博士論文予備審査会」設置届〉
(課程博士・論文博士：共通)

年 月 日

殿

副専攻長

.....印

博士論文予備審査会設置届

博士論文予備審査会を下記のとおり設置しましたのでお届け致します。

記

1. 学位審査申請者
2. 学位審査論文名
3. 博士論文予備審査会担当委員

主 査

(職階・姓・名)

委 員

委 員

委 員

委 員

委 員

以 上

様式は全て A4 判の所定様式に統一する

(2) 学位審査の申請提出書類

〈学位審査申請書〉

課程博士

課程博士		
※学位授与年度	年度	甲第 号
年 月 日		
研究科長 殿		
学位審査申請書		
大同大学学位規程第4条の2第1項の規定により、博士（工学）の学位を授与願いたく、同規程第5条第1項に定める書類を提出いたしますので、審査をお願いします。		
申請者	博士後期課程 専攻	年度入学
氏名	印	年 月 日生
提出書類		
博士論文 _____ 4通		
論文題目： _____ _____		
論文目録 _____ 1通		
論文内容の要旨 _____ 1通		
履歴書 _____ 1通		
指導教授の確認		印
受理： . . . 印		

〈学位審査申請書〉

論文博士

論文博士		
※学位授与年度	年度	乙第 号
年 月 日		
研究科長 殿		
学位審査申請書		
大同大学学位規程第4条の2第2項の規定により、博士（工学）の学位を授与願いたく、同規程第5条第1項に定める書類を提出いたしますので、審査をお願いします。		
申請者	氏名	年 月 日生
氏名	印	年 月 日生
最終学歴： 大学（ ） 専攻 . . .		
現 職： _____		
提出書類		
博士論文 _____ 4通		
論文題目： _____ _____		
論文目録 _____ 1通		
論文内容の要旨 _____ 1通		
履歴書 _____ 1通		
学位論文審査手数料 _____ 150,000円		
世話指導教授の確認	専攻	印
学位論文審査手数料 納入年月日・確認印 . . . 受理： . . . 印		

〈論文目録〉

課程博士

課程博士		
※学位授与年度	年度	甲第 号
論文目録		
申請者		印
博士論文		
論文題目： _____ _____ _____		
印刷公表の方法及び時期：別紙「博士論文の印刷公表」		
参考論文 下記項目について、該当する箇所を○で囲んで下さい。 (な し 、 別紙 「参考論文の印刷公表」)		

〈論文目録〉

論文博士

論文博士		
※学位授与年度	年度	乙第 号
論文目録		
申請者		印
博士論文		
論文題目： _____ _____ _____		
印刷公表の方法及び時期：別紙「博士論文の印刷公表」		
参考論文 下記項目について、該当する箇所を○で囲んで下さい。 (な し 、 別紙 「参考論文の印刷公表」)		

4. 「論文目録」記入例

	※ 学位授与年度	年度	第 号
<p style="font-size: 1.2em; margin: 0;">論 文 目 録</p> <div style="border: 1px solid black; width: 80%; margin: 10px auto; padding: 5px;"> <p style="margin: 0;">申請者 印</p> </div> <p style="margin-top: 10px;">博士論文</p> <p>論文題目： _____</p> <p style="margin-left: 100px;">(_____)</p> <p style="text-align: center; margin-top: 5px;">論文題目が欧文等の場合は、() 内に邦文を付記</p> <p>印刷公表の方法及び時期：</p>			

印刷公表の方法及び時期「博士論文の印刷公表」

記入例 1：第1章を全文公表した場合

公表(予定) 年 月 日	公表内容	発表論文名・著書名
	全文・要約	(著者名、論文名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦)) (以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可)
20XX年11月	第1章 全文掲載	滝春太郎、大同二郎、白水三郎 網膜細胞画像認識システム 電子情報通信学会論文誌(D), vol. J71 -, No. 11, pp. 2126 - 2134, 1991. に掲載

記入例 2：第1章を要約公表した場合

20XX年11月	第1章 要約掲載	滝春太郎 網膜細胞画像認識システム 電子情報通信学会論文誌(D), vol. J71 -, No. 11, pp. 2126 - 2134, 1991. に掲載
----------	-------------	---

記入例 3：第1章を要約公表(予定)の場合

20XX年11月 発行予定	第1章 要約掲載	滝春太郎 網膜細胞画像認識システム 電子情報通信学会論文誌(D), vol. J71 -, No. 11, pp. 2126 - 2134, 1993. に掲載予定
------------------	-------------	---

注：上記の場合、掲載予定証明又は受理証明の写しを添付すること。

記入例 4 : 欧文誌に公表した場合

20XX年 3月	第 1 章 要約掲載	Tarou Takiharu Software system for neuron classification based on simple parameters, (簡単な特徴量に基づいた神経細胞の分類のための) ソフトウェアシステム IEEE trans. on Biomedical Engineering, vol. BME - 33, No. 3, pp. 308 - 314, 1990. に掲載
----------	---------------	--

記入例 5 : 博士論文と異なる題目で公表した場合

20XX年 11月	第 2 章 全文掲載	滝 春 太 郎 「第2章の網膜細胞画像認識システムの構築」を「網膜細胞画像認識システム」として 電子情報通信学会論文誌 (D) , vol. J71 - , No. 11, pp. 2396 - 2403, 1992. に掲載
-----------	---------------	---

記入例 6 : 分割して公表した場合

第2章及び第3章を以下5編の論文及び1件の国際会議に分割して全文掲載		
20XX年 11月		滝 春 太 郎 神経細胞の2値画像の分類 電子情報通信学会論文誌 (D) , vol. J66 - D, No. 5, pp. 601 - 603, 1991. に掲載

記入例 7 : 国際会議で公表した場合

20XX年 11月		Tarou Takiharu Automatic Classification of neuros, (神経細胞の自動分類) SPIE 27th Annual International Symposium, Sandiego, Proceedings of SPIE - The International Society for Optical Engineering, Vol, 435, pp. 53 - 59, 1991. に掲載 (U S Aにて発表)
-----------	--	--

5. 学位論文の様式

1. 規 格

A4判とする。

2. 本 文

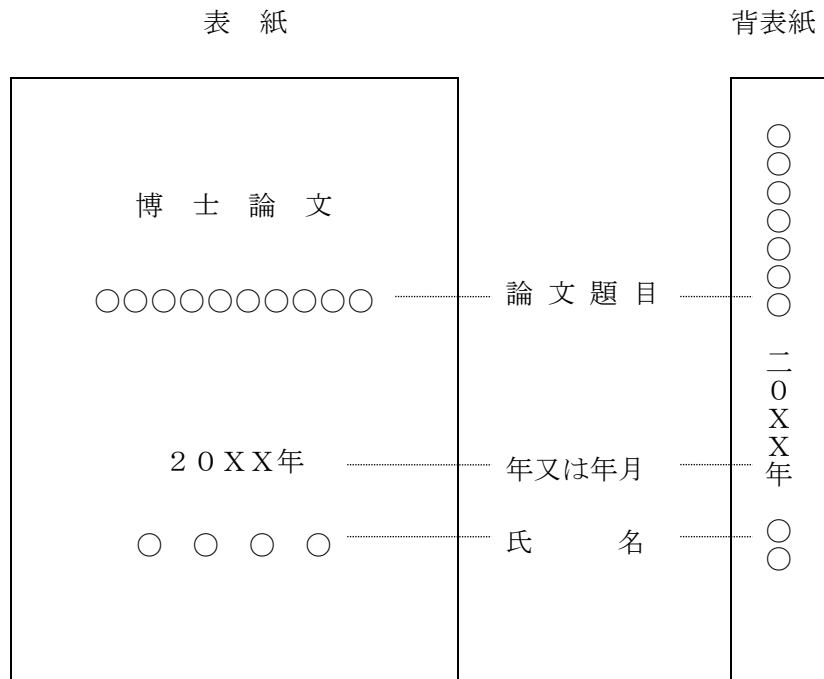
- (1) 原則として横書きとすること。
- (2) ページ数を記入し、目次を作成すること。
- (3) 参考論文を添付する場合は、目次の最後に明記すること。

3. 印刷・製本

- (1) ハードカバーとし、永久保存に耐え得る仕様とすること。
- (2) 論文の表紙及び背表紙には、論文題目・氏名及び年号（年又は年月）以外を記入しないこと。
- (3) 印刷に当たっては、ワードプロセッサ又はタイプライターを用いることが望ましい。なお、手書きによる場合は、楷書で記述すること。
- (4) 大文字・小文字の区別、数式・化学式・記号等及び数量を表す単位等は、正確に記述すること。

4. そ の 他

製本の見本は教務室に備え付けてあるので参考にすること。



担当教員一覧

1. 修士課程

機械工学専攻

大嶋和彦	教授	西脇武志	教授
尾形和哉	教授	前田安郭	教授
神崎隆男	教授	溝口正信	教授
小里泰章	教授	井原禎貴	准教授
小森和武	教授	篠原主勲	准教授
坂倉守昭	教授	杣谷啓	准教授
白石裕之	教授	坪井涼	准教授
高田健	教授	町屋修太郎	准教授
田中浩司	教授	吉田昌史	准教授
蔦森秀夫	教授	萩野将広	講師
徳納一成	教授	宮本潤示	講師

大学院客員教授

幾原裕美	(一般財団法人 ファインセラミックスセンター)
古谷仁志	(新日鐵住金株式会社)

電気・電子工学専攻

赤池宏之	教授	高木康夫	教授
植田俊明	教授	堀尾吉巳	教授
大澤文明	教授	山田靖	教授
川福基裕	教授	加納善明	准教授
橋本雄一	教授		

大学院客員教授

入山恭彦	(大同特殊鋼株式会社)
高橋誠治	(一般財団法人 ファインセラミックスセンター)
安井久一	(国立研究開発法人 産業技術総合研究所)

建築学専攻

宇野享	教授	中島貴光	准教授
萩原伸幸	教授	藤森繁	准教授
武藤隆	教授	船橋仁奈	准教授
渡邊慎一	教授	岡本洋輔	講師
高柳伸一	准教授	米澤隆	講師
高橋之	准教授		

都市環境デザイン学専攻

嶋田喜昭	教授	光田恵	教授
鷺見哲也	教授		
大東憲二	教授	山口一	教授
高山努	教授	棚村一壽	准教授
棚橋秀行人	教授	木全博三	講師
堀内将人	教授	樋口恵一	講師

2. 博士後期課程

材料・環境工学専攻

赤上	池田	宏浩	之次	教授	脇原	武伸	志幸	教授
大澤	田澤	浩文	次明	教授	原本	伸雄	一彦	教授
尾嶋	嶋形	文和	彦哉	教授	破内	勝将	人己	教授
川福	野里	和基	裕章	教授	尾田	吉安	郭	教授
桑野	森倉	茂泰	武昭	教授	田口	恵一		教授
小森	田石	和守	昭之	教授	田邊	靖慎	一貴	教授
小嶋	見木	喜裕	也夫	教授	原野	禎正	雄明	教授
白鷺	田山	康健	則司	教授	納原	善主	勲三	教授
高木	内中	努義	行夫	教授	谷村	啓壽		教授
高竹	橋植	浩秀		教授	井森	涼繁	郎美	教授
田柵	森納	覚秀		教授	屋島	修千	代史	教授
柵蔦		一		教授	田吉	昌		教授
德				教授				教授

情報学研究所

修士課程

修士課程 講義要綱等

1. 情報学専攻

担当教員一覧

1. 修士課程

修士課程 講義要綱等

1. 情報学専攻

(1) 教育課程表

大学院学則 別表(1)

部類	コース	授業科目	単位数	毎週授業時間数				備考
				1年次		2年次		
				1	2	3	4	
[1] 講義	コース共通	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			集中
		経済学特論	1	1	<1>			集中
		地球環境科学特論	1	1	<1>			集中
		外国文化特論	1	1	<1>			集中
		情報社会倫理特論	2		2			
		情報学特別講義Ⅰ	1	1	<1>			集中
		情報学特別講義Ⅱ	1			1	<1>	集中
	情報システムコース	音響情報学特論	2	2				
		コンピュータビジョン特論	2	2				
		情報統計学特論	2	2				
		センシングシステム特論	2	2				
		知識情報処理特論	2	2				
		音声音楽情報処理特論	2		2			
		コンピュータシステム特論	2		2			
		システムプログラミング特論	2		2			
		情報ネットワーク特論	2		2			
		制御システム特論	2		2			
		データ工学特論	2		2			
	情報デザインコース	映像製作特論	2	2				
		コーポレートコミュニケーション特論	2	2				
		コンピュータグラフィックス特論	2	2				
		コンピュータミュージック制作特論	2	2				
		メディアプロデュース特論	2	2				
		インダストリアルデザイン特論	2		2			
		企業情報とデザインマネジメント特論	2		2			
		視覚表現特論	2		2			
		製品開発特論	2		2			
		マーケティング特論	2		2			
	経営情報コース	経営学特論	2	2				
		地域経済学特論	2	2				
		物流システム特論	2		2			
		環境情報特論	2		2			
	[2] 演習	コース共通	情報学特別演習Ⅰ	2	2			
情報学特別演習Ⅱ			2		2			
情報学特別演習Ⅲ			2			2		
情報学特別演習Ⅳ			2				2	
[3] 研究	コース共通	情報学特別研究Ⅰ	1.5	◎				
		情報学特別研究Ⅱ	1.5		◎			
		情報学特別研究Ⅲ	1.5			◎		
		情報学特別研究Ⅳ	1.5				◎	
		学外研修	2	◎	<◎>			

(2) 教育内容

近年、情報科学および情報通信技術は飛躍的に発展し、社会の情報化を大きく前進させた。ネットワーク化された様々なコンピュータシステムやソフトウェアは、生産活動はもとより、流通・販売、文化・芸術、医療・福祉、生活環境を含む多種多様な分野において、大きな変革をもたらしている。こうした社会的な情勢における多様な要請に応えるため、情報システムコース、情報デザインコース、経営情報コースの3コースを設けて、多面的な教育・研究を展開する。情報システムコースでは、コンピュータとネットワークの基本原則と先進技術を習得し、情報システムを開発・運用することができる人材を育成するために、教育・研究を行う。情報デザインコースでは、コンピュータ技術と芸術的な能力を活かして、情報コンテンツの質的向上ならびに量的拡大を図っていくことができる人材を育成するために、教育・研究を行う。経営情報コースでは、経営と情報の知識を活かして、社会や経済・経営における様々な問題に対して解決方法を見出していくことができる人材を育成するために、教育・研究を行う。

授業科目は、講義・演習・研究に分類される。講義は、少人数の参加型授業形式である特論として実施される。講義には、コース共通の特論とコース固有の特論がある。コース共通の特論には、大学院共通の特論と本専攻固有の特論がある。後者として、「情報社会倫理特論」、「情報学特別講義Ⅰ」、「情報学特別講義Ⅱ」が設けられている。

「情報学特別演習（Ⅰ～Ⅳ）」では、「特別研究（Ⅰ～Ⅳ）」を見据えて、研究指導の担当教員が、各分野の専門書・論文あるいは実例を教材とした演習をマンツーマン形式で実践する。「特別研究（Ⅰ～Ⅳ）」では、特色ある研究テーマを設定し、課題を発見し、それに対する解決策を見出し、実践していくまでの全過程において、大学院生の自発性・主体性を抛りどころとして、研究指導の担当教員が個人指導を行う。学期毎に研究の進捗を確認しながら、学内外での研究発表を通して、論理的思考能力を養うとともに、文章作成とプレゼンテーションに係る表現能力を育成する。

情報学専攻に所属する者は、情報システムコース、情報デザインコース、経営情報コースのいずれかのコースを履修しなければならない。以下は、各コースの教育内容である。

① 情報システムコース

コンピュータのハードウェアとソフトウェアを中心に、情報ネットワークの構成法までを含むコンピュータシステムならびにコンピューティングの基礎から応用・実践にいたる教育・研究を行う。そこでは、デジタル信号処理・制御理論などを始めとする数理的技法、音声・音楽を含む音響情報処理、画像・映像に対するマルチメディア情報処理、人工知能やコンピュータビジョンなどの応用・学際的な情報処理、大規模データ処理やヒューマンインタフェースなどに取り組む。

② 情報デザインコース

コンピュータを駆使して作り出されるグラフィックス、サウンド、映像などの芸術表現、人と住空間を繋ぐために展開されるプロダクトデザイン、社会あるいは企業環境におけるメディアの役割など、基礎から応用・実践にいたる系統的な学習と制作に取り組む。これらを通して、デザインに関わる感性を養うと共に、クオリティの高い情報コンテンツの制作、製品のデザイン、情報戦略の企画などに必要となる創造的な能力の獲得に向けて教育・研究を行う。

③ 経営情報コース

情報分野の知識と技術に基づく数量的・実証的アプローチを重視し、経営学の学術的理論と実用的な技法、実践的かつ創造的な問題解決の方法論に関する学習を行う。また、ビッグデータ活用による経営改善、地域経済の活性化方法、環境情報活用による環境保全・環境創造、物流システムを通じた企業運営や社会システムの改善に関する教育・研究に取り組む。これらを通して、社会や経済・経営における様々な問題に対する現実的な解決能力の獲得に向けて教育・研究を進める。

(3) 履修上の心得

情報学専攻における修了要件として、講義 12 単位以上、演習 8 単位以上、研究 6 単以上であり、かつ合計 30 単位以上の修得が課せられる。修了要件の修得単位には、工学研究科の専攻ならびに他大学院からの修得単位、入学前修得単位の中から、合計 10 単位を超えない修得単位を含めることができる。さらに、修了要件の修得単位に、履修コースの他コースの講義科目の修得単位を 4 単位まで含めることができる。

1 単位科目の講義及び演習に対しては、授業時間内の学修 15 時間（毎週 1 時間）、授業時間外の学修 30 時間（毎週 2 時間）を必要とする内容で構成される。また、2 単位科目の講義及び演習に対しては、授業時間内の学修 30 時間（毎週 2 時間）、授業時間外の学修 60 時間（毎週 4 時間）を必要とする内容で構成される。この点も踏まえて、授業科目の履修にあたっては、研究指導の担当教員と十分に相談の上、将来の進路を見据えた有意義かつ体系的な履修計画を立案する。

(4) 授業科目・担当教員等

情報学専攻

授 業 科 目		単 位 数	毎週授業時間数				担 当 教 員	
			1 年次		2 年次			
			1	2	3	4		
情報学専攻科目	情報システムコース	音響情報学特論	2	2				
		コンピュータビジョン特論	2	2			竹内教授	
		情報統計学特論	2	2			柴田講師	
		センシングシステム特論	2	2			上田教授	
		知識情報処理特論	2	2			芋野講師	
		音声音楽情報処理特論	2		2		柘植准教授	
		コンピュータシステム特論	2		2		朝倉教授	
		システムプログラミング特論	2		2		荻野准教授	
		情報ネットワーク特論	2		2		桑野教授	
		制御システム特論	2		2		不破教授	
	データ工学特論	2		2		宮島准教授		
	情報デザインコース	映像製作特論	2	2			杉本教授	
		コーポレートコミュニケーション特論	2	2			上岡教授	
		コンピュータグラフィックス特論	2	2			横山教授	
		コンピュータミュージック制作特論	2	2			小高教授	
		メディアプロデュース特論	2	2			杉本教授	
		インダストリアルデザイン特論	2		2		クレムス・メツラー非常勤講師	
		企業情報とデザインマネジメント特論	2		2			
		視覚表現特論	2		2		高木教授	
		製品開発特論	2		2		岡田准教授	
		マーケティング特論	2		2		上岡教授	
	経営情報コース	経営学特論	2	2			小澤教授	
		地域経済学特論	2	2			松木准教授	
		物流システム特論	2		2		小澤教授	
		環境情報特論	2		2		大東教授	
	専攻内共通科目	情報社会倫理特論	2		2		桑野教授	
		情報学特別講義Ⅰ	1	1	<1>		遠藤非常勤講師	
		情報学特別講義Ⅱ	1			1	<1>	遠藤非常勤講師
		情報学特別演習Ⅰ	2	2			各指導教員	
		情報学特別演習Ⅱ	2		2		各指導教員	
		情報学特別演習Ⅲ	2			2	各指導教員	
		情報学特別演習Ⅳ	2				2	各指導教員
		情報学特別研究Ⅰ	1.5	◎			各指導教員	
情報学特別研究Ⅱ		1.5		◎		各指導教員		
情報学特別研究Ⅲ		1.5			◎	各指導教員		
情報学特別研究Ⅳ	1.5				◎	各指導教員		
全研究 共通科目	学外研修	2	◎	<◎>			専攻長	
	ベンチャービジネス特論	1	1	<1>			武藤非常勤講師	
	経済学特論	1	1	<1>			八木非常勤講師	
	地球環境科学特論	1	1	<1>			加藤非常勤講師	
	外国文化特論	1	1	<1>			クレムス・メツラー非常勤講師	

コンピュータビジョン特論 (Computer Vision)

選択 2 単位 1 期 教授 竹内 義則 授業時間外の学修 60 時間 (毎週 4 時間)

【授業の概要】

人間は目の網膜に写った 2 次元の映像から 3 次元空間を認識することができる。人間がものを見るという仕組みを解明し、工学的に実現することがコンピュータビジョンの重要なテーマの一つであり、これまでに数十年にわたって研究が続けられている。この講義では、網膜や脳内の 1 次視覚野での処理をもとに、どのようにものを見ているかを解説する。さらにその処理をコンピュータを用いて工学的に実現することにより、理解を深める。

【学修到達目標】

- ①ゼロ交差法が理解できる。
- ②透明性の知覚が理解できる。
- ③群化が理解できる。
- ④ステレオ法が理解できる。

【授業の内容】

1. 画像の表現
 1. 1 初期視覚
 1. 2 ゼロ交差法と原始スケッチ
 1. 3 透明性の知覚
 1. 4 群化
2. 2 次元画像から 3 次元へ
 2. 1 人間の視覚処理過程
 2. 2 ステレオ法

以上の内容を 15 回の講義で実施する。

【成績評価の方法】 課題レポート 100%

【教科書】 なし。プリントを用いる。

【参考書】 デビット マー著、乾 敏郎、安藤 広志訳、ビジョン—視覚の計算理論と脳内表現、産業図書、1987
田村 秀行、コンピュータ画像処理、オーム社、2002

情報統計学特論 (Advanced Information Statistics)

選択	2単位	1期	講師	柴田 慎一	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
【授業の概要】 <p>工学に必要な実験の測定データ・アンケート評価などの情報を整理し、そのデータの持つ性質や傾向の把握、および予測を行う方法を統計的手法という。この手法は自然科学の分野だけでなく人文科学や社会科学など、幅広い分野でデータ解析に用いられている。</p> <p>本特論では、まず統計解析の基本を理解し 2 変量を扱った解析方法について説明する。統計学における情報量、仮説検定と統計的推定の考えについて具体例を用いて学習する。また 3 変量以上を扱った主成分分析や数量化など多変量解析の手法について説明し、具体例を用いて基本概念や解析に必要なデータと解析結果の解釈について学ぶ。</p> <p>各講義時に提示する課題・レポートを通して上記の内容の知識を深める。</p>			【授業の内容】 <ol style="list-style-type: none">① ガイダンス、統計の基礎概念② 統計サンプリング③ 基本統計量④ 度数分布と四分位数⑤ 変数の相関関係⑥ 相関と回帰⑦ 確率分布と確率密度関数⑧ 記述統計と推測統計⑨ 検定と推定⑩ 主成分分析・判別分析⑪ 数量化Ⅰ類⑫ 数量化Ⅱ類⑬ 数量化Ⅲ類⑭ 数量化Ⅳ類⑮ まとめ		
【学修到達目標】 <ol style="list-style-type: none">①統計量の基本概念や扱い方を理解している。②統計的仮説検定を理解している。③主成分分析・判別分析について説明できる。④数量化の内容を理解している。					
【成績評価の方法】 講義の取組 (40%) , 課題・レポート (60%) による総合評価					
【教科書】 講義中に資料を配布					
【参考書】 有馬哲, 石村貞夫「多変量解析のはなし」東京図書(1994)、岡田昌史(監修)「Rによる医療統計学」丸善株式会社(2007)					

センシングシステム特論 (Sensing Systems)

選択	2単位	1期	教授	上田 浩次	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
【授業の概要】 <p>我々が活用しているあらゆる機器は様々なセンシングシステムによって支えられている。このセンシングシステムでは、対象に応じたセンサが用意され、その出力に信号処理を施すことによって、所望の解析結果を得る。そして、その結果をもとにシステムの状況理解がなされ、適切な制御が実行される。</p> <p>本講義では、具体的なセンシングシステムについて実習を通して理解を深める。さらに、現実の応用事例として ITS を取り上げる。そして、そこで利用されている各種センサの紹介とそれらを取りまく背景およびシステム制御の紹介を行うとともに、システムの状況理解のために利用されているデジタル信号処理技術に注目し、その処理内容についても理解を深める。これらの理解を通じて、センサセンシング技術について学ぶ。</p>			【授業の内容】 <ol style="list-style-type: none">①はじめに (授業ガイダンス、センシングシステムの概要)②実習環境とマイコンプログラミングの確認③プログラミング実習 (A/D 変換)④センサとセンシングシステムの理解 (CdS センサ)⑤センサ出力とセンシングシステム応答計測⑥センシングシステムプログラミング実習 (1)⑦センシングシステムプログラミング実習 (2) とまとめ⑧センサとセンシングシステムの理解 (サーミスタセンサ)⑨センシングシステムプログラミング実習 (3)⑩センシングシステムプログラミング実習 (4) とまとめ⑪ITS とセンシングシステム (背景)⑫交流理論, 情報工学の基本内容確認⑬電波センサ応用の基礎理論 (伝送線路理論 1)⑭電波センサ応用の基礎理論 (伝送線路理論 2)⑮研究事例紹介: 電波センサ応用システム		
【学修到達目標】 <ol style="list-style-type: none">①各種センサの動作について理解できる。②各種センサの計測方法について理解できる。③センシングシステムの動作・構成について理解できる。④ITS に利用されているセンサについて理解できる。					
【成績評価の方法】 授業, 実習, 課題取組状況 80%と演習レポート 20%の総合評価					
【教科書】 プリント配布					
【参考書】					

<情報学専攻：情報学専攻科目 情報システムコース>

知識情報処理特論 (Knowledge Engineering)

選択 2 単位 1 期 講師 芋野 美紗子 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

情報処理技術の発展により、現代社会では様々なコンピュータシステムが運用されており、情報系技術者としてシステムの企画、開発といった知識は重要であると考え、本講義ではソフトウェア面、特に人とコンピュータとの接点 (HCI) 部分における言語処理を中心としたシステムのデザイン、開発、評価を行う。その中で該当分野における要素技術について理解を深めるとともに、システムの企画や成果の発表を通して総合的な問題解決能力を身に着けることを目指す。

【学修到達目標】

- ① 言語処理分野における要素技術を理解することができる
- ② システム企画の創出ができる
- ③ 企画内容に沿ったシステムの開発を行うことができる

【授業の内容】

- ① 講義内容の解説・ガイダンス
- ② 形態素解析
- ③ 構文解析・意味解析
- ④ 言語資源・コーパス
- ⑤ 開発システムの企画
- ⑥ 企画発表 1
- ⑦ 企画発表 2
- ⑧ 企画発表 3
- ⑨ システム開発 1
- ⑩ システム開発 2
- ⑪ システム開発 3
- ⑫ システム開発 4
- ⑬ システム開発 5
- ⑭ 成果発表 1
- ⑮ 成果発表 2

【成績評価の方法】 課題レポート 60% 成果発表 40%

【教科書】 講義中に資料を配布

【参考書】

音声音楽情報処理特論 (Speech and Music Informatics)

選択 2 単位 2 期 教授 栢植 覚 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

本講義では、音声信号および音楽信号に関する情報処理技術を取り扱う。

人間のコミュニケーションの道具である音声をコンピュータとのコミュニケーションに使用する場合、コンピュータが音声を理解しなければならない。この仕組みを理解するため、音声認識システム、話者認識システム、音楽検索システムなどのアプリケーションの仕組みを学び、信号処理や統計などの技術を習得する。

【学修到達目標】

- ① 音響信号のデジタル信号処理を説明できる。
- ② 話者認識システムを理解している。
- ③ 音声認識システムを理解している。
- ④ 音楽情報処理を理解している。

【授業の内容】

- ① 講義内容の解説・ガイダンス
- ② 音声生成のメカニズム
- ③ 音声生成のデジタルモデル 1
- ④ 音声生成のデジタルモデル 2
- ⑤ 音声・音楽信号のデジタル信号処理 1
- ⑥ 音声・音楽信号のデジタル信号処理 2
- ⑦ 話者認識 (特徴量抽出)
- ⑧ 話者認識 (統計モデル)
- ⑨ 話者認識 (話者識別・照合)
- ⑩ 音声認識 (特徴量抽出)
- ⑪ 音声認識 (音響モデル)
- ⑫ 音声認識 (言語モデル)
- ⑬ 音声認識 (探索)
- ⑭ 音声/音楽情報処理アプリケーション
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 授業への取り組み(30%)およびレポート(70%)による総合評価

【教科書】 講義中に資料を配布

【参考書】 「デジタル音声処理」 古井 貞熙 (東海大学出版会), 「コンピュータ音楽」 (東京電機大学出版局)

＜情報学専攻：情報学専攻科目 情報システムコース＞

コンピュータシステム特論 (Computer System)

選択 2 単位 2 期 教授 朝倉 宏一 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

今日、様々なコンピュータシステムが実用化されている。一般的な PC の他にも、組み込みシステム、IoT 機器、クラウド環境など、様々な規模や構成のものが存在する。本特論では、コンピュータを構成するプロセッサやメモリなどの構成要素に関して教科書を輪読しながら議論する。また、様々なコンピュータシステムを適切に動作させるソフトウェア要件についても理解を深める。

【学修到達目標】

- ① コンピュータシステムの構成要素について理解している
- ② 並列性の分類について理解している
- ③ データセンターの構成について理解している

【授業の内容】

- ① イントロダクション
- ② コンピュータシステムの構成
- ③ メモリ階層
- ④ メモリ階層
- ⑤ 命令レベル並列性
- ⑥ 命令レベル並列性
- ⑦ 命令レベル並列性
- ⑧ 命令レベル並列性
- ⑨ データ並列性
- ⑩ データ並列性
- ⑪ データ並列性
- ⑫ スレッド並列性
- ⑬ スレッド並列性
- ⑭ データセンターのアーキテクチャ
- ⑮ データセンターのアーキテクチャ

【成績評価の方法】 プレゼンテーション・議論 (50%)、期末試験 (50%) で評価します。

【教科書】 講義中に資料を配布する

【参考書】

情報ネットワーク特論 (Information Networking)

選択 2 単位 2 期 教授 桑野 茂 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

現在のネットワークは無線を中心としたアクセスネットワークとそれを支える有線 (光) ネットワークとから構成される。また、ハードウェア性能の向上に伴い、ネットワーク機能の一部を汎用のハードウェアを用いてソフトウェアで処理する技術も進んできている。この講義を通じて、将来のネットワークを支える無線ネットワーク技術ならびに有線ネットワーク技術について解説することにより、ネットワーク技術についての理解を深めるとともに、ネットワーク仮想化技術について理解を深める。

【学修到達目標】

- ① 現在のネットワークの仕組みについて理解している。
- ② 様々な無線システム技術について理解している。
- ③ 様々な光ネットワーク技術について理解している。
- ④ 仮想化技術等将来のネットワーク技術について理解している。

【授業の内容】

- ① ガイダンス・ネットワーク技術の概要
- ② ワイヤレスネットワークの概要
- ③ 移動通信技術(1)
- ④ 移動通信技術(2)
- ⑤ 無線 LAN 技術(1)
- ⑥ 無線 LAN 技術(2)
- ⑦ 近距離無線技術(1)
- ⑧ 近距離無線技術(2)
- ⑨ 光ネットワークの概要
- ⑩ 光アクセス技術(1)
- ⑪ 光アクセス技術(2)
- ⑫ バックボーンネットワーク技術(1)
- ⑬ バックボーンネットワーク技術(2)
- ⑭ ネットワーク仮想化技術
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 授業への取り組み(30%)、レポート(70%)により評価する。

【教科書】 講義前に資料を配布する。

【参考書】 適宜紹介する。

制御システム特論 (Control Systems)

選択 2単位 2期 教授 不破 勝彦 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

制御は、機械、電気、情報、経済などありとあらゆるシステムに必要とされる基盤技術である。本講義では、現代制御理論を用いて制御システムを構築するための基礎を論ずるとともに、簡単な制御システムが構築できるようになることを目指したい。前半では、安定性や可制御・可観測性の判定など制御システムの解析法について学ぶ。後半では状態推定器を併合した状態フィードバック制御の設計法について学ぶ。

【学修到達目標】

- ①線形代数で学んだ行列の基礎を理解している。
- ②状態変数を理解している。
- ③システムの可制御性、可観測性を判定することができる。
- ④状態フィードバック制御ゲイン行列を求めることができる。
- ⑤状態推定器のゲイン行列を求めることができる。

【授業の内容】

- ① 制御システムの実例
- ② 制御数学の基礎 (1)
- ③ 制御数学の基礎 (2)
- ④ 制御数学の基礎 (3)
- ⑤ 状態方程式
- ⑥ 安定性
- ⑦ システムの線形変換
- ⑧ 可制御性・可観測性
- ⑨ 状態フィードバック制御 (1)
- ⑩ 状態フィードバック制御 (2)
- ⑪ 状態推定器
- ⑫ 状態推定器を併合した状態フィードバック制御
- ⑬ プレゼンテーション (1)
- ⑭ プレゼンテーション (2)
- ⑮ プレゼンテーション (3)

【成績評価の方法】 レポート (20%)、プレゼンテーション (30%)、小テスト (50%)

【教科書】 「実践の技術者のための電気電子系教科書シリーズ性御工学」成清辰生・不破勝彦著 (理工図書)

【参考書】 「入門現代性御理論」白石昌武著 (日刊工業新聞社)

データ工学特論 (Advanced Data Engineering)

選択 2単位 2期 准教授 宮島 千代美 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】 【授業の概要】

実世界で観測される大規模なデータから、有用な知識や特徴的なパターンを抽出・発見するために、データベース(Database)とデータマイニング(Data Mining)といった技術が重要となっている。本特論では、基礎となるデータベース技術、データマイニングの代表的な解析手法とそれらの応用について学習する。これらを通して、データベースとデータマイニングに関わる基礎的技術を修得することを目的とする。

【学修到達目標】

- ① 関係データベースとオブジェクトデータベースを説明できる。
- ② 相関ルールのマイニング技術を説明できる。
- ③ 回帰分析技術を説明できる。
- ④ クラスタリング技術を説明できる。
- ⑤ クラス分類技術・決定木を説明できる。

【授業の内容】

- ① データベースの基本概念
- ② 関係データベース
- ③ データベース言語と管理システム
- ④ オブジェクトデータベース
- ⑤ 相関ルールによるマイニング (1)
- ⑥ 相関ルールによるマイニング (2)
- ⑦ 回帰分析 (1)
- ⑧ 回帰分析 (2)
- ⑨ クラスタリング (1)
- ⑩ クラスタリング (2)
- ⑪ クラス分類 (1)
- ⑫ クラス分類 (2)
- ⑬ クラス分類 (3)
- ⑭ データマイニングの応用 (1)
- ⑮ データマイニングの応用 (2)

【成績評価の方法】 授業への取り組み状況 (50%)、課題・レポート (50%) により評価する。

【教科書】 講義中に資料を配布する。

【参考書】 講義中に紹介する。

<情報学専攻：情報学専攻科目 情報デザインコース>

映像製作特論 (Film Making)

選択	2単位	1期	教授	杉本 幸雄	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
【授業の概要】 デジタル技術の進化に伴い、映像制作の分野もその裾野を大きく広げている。作劇術や演出のテクニックもそれを支える社会観、人間観、美意識など絶えず進化を遂げている。ドキュメンタリーであれ、劇映画であれ、世に問う映像作品を作る土台とは、人間研究である。興味のある人物や社会問題に対して深く洞察できる力が必要である。取材力をつけること、人に会い、話を聴き、インタビューを重ね、資料を集め、調査、分析をしてオリジナルの脚本を仕上げ、映像化していく作業が授業の柱となる。人を見る眼、社会を見る眼を養いながら、映像作品を作ることを主眼とする。			【授業の内容】 ①授業の方向性についてのガイダンス ②新聞記事のスクラップについて ③自らの指向性についての分析 ④取材対象の絞り込みと決定 ⑤取材 ⑥取材 ⑦取材 ⑧オリジナルの脚本書き ⑨脚本書き ⑩撮影 ⑪撮影 ⑫編集 ⑬編集 ⑭仕上げ作業 ⑮上映とまとめ		
【学修到達目標】 ①メディアが発する様々な情報に対して、リテラシーを持って理解できる。 ②社会情勢に対して深く洞察をし、自分の意見を持つことができる。 ③取材したものを脚本に書き、映像作品として製作することができる。					
【成績評価の方法】 取材力、脚本力、コミュニケーション力など総合的に評価					
【教科書】 なし					
【参考書】 適宜使用					

コーポレートコミュニケーション特論 (Corporate Communication)

選択	2単位	1期	教授	上岡 和弘	授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)
【授業の概要】 市場環境の激変(グローバリズムによる様々な影響、人口問題、環境問題、メディア環境の変化、消費意識の変化・・・)が進む超高齢化先進国日本。今後ますます重要とされる分野がCC(コーポレートコミュニケーション)である。本講では事例研究と計画立案を通し、CCを3つの視点(自社・ステイクホルダー・社会)で捉えることで共創社会の今後についての知見を獲得していく。 (研究・調査例) ・想定企業：例)健康産業分野 ・社会的課題発見：例)独居老人が増えている ・解決策策定：例)国内人口問題/健康管理サポート(自社の社会的価値)/収益モデル(個人データ取得による囲い込み通販事業)			【授業の内容】 ①コーポレートコミュニケーション特論について ②事例研究1 ③研究・調査 ④発表・講評 ⑤事例研究2 ⑥研究・調査 ⑦発表・講評 ⑧事例研究3 ⑨研究・調査 ⑩発表・講評 ⑪事例研究4 ⑫研究・調査 ⑬研究・調査 ⑭発表・講評 ⑮発表・講評まとめ		
【学修到達目標】 ①CCの役割が理解出来る ②CCを3視点(自社、ステイクホルダー、社会)に分類出来る ③課題発見と解決策立案が出来る					
【成績評価の方法】 研究結果、発表と受講内容					
【教科書】					
【参考書】					

＜情報学専攻：情報学専攻科目 情報デザインコース＞

コンピュータグラフィックス特論 (Computer Graphics)

選択 2単位

1期

教授 横山 弥生

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

近年、さまざまなメディアによる表現が盛んである。本特論では、コンピュータグラフィックスを中心としたデジタルデザイン&アート表現とその技法の進歩を歴史的な名作の鑑賞を通して学ぶことを目的とし、今日に至るまでのさまざまなデジタル表現を概説する。また、コンピュータグラフィックスと画像処理を別々に扱うのではなく、視覚に関わる情報処理として統合的に展開する。

【学修到達目標】

- ①CG の大まかな歴史を理解している。
- ②CG と画像処理の役割を理解している。
- ③CG の基本技術と応用分野が説明できる。
- ④今後の CG の発展と CG アートの方向性を考えることができる。

【授業の内容】

- ① CGと画像処理
- ② 座標系と幾何学的モデル
- ③ デジタル画像と変換
- ④ デジタル表現の発展
-CG誕生と本格的な始動~70年代まで-
- ⑤ デジタル表現の発展
-80年代実用化と普及~今日まで-
- ⑥ デジタルデザイン
- ⑦ デジタルアート
- ⑧ デザインにとっての映像表現とは
- ⑨ 映画の中のCG
- ⑩ 最前線のデジタルアート
- ⑪ 基本的表現による応用表現への展開
- ⑫ シミュレーションとしてのCG
- ⑬ アルゴリズムアート
- ⑭ 数理造形
- ⑮ 今後の発展

【成績評価の方法】 理解 50%、ディスカッション 25%、レポート 25%

【教科書】 プリント等の配布

【参考書】

コンピュータミュージック制作特論 (Computer Music Production)

選択 2単位

1期

教授 小高 直樹

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

現代においてコンピュータミュージックは従来の音楽と区別がつきにくいほどの精度になってきている。しかし厳密には本物の楽器と比べてどのような欠点があるのだろうか？コンピュータミュージックの限界を知る事により逆説的にその用途を考える。

また、既成の映像に対してサウンドがどのように付随しているかを検証して実際に映像に付随するサウンドを制作してみる。

【学修到達目標】

- ①コンピュータによる音楽制作の方法が理解できる。
- ②効果音の入れ方が理解できる。
- ③映像とサウンドの関係が理解できる。

【授業の内容】

- ① コンピュータミュージックとは
- ② MIDI 概論
- ③ 楽器法概論、プラグインの説明等
- ④ 楽曲のデータ化1 (ベロシティー、ゲートタイム)
- ⑤ 楽曲のデータ化2 (コントロール、テンポ等)
- ⑥ 楽曲のデータ化3 (総合)
- ⑦ 楽曲のデータ化4
- ⑧ AUDIO 概論
- ⑨ 効果音を取り入れたデータ制作1
- ⑩ 効果音を取り入れたデータ制作2
- ⑪ 効果音を取り入れたデータ制作3
- ⑫ 映像とサウンド1
- ⑬ 映像とサウンド2
- ⑭ 映像とサウンド3
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 データ提出による判定

【教科書】

【参考書】

<情報学専攻：情報学専攻科目 情報デザインコース>

メディアプロデュース特論 (Media Production)

選択 2 単位 1 期 教授 杉本 幸雄 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

現代社会には映像情報が溢れている。映像メディアといかに能動的・創造的に関わっていくか、そしてその力を身につけるかはきわめて重要である。そのためには、映像メディアの送り手側のテクニックや発想などについても学び、これらに対しての優れた洞察力を養うことが肝要となる。

本講義ではまず、映像表現の原理やメディア技術の発達について学び、次にわが国ならびに諸外国における映像作品(番組のみならず、ニュース・ドキュメンタリーほか)をさまざま上映・鑑賞し、つくり手の手法や発想のあり方を知り、コンテンツへの批評・評論法についても学ぶ。

【学修到達目標】

- ①メディアの社会における役割の理解ができる。
- ②メディアを使つての戦術・戦略の方法論が理解できる。
- ③21世紀のメディアプロデュースの有り方が理解できる。
- ④メディアがもたらす功罪の理解ができる。

【授業の内容】

- ① オリエンテーション、映像メディアの今日の状況
- ② テレビ・ラジオ、その歴史と変遷～その1
- ③ テレビ・ラジオ、その歴史と変遷～その2
- ④ 放送番組をどう作るか、フィクションの企画
- ⑤ 放送番組をどう作るか、ノン・フィクションの企画
- ⑥ 放送番組をどう作るか、映像文法とテクノロジー
- ⑦ 放送番組をどう作るか、ポストプロダクション(編集ほか)
- ⑧ 劇伴と映画音楽の世界
- ⑨ 放送番組をどう作るか 取材と報道～その1
- ⑩ 放送番組をどう作るか 取材と報道～その2
- ⑪ 視聴率と著作権
- ⑫ テレビ番組研究～その1
- ⑬ テレビ番組研究～その2
- ⑭ デジタル時代のテレビ・ラジオの可能性
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 番組制作に対する理解力 (50%) レポート (50%)

【教科書】 特になし

【参考書】

インダストリアルデザイン特論 (Industrial Design)

選択 2 単位 2 期 非常勤講師 クレメンズ メッツラー 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

デザインはすでに我々の日常生活の一部となり、企業のビジネスストラテジーにとっても益々重要性を増しています。

「デザイン」を理解するために、上記に関する基本的な知識が必要です。

「インダストリアルデザイン特論」では、私の経験的観点からデザインの歴史背景と現状を捉え、その関係について論じます。

本授業の重要項目は

- ・政治・経済史的要件がデザインに与えた影響
- ・技術革新にともなうデザイン美学の変遷
- ・欧米におけるドイツデザイン

【学修到達目標】

- [1]デザイン史の大きな流れが理解できる
- [2]ドイツデザイン史の流れとその時代背景が理解できる
- [3]バウハウス教育の前史、変遷、拡散と影響を理解する
- [4]製品デザインの基本的な考え方や目的を理解する
- [5]デザイン開発のプロセスの組み立てを理解する
- [6]製品のデザイン言語の基礎を理解できる
- [7]今後のデザインにおける課題を理解する

【授業の内容】

- [1]イントロ「製品対美術品：デザインって何？」
- [2]「西洋美術史：建築&タイポグラフィは社会を象徴している」、「ゴシック建築からモダニズム：新しい素材・新しい技術・新しい表現」
- [3]「大量生産性と美：デザイン教育の始まりからバウハウスまで、メイド・イン・ジャーマニーから Designed in Germanyへ」
- [4]「バウハウス：デザイン思想の変遷、教育、目標、影響」
- [5]「ウルム造形大学：デザイン思想の変遷、目標、部門、デザイン・教育への影響」
- [6]「ゲルマン・デザイン：AEG、ERCO、グッドフォーム、そして東ドイツのデザイン」
- [7] その他の国1：ロシア、スカンジナビア
- [8] その他の国2：イタリア、スペイン、フランス、米国
- [9] 「マイクロエレクトロニクスの影響」
- [10] 「製品開発とデザイン・プロセス」、「ユーザー中心設計」
- [11] 「デジタル対アナログ：五感を通じたコミュニケーション」
- [12] 「製品言語：表現とゲシュタルト心理学」
- [13] 「製品分析：デザインを評価する」
- [14] 「コーポレート・アイデンティティとコーポレート・デザイン」
- [15] その他、まとめ(復習)

【成績評価の方法】 講義での討論(30%)、レポート提出及びショートレクチャー(70%)による総合評価

【教科書】 使用しない

【参考書】 特になし(授業の中で紹介する) 【連絡先】 メール：hello@clemensmetzler.com

<情報学専攻：情報学専攻科目 情報デザインコース>

視覚表現特論 (Visual Representation)

選択 2単位 2期 教授 高木 基充 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

現代社会においてビジュアルイメージをつかったコミュニケーションは不可欠なものとなっている。本特論では、情報メディアと視覚表現の社会的役割とその意味を理解し、情報コミュニケーションと情報デザインの新たな表現形態と思想を考察する。授業は講義と後半でプロジェクトワークに取り組む。

【学修到達目標】

- ①情報メディアと社会的役割を理解する。
- ②デザインの歴史とこれからの役割を認識する。
- ③常用デザインの可能性を認識する。

【授業の内容】

- ① 環境とデザイン
- ② デザインから見た生活
- ③ デザインの拡張
- ④ コンピュータとデザイン
- ⑤ I. T. の発展とデザインの関係
- ⑥ 色彩の革命
- ⑦ 専門から常用へ
- ⑧ 20世紀型デザインの特徴
- ⑨ デザインの遊離と希薄化
- ⑩ デザインとアートの違い
- ⑪ 常用デザインとは
- ⑫ プロジェクトワーク 1
- ⑬ プロジェクトワーク 2
- ⑭ プロジェクトワーク 3
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 制作、プレゼンテーション、レポート

【教科書】 参考書を購入すること。

【参考書】 「常用デザイン」南雲治喜著 (グラフィック社)

製品開発特論 (Product Design and Development)

選択 2単位 2期 准教授 岡田 心 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

ユーザ中心の製品開発やデザイン開発において、製品や社会の問題点を発見し、いかに発想・表現・伝達していくかが重要である。本特論ではプロダクトデザインにおける開発段階の応用的デザイン技法、ユーザ調査からのコンセプト立案、デザイン評価までの開発技法を学び、課題として実際に取り組み、習得していく。

【学修到達目標】

- ①製品開発におけるデザインの役割が理解できる。
- ②ユーザ調査方法を活用できる。
- ③コンセプト立案手法を活用することができる。
- ④アイデア発想手法を活用することができる。
- ⑤デザイン評価手法を活用することができる。

【授業の内容】

- ① 製品開発とプロダクトデザイン
- ② プロダクトデザイン史と生産技術史
- ③ 社会とプロダクトデザイン
- ④ ユーザセンタードデザインにおける製品開発とプロセス
- ⑤ ユーザ調査手法 1：アンケート調査、インタビュー調査
- ⑥ ユーザ調査手法 2：観察調査、フィールド調査
- ⑦ ユーザ調査手法 3：課題発表
- ⑧ コンセプト立案手法 1：ペルソナ手法
- ⑨ コンセプト立案手法 2：シナリオ手法
- ⑩ コンセプト立案手法 3：課題発表
- ⑪ アイデア発想手法
- ⑫ デザイン評価手法 1：ユーザ評価手法
- ⑬ デザイン評価手法 2：課題発表
- ⑭ 技術とデザイン
- ⑮ これからの製品開発とデザイン、最終課題

【成績評価の方法】 授業における発言、ディスカッション；30%、課題（計3回）；45%、最終課題；25%

【教科書】 「プロダクトデザインの基礎」JIDA「プロダクトデザインの基礎」編集委員会著 (ワークスコーポレーション)

【参考書】

マーケティング特論 (Marketing)

選択 2単位

2期

教授 上岡 和弘

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

市場環境の激変（グローバリズムによる様々な影響、人口問題、環境問題、メディア環境の変化、消費意識の変化・・・）が進む超高齢化先進国日本では、今後のマーケティング活動は世界的にも未知の領域に進んでいくと言われている。本講では、様々な社会的課題に適合する企業活動事例を研究し、知見を獲得していく。

〈研究・調査例〉

- ・社会的課題：例) 超高齢化社会
- ・解決策：例) 自動運転開発（自動車産業）
ドローン宅配技術（流通産業）
- ・他取扱要素：SWOT 分析、顧客分析（RFM）

【学修到達目標】

- ①マーケティングの役割が理解出来る
- ②実際の企業活動が理解出来る
- ③マーケティング的課題発見と解決策立案が出来る

【授業の内容】

- ①マーケティング特論について
- ②事例研究 1
- ③研究・調査
- ④発表・講評
- ⑤事例研究 2
- ⑥研究・調査
- ⑦発表・講評
- ⑧事例研究 3
- ⑨研究・調査
- ⑩発表・講評
- ⑪事例研究 4
- ⑫研究・調査
- ⑬研究・調査
- ⑭発表・講評
- ⑮発表・講評まとめ

【成績評価の方法】 研究結果、発表と受講内容

【教科書】

【参考書】

経営学特論 (Business Administration)

選択 2単位 1期

教授 小澤 茂樹

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

経営とは、企業における利潤最大額を実現させるために、人、モノ、金、情報を管理（コントロール）することである。本授業では、人、モノ、金を管理する意義や、これらを管理する手法（戦略）および制度を学ぶ。また、現代の企業が抱える問題に触れ、社会や経済の変化を踏まえつつ、今後の企業経営のあり方を考える。

【学修到達目標】

- ①経営に関する一般理論を用いて、企業経営を考察することができる。
- ②事例を踏まえつつ、企業が抱える問題に対する合理的な解決策を示すことができる。

【授業の内容】

- ① 企業とは何か
- ② 経営とは何か
- ③ 企業の形態と目的
- ④ 企業の戦略と組織
- ⑤ 企業経営と法律
- ⑥ 企業経営と社会
- ⑦ 企業経営における人の管理 1
- ⑧ 企業経営における人の管理 2
- ⑨ 企業経営におけるモノの管理 1
- ⑩ 企業経営におけるモノの管理 2
- ⑪ 企業経営における金の管理 1
- ⑫ 企業経営における金の管理 2
- ⑬ 企業経営における情報の管理 1
- ⑭ 企業経営における情報の管理 2
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 授業における発言や授業での発表などによる総合評価

【教科書】 「ゼミナール経営学入門」伊丹敬之・加護野忠男（日本経済新聞出版社）

【参考書】

地域経済学特論 (Regional Economics)

選択 2単位 1期

准教授 松木 孝文

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

「今、地域や空間が持つ意味は何か？」
グローバリゼーションと情報化が進む現在、「空間」や「地域」の問い直しは重要な意味を持つ。本授業では、空間経済学・経済地理学・地域社会学・情報社会学等の分野から学際的に特徴的な議論を参照し、空間あるいは地域という枠が経済・産業・情報にどのような影響を与えるのかを考える。

授業の序盤に簡単に地域経済研究の見取り図を示した後、主要な文献を輪読して理論的基礎を作る段階へと入り、最終的には商店街やNPO等が実施するプロジェクトの中で、データ収集と分析・提言が出来る所まで漕ぎ着ける予定である。

【学修到達目標】

- ①地域経済の特徴を各種統計を用いて説明できる。
- ②「空間」という要素が持つ独自性について説明できる。
- ③フィールドワークの際に留意すべき点について説明できる。

【授業の内容】

- ① ガイダンス、地域経済研究の概要
- ② 経済学・地域経済学について
- ③ 情報化と空間・地域について 1
- ④ 情報化と空間・地域について 2
- ⑤ 都市と農村
- ⑥ 地域おこし・まちおこし
- ⑦ 地域調査の方法 1
- ⑧ 地域調査の方法 2
- ⑨ 空間とイノベーション 1
- ⑩ 空間とイノベーション 2
- ⑪ 地域研究の実践 1
- ⑫ 地域研究の実践 2
- ⑬ プレゼンテーション 1
- ⑭ プレゼンテーション 2
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 プレゼンテーションおよびレポートで評価する

【教科書】

【参考書】 授業中に紹介する

物流システム特論 (Physical Distribution System)

選択 2単位 2期

教授 小澤 茂樹

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

近年における農林水産品および工業製品は、消費地と異なる場所で生産されている。そのため、物流（貨物輸送）は不可欠であると共に、企業の経営や国の交通政策において極めて重要な意義を有している。

本授業では、物流の意義やそのシステムに触れた上で、企業経営における物流の取り組みや今日における物流の問題、その解決策を考察する。また、社会や経済の変化に伴う物流に対するニーズの変化にも触れ、今後において必要とされる物流のあり方を学ぶ。

【学修到達目標】

- ①物流のシステムを理解した上で、企業経営における物流の意義や重要性を示すことができる。
- ②事例を踏まえつつ、物流の視点から企業経営に関する問題点や解決策を示すことができる。

【授業の内容】

- ① 物流の意義
- ② 物流の歴史
- ③ 物流と企業経営
- ④ 物流と社会
- ⑤ 物流システム（実運送事業者）
- ⑥ 物流システム（インフラ事業者）
- ⑦ 物流システム（利用運送事業者）
- ⑧ 物流インフラ（道路、空港、港湾）
- ⑨ 物流インフラ（ターミナル、倉庫）
- ⑩ 在庫の意義
- ⑪ ロジスティクス
- ⑫ ロジスティクスとキャッシュフロー
- ⑬ ロジスティクスと情報システム
- ⑭ 今後の経済・社会の変化と物流
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 授業における発言や授業での発表などによる総合評価

【教科書】 「現代物流システム論」 塩見英治・齋藤実（中央経済社）

【参考書】

環境情報特論 (Environmental Information)

選択 2単位 2期

教授 大東 憲二

授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

我々を取り巻く生活環境と自然環境は、各種の開発事業によって影響を受ける。例えば、丘陵地での宅地開発、市街地での高層ビルの建設、地下鉄道の建設などによって、それまでの生活環境と自然環境が大きく変化する可能性がある。それらの環境変化を定量的または定性的に把握するには、それぞれの環境項目を可能な限り数値情報化し、開発事業による影響を評価しなければならない。

この授業では、環境影響評価において抽出される環境項目、例えば、大気質、騒音、振動、悪臭、水質、地形・地質、地盤・土壌、地下水、動物、植物、生態系、景観、廃棄物、温室効果ガス等の数値情報化手法について説明する。

【学修到達目標】

- ①環境影響評価の手続について説明できる。
- ②環境影響評価項目の数値情報化方法について説明できる。
- ③数値情報化した環境影響評価項目を用いて開発事業による影響を評価できる。

【授業の内容】

- ① 環境影響評価の概説
- ② 大気質の数値情報化
- ③ 騒音および低周波音の数値情報化
- ④ 振動の数値情報化
- ⑤ 悪臭の数値情報化
- ⑥ 水質の数値情報化
- ⑦ 地形・地質の数値情報化
- ⑧ 地盤・土壌の数値情報化
- ⑨ 動物・植物・生態系の数値情報化
- ⑩ 景観の数値情報化
- ⑪ 人と自然とのふれあいの場の数値情報化
- ⑫ 地域の歴史的文化的特性を生かした環境の状況の数値情報化
- ⑬ 廃棄物の数値情報化
- ⑭ 温室効果ガス等の数値情報化
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】 講義内容についての討論 40%、課題レポート 60%による総合評価

【教科書】 プリントを配布する

【参考書】

情報社会倫理特論 (Computerized Society and Ethics)

選択 2単位 2期 教授 桑野 茂 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

情報通信技術のめざましい発展により、高度に情報化された社会が実現されており、我々はその利益を享受している。こういった社会において、情報ネットワークを介して様々な人とつながりを持つこととなるが、その中で様々な問題が発生している。

本特論では、情報社会の特質を理解し、その中で発生する課題ならびに問題について把握するとともに、倫理的な視点からその解決策について議論していく。

【学修到達目標】

- ① 情報社会の特質を理解している。
- ② 知的所有権について理解している。
- ③ サイバー犯罪について理解している。
- ④ 情報社会における倫理観を身に付けている。

【授業の内容】

- ① 情報技術の歴史、情報社会と情報倫理
- ② ネットワーク利用状況
- ③ メディアリテラシー
- ④ 個人情報とプライバシー
- ⑤ 知的所有権(1)
- ⑥ 知的所有権(2)
- ⑦ 知的所有権(3)
- ⑧ 課題中間報告
- ⑨ サイバー犯罪(1)
- ⑩ サイバー犯罪(2)
- ⑪ ケーススタディ(1)
- ⑫ ケーススタディ(2)
- ⑬ ケーススタディ(3)
- ⑭ 情報セキュリティ技術
- ⑮ 課題最終報告、まとめ

【成績評価の方法】 授業への取り組み(30%)、レポート(70%)により評価する。

【教科書】 特になし。

【参考書】 特になし。

システムプログラミング特論 (System Programming)

選択 2単位 2期 准教授 荻野 正雄 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

ものづくりや基礎研究とその応用を支えるスーパーコンピュータ、情報化社会を支えるデータセンターなど、今日を支えるコンピュータは大規模化・複雑化している。それらの多くは、並列処理・分散処理によって処理能力向上が実現されており、そのためのハードウェアやシステムソフトウェアで構成されている。本特論では、並列ハードウェアや並列ソフトウェアについて、教科書を輪読しながら議論し、その理解を深める。

【学修到達目標】

- [1] 並列処理システムの構成について理解している。
- [2] 並列処理システムのハードウェア特性について理解している。
- [3] 並列処理システムのソフトウェア特性について理解している。
- [4] 並列処理システムのためのプログラミングについて理解している。

【授業の内容】

1. イントロダクション
2. 並行・並列・分散システム
3. ノイマン型アーキテクチャとその改良
4. 並列ハードウェア (1)
5. 並列ハードウェア (2)
6. 並列ソフトウェア
7. 並列システムの評価手法
8. 並列プログラミング
9. 分散メモリプログラミング (1)
10. 分散メモリプログラミング (2)
11. 共有メモリプログラミング (1)
12. 共有メモリプログラミング (2)
13. N体シミュレーションの並列化
14. 木探索の並列化
15. まとめ

【成績評価の方法】 プレゼンテーション・議論 (50%)、期末試験 (50%) で評価します。

【教科書】 「An Introduction to Parallel Programming」 <Morgan Kaufmann> Peter S. Pacheco

【参考書】 適宜資料を配布します。

情報学特別講義Ⅰ (Selected Topics in Informatics I)

選択 1 単位 1 (2) 期 非常勤講師 遠藤 麻里 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

情報学に関連する広い分野から最新的话题を選び、技術や応用の実情をその分野の専門家の講師が紹介する。

【学修到達目標】

動作解析、人間工学、情報デザイン・社会情報に関する研究事例を理解し、情報学分野での自身の修士研究への応用の可能性を考察できる。

【成績評価の方法】 講義への取り組み状況 50%、課題・レポート 50%

【教科書】 指定なし

【参考書】 指定なし

情報学特別講義Ⅱ (Selected Topics in Informatics II)

選択 1 単位 3 (4) 期 非常勤講師 遠藤 麻里 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

情報学に関連する広い分野から最新的话题を選び、技術や応用の実情をその分野の専門家の講師が紹介する。

【学修到達目標】

動作解析、人間工学、情報デザイン・社会情報に関する研究事例を理解し、情報学分野での自身の修士研究への応用の可能性を考察できる。

【成績評価の方法】 講義への取り組み状況 50%、課題・レポート 50%

【教科書】 指定なし

【参考書】 指定なし

情報学特別演習Ⅰ (Seminar on Informatics Ⅰ)

必修 2単位 1期 准教授 宮島 千代美 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

機械学習や統計的分析手法を用いて、ドライバの運転行動の分析・モデル化・理解に関する研究を行う。その中で必要となる運転行動データの表現形式や車載ネットワーク信号の基礎知識と、特徴抽出手法について学ぶ。

【学修到達目標】

- ① 運転行動のデータ表現形式を説明できる。
- ② 車載ネットワークの仕組みを説明できる。
- ③ 運転行動信号や車載ネットワーク信号の前処理と基礎的な特徴抽出手法について理解・修得する。

【授業の内容】

- ① 運転行動とは
- ② 運転行動データの表現形式
- ③ 運転行動データの取得
- ④ 運転行動信号の同期
- ⑤ 運転行動信号の前処理
- ⑥ 運転行動信号の特徴抽出(1)
- ⑦ 運転行動信号の特徴抽出(2)
- ⑧ 車載ネットワークの仕組み
- ⑨ 車載ネットワーク信号の表現形式
- ⑩ 車載ネットワーク信号の取得
- ⑪ 車載ネットワーク信号の同期
- ⑫ 車載ネットワーク信号の前処理
- ⑬ 車載ネットワーク信号の特徴抽出(1)
- ⑭ 車載ネットワーク信号の特徴抽出(2)
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】ゼミへの参加(30%)、課題の取組み(30%)、発表と議論(40%)で評価

【教科書】適宜資料を配布

【参考書】「車載ネットワークシステム徹底解説」佐藤道夫(CQ出版)

情報学特別演習Ⅱ (Seminar on Informatics Ⅱ)

必修 2単位 2期 准教授 宮島 千代美 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

機械学習や統計分析手法を用いて、ドライバの運転行動の分析・モデル化・理解に関する研究を行う。その中で必要となるドライバの生体信号や視線データに関する基礎知識・特徴抽出手法について学ぶ。

【学修到達目標】

- ① 心拍データの表現形式を説明できる。
- ② 視線データの表現形式を説明できる。
- ③ 心拍データや視線データを可視化・分析・比較する手法を理解・修得する。

【授業の内容】

- ① 生体信号の表現形式
- ② 生体信号の前処理
- ③ 生体信号の特徴抽出
- ④ 生体信号の統計分析(1)
- ⑤ 生体信号の統計分析(2)
- ⑥ 生体信号の比較と統計検定(2)
- ⑦ 生体信号の個人性
- ⑧ 視線データの表現形式
- ⑨ 視線情報の可視化(1)
- ⑩ 視線情報の可視化(2)
- ⑪ 視線情報の統計分析
- ⑫ 視行動の類似尺度
- ⑬ 視行動の個人性
- ⑭ 視行動の比較・評価
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】ゼミへの参加(30%)、課題の取組み(30%)、発表と議論(40%)で評価

【教科書】適宜資料を配布

【参考書】適宜資料を配布

情報学特別演習Ⅲ (Seminar on Informatics Ⅲ)

必修 2 単位 3 期 准教授 宮島 千代美 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

機械学習や統計分析手法を用いて、ドライバの運転行動の分析・モデル化・理解に関する研究を行う。その中で運転の状況理解に必要となる、クラスタリング手法及び画像処理技術について理解・修得する。

【学修到達目標】

- ① クラスタリング手法について説明できる。
- ② 基礎的な画像処理技術について説明できる。
- ③ クラスタリング手法・画像処理を用いた分類を行うことができる。

【授業の内容】

- ① クラスタリング手法 (1)
- ② クラスタリング手法 (2)
- ③ クラスタリング手法 (3)
- ④ 運転行動信号のクラスタリング (1)
- ⑤ 運転行動信号のクラスタリング (2)
- ⑥ 運転状況の分類
- ⑦ 画像のデータ表現
- ⑧ 画像処理の基礎知識
- ⑨ 画像の前処理
- ⑩ 画像の特徴抽出 (1)
- ⑪ 画像の特徴抽出 (2)
- ⑫ 画像の識別 (1)
- ⑬ 画像の識別 (2)
- ⑭ 画像の識別 (3)
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】ゼミへの参加 (30%) , 課題の取組み(30%), 発表と議論 (40%) で評価

【教科書】適宜資料を配布

【参考書】適宜資料を配布

情報学特別演習Ⅳ (Seminar on Informatics Ⅳ)

必修 2 単位 4 期 准教授 宮島 千代美 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

機械学習や統計分析手法を用いて、ドライバの運転行動の分析・モデル化・理解に関する研究を行う。そのために、深層学習をはじめとする機械学習手法について理解・修得する。また、情報学特別演習Ⅰ～Ⅲで修得した技術も総合し、運転行動理解の応用問題に取り組む。

【学修到達目標】

- ① 主な機械学習手法について説明できる。
- ② 深層学習について説明できる。
- ③ 機械学習を用いて識別問題を解くことができる。

【授業の内容】

- ① 重回帰分析 (1)
- ② 重回帰分析 (2)
- ③ サポートベクトルマシン (1)
- ④ サポートベクトルマシン (2)
- ⑤ ガウス混合モデル (1)
- ⑥ ガウス混合モデル (2)
- ⑦ 深層学習とは
- ⑧ 深層学習による識別 (1)
- ⑨ 深層学習による識別 (2)
- ⑩ オートエンコーダ
- ⑪ 深層学習による特徴抽出
- ⑫ 機械学習の応用 (1)
- ⑬ 機械学習の応用 (2)
- ⑭ 機械学習の応用 (3)
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】ゼミへの参加 (30%) , 課題の取組み(30%), 発表と議論 (40%) で評価

【教科書】適宜資料を配布

【参考書】適宜資料を配布

情報学特別演習 I (Seminar on Informatics I)

必修 2単位 1期 教授 不破 勝彦 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

高精度・高性能な産業機械の制御を実現するために、コンピュータを使った制御器が使用されるようになり、離散事象としての取扱が必要不可欠となる。本演習では、現代制御理論の立場から、連続時間制御系を離散時間系に変換して制御するための基礎について学ぶとともに、できるだけ実例を通してその理解を深める。

【学修到達目標】

- ①コンピュータを使った制御系の構成について理解している。
- ②連続時間系と離散時間系との違いについて理解している。
- ③ z 変換を使って離散時間系の状態方程式を求めることができる。
- ④ z 変換を使ってパルス伝達関数を求めることができる。

【授業の内容】

- ①コンピュータを使って制御するとは
- ②連続時間系の復習
- ③離散時間系とは(1)
- ④離散時間系とは(2)
- ⑤伝達関数
- ⑥最小実現
- ⑦状態方程式
- ⑧サンプル点上の動特性
- ⑨サンプル点間の動特性
- ⑩ z 変換および逆 z 変換(1)
- ⑪ z 変換および逆 z 変換(2)
- ⑫拡張 z 変換
- ⑬パルス伝達関数
- ⑭拡張パルス伝達関数
- ⑮プレゼンテーション

【成績評価の方法】小テスト(20%)、レポート(60%)、プレゼンテーション(20%)

【教科書】「大学講義シリーズ 基礎デジタル制御」美多勉・原辰次・近藤良 共著(コロナ社)

【参考書】

情報学特別演習 II (Seminar on Informatics II)

必修 2単位 2期 教授 不破 勝彦 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

高精度・高性能な産業機械の制御を実現するために、コンピュータを使った制御器が使用されるようになり、離散事象としての取扱が必要不可欠となる。本演習では、現代制御理論の立場から、連続時間制御系を離散時間系に変換して制御するための解析手法について学ぶとともに、できるだけ実例を通してその理解を深める。

【学修到達目標】

- ①離散時間系の安定性を評価することができる。
- ②離散時間系の可到達性、可制御性、可観測性を評価することができる。
- ③安定性、可制御性、可観測性、零点において、連続時間制御系と離散時間制御系との関係を理解している。
- ④サンプリング定理について理解している。

【授業の内容】

- ①離散時間系の安定性(1)
- ②離散時間系の安定性(2)
- ③離散時間系の安定判別法
- ④離散時間系の可到達性
- ⑤離散時間系の可制御性
- ⑥離散時間系の可観測性
- ⑦座標変換と極零相殺
- ⑧連続時間系と離散時間系との関係(極)
- ⑨連続時間系と離散時間系との関係(可制御性)
- ⑩連続時間系と離散時間系との関係(可観測性)
- ⑪連続時間系と離散時間系との関係(零点)
- ⑫離散時間系から連続時間系への変換
- ⑬エリアシング
- ⑭サンプリング定理
- ⑮プレゼンテーション

【成績評価の方法】小テスト(30%)、レポート(50%)、プレゼンテーション(20%)

【教科書】「大学講義シリーズ 基礎デジタル制御」美多勉・原辰次・近藤良 共著(コロナ社)

【参考書】

情報学特別演習Ⅲ (Seminar on Informatics Ⅲ)

必修 2単位 3期 教授 不破 勝彦 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

高精度・高性能な産業機械の制御を実現するために、コンピュータを使った制御器が使用されるようになり、離散事象としての取扱いが必要不可欠となる。本演習では、現代制御理論の立場から、連続時間制御系を離散時間系に変換して制御するための設計手法について学ぶとともに、できるだけ実例を通してその理解を深める。

【学修到達目標】

- ①離散時間系の状態フィードバック制御においてフィードバックゲイン行列を求めることができる。
- ②離散時間系の状態推定器の役割を理解し、その設計をすることができる。
- ③離散時間系における分離原理について理解している。
- ④有限制制御について理解している。

【授業の内容】

- ①離散時間系の状態フィードバック制御(1)
- ②離散時間系の状態フィードバック制御(2)
- ③離散時間系の同次元状態推定器
- ④離散時間系の最小次元状態推定器
- ⑤離散時間系のGopinathのアルゴリズム
- ⑥離散時間系の併合系と分離原理
- ⑦有限整定制御
- ⑧有限整定状態推定器
- ⑨離散時間最適レギュレータ(1)
- ⑩離散時間最適レギュレータ(2)
- ⑪離散時間最適レギュレータの根軌跡
- ⑫離散時間系のサーボ特性
- ⑬内部モデル原理とロバスト性
- ⑭離散時間系の型理論
- ⑮プレゼンテーション

【成績評価の方法】 小テスト(40%)、レポート(40%)、プレゼンテーション(20%)

【教科書】「大学講義シリーズ 基礎デジタル制御」美多勉・原辰次・近藤良 共著(コロナ社)

【参考書】

情報学特別演習Ⅳ (Seminar on Informatics Ⅳ)

必修 2単位 4期 教授 不破 勝彦 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

情報学特別演習ⅠⅡⅢを通じて習得した制御系設計法を適用して、独自に設定した制御仕様を満足するような制御系を設計し、数値シミュレーションを通じて制御性能を評価するまでを行なう。

【学修到達目標】

- ①制御対象のモデリングを通じて、状態方程式を求めることができる。
- ②制御対象の安定性、可制御性、可観測性を評価することができる。
- ③状態推定器を併合した状態フィードバック制御系を構築することができる。
- ④制御性能を評価し、プレゼンテーションすることができる。

【授業の内容】

- ①制御対象の調査(1)
- ②制御対象の調査(2)
- ③制御仕様の設定
- ④制御対象のモデル化(1)
- ⑤制御対象のモデル化(2)
- ⑥可制御性・可観測性・安定性の評価
- ⑦状態フィードバック制御系設計(1)
- ⑧状態フィードバック制御系設計(2)
- ⑨状態フィードバック制御系設計(3)
- ⑩状態推定器設計(1)
- ⑪状態推定器設計(2)
- ⑫併合系の構成
- ⑬数値シミュレーション
- ⑭制御性能評価
- ⑮プレゼンテーション

【成績評価の方法】 演習取組状況(20%)、制御系設計レポート(50%)、プレゼンテーション(30%)

【教科書】「大学講義シリーズ 基礎デジタル制御」美多勉・原辰次・近藤良 共著(コロナ社)

【参考書】

情報学特別演習Ⅰ (Seminar on Informatics Ⅰ)

必修 2単位 1期 教授 朝倉 宏一 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

ネットワークを駆使した新しい情報システムの開発のためには、計算機技術、ネットワーク技術、ソフトウェア技術に関する基礎的な課題の理解が重要である。本演習では、無線ネットワーク技術における基礎的な項目について輪講形式で学習する。

【学修到達目標】

- ①無線ネットワーク構築のための課題について説明できる
- ②移動通信における課題について説明できる。
- ③無線センサ・ネットワークについて説明できる。
- ④様々なルーティング・プロトコルの特徴について説明できる

【授業の内容】

- ① イントロダクション
- ② ネットワークの基礎
- ③ 無線ネットワーク (1)
- ④ 無線ネットワーク (2)
- ⑤ 無線ネットワーク (3)
- ⑥ 移動通信 (1)
- ⑦ 移動通信 (2)
- ⑧ 移動通信 (3)
- ⑨ 無線センサ・ネットワーク (1)
- ⑩ 無線センサ・ネットワーク (2)
- ⑪ 無線センサ・ネットワーク (3)
- ⑫ ルーティング・プロトコル (1)
- ⑬ ルーティング・プロトコル (2)
- ⑭ ルーティング・プロトコル (3)
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】プレゼンテーション (40%)，議論・発言内容 (60%) で評価します。

【教科書】適宜資料を配布します。

【参考書】適宜資料を配布します。

情報学特別演習Ⅱ (Seminar on Informatics Ⅱ)

必修 2単位 2期 教授 朝倉 宏一 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

ネットワークを駆使した新しい情報システムの開発のためには、計算機技術、ネットワーク技術、ソフトウェア技術に関する基礎的な課題の理解が重要である。本演習では、人工知能における深層学習と群知能に関する基礎的な項目について輪講形式で学習する。

【学修到達目標】

- ①ニューラル・ネットワークについて説明できる
- ②深層学習で用いるネットワーク構成の特徴について説明できる
- ③庵と・コロニー・システムの特徴について説明できる
- ④粒子群最適化の特徴について説明できる

【授業の内容】

- ① イントロダクション
- ② 人工知能の基礎
- ③ 深層学習 (1)
- ④ 深層学習 (2)
- ⑤ 深層学習 (3)
- ⑥ 深層学習を用いた動画処理 (1)
- ⑦ 深層学習を用いた動画処理 (2)
- ⑧ 群知能の基礎
- ⑨ アント・コロニー・システム (1)
- ⑩ アント・コロニー・システム (2)
- ⑪ アント・コロニー・システム (3)
- ⑫ 粒子群最適化 (1)
- ⑬ 粒子群最適化 (2)
- ⑭ 粒子群最適化 (3)
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】プレゼンテーション (40%)，議論・発言内容 (60%) で評価します。

【教科書】適宜資料を配布します。

【参考書】適宜資料を配布します。

情報学特別演習Ⅲ (Seminar on Informatics Ⅲ)

必修 2 単位 3 期 教授 朝倉 宏一 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

ネットワークを駆使した新しい情報システムの開発のためには、計算機技術、ネットワーク技術、ソフトウェア技術に関する最先端のトピックの理解が重要である。本演習では、上記技術の先端的な話題について輪講形式で学習する。

【学修到達目標】

- ① 基本ソフトウェアの役割について説明できる
- ② 並列処理と分散処理の違い・特徴について説明できる
- ③ ソフトウェア・エージェントについて説明できる

【授業の内容】

- ① インTRODクシヨN
- ② 基本ソフトウェアの基礎
- ③ 並列・分散処理技術 (1)
- ④ 並列・分散処理技術 (2)
- ⑤ 並列・分散処理技術 (3)
- ⑥ 並列・分散処理技術 (4)
- ⑦ 並列・分散処理技術 (5)
- ⑧ 並列・分散処理技術 (6)
- ⑨ エージェント技術 (1)
- ⑩ エージェント技術 (2)
- ⑪ エージェント技術 (3)
- ⑫ エージェント技術 (4)
- ⑬ エージェント技術 (5)
- ⑭ エージェント技術 (6)
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】プレゼンテーション (40%) , 議論・発言内容 (60%) で評価します。

【教科書】適宜資料を配布します。

【参考書】適宜資料を配布します。

情報学特別演習Ⅳ (Seminar on Informatics Ⅳ)

必修 2 単位 4 期 教授 朝倉 宏一 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【授業の概要】

ネットワークを駆使した新しい情報システムの開発のためには、計算機技術、ネットワーク技術、ソフトウェア技術に関する最先端のトピックの理解が重要である。本演習では「情報学特別演習 III」に引き続き、上記技術の先端的な話題について輪講形式で学習する。

【学修到達目標】

- ① 仮想化技術について説明できる
- ② SDN について説明できる
- ③ エージェント・シミュレーションの特徴について説明できる

【授業の内容】

- ① インTRODクシヨN
- ② 仮想化技術の基礎
- ③ 仮想化ソフトウェア (1)
- ④ 仮想化ソフトウェア (2)
- ⑤ 仮想化ソフトウェア (3)
- ⑥ 仮想化ソフトウェア (4)
- ⑦ ネットワークの仮想化 (1)
- ⑧ ネットワークの仮想化 (2)
- ⑨ ネットワークの仮想化 (3)
- ⑩ コンピュータ・シミュレーションの基礎
- ⑪ エージェント・シミュレーション (1)
- ⑫ エージェント・シミュレーション (2)
- ⑬ エージェント・シミュレーション (3)
- ⑭ エージェント・シミュレーション (4)
- ⑮ まとめ

【成績評価の方法】プレゼンテーション (40%) , 議論・発言内容 (60%) で評価します。

【教科書】適宜資料を配布します。

【参考書】適宜資料を配布します。

情報学特別演習 I (Seminar on Informatics I)

必修 2単位 1期 教授 横山 弥生 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

造形デザインの基盤領域分野である「構成」について深めて行く。構成とは、造形における形態、構造、色彩、素材、質感などの組み立てを計画的に利用して作品を作り上げていく学問であり、方法である。構成＝構図やレイアウトと思われがちであるが、形態、色彩、素材など全てを含んだものである。

【学修到達目標】

- ① 形態、構造について理解し、制作に応用できる。
- ② 色彩について理解し、制作に応用できる。
- ③ 素材や質感について理解し、制作に応用できる。
- ④ レイアウトについて理解し、制作に応用できる。

【授業の内容】

- ① 既存研究の選定と調査
- ② 既存研究の選定と調査
- ③ 研究と制作1
- ④ 研究と制作1
- ⑤ 研究と制作1のまとめ
- ⑥ 研究と制作2
- ⑦ 研究と制作2
- ⑧ 研究と制作2のまとめ
- ⑨ 研究と制作3
- ⑩ 研究と制作3
- ⑪ 研究と制作3のまとめ
- ⑫ 研究と制作4
- ⑬ 研究と制作4
- ⑭ 研究と制作4のまとめ
- ⑮ 成果発表と議論

【成績評価の方法】 研究の取り組み状況(35%)、概要プレゼンテーション(35%)、成果発表(30%)

【教科書】 なし

【参考書】 随時指定する

情報学特別演習 II (Seminar on Informatics II)

必修 2単位 2期 教授 横山 弥生 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

情報学特別演習 I での基盤研究から応用に入っていく。「コト」と「モノ」のデザイン領域を調査し、まとめ、既存研究との関係を深めながら発表、議論を行う。

【学修到達目標】

- ① モノのデザインを理解し、まとめることができる。
- ② コトのデザインを理解し、まとめることができる。
- ③ モノとコトのデザインの関係性と相違を理解し、研究に生かす。
- ④ 成果発表およびそれに関する議論ができる。

【授業の内容】

- ① デザイン領域調査
- ② デザイン領域調査
- ③ 研究と制作1
- ④ 研究と制作1
- ⑤ 研究と制作1のまとめ
- ⑥ 研究と制作2
- ⑦ 研究と制作2
- ⑧ 研究と制作2のまとめ
- ⑨ 研究と制作3
- ⑩ 研究と制作3
- ⑪ 研究と制作3のまとめ
- ⑫ 研究と制作4
- ⑬ 研究と制作4
- ⑭ 研究と制作4のまとめ
- ⑮ 成果発表と議論

【成績評価の方法】 研究の取り組み状況(35%)、概要プレゼンテーション(35%)、成果発表(30%)

【教科書】 なし

【参考書】 随時指定する

情報学特別演習Ⅲ (Seminar on Informatics Ⅲ)

必修 2単位 3期 教授 横山 弥生 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

「知のアート&デザイン」「美のアート&デザイン」両者の領域を調査し、まとめ、既存研究との関係を深めながら発表、議論を行う。

【学修到達目標】

- ① 「知のアート&デザイン」を理解し、まとめることができる。
- ② 「美のアート&デザイン」を理解し、まとめることができる。
- ③ 「知のアート&デザイン」と「美のアート&デザイン」のデザインの関係性と相違を理解し、研究に生かす。
- ④ 成果発表およびそれに関する議論ができる。

【授業の内容】

- ① デザイン領域調査
- ② デザイン領域調査
- ③ 研究と制作1
- ④ 研究と制作1
- ⑤ 研究と制作1のまとめ
- ⑥ 研究と制作2
- ⑦ 研究と制作2
- ⑧ 研究と制作2のまとめ
- ⑨ 研究と制作3
- ⑩ 研究と制作3
- ⑪ 研究と制作3のまとめ
- ⑫ 研究と制作4
- ⑬ 研究と制作4
- ⑭ 研究と制作4のまとめ
- ⑮ 成果発表と議論

【成績評価の方法】 研究の取り組み状況(35%)、概要プレゼンテーション(35%)、成果発表(30%)

【教科書】 なし

【参考書】 随時指定する

情報学特別演習Ⅳ (Seminar on Informatics Ⅳ)

必修 2単位 4期 教授 横山 弥生 授業時間外の学修 60時間(毎週4時間)

【授業の概要】

情報学特別演習ⅠⅡⅢを通じて修得した内容に各自のテーマを明確にし、研究作品が完成するように進める。

また、学外における多くの展示について私見を述べ、発表することができるまでを行う。

【学修到達目標】

- ① テーマを明確にし、計画を立てることができる
- ② 作品を細部迄丁寧に作り込むことができるように計画立てられる。
- ③ テーマをまとめ、プレゼンテーションできる。
- ④ 多くの展示会のテーマをまとめ、評価をプレゼンテーションすることができる。

【授業の内容】

- ① テーマ研究
- ② 展示会のまとめ
- ③ 研究と制作1
- ④ 研究と制作1
- ⑤ 研究と制作1
- ⑥ 研究と制作1
- ⑦ 研究と制作1
- ⑧ 研究と制作1のまとめ
- ⑨ 研究と制作2
- ⑩ 研究と制作2
- ⑪ 研究と制作2
- ⑫ 研究と制作2
- ⑬ 研究と制作2
- ⑭ 研究と制作2のまとめ
- ⑮ 成果発表と議論

【成績評価の方法】 研究の取り組み状況(35%)、プレゼンテーション(35%)、成果発表(30%)

【教科書】 なし

【参考書】 随時指定する

<情報学専攻：特別研究>

情報学特別研究 I ～IV (Research in Informatics I ～IV)

必修 1.5 単位 1 ～ 4 期

准教授 宮島 千代美

授業時間外の学修時間 45 時間 (毎週 3 時間)

【授業の概要】

ドライバの運転行動の理解や運転の危険性の評価等、運転行動情報処理に関する研究を 2 年間通して実施する。主に機械学習や統計分析手法に基づき、様々な運転行動信号を分析、情報を統合し、運転状況やドライバの状態を理解する研究を行う。

【学修到達目標】

- ① 運転行動情報を機械学習や統計分析手法を用いて分析・統合・理解することができる。
- ② 研究における課題を自発的に見つけ、課題に取り組むことができる。

【授業の内容】

運転中に観測される様々なデータを機械学習や統計的手法を用いて分析・統合することで、ドライバの運転行動や運転状況を理解する研究に取り組む。例えば次のような研究課題が考えられる。

- ・ 運転行動の個人性に関する研究
- ・ 運転の安全性評価に関する研究
- ・ 運転状況の分類や危険運転状況検出に関する研究

これらについて、より具体的な事例を取り上げ、研究テーマとする。また、関連研究の調査の発表や、研究内容および成果の報告を定期的に行う。

【成績評価の方法】 研究の実施状況を総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

<情報学専攻：特別研究>

情報学特別研究 I ～IV (Research in Informatics I ～IV)

必修 1.5 単位 1 ～ 4 期

教授 不破 勝彦

授業時間外の学修時間 45 時間 (毎週 3 時間)

【授業の概要】

外乱抑制制御や振動抑制制御などを主体とした制御系設計法の開発を目指す。具体的には、制御対象ならびに外乱のモデル化を通じて制御系設計に必要な条件を確認し、これらの動特性を通じて外乱や振動を抑制する方策を研究する。

【学修到達目標】

- ① 文献の調査を通じて、問題設定を行なうことができる。
- ② 問題に応じた制御仕様を与えて、制御器を求めることができる。
- ③ 制御性能を評価し、得られた結果を論文としてまとめ、プレゼンテーションすることができる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況を総合的に判断する。

【教科書】

【参考書】

情報学特別研究 I ～IV (Research in Informatics I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期

教授 朝倉 宏一

授業時間外の学修時間 45 時間 (毎週 3 時間)

【授業の概要】

ネットワークを駆使した新しい情報システムの構築を目指し、ネットワーク技術、並列処理技術、分散処理技術に関する研究・開発を行う。

【学修到達目標】

- ①アドホック・ネットワークの有効性を説明できる
- ②プログラミング学習支援システムの有効性を説明できる
- ③災害地シミュレーションの有効性を説明できる
- ④深層学習の有効性を説明できる

【授業の内容】

以下の研究テーマに関して、文献調査により研究分野の最新動向を把握し、研究グループ内や指導教員との真摯な討論、議論を通じて、研究開発手法を習得する。また、それに基づき、新しい情報システムを開発する。

- ・ アドホック・ネットワークを用いた災害地情報共有システム
- ・ 無線・ネットワーク・プロトコル評価のための、仮想災害地シミュレーション
- ・ 無線センサ・ネットワークにおける最適ルーティング手法
- ・ プログラミング学習支援のためのオンライン・ジャッジ・システム
- ・ VR システムを用いた避難教育システム
- ・ 深層学習を利用した折り紙支援システム

【成績評価の方法】 研究の実施状況を総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

情報学特別研究 I ～IV (Research in Informatics I ～IV)

必修 1.5 単位 1～4 期

講師 原田 昌明

授業時間外の学修 45 時間 (毎週 3 時間)

【授業の概要】

アート表現から実用性に主眼をおいたものまで映像表現のあり方は多岐に渡っている。

それらを各々のテーマに沿って調査、分析をおこない、

より効果的な映像媒体のあり方について研究する。

【学修到達目標】

- ① 映像メディアの特性が理解できる。
- ② 映像メディアの効用について調査、検証することができる。
- ③ 映像メディアの特性を活かした表現手法を用いることができる。

【成績評価の方法】 研究の実施状況を総合的に評価する。

【教科書】

【参考書】

<全研究科共通科目>

学外研修 (Internship)

選択 2単位 1(2)期 専攻長 授業時間外の学修 60 時間(毎週 4 時間)

【実習の概要】

企業または官公庁において、実務に関する研修を行う。実務には、生産、設計・監理、調査計画等広範な分野があり、希望する分野で最適な研修先を選定する。本学のキャリアセンターでは、研修先の事前登録制度があり密接な連携をとるようにする。

【学修到達目標】

- ①実務の研修を通して、情報関連業界の内容を理解できる。
- ②実務の研修を通して、自らの適性を判断できる。
- ③実務経験を将来のキャリア形成、職業選択に生かすことができる。

【授業の内容】

実務の理解とともに自身の方向付けやスキルアップを目的とし、将来をより良くすることに役立つように受け入れ先と研修内容を十分協議して計画する。

実際の学外研修は以下の3段階で行う。

- ・受け入れ先との事前研修
- ・受け入れ先での学外研修
- ・学外研修報告

【成績評価の方法】 受け入れ企業等からの評価、研修報告書、研修報告

【教科書】

【参考書】

ベンチャービジネス特論 (Venture Business)

授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

選択 1単位 1期 非常勤講師 武藤 郷史

【授業の概要】

我が国のイノベーションを牽引するベンチャービジネスの必要性を理解するとともに、実例やワークを元にベンチャービジネス成功のエッセンスを学ぶ。

- (1)我が国の経済環境から、ベンチャービジネスおよびベンチャー支援政策のメガトレンドを理解する。
- (2)その上で、成功するベンチャー起業家の特性を把握し、どのようにしてビジネスモデルを構築していくかを考える。
- (3)ベンチャーマネジメントは一般企業と特性が異なり、また成長過程ごとに課題が変化する。そのポイントを考察する。
- (4)ベンチャービジネス成功のためのエッセンスを理解し、ビジネスプランの書き方を学ぶ。

【学修到達目標】

- ①ベンチャー戦略の概要を理解し、戦略設計の基本フレームを使った事業コンセプト設計を実践できる
- ②基本的なビジネスプランの骨子が描けるようになる

【成績評価の方法】 講義での討論(30%)とレポート評価(70%)

【教科書】 資料配布

【参考書】

【授業の内容】

- ① 我が国におけるベンチャー企業の必要性
 - ・我が国経済におけるベンチャービジネスの役割
- ② イノベーションをおこすベンチャー企業
 - ・ベンチャービジネスがおこすイノベーションとは。
- ③ 成功するベンチャー起業家の特性
 - ・成功する起業家のエッセンス
- ④ ベンチャーマネジメントの留意点
 - ・ベンチャーマネジメントの特性
 - ・成長ステージごとの経営のポイント
- ⑤ ビジネスプランの役割
 - ・ベンチャー戦略とビジネスプラン
- ⑥ ビジネスプランの書き方
 - ・ビジネスプランの展開方法
- ⑦ 発表

<全研究科共通科目>

経済学特論 (Economics)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 八木エドワード 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【授業の概要】

バブル景気とは、1986年12月から1991年2月までの51か月間、日本で起こった資産価格の上昇や好景気のことである。バブル崩壊後のいわゆる「失われた10年」は「失われた20年」となり、今現在は「失われた30年」の途中である。人口減少、少子化、超高齢化社会の課題を考慮すると、「失われた100年」となる可能性がある。25年以上に渡り低迷する結果を招いた、根本的な問題点、解決策は何か。

【学修到達目標】

学生達が来るべき就職活動や卒業後の人生にどう対応すれば良いかについて役立つ知識を得ている。

【授業の内容】

7回の授業では、日本経済の推移、グローバル化、アジアの時代(特に中国の躍進と中間層・富裕層の拡大)、東海地区の経済(トヨタ依存症)等を検討し、「MBA研究方法」で行う：

1. 課題を認識する
2. 問題点などを指摘(定義)する
3. 問題解決を目的とし、仮説を立てる
4. データを収集する
5. 客観的に情報を分析する
6. 妥当性のある結論(提案)を出す

【成績評価の方法】講義での討論参加(70%)、レポート(30%)

【教科書】特になし

【参考書】授業で配布

地球環境科学特論 (Global Environmental Science)

選択 1 単位 1 期 非常勤講師 加藤 俊夫 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【講義の概要】

- (1) 地球が直面している環境問題について、科学の視点から考える。
 - ・「地球環境」の内容と変遷
 - ・「地球環境」の視点から捉えた問題とその解決方法
 - ・「京都議定書～パリ協定」の解説
- (2) 講師が携わっている土木コンサルタントの立場での経験等に基づき、土木(社会資本整備～インフラ整備)に関連する環境を学ぶ。
 - ・災害対策(洪水、地震、液状化、津波、土石流、流木)と環境
 - ・河川改修やダム開発、水力発電開発などの環境への負荷
- (3) 地球環境変化により、世界や日本で近年自然災害が激甚化している。河川・海岸・砂防・港湾・耐震の技術、防災士の立場から、「防災・減災」についての考えや技術を学ぶ。
- (4) 地球環境を、自分の学問分野、将来の職業、自分の生活など、視点の設定をかえて考えることを学ぶ。また、地球規模の環境と身近な環境の関係についても同様に考える。
 - ・上記の視点から捉えた地球環境
 - ・上記の視点から捉えた身近な環境
 - ・日本が直面している環境
- (5) 地球環境を捉える技術的手法の一手法として、技術士部門の総合技術監理手法(リスク管理、リスクマネジメントなど)を学ぶ。
- (6) 技術者が地球環境問題、環境問題についてどのように取り組むことが期待されているかを考える。

【講義の内容】

- ① 地球環境問題の動向(「パリ協定」を題材)
- ② 社会資本整備関係のコンサルタントの立場からの「環境問題」「対応方法や考え方」
- ③ 防災、減災について
- ④ 地球を取りまく環境の実態
- ⑤ リスク管理手法、クライシスマネジメント
- ⑥ 技術倫理観、これからの時代を担う技術者に求められる環境への取り組み方

【学修到達目標】

- ① 環境をフレキシブルに捉える視点の習得
- ② 環境の持つ多面的な視点の習得
- ③ リスクマネジメント、クライシスマネジメントという技術の習得
- ④ 自分の専門以外の研究と交流の意義の発見より新しいアイデアの展開の経験

【成績評価の方法】講義での討論(20%)とレポート評価(80%)

【教科書】配付資料

【参考書】

外国文化特論 (Foreign Culture)

選択 1 単位 2 期 非常勤講師 クレムス メツラー 授業時間外の学修 30 時間(毎週 2 時間)

【講義の概要】

西洋の映像文化を多様な角度から分析・解明する。学生の外国文化への幅を広げる。

文化的要素が人々の生活を形成する際に重要な役割を演じる事の理解度を深める。自分の国の文化に対する新しい展望を提供する。

ヨーロッパと日本で得た経験・知見を織り込んだ講義内容

【学修到達目標】

- ①ヨーロッパ文化の社会、宗教、歴史的な背景を理解することができる。
- ②ヨーロッパの建築様式および美術様式を概説することができる。
- ③現代ドイツの経済や産業の源泉について探ることができる。
- ④日本文化を海外の視点で見ることができる。

【講義の内容】

- ①オリエンテーション、「キリスト教ギリシャ、古代ローマ、キリスト教」、「キリスト教：源泉／歴史／文化的影響、ユダヤ教／イスラム教」
- ②ドイツの日常生活：民族の祭りと風俗慣、食文化、伝統、学制、西ドイツ・東ドイツ、ドイツの方言、新聞、本の見本市、他について
- ③欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィを比べる、その1「古代ギリシアから中世、ルネサンス、バロック」
- ④製品のデザイン史、イギリス産業革命、大量生産性と美、ドイツのデザインの始まり、ポルシェ と フォルクスワーゲン社、「Made in Germany」から「Designed in Germany」へ、バウハウス から アップル まで、他
- ⑤欧米の文化史、歴史の流れの中で、建築、造形芸術、音楽、ファッション、タイポグラフィを比べる、その2「アール・ヌーヴオーからモダン、ポスト・モダン、現在まで」
- ⑥現在のヨーロッパ：「イギリスとヨーロッパ」、「ドイツとフランス」、「北欧」、「ロシアと東ヨーロッパ」、「ギリシャクライシス」、「難民を受け入れる伝統」、他
- ⑦まとめと自由討論
講義の最後は全員で自由討論、意見交換する。
注：外国人留学生が出席する場合には、英語（及ドイツ語）での説明も可能。

【成績評価の方法】 講義での討論(30%)、レポート提出及びショートレクチャー(70%)による総合評価

【教科書】 使用しない

【参考書】 特になし（授業の中で紹介する）

【連絡先】 メール：hello@clemensmetzler.com

諸 規 程 等

奨学生制度

ティーチング・アシスタント（TA）制度

大同大学大学院学則

大同大学学位規程

大同大学大学院学位審査等取扱細則

大同大学大学院研究科履修規程

大同大学大学院研究生規程

大同大学大学院科目等履修生規程

大同大学大学院学部学生の大学院授業科目の早期履修に関する規程

大同大学大学院外国人留学生規程

大同大学大学院特別研究学生規程

大同大学大学院特別聴講学生規程

大同大学大学院入学前の既修得単位の認定に関する規程

大同大学大学院他の大学院における授業科目の履修等に関する規程

大同大学大学院他の大学院等における研究指導に関する規程

大同大学大学院連携大学院教育に関する規程

大同大学学籍異動に関する取扱規程

大同大学大学院一般奨学生規程

大同大学大学院一般奨学生規程施行細則

大同大学大学院博士後期課程特別奨学規程

大同大学大学院学生表彰規程

大同大学大学院学生表彰規程実施細則

大同大学学生懲戒規程

大同大学大学院日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考規程

大同大学大学院日本学生支援機構奨学金

返還免除候補者選考委員会規程

大同大学提携教育ローン規程

大同大学提携教育ローン利子補給奨学規程

大同大学提携教育ローン利子補給奨学細則

大同大学大学院論文博士の学位授与申請書類

(7)外国語の能力に関する申告書) についての申合せ
大同大学大学院論文博士の申請資格、試験及び業績についての申合せ
大同大学大学院課程博士の業績についての申し合せ

奨学生制度

経済的負担を少しでも軽くし、研究に専念することができるよう、次の制度が用意されている。

1. 日本学生支援機構奨学生

(1) 条 件

学業・人物ともに優秀かつ健康であって、経済的理由のため修学が困難であること。
外国人留学生は、対象とならない。

(2) 出 願

「出願説明会」開催時に「願書」等を配布するので、出席し指定日までに出願してください。
「出願説明会」開催時期は、原則として4月です。詳細は、掲示板で確認してください。

(3) 貸与月額、返還等

別表1のとおり。

2. 学内一般奨学生

(1) 条 件

日本学生支援機構に準じます。加えて日本学生支援機構奨学生ならびにその他諸団体の奨学生との重複受給はできません。ただし、博士後期課程においては、特別の事情があると認めた場合はこの限りではありません。

(2) 出 願

日本学生支援機構に準じます。

(3) 貸与月額、返還等

別表2のとおり。

3. その他の奨学生

(1) 種 類

地方自治体や民間育英事業団体等によるものがあります。

(2) 出願等

大学を経由せずに直接募集するものが多いです。居住する地域の教育委員会またはそれぞれの育英団体へ問い合わせてください。

大学あてに募集案内のあったものについては、掲示でお知らせします。

日本学生支援機構奨学金や、他の奨学金との重複受給が認められない場合があるので注意してください。

日本学生支援機構奨学生制度種別一覧（別表1）

種 別	貸 与 月 額	利子・利率	返還期間
第一種	修士：50,000円・88,000円から選択 博士：80,000円・122,000円から選択	無利子	最長20年間
第二種	5万円・8万円・10万円・13万円・15万円から選択	有利子 (年利上限3%)	

大同大学大学院奨学生制度種別一覧（別表2）

種 別	免除・貸与金額	免除・貸与期間	返還期間
一般奨学生	修士・博士 月額60,000円貸与	採用時から最短修業年限 (無利子)	最長10年間 (修士・博士ともに貸与を うけた場合は15年間)
博士後期課程 特別奨学生	学生納付金の年額から 200,000円を免除	採用時から最短修業年限	返還の義務なし

ティーチング・アシスタント（TA）制度

本学の教育業務の遂行を補助し、また大学院生の教育訓練の実施を行うために、ティーチング・アシスタント（TA）制度が整えられている。

1. 業務

- (1) 学部の講義・実験・実習・演習等の授業の補助業務（授業時間内業務）を担当することができる。
- (2) 教育上必要ある場合は次の業務を担当することができる。
 - ア. 授業実施に関連する前準備、後始末等の業務及び学科長等が命ずる業務
 - イ. 学部の各定期試験の監督業務
 - ウ. 当該学科等の実験・実習等、設備・機器の維持・管理のための補助業務
- (3) 勤務時間中は、当該学科目を担当する教員及び当該学科長等の直接の監督下で業務を行う。
- (4) 職務上知り得た秘密事項を守秘する義務を要する。

2. 勤務形態

- (1) 1日の勤務時間（拘束時間）は、当該大学院学生の学業に支障をきたさないよう配慮すること。
- (2) 大学院学生が担当できる1週当たりのコマ数は、次のとおりとする。
 - ア. 博士後期課程大学院学生は、1人1週4コマの範囲内とする。
 - イ. 修士課程大学院学生は、1人1週3コマの範囲内とする。
- (3) コマ数とは、授業科目1時限（90分）分をいう。

3. 採用要件

- (1) 本学大学院に在籍していること。（但し、教育上特に必要と研究科長が認めた場合は、本学以外の大学院学生を採用することができる。）
- (2) 採用は、6カ月以上1年以内の期間とする。（但し、大学院在学中に限りその期間を更新することができる。）
- (3) 採用時期は、原則として4月及び10月とし、採用手続きは3月末及び9月末迄に完了していること。
- (4) 申請方法は、各学科等で採用が必要の場合には、予め当該大学院専攻長及び研究指導担当教員の内諾を受け研究科長に申請する。
- (5) 本学以外の大学院学生の申請については、当該所属大学の所属長（研究科長を含む）の内諾を経て研究科長に申請する。

4. 採用の取り消し

- (1) 学業不振若しくは、業務を著しく怠ったとき。
- (2) 正当な理由なしに長期間勤務しなかったとき。
- (3) 研究科長が不適格と判断したとき。

5. 給与

- (1) 週1コマ（90分）月額10,000円
- (2) 交通費、賞与及び退職金は支給しない。

大同大学大学院学則

平成 2 年 4 月 1 日制定

平成 30 年 4 月 1 日改正

第 1 章 総則

(趣旨)

第 1 条 大同大学学則第 4 条第 2 項の規定に基づく、大同大学大学院(以下「本大学院」という。)に関する事項については、この学則の定めるところによる。

(目的)

第 2 条 本大学院は、大同大学の目的及び使命に則り学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめて、文化の進展に寄与することを目的とする。

第 3 条 削除

(教育内容等の改善のための組織的な研修等)

第 3 条の 2 本大学院は、授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を行う。

第 2 章 組織

(研究科)

第 4 条 本大学院に、次の研究科を置く。

工学研究科

情報学研究科

(研究科の目的)

第 4 条の 2 本大学院の工学研究科は、科学の応用である工学を教授研究し、産業を基盤とする人間社会に科学技術面から貢献する優れた人材を育成することを目的とする。

2 本大学院の情報学研究科は、情報の科学とその広い応用にかかわる情報学を教授研究し、情報社会に貢献する優れた人物を育成することを目的とする。

(課程)

第 5 条 工学研究科の課程は、修士課程及び博士課程後期 3 年の課程(以下「博士後期課程」という。)とする。

2 情報学研究科の課程は、修士課程とする。

(課程の目的)

第 5 条の 2 修士課程は、広い視野に立つて精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とする。

2 博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するために必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。

(専攻)

第 6 条 各研究科に次の専攻を置く。

研究科	修士課程	博士後期課程
工学研究科	機械工学専攻	材料・環境工学専攻
	電気・電子工学専攻	
	建築学専攻	
	都市環境デザイン学専攻	
情報学研究科	情報学専攻	

第3章 修業年限及び収容定員

(修業年限、在学年限)

第7条 修士課程の標準修業年限は2年とし、在学年限は4年とする。

2 博士後期課程の標準修業年限は3年とし、在学年限は6年とする。

(収容定員)

第8条 各研究科の収容定員は、次のとおりとする。

			収容定員 (入学定員)	
工学研究科	修士課程	機械工学専攻	16名	(8名)
	修士課程	電気・電子工学専攻	12名	(6名)
	修士課程	建築学専攻	10名	(5名)
	修士課程	都市環境デザイン学専攻	10名	(5名)
		計	48名	(24名)
	博士後期課程	材料・環境工学専攻	9名	(3名)
情報学研究科	修士課程	情報学専攻	12名	(6名)

第4章 学年、学期及び休業日

(学年)

第9条 学年は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(学期及び授業期間)

第10条 学年を分けて、次の2学期とする。

前期	4月1日から9月30日まで
後期	10月1日から翌年3月31日まで

2 前項の規定にかかわらず、必要に応じて学期の期間を変更することがある。

3 1年間の授業を行う期間は、定期試験等の期間を含め35週にわたることを原則とする。

4 各授業科目の授業は、15週にわたる期間を単位として行う。ただし、教育上特別の必要があると認められる場合には、この期間により短い特定の期間において授業を行うことができる。

(休業日)

第11条 休業日は、次のとおりとする。

- (1) 日曜日
- (2) 国民の祝日に関する法律に規定する休日
- (3) 開学記念日5月10日
- (4) 春季休業3月21日から4月2日まで
- (5) 夏季休業8月1日から9月30日まで

- (6) 冬季休業 12 月 21 日から 1 月 9 日まで
- 2 前項の規定にかかわらず、特に必要な場合には休業日に授業を行うことがある。
- 3 臨時の休業日は、その都度これを定める。

第 5 章 教育課程

(教育課程の編成方針)

第 12 条 本大学院は、研究科及び専攻の定める教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設するとともに学位論文の作成等に対する指導(以下「研究指導」という。)の計画を策定し、体系的に教育課程を編成するものとする。

2 教育課程の編成に当たっては、専攻分野に関する高度の専門的知識及び能力を修得させるとともに、当該専攻分野に関連する分野の基礎的素養を涵養するよう適切に配慮しなければならない。

(授業及び研究指導)

第 13 条 本大学院の教育は、授業科目の授業及び研究指導によつて行うものとする。

(研究指導及び授業担当)

第 13 条の 2 研究指導及び授業は、大学院を担当する資格を有する教員が行うものとする。

2 大学院教授会の審議を経て、学長が教育上有益と認めたときは、他の大学院又は研究所等との協議に基づき、本大学院の学生が当該大学院又は研究所等において課程修了に必要な研究指導を受けることを認めることができる。ただし、修士課程の学生の場合は、研究指導を受ける期間は、1 年を超えないものとする。

3 前項の規定は、本大学院の学生が外国の大学院又は研究所等において研究指導を受けるため留学する場合に準用する。

(教育方法の特例)

第 14 条 本大学院において、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行うことができる。

(連携大学院教育)

第 14 条の 2 本大学院において、教育研究上特別の必要があると認めたときは、他の研究所等との協議に基づき、当該研究所等の研究者を大学院客員教授に委嘱する等の方法により、学生が当該研究所等において研究指導を受けること(連携大学院教育と称する。)を認めることができる。

(授業科目及び単位数)

第 15 条 各専攻の授業科目及び単位数は、別表(1)、別表(1)の 2 及び別表(2)に定める。

(単位の計算方法)

第 15 条の 2 各授業科目の単位数は、1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもつて構成することを標準とし、授業の方法に応じ当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して次の基準により単位数を計算する。

- (1) 講義及び演習については、15 時間の授業をもつて 1 単位とする。
- (2) 実験、実習(製図を含む)及び実技については、40 時間の授業をもつて 1 単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、本大学院が定める時間の授業をもつて 1 単位とすることができる。
- (3) 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習(製図を含む)又は実技のうち二以上の方法

の併用により行う場合についてはその組み合わせに応じ、前 2 号に規定する基準を考慮して本大学院が定める時間の授業をもつて 1 単位とする。

2 前項の規定にかかわらず、特別研究については、学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、必要な学修等を考慮して単位数を定める。

(授業の方法)

第 15 条の 3 授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併用により行うものとする。

2 前項の授業を、外国において履修させることができる。

3 第 1 項の授業は、文部科学大臣が別に定めるところにより、授業の一部を、校舎及び附属施設以外の場所で行うことができる。

(成績評価基準等の明示等)

第 15 条の 4 授業及び研究指導の方法及び内容並びに 1 年間の授業及び研究指導の計画を、学生に対してあらかじめ明示するものとする。

2 学修の成果及び学位論文に係る評価並びに修了の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。

(教職課程)

第 16 条 本大学院に教育職員免許法に基づく教員の免許状授与の資格を取得するための課程を置く。

2 工学研究科において、教育職員免許法に基づいて所定の単位を修得し、所要の資格を取得した者が申請することができる免許状の種類及び免許教科は、次のとおりとする。

機械工学専攻	高等学校教諭専修免許状	工業
電気・電子工学専攻	高等学校教諭専修免許状	工業
建築学専攻	高等学校教諭専修免許状	工業
都市環境デザイン学専攻	高等学校教諭専修免許状	工業

3 情報学研究科において、教育職員免許法に基づいて所定の単位を修得し、所要の資格を取得した者が申請することができる免許状の種類及び免許教科は、次のとおりとする。

情報学専攻	高等学校教諭専修免許状	情報
-------	-------------	----

第 6 章 履修の方法及び課程の修了要件等

(履修の方法)

第 17 条 授業科目の履修の方法に関し必要な事項は、別に定める。

(単位の授与及び成績の評価)

第 17 条の 2 授業科目を履修した学生に対しては、学修状態を審査して、単位を与えるものとする。ただし、第 15 条の 2 第 2 項の授業科目については、本大学院が定める適切な方法により学修の成果を評価して単位を与えることができる。

2 学修状態の審査は、筆記若しくは口頭試験又は研究報告によるものとし、毎学期又は学年末に行う。

3 成績は、優、良、可、不可の評語をもつて評価し、優、良、可を合格とし、不可は不合格とする。

4 学位論文及び試験並びに博士後期課程における特別研究の成績は、合、否とし、合を合格、否を不合格とする。

5 第1項の規定にかかわらず、博士後期課程における特別研究にあつては、単位を付与しない。

(論文審査及び試験)

第17条の3 論文の審査及び試験については、大学院教授会が審査委員会を組織し、その審査報告に基づいて、学長が決定する。

(他の大学院における授業科目の履修等)

第18条 大学院教授会の審議を経て、学長が教育上有益として認めたものは、学生が本大学院に入学した後に他の大学院との協議に基づき履修した授業科目について修得した単位のうち、10単位を超えない範囲で本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

2 前項の規定は、本大学院の学生が外国の大学院に留学する場合に準用する。

(入学前の既修得単位の認定)

第19条 学生が本大学院に入学する前に大学院において履修した授業科目について修得した単位(大学院科目等履修生として修得した単位を含む。)のうち、大学院教授会の審議を経て、学長が教育上有益として認めたものは、本大学院に入学した後の本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

2 前項により、修得したものとみなす単位数は、転入学の場合を除き、本大学院において修得した単位以外のものについては、前条第1項(同条第2項において準用する場合を含む。)により修得したものとみなす単位数と合わせて10単位を超えないものとする。

(修士課程の修了要件)

第20条 修士課程の修了の要件は、大学院に2年以上在学し、専攻の授業科目について、30単位を修得し、かつ必要な研究指導(学位論文の作成等に関する指導をいう。以下同じ。)を受けたうえ、本大学院の修士課程の目的に応じ、本大学院の行う修士論文又は特定の課題についての研究の成果の審査及び試験に合格することを必要とする。ただし、在学期間に関しては、大学院教授会の審議を経て、学長が特に優れた研究業績を上げた者と認めた場合には、1年以上在学すれば足りる。

(博士後期課程の修了要件)

第21条 修士課程を修了の上、博士後期課程に入学した場合の博士後期課程の修了の要件は、博士後期課程に3年以上在学し、専攻の授業科目について、8単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえ、大学院の行う博士論文の審査及び試験に合格することを必要とする。ただし、在学期間に関しては、大学院教授会の審議を経て、学長が特に優れた研究業績を上げた者と認めた場合には、大学院に3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては当該2年の在学期間を含む。)以上在学すれば足りる。

2 前条ただし書の規定による在学期間をもつて修士課程を修了した者の博士後期課程の修了の要件については、前項中「3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては当該2年の在学期間を含む。)」とあるのは、「3年(修士課程における在学期間を含む。)」と読み替えて、同項の規定を適用する。

3 第25条第2号ないし第4号により博士後期課程に入学した場合の博士後期課程の修了の要件

は、第 1 項を準用する。ただし、在学期間に関しては、大学院教授会の審議を経て、学長が特に優れた研究業績を上げた者と認めた場合には、博士後期課程に 1 年以上在学すれば足りる。

(学位の授与)

第 22 条 修士課程を修了した者には、修士の学位を、博士後期課程を修了した者には、博士の学位を授与する。

2 本大学院の博士後期課程を経ないで論文を提出して博士の学位を申請した者については、論文の審査及び試験に合格し、かつ、博士後期課程を修了した者と同等以上の学力を有することを確認された者に博士の学位を授与する。

3 学位授与に関する事項は、別に定める。

第 7 章 入学・学籍の異動

(入学時期)

第 23 条 入学の時期は学年の始めとする。ただし、第 45 条に規定する外国人留学生及び社会人の入学の時期については、学期の始めとすることができる。

(修士課程の入学資格)

第 24 条 本大学院修士課程に入学することのできる者は、次の各号の一に該当する者とする。

- (1) 学校教育法第 83 条に定める大学を卒業した者
- (2) 学校教育法第 104 条第 4 項の規定により学士の学位を授与された者
- (3) 外国において、学校教育における 16 年の課程を修了した者
- (4) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における 16 年の課程を修了した者
- (5) 我が国において、外国の大学の課程(その修了者が当該外国の学校教育における 16 年の課程を修了したとされるものに限る。)を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であつて、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了した者
- (6) 専修学校の専門課程(修業年限が 4 年以上であることその他の文部科学大臣が別に定める基準を満たすものに限る。)で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者
- (7) 文部科学大臣の指定した者
- (8) 大学に 3 年以上在学し、本大学院において、所定の単位を優れた成績をもつて修得したものと認められた者
- (9) 本大学院において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、22 歳に達した者

(博士後期課程の入学資格)

第 25 条 本大学院博士後期課程に入学することのできる者は、次の各号の一に該当する者とする。

- (1) 修士の学位又は学校教育法第 104 条の規定により専門職大学院の課程を修了した者に授与される学位(以下「専門職学位」という。)を有する者
- (2) 外国において修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者
- (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門

職学位に相当する学位を授与された者

(4) 我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者

(5) 文部科学大臣の指定した者

(6) 本大学院において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者で、24 歳に達した者

(入学志願の手続)

第 26 条 入学志願者は、指定の期間内に入学検定料を納付のうえ、入学願書等、所定の書類を提出しなければならない。

(入学試験)

第 27 条 入学志願者に対しては、入学試験を行い合格者を決定する。

2 入学試験に関する事項は、別に定める。

(入学手続及び入学許可)

第 28 条 前条の入学試験の結果に基づき、合格通知を受けた者で、本学に入学しようとする者は、指定の期間内に入学金、授業料等を納付のうえ、所定の書類を提出しなければならない。

2 学長は、前項の手続きを完了した者に入学を許可する。

(再入学)

第 29 条 本大学院を退学した者で、同一専攻に再び入学を願い出たときは、選考のうえ入学を許可することがある。ただし、懲戒による退学者の再入学は許可しない。

(転入学)

第 30 条 他の大学院の学生で、本大学院に転入学を願い出た者があるときは、選考のうえ相当年次に入学を許可することがある。

2 前項の規定により、入学を許可された者の既に履修した授業科目及び単位数の取り扱い並びに在学年数については、大学院教授会の審議を経て、学長がこれを決定する。

(転学)

第 31 条 学生が他の大学院に転学しようとするときは、転学願を提出し、学長の許可を得て転学することができる。

(留学)

第 32 条 学生が第 18 条第 2 項又は第 13 条の 2 第 3 項の規定に基づき留学しようとするときは、学長に願い出て、その許可を受けなければならない。

(休学)

第 33 条 病気その他やむを得ない事由により修学できない場合は、休学願を提出し、学長の許可を得て休学することができる。

2 休学期間は、通算して 2 年を超えてはならない。

3 休学期間は、在学年数に算入しない。

(復学)

第 34 条 休学期間内においてその事由が消滅したときは、復学願を提出し、学長の許可を得て復

学することができる。ただし、懲戒による退学は除くものとする。

(退学)

第 35 条 学生が退学しようとするときは、退学願を提出し、学長の許可を得て退学することができる。ただし、懲戒による退学は除くものとする。

(除籍)

第 36 条 次の各号の一に該当する者は、除籍する。

- (1) 在学年限を超えた者
- (2) 長期にわたる欠席又は疾病その他の事由により成業の見込みがないと認められた者
- (3) 死亡又は行方不明となった者
- (4) 学生納付金の納付を怠り、催告されてもなお納付しない者
- (5) 他の大学院に正規課程の学生として在籍していることが明らかになった者

(復籍)

第 37 条 前条第 4 号により除籍された者が復籍を願い出た場合は、選考のうえ復籍を許可することがある。

第 8 章 入学検定料・学生納付金

(入学検定料)

第 38 条 入学検定料の額は、別表(3)に定める。

2 すでに納付した入学検定料は、返付しない。

(学生納付金)

第 38 条の 2 本規則において学生納付金とは、次のものをいう。

- (1) 入学金
- (2) 授業料及び施設設備費(以下「授業料等」という。)
- (3) その他諸納付金

2 学生納付金の額は、別表(3)に定める。

3 すでに納付した学生納付金は、原則として返付しない。

4 停学を命ぜられた者は、停学期間中であっても学生納付金を納付しなければならない。

5 学生納付金の納付手続きに関する事項は、別に定める。

(学生納付金の特別な取扱)

第 38 条の 3 転入学及び再入学を許可された者は、別表(3)に定める入学金を納付しなければならない。

2 復籍を許可された者は、別表(3)に定める復籍料を納付しなければならない。

(学生納付金の免除)

第 39 条 休学を許可された者の休学期間中の学生納付金は、別表(3)に定める在籍料とし、授業料等を免除する。ただし、学期の途中に休学又は復学する場合には、この限りではない。

2 学生納付金の納付期限の延長を許可され、学生納付金が未納の状態にある者が退学する場合は、未納の学生納付金を免除する。

3 学生納付金が未納の状態にある者で第 36 条第 3 号又は第 4 号により除籍となった者は、未納の学生納付金を免除する。

4 学生納付金の納付が極めて困難な者であつて、学業に精励し、人格、操行優秀な者に対しては、願い出により選考のうえ学生納付金の一部又は全部を免除することができる。

5 次の各号の一に該当する学生は、入学金を免除する。

- (1) 大同大学又は大同工業大学を卒業した者
- (2) 本大学院を修了し、博士後期課程へ入学を許可された者
- (3) 第 24 条第 8 項により、修士課程へ入学を許可された者

第 9 章 奨学生

(奨学生)

第 40 条 本大学院に学生の学業奨励のため、奨学生制度を設ける。

2 奨学生制度に関する事項は、別に定める。

第 10 章 賞罰

(表彰)

第 41 条 学長は、他の模範となる学生を表彰することがある。

2 表彰に関する事項は、別に定める。

(懲戒)

第 42 条 学長は、学生が法令若しくは本学の規則に違反したとき又は学生の本分に反する行為をしたときは、懲戒する。

2 懲戒は、退学、停学及び訓告とする。

3 前項の退学は、次の各号の一に該当する者についてこれを行う。

- (1) 性行不良で改善の見込みがないと認められる者
- (2) 学力劣等で成業の見込みがないと認められる者
- (3) 正当の理由がなくて出席常でない者
- (4) 本大学院の秩序を乱し、その他学生としての本分に反した者

4 前 3 項に規定するほか、学生の懲戒に関する事項は、別に定める。

第 11 章 科目等履修生、特別聴講学生、研究生、外国人留学生

(大学院科目等履修生)

第 43 条 本大学院の授業科目の履修を願い出た者があるときは、本大学院の教育研究に支障のない場合に限り、選考のうえ大学院科目等履修生として入学を許可することがある。

(大学院特別聴講学生)

第 43 条の 2 他の大学院の学生で、本大学院の授業科目を履修することを願い出た者があるときは、当該大学院との協議に基づき、大学院特別聴講学生として入学を許可することがある。

2 前項の規定は、外国の大学院の学生が本大学院において授業科目を履修することを願い出た場合に準用する。

(大学院研究生)

第 44 条 本大学院において特定の専門事項について研究を行うことを願い出た者があるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考のうえ大学院研究生として入学を許可することがある。

(大学院特別研究学生)

第 44 条の 2 他の大学院の学生で、本大学院において研究指導を受けることを願い出た者があ

るときは、教育研究に支障がない場合に限り、当該大学院との協議に基づき、大学院特別研究学生として入学を許可することがある。

2 前項の規定は、外国の大学院の学生が本大学院において研究指導を受けることを願い出た場合に準用する。

(大学院外国人留学生)

第 45 条 外国人で、本大学院に入学を願い出た者がいるときは、選考のうえ大学院外国人留学生として入学を許可することがある。

(関係規程)

第 46 条 前 5 条に規定する大学院科目等履修生、大学院特別聴講学生、大学院研究生、大学院特別研究学生及び大学院外国人留学生に関する事項は、別に定める。

第 12 章 職員組織

(職員組織)

第 47 条 本大学院に次の職員を置く。

- (1) 大学院研究科長
- (2) 大学院副研究科長
- (3) 研究科長
- (4) 教授、准教授、講師

2 前項第 4 号に規定する教授、准教授及び講師は、教育研究上支障を生じない場合に限り、学部又はセンター等に所属する教授、准教授及び講師をもって充てることができる。

3 第 1 項第 4 号に規定する教授、准教授及び講師は、大学院の教員資格を有する者でなければならない。

4 大学院の教員資格については、別に定める。

(職制、業務処理)

第 47 条の 2 本大学院の職制及び業務処理に関する事項は、別に定める。

(博士後期課程担当教員、修士課程担当教員)

第 48 条 削除

第 13 章 大学院教授会

(大学院教授会)

第 49 条 本大学院に、大学院教授会を置く。

2 大学院教授会に関する事項は、別に定める。

附 則 < 省 略 >

別表(3) 入学検定料・学生納付金(第38条・第38条の2・第38条の3・第39条関係)

1. 入学検定料

納付金種別	金額
入学検定料	35,000円

2. 学生納付金

(1) 入学金

① 修士課程

第28条に規定する入学及び第30条に規定する転入学は150,000円とし、
第29条に規定する再入学は70,000円とする。

② 博士後期課程

第28条に規定する入学及び第30条に規定する転入学は277,000円とし、
第29条に規定する再入学は130,000円とする。

(2) 授業料及び施設設備費

① 修士課程

納付金種別	1年次	2年次
授業料	535,800円	535,800円
施設設備費	305,000円	305,000円
計	840,800円	840,800円

② 博士後期課程

納付金種別	1年次	2年次	3年次
授業料	540,800円	540,800円	540,800円
計	540,800円	540,800円	540,800円

(3) その他諸納付金

① 復籍料

30,000円とする。

② 休学時の在籍料

年額 60,000円とする。

ただし、前期又は後期の休学を許可された場合の在籍料は、年額の2分の1とする。

大同大学学位規程

平成 2 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 9 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 この規程は、学位規則(昭和 28 年文部省令第 9 号)第 13 条及び大同大学学則(以下「学則」という。)第 19 条第 3 項並びに大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 22 条第 3 項の規定に基づき、大同大学(以下「本学」という。)が授与する学位について必要事項を定めるものとする。

(学位の種類)

第 2 条 本学において授与する学位は、学士、修士及び博士とする。

2 学位に付記する専攻分野の名称は、次のとおりとする。

学 部

工学部 工学

情報学部 情報

大学院 工学研究科

修士課程

機械工学専攻 工学

電気・電子工学専攻 工学

建築学専攻 工学

都市環境デザイン学専攻 工学

博士後期課程

材料・環境工学専攻 工学

大学院 情報学研究科

修士課程

情報学専攻 情報

(学士の学位授与の要件)

第 3 条 学士の学位は、本学を卒業した者に授与する。

(修士の学位授与の要件)

第 4 条 修士の学位は、本学大学院の修士課程を修了した者に授与する。

(博士の学位授与の要件)

第 4 条の 2 博士の学位は、本学大学院の博士課程後期 3 年の課程(以下「博士後期課程」という。)を修了した者に授与する。

2 前項に定める者のほか、大学院学則第 22 条第 2 項の定めるところにより、学位論文の審査及び試験に合格し、かつ、博士後期課程を修了した者と同等以上の学力を有することを認めた者に博士の学位を授与する。

(学位論文の提出)

第 5 条 本学大学院修士課程の学位論文(以下「修士論文」と称する。)及び博士後期課程の学

位論文（以下「博士論文」と称する。）は、学長に提出するものとする。

- 2 本学大学院修士課程及び博士後期課程における修士論文及び博士論文を提出できる者は、修了に必要な在学期間を満たした者又は見込みの者で課程修了に必要な所定の単位を修得した者又は修得見込みの者で、かつ必要な研究指導を受けた者でなければならない。
- 3 前条第2項の規定により学位の授与を申請する者は、学位審査申請書に履歴書、論文目録、論文内容要旨及び第13条第1項に定める論文審査手数料を添えて、博士論文を学長に提出するものとする。
- 4 提出論文は、一編とする。ただし、参考として他の論文を添付することができる。
- 5 受理した論文は、返付しない。

（審査の付託）

第6条 修士論文及び博士論文を受理したとき大学院教授会は、大学院担当教員より審査委員を選出し、審査委員会を組織する。

（論文審査及び試験）

第7条 審査委員会は、修士論文及び博士論文の審査並びに試験を担当する。

（審査結果の報告）

第8条 審査委員会は、論文の審査及び試験を終了したとき、その結果を文書をもって大学院教授会に報告しなければならない。

（大学院教授会の議決）

第9条 所定の単位を修得し研究指導を受けた者に対して、大学院教授会は、前条の報告に基づいて審議し、学位授与の認定について議決する。

（学位の授与）

第10条 学長は、前条に基づいて、学位を授与できると認めた者に対し学位記を授与し、学位を授与できない者に対しては、その旨を本人に通知する。

（学位論文要旨等の公表）

第10条の2 本学において博士の学位を授与したときは、当該博士の学位を授与した日から3か月以内に、当該博士の学位授与に係る論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨をインターネットの利用により公表するものとする。

（学位論文の公表）

第10条の3 本学において博士の学位を授与された者は、当該博士の学位を授与された日から1年以内に、当該博士の学位の授与に係る論文の全文を公表するものとする。ただし、当該博士の学位を授与される前に既に公表したときは、この限りでない。

2 前項の規定にかかわらず、本学において博士の学位を授与された者は、やむを得ない事由がある場合には、学長の承認を受けて、当該博士の学位の授与に係る論文の全文に代えてその内容を要約したものを公表することができる。この場合において、本学はその学位論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。

3 博士の学位を授与された者が行う前2項の規定による公表は、本学の協力を得て、インターネットの利用により行うものとする。

4 前3項の規定により当該学位論文を公表する場合には、本学において審査した論文である旨を

明記するものとする。

(学位の名称)

第 11 条 学位を授与された者が、学位の名称を用いるときは、大同大学を付記するものとする。

2 学位記の様式は、別記様式第 1 号、第 2 号、第 3 号及び第 4 号とする。

(学位授与の取消し)

第 12 条 学位を授与された者が、その名誉を汚辱する行為があつたとき又は不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したときは、学長は、学士の学位にあつては教授会、修士及び博士の学位にあつては大学院教授会の審議を経て、学位の授与を取消し、学位記を返付させる。

(論文審査手数料)

第 13 条 第 5 条第 2 項に定める論文審査手数料は、次のとおりとする。

150,000 円

2 納付した論文審査手数料は、返付しない。

(その他)

第 14 条 この規程に定めるもののほか必要な事項は、別に定める。

附 則 < 省 略 >

別記様式第1号 サイズ(A4)

第 号	
学 位 記	(氏名)
[大学印]	年 月 日生
<p>本学〇〇学部〇〇学科所定の課程を 修め本学を卒業したので学士(〇〇)の 学位を授与する</p>	
年 月 日	
大同大学長 氏 名	[印]

別記様式第2号 サイズ(A4)

修第 号	
学 位 記	(氏名)
[大学印]	年 月 日生
<p>本学大学院〇〇学研究科修士課程 〇〇〇専攻の課程を修了したので修士 (〇〇)の学位を授与する</p>	
年 月 日	
大同大学長 氏 名	[印]

別記様式第3号 サイズ(A3)

博 第 号	年 月 日	大同 大学 長 氏 名	[印]	学 位 記	[大学印]	(氏名)	年 月 日 生
<p>博士(工学)の学位を授与する</p>				<p>本学大学院工学研究科後期課程 〇〇〇専攻の課程を修了したので</p>			

別記様式第4号 サイズ(A3)

論 博 第 号	年 月 日	大同 大学 長 氏 名	[印]	学 位 記	[大学印]	(氏名)	年 月 日 生
<p>博士(工学)の学位を授与する</p>				<p>本学大学院工学研究科に学位論文を 提出し所定の審査及び試験に合格した</p>			

大同大学大学院学位審査等取扱細則

平成7年11月16日制定

平成29年4月1日改正

第1章 総則

(目的)

第1条 この細則は、大同大学大学院学則及び同学位規程に定めるもののほか、修士課程及び博士後期課程の学位審査等の取扱いについて必要な事項を定めることを目的とする。

第2章 修士の学位

(学位審査の申請)

第2条 学位審査の申請は在学中に行うものとし、申請書等の提出時期は毎年1月とする。ただし、特別の理由により修了時期を異にする場合は、申請書等の提出時期を、6月修了の場合にあつては4月、9月修了の場合にあつては7月、12月修了の場合にあつては10月とする。

2 申請者は、研究指導を担当する教員（以下「指導教員」という。）及び専攻長の承認を得たうえ、学位審査申請書を学長に提出する。

(審査委員候補者の推薦)

第3条 各専攻は、指導教員を含み大学院担当教員より3名以上の審査委員(内1名は主査)候補者を大学院教授会に推薦する。

(審査委員の選出)

第4条 大学院教授会は、前条の候補者名簿に基づき、3名以上の審査委員を選出する。

(論文の提出)

第5条 申請者は、論文及び論文要旨それぞれ正1通、副2通を所定の期日までに学長に提出する。

(論文審査及び試験)

第6条 論文審査及び試験の実施方法は、各専攻において定める。

(論文審査及び試験の結果の判断・学位授与の審議)

第7条 論文審査及び試験が終了したときは、審査委員主査は論文審査及び試験の結果を専攻長を経て、大学院教授会に報告する。

2 大学院教授会は、前条の報告に基づいて審議し、修了の資格を確認して、学位授与の認定について議決する。

第3章 博士の学位

第1節 課程博士

(論文予備審査会)

第8条 論文予備審査会の世話役は、博士論文提出予定者の指導教員が所属する「博士後期課程の運営方法」に定める当該分野の副専攻長(以下「副専攻長」という。)とする。

2 副専攻長は、博士論文申請の審査をするための論文予備審査会の設置を博士後期課程の専攻長に届出る。

3 論文予備審査会の構成員は、当該分野の大学院担当教員全員とする。なお、博士論文提出予定者の専門に係る当該分野以外の大学院担当教員及び学外の教授、又は、いずれかを必要に

応じて加えることができる。

- 4 論文予備審査を担当する教員は、指導教員及び前項の構成員より選出された2名以上とする。
なお、指導教員が主査にあたることとする。

(博士論文申請の仮決定)

第9条 担当教員は、博士論文提出予定者による博士論文の口頭発表及び質疑を行い、博士論文に対する修正等の指導の後、主査は、論文予備審査会に審査の結果を報告する。

- 2 博士論文申請の可否の仮決定は、論文予備審査会において、投票により行う。
- 3 投票は、構成員の3分の2以上の出席を必要とし、仮決定の判定は、出席委員の3分の2以上の同意を必要とする。なお、博士論文の修正等がある場合には、投票を延期することができる。

(審査委員候補者の選出)

第10条 博士論文申請の仮決定が可の場合には、指導教員及び第8条第3項の構成員から論文予備審査会において選出された2名以上を審査委員候補者とする。

なお、指導教員が主査にあたることとする。

- 2 審査委員候補者には、博士後期課程の専攻長を加える。
- 3 副専攻長は、仮決定の結果と審査委員候補者名を博士後期課程の専攻長に報告する。

(学位審査の申請)

第11条 学位審査の申請は、在学中に行うものとし、学位審査申請書等の提出期限は、毎年1月とする。ただし、満了後等の理由により終了時期を異にする場合は、申請書等の提出時期を、6月修了の場合にあつては4月、9月修了の場合にあつては7月、12月修了の場合にあつては10月とする。

- 2 博士論文提出予定者は、博士論文申請の仮決定が可の場合、論文審査の申請の手続きをとる。
- 3 博士論文申請者は、次の書類を、博士後期課程の専攻長を経て学長に提出する。

- (1) 学位審査申請書、履歴書、論文日録、論文内容要旨
- (2) 博士論文 1編(正1、副3)
- (3) 単位取得証明書
- (4) 外国語の能力に関する申告書(学部、修士課程における外国語単位取得状況及び本人の自己申告)

(論文受理の決定、審査委員会の設置)

第12条 博士後期課程の専攻長は、申請書類の検討の結果を踏まえて、大学院教授会において論文受理の決定及び審査委員会の設置の承認を得る。

(論文審査及び試験)

第13条 審査委員会は、受理された論文の公開講演会を開催し、質疑・討論を行う。なお、博士論文に関連する専門の試験の方式は、筆答又は口頭で行う。

- 2 外国語の試験は、博士論文提出者に予め論文内容要旨の外国語訳を提出させ、それを中心として口頭で行う。
- 3 論文審査及び試験が終了したときは、審査委員主査はその結果を学位審査報告書にまとめ、大学院教授会に報告する。
- 4 学位審査報告書には論文審査の結果、試験の方式及びその結果、業績等を記載する。

なお、業績は、学会誌に既発表、又は発表確定の博士論文の主たる内容を含む自著論文、又は本人と指導教員との共著論文のあることを最低必要条件とする。

5 博士後期課程の大学院担当教員からなる大学院教授会において、第3項の報告に基づき、論文審査及び試験の可否を投票により決定する。

6 投票は、構成員の3分の2、合格の判定は出席委員の3分の2以上の同意を必要とする。

(学位授与の認定)

第14条 論文審査及び試験の判定をもつて、学位授与の認定とする。

(学位授与の特例)

第15条 博士後期課程の単位取得満了後3年間は、この細則を適用する。

第2節 論文博士

(論文予備審査会)

第16条 論文予備審査会の世話役は、博士論文提出予定者の世話指導教員が所属する当該分野の副専攻長とする。

2 副専攻長は、博士論文申請の審査をするため論文予備審査会の設置を博士後期課程の専攻長に届出る。

3 論文予備審査会の構成員は、当該分野の大学院担当教員全員とする。なお、博士論文提出予定者の専門に関係する当該分野以外の大学院担当教員及び学外の教授、又は、いずれかを必要に応じて加えることができる。

4 論文予備審査の担当委員は、世話指導教員及び前項の構成員より選出された2名以上とする。

(博士論文申請の仮決定)

第17条 担当委員は、博士論文提出予定者による博士論文の口頭発表及び質疑を行い、博士論文に対する修正等の指導の後、主査は、論文予備審査会に審査の結果を報告する。

2 論文予備審査会において、投票により博士論文申請の可否の仮決定を行う。

3 投票は、構成員の3分の2以上の出席を必要とし、仮決定の判定は、出席委員の3分の2以上の同意を必要とする。なお、博士論文の修正等がある場合には、投票を延期することができる。

(審査委員候補者の選出)

第18条 博士論文申請の仮決定が可の場合には、世話指導教員及び第16条第3項の構成員から選出された2名以上を審査委員候補者とする。なお、世話指導教授が主査にあたることとする。

2 審査委員候補者には、博士後期課程の専攻長を加える。

3 副専攻長は、仮決定の結果と審査委員候補者名を博士後期課程専攻長に報告する。

(学位審査の申請)

第19条 学位審査の申請は、年間4回とする。学位審査申請書等の提出時期は、6月授与の場合にあつては4月、9月授与の場合にあつては7月、12月授与の場合にあつては10月、3月授与の場合にあつては1月とする。

2 博士論文提出予定者は、博士論文申請の仮決定が可の場合、論文審査の申請の手続きをとる。

3 博士論文申請者は、次の書類を、博士後期課程の専攻長を経て学長に提出する。

(1) 学位審査申請書、履歴書、論文目録、論文内容要旨

(2) 博士論文 1編(正1、副3)

(3) 単位取得証明書

(4) 外国語の能力に関する申告書(学部、修士課程における外国語単位取得状況及び本人の自己申告)

(論文受理の決定、審査委員会の設置)

第20条 博士後期課程の専攻長は、申請書類の検討の結果を踏まえて、大学院教授会において論文受理の決定及び審査委員会の設置の承認を得る。

(論文審査及び試験)

第21条 審査委員会は、受理された論文の公開講演会を開催し、質疑・討論を行う。なお、論文博士に関連する専門の試験の方式は、筆答又は口頭で行う。

2 外国語の試験は、博士論文提出者に予め論文内容要旨の外国語訳を提出させ、それを中心として口頭で行う。

3 博士後期課程を修了した者と同等以上の学力を有することを確認するための試験を行う。

4 論文審査及び試験が終了したときは、審査委員主査はその結果を学位審査報告書にまとめ、大学院教授会に報告する。

5 学位審査報告書には論文審査の結果、試験の方式及びその結果、業績等を記載する。なお、業績は学会誌に既発表、又は発表確定の博士論文の主たる内容を含む自著論文、又は本人と世話指導教員との共著論文のあることを最低必要条件とする。

6 博士後期課程の大学院担当教員からなる大学院教授会において、第4項の報告に基づき、論文審査及び試験の可否を投票により決定する。

7 投票は、構成員の3分の2、合格の判定は出席委員の3分の2以上の同意を必要とする。

(学位授与の認定)

第22条 論文審査及び試験の判定をもつて、学位授与の認定とする。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院研究科履修規程

平成 27 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 17 条第 1 項の規定に基づく履修方法については、この規程の定めるところによる。

(履修申請)

第 2 条 履修申請は、研究指導を行う教員(以下「指導教員」という)の承認を受け、所定の期間内に定められた方法によつて行わなければならない。

- 2 正当な理由がなく、所定の期間内に履修申請を行わなかった授業科目は、履修を許可しない。
- 3 不合格となつた授業科目の単位を修得しようとする者は、あらためて履修申請し、再履修しなければならない。
- 4 履修申請した授業科目は、必ず「履修申請確認表」で確認しなければならない。

(履修申請の変更)

第 3 条 履修申請した授業科目は、指導教員の承認を受け、所定の期間内に定められた方法によつて、変更することができる。

- 2 前項の規定にかかわらず、授業科目によつては履修申請を変更できないことがある。
- 3 正当な理由がなく、所定の期間内に履修申請の変更を行わなかった授業科目は、履修申請の変更を許可しない。
- 4 履修申請を変更した授業科目は、必ず「履修申請確認表」で確認しなければならない。

(履修の制限)

第 4 条 授業科目の履修は、次の制限に従わなければならない。

- (1) 上級年次に開講される授業科目を履修することはできない。
- (2) 同一時限に開講されている授業科目を重複して履修することはできない。
- (3) 既に履修し、単位を付与された授業科目については再履修することはできない。
- (4) 履修クラスが設定される授業科目にあつては、原則該当のクラスを履修しなければならない。

(履修区分)

第 5 条 次の各号に掲げる専攻に、授業科目の履修上の区分として、当該各号に掲げるコースを設ける。

- (1) 工学研究科機械工学専攻 機械工学コース 及び総合機械工学コース
- (2) 工学研究科都市環境デザイン学専攻 土木・環境コース及びかおりデザインコース
- (3) 情報学研究科情報学専攻 情報システムコース、情報デザインコース及び経営情報コース

2 前項の各号に掲げる専攻に所属する者は、いずれかのコースを履修しなければならない。

(開講科目)

第 6 条 授業科目によつては、年度によつて開講しないことがある。

(他研究科及び他専攻等授業科目の履修)

第 7 条 学生は、所属する研究科の専攻の開講する科目(第 5 条第 1 項各号の専攻にあつてはコース

の開講する科目)のほか、所属する研究科の他の専攻(第5条第1項各号の専攻にあつては他のコース)及び他の研究科の専攻の開講する科目(第5条第1項各号の専攻にあつてはコースの開講する科目)を履修することができる。

- 2 前項において履修を許可された科目の履修及び修得単位の各取扱については、別表(1)のとおりとする。
- 3 他専攻の授業科目について修得した単位数については、大学院学則第18条及び第19条により修得したものとみなす単位数とあわせて10単位を超えないものとする。
(履修人員の制限)

第8条 開講される各授業科目の履修人員は、教室の収容人員等の都合により制限することができる。
(授業出席の義務)

第9条 学生は、授業担当教員の指示に基づき、履修登録した授業に出席しなければならない。

- 2 授業出席回数が不足した場合には、単位を修得できないことがある。
(授業欠席の特別な取扱)

第10条 学生が、やむを得ない事由により授業を欠席する場合には、授業欠席の特別な取り扱いを認めることがある。
2 前項に規定する学生の授業欠席の特別な取り扱いに関する事項は、別に定める。
(休講)

第11条 大学院又は授業担当教員の事情により、授業を休講する場合がある。

- 2 前項に規定する休講については、原則として補講を行う。
- 3 暴風警報の発令、公共交通機関の運休、東海地震予知情報の発令等に伴う授業の休講に関する事項は、別に定める。
(緊急時の授業休講)

第12条 気象警報が発令された場合等の緊急時に授業を休講することがある。

- 2 前項に規定する授業休講の取り扱いに関する事項は、別に定める。
(学修状態の審査)

第13条 大学院学則第17条第2項に規定する成績評価は、試験によるものとする。

- 2 前項に規定する試験の方法は、筆記試験またはレポート等とする。
- 3 第1項の規定にかかわらず、学生の学修状況の総合的な審査をもつて、試験に代えることができる。
(試験の種類)

第14条 試験は、期末試験、追試験、特別追試験とする。

- 2 期末試験は、各学期末に行う試験をいう。
- 3 前項に規定する期末試験を分け、通常期末試験及び特別期末試験とする。
- 4 追試験は、病気(次項に定める公認欠席を除く)、事故、公共交通機関の延着その他やむを得ない理由により期末試験を受験できなかつた者に対し行う試験をいう。
- 5 特別追試験は、期末試験の時間割において、受験科目が同一時限に重なり受験できない科目がある場合及び公認欠席により期末試験を受験できなかつた者に対し行う試験をいう。

6 追試験及び特別追試験を受験しようとする者は、所定の手続きを指定の期間に行わなければならない。

7 追試験、特別追試験を受験しなかつた者に対する追試験、特別追試験は行わない。

(受験資格)

第 15 条 次の各号に該当する者は、試験を受けることができない。

- (1) 試験を受けようとする科目を履修申請していない者
- (2) 学生証を携帯していない者
- (3) 試験開始後 30 分以上遅刻した者
- (4) 学納金を未納の者

(受験の遵守事項)

第 16 条 第 14 条に定める試験を受験しようとする者は、試験室において、次の各号に定める事項を遵守しなければならない。

- (1) 試験室においては、監督者の指示に従わなければならない。
- (2) 試験開始 30 分経過後は、試験室に入室することができない。
- (3) 試験室では、学生証を机の上に置かなければならない。学生証を所持しない者は、受験することができない。
- (4) 筆記用具及び許可された物を除くすべての携帯品は、監督者が指定する場所に置かなければならない。
- (5) 携帯電話等は電源を切り、鞆等の中にしまわなければならない。(時計としての使用も不可。)
- (6) 試験中に質問その他の用件があるときは、挙手し監督者に申し出なければならない。
- (7) 答案用紙は、解答の有無にかかわらず学籍番号及び氏名を記入しなければならない。また、監督者が指定する場所に提出し、試験室外に持ち出してはならない。

(不正行為)

第 17 条 第 14 条の受験に際し次の各号の一に該当する行為を行つた者は、不正行為者とみなし、学生証、答案及び証拠となる物件を取り上げ退場を命じる。

- (1) 他人に受験を依頼すること又はこれを引き受けること。
- (2) 監督者の許可なく行動すること、又、監督者の制止を無視して行動すること。
- (3) 持ち込みを許可されていない物品(ノート、メモ、教科書、参考書等)及び電子機器(電子辞書、パソコン等)を使用すること。
- (4) 他の学生の答案を参照すること又は他の学生に答案を参照させること。
- (5) 言語・動作又は通信機器等により学生同士で互いに連絡すること。
- (6) 許可なく他の学生に物品を貸与すること。
- (7) 他の学生の不正行為を助けること。
- (8) 試験開始後 30 分以内に退室すること。
- (9) 監督者の指示に違反すること。
- (10) 身体、所持品及び机等身の回りの物品に文字等を記載し試験中に参照すること又はそれを参照できるような状態で受験すること。

- (11) 他人と答案の交換を行うこと。
- (12) その他不正行為とみなされる行為を行うこと。
- 2 不正行為を行つた者に対しては、当該学期に履修した授業の内、第 14 条に定める試験を実施した授業は不合格とし、かつ、大学院学則第 42 条により、懲戒する。
- 3 前項において不合格となつた科目の成績評価の評語は、欠席とする。

(成績評価の基準)

第 18 条 大学院学則第 17 条第 2 項第 4 項の成績評価の基準は、原則として次による。

優	100 点より 80 点まで
良	79 点より 70 点まで
可	69 点より 60 点まで
不可	59 点以下

- 2 前項の規定にかかわらず、試験を欠席または棄権した場合の評語は、欠席とする。

(試験結果の発表及び成績評価の確認)

第 19 条 試験の結果は、「試験結果通知書」によつて通知する。

- 2 前項の試験結果通知書において、成績評価に疑問がある者は、所定の期間内に大学院研究科長に成績評価の確認を願い出ることができる。

(修士課程における単位の修得)

第 20 条 修士課程の修了要件として必要な単位数は、大学院学則第 20 条のとおりとし、専攻ごとの単位修得要件は別表 (2) のとおりとする。

(博士後期課程における単位の修得)

第 21 条 博士後期課程の修了要件として必要な単位数は、大学院学則第 21 条のとおりとし、単位修得要件は別表 (3) のとおりとする。

附 則 < 省 略 >

別表（1）

所属研究科の他専攻、他研究科の専攻及び同一専攻内の他コースの履修

研究科	専攻名（コース名）	所属研究科の他の専攻又は他の研究科の専攻の授業科目の各取扱		同一専攻内の他のコースの開講する授業科目の取扱		
		履修の取扱	修得単位の取扱	履修するコース	履修の取扱	修得単位の取扱
工学研究科	機械工学専攻 （機械工学コース）	授業科目の部類は修得した科目の部類とする。	6 単位を上限として、「修了に必要な単位数」に算入することができる。	総合機械コース	授業科目の部類は修得した科目の部類とする	6 単位を上限として、「修了に必要な単位数」に算入することができる。
	機械工学専攻 （総合機械工学コース）			機械工学コース		
	電気・電子工学専攻			/		
	建築学専攻					
	都市環境デザイン学専攻 （土木・環境コース）					
	都市環境デザイン学専攻 （かおりデザインコース）			土木・環境コース		
情報学研究科	情報学専攻 （情報システムコース）	授業科目の部類は修得した科目の部類とする。	6 単位を上限として、「修了に必要な単位数」に算入することができる。	情報デザインコース	授業科目の部類は修得した科目の部類とする	4 単位を上限として、「修了に必要な単位数」に算入することができる。
	情報学専攻 （情報デザインコース）			経営情報コース		
				情報システムコース		
	情報学専攻 （経営情報コース）			経営情報コース		
				情報システムコース		
情報学専攻 （経営情報コース）	情報デザインコース					

別表（2）

修士課程における単位修得の要件

研究科	課程	専攻名	部類	必要単位数	
工学研究科	修士課程	機械工学専攻	[1]講義	12 単位以上	左記条件を満たし 30 単位以上
			[2]演習	8 単位以上	
			[3]研究	6 単位以上	
		電気・電子工学専攻	[1]講義	10 単位以上	左記条件を満たし 30 単位以上
			[2]演習	10 単位以上	
			[3]研究	6 単位以上	
		建築学専攻	[1]講義	10 単位以上	左記条件を満たし 30 単位以上
			[2]演習	6 単位以上	
			[3]研究	6 単位以上	
		都市環境デザイン学専攻	[1]講義	10 単位以上	左記条件を満たし 30 単位以上
			[2]演習	6 単位以上	
			[3]研究	6 単位以上	
情報科学		情報学専攻	[1]講義	12 単位以上	左記条件を満たし 30 単位以上
			[2]演習	8 単位以上	
			[3]研究	6 単位以上	

別表（3）

博士後期課程における単位修得の要件

研究科	課程	専攻名	部類	必要単位数	
工学研究科	博士後期課程	材料・環境工学専攻	特論	4 単位以上	左記条件を満たし 8 単位以上
			特別講義		
			輪講	2 単位以上	
			/	「学外研修」 「特別調査演習」 の 2 科目から 2 単位以上	
				「特別研究」の 履修	

大同大学大学院研究生規程

平成 2 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 46 条の規定に基づく大同大学(以下「本学」という。)の大学院研究生については、この規程の定めるところによる。

(出願資格)

第 2 条 大学院研究生の出願資格は、次の各号のとおりとする。

- (1) 修士課程においては、修士の学位を授与された者又は本大学院において、修士の学位を授与された者と同等以上の学力があると認められる者とする。
- (2) 博士後期課程においては、博士の学位を授与された者又は本大学院において、博士の学位を授与された者と同等以上の学力があると認められる者とする。

(予備審査)

第 3 条 大学院研究生を出願しようとする者は、予め予備審査を受けなければならない。

2 予備審査を受審する者は、次の各号の書類を添えて予備審査を願い出なければならない。

- (1) 研究題目・研究内容
- (2) 出願理由説明書
- (3) 履歴書
- (4) 最終学校の卒業証明書及び成績証明書

3 出願者を受け入れる当該専攻の長は、前項に定める書類により予備審査を行う。

(出願手続)

第 3 条の 2 大学院研究生を出願する者は、入学検定料を納付のうえ、次の各号の書類を提出しなければならない。

- (1) 入学願書
- (2) 健康診断書

(選考方法)

第 3 条の 3 出願者を受け入れる当該専攻は、書類及び面接等による選考を行う。

(入学許可)

第 4 条 大学院研究生の入学は、大学院教授会の審議を経て、学長が許可する。

(入学の時期及び研究期間)

第 5 条 大学院研究生の入学の時期は、学期の始めとする。ただし、特別の事情がある場合は、この限りでない。

2 大学院研究生の研究期間は、1 年以内とする。ただし、特別の事情がある場合はこの限りではない。

(入学検定料及び納付金)

第 6 条 入学を許可された者は、所定の手続きをとり、登録料及び授業料(以下「納付金」という。)を所定の期限までに納付しなければならない。

2 入学検定料及び納付金並びにその免除については、別に定める。

(規定の準用)

第7条 この規程に定めるもののほか、本学の大学院学則及び諸規程を準用する。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院科目等履修生規程

平成 6 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 46 条の規定に基づく大同大学(以下「本学」という。)の大学院科目等履修生については、この規程の定めるところによる。

(出願資格)

第 2 条 大学院科目等履修生の出願資格は、次のとおりとする。

- (1) 修士課程においては、大学を卒業した者又はこれと同等以上の学力があると認められる者とする。
- (2) 博士後期課程においては、修士の学位を授与された者又は本大学院において、修士の学位を授与された者と同等以上の学力があると認められる者とする。

2 教育職員の免許その他法令に定める資格を得るために大学院科目等履修生として出願する者は、その基礎資格を有する者とする。

(出願手続)

第 3 条 大学院科目等履修生を出願する者は、入学検定料を納付のうえ、次の各号の書類を提出しなければならない。

- (1) 入学願書
- (2) 履歴書
- (3) 最終学校の卒業証明書及び成績証明書
- (4) 健康診断書

2 前条第 2 項の出願者は、前項に定める書類のほか、基礎資格を有することを証明する書類を添付しなければならない。

(選考方法)

第 3 条の 2 出願者が履修を希望する授業科目を担当する専攻は、書類による選考を行う。

(入学許可)

第 4 条 大学院科目等履修生の入学は、大学院教授会の審議を経て、学長が許可する。

(入学の時期及び履修期間)

第 5 条 大学院科目等履修生の入学の時期は、学期の始めとする。

2 大学院科目等履修生の履修期間は、1 年以内とする。ただし、特別の事情がある場合はこの限りでない。

(入学検定料及び納付金)

第 6 条 入学を許可された者は、所定の手続きをとり、登録料及び授業料(以下「納付金」という。)を所定の期限までに納付しなければならない。

2 入学検定料及び納付金並びにその免除については、別に定める。

(単位の授与)

第 7 条 大学院科目等履修生が履修した授業科目に合格した場合には、単位を授与する。

(単位修得証明書)

第8条 前条の規定により単位を認定された者に対しては、本人の申請により、単位修得証明書を発行する。

(規定の準用)

第9条 この規程に定めるもののほか、本学の大学院学則及び諸規定を準用する。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院学部学生の大学院授業科目の早期履修に関する規程

(平成 30 年 12 月 13 日制定)

(目的)

第 1 条 本学の大学院(以下「本大学院」という。)に進学を志望する大同大学(以下「本学」という。)に在籍する学業優秀な学部学生に対して、その能力を早期にかつ高度に発展させる機会を与えるとともに、当該学部学生の本大学院入学後の学修及び研究時間を確保することを目的とする。

(早期履修生)

第 2 条 本学の学部 に在籍し、本大学院の修士課程の授業科目を履修する者(以下「早期履修生(大学院科目等履修生)」という。)は、大同大学大学院科目等履修生として取り扱うものとする。

2 早期履修生(大学院科目等履修生)の出願資格、出願手続、履修可能な授業科目、履修単位の上限及び修得した単位の取扱いについては、大同大学大学院科目等履修生規程(以下「科目等履修生規程」という。)の規定にかかわらず、この規程によるものとする。

(出願資格)

第 3 条 早期履修生(大学院科目等履修生)として出願できる者は、科目等履修生規程第 2 条第 1 項第 1 号の後段の規定(大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者)に相当する者として所属の学科(専攻)が認めた者であり、かつ、次の各号のすべてに該当する者とする。

- (1) 本学の学部 に在籍する学生であって本大学院に進学を志望する者
- (2) 本学の学部 に在籍する学生であって本大学院の修士課程の授業科目を履修する時点で 4 年次の者
- (3) 本大学院の授業科目を履修することが教育上有益であると所属の学科(専攻)が認めた者であり、かつ、同学科(専攻)の長の推薦が受けられる者
- (4) 当該学生が履修を希望する授業科目の担当教員及び当該授業科目を開講する専攻(コース)の長の内諾が得られている者

(出願手続)

第 4 条 早期履修生(大学院科目等履修生)を志願する者は、事前に主指導教員と相談のうえ、履修しようとする学期の始めの原則として 1 月前までに、別に定める早期履修生(大学院科目等履修生)入学願に、履修しようとする年度の前年度までの学業成績を記載した書類を添えて、学長に願出するものとする。

(履修可能な授業科目)

第 5 条 早期履修生(大学院科目等履修生)が履修できる授業科目は原則、当該学部学生が所属する学科(専攻)を基礎とする本大学院の専攻が開講する授業科目とする。

2 前項の規定にかかわらず、履修しようとする授業科目の履修者が早期履修生(大学院科目等履修生)のみである場合には、開講しない場合がある。

(履修単位の上限)

第 6 条 早期履修生(大学院科目等履修生)が履修することができる単位数は、10 単位以内とする。

(修得した単位の取扱い)

第7条 早期履修生(大学院科目等履修生)が修得した単位は、所属学科(専攻)の卒業要件単位に含めることはできない。

(規程の改廃)

第8条 この規程の改廃は、大学院運営委員会の審議を経るものとする。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、学部学生の大学院授業科目の早期履修に関し必要な事項は、学長が別に定める。

(所管事務)

第10条 学部学生の大学院授業科目の早期履修に関する事務は、教務室が行う。

附 則

第1条 この規程は、平成31年1月1日から施行する。

大同大学大学院外国人留学生規程

平成 2 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 46 条の規定に基づき、大同大学大学院(以下「本大学院」という。)の外国人留学生に関し、必要な事項を定める。

(定義)

第 2 条 大学院外国人留学生(以下「外国人留学生」という。)とは、出入国管理及び難民認定法(昭和 26 年 10 月 4 日政令第 319 号)別表第 1 に規定する「留学」の在留資格により、本大学院に入学を許可された者をいう。

(外国人留学生の区分)

第 3 条 外国人留学生の区分は、次の各号のとおりとする。

- (1) 大学院学則第 28 条第 2 項により入学を許可された者(以下「大学院学生」という。)
- (2) 大学院科目等履修生
- (3) 大学院特別聴講学生
- (4) 大学院研究生
- (5) 大学院特別研究学生

(大学院学生の入学志願の手続)

第 4 条 大学院学生として入学を志願する者は、大学院学則第 26 条に定めるほか、次の各号に定める書類を添えて願出しなければならない。

- (1) 履歴書
- (2) 最終出身学校の卒業(修了)証明書及び学業成績証明書
- (3) 独立行政法人日本学生支援機構の行う日本留学試験において、本学が別に指定する科目を受験していることが証明できる書類
- (4) 志願理由説明書
- (5) 在留資格を証明する書類
- (6) 身元保証書

(大学院学生の選考)

第 5 条 入学志願者の選考は、書類審査及び面接試験による総合評価により行い、大学院教授会の審議を経て学長が決定する。

2 前項に定めるほか、選考の実施に関し必要な事項は、別に定める。

(大学院科目等履修生の出願手続)

第 6 条 大学院科目等履修生の出願手続は、大同大学大学院科目等履修生規程第 3 条の規定によるほか、次の各号に掲げる書類を添付しなければならない。

- (1) 在留資格を証明する書類
- (2) 身元保証書

(大学院特別聴講生の出願手続)

第7条 大学院特別聴講学生の出願手続は、大同大学大学院特別聴講学生規程第3条の規定によるほか、次の各号に掲げる書類を添付しなければならない。

- (1) 在留資格を証明する書類
- (2) 身元保証書

(大学院研究生の出願手続)

第8条 大学院研究生の出願手続は、大同大学大学院研究生規程第3条の2の規定によるほか、次の各号に掲げる書類を添付しなければならない。

- (1) 在留資格を証明する書類
- (2) 身元保証書

(大学院特別研究学生の出願手続)

第9条 大学院特別研究学生の出願手続は、大同大学大学院特別研究学生規程第3条の規定によるほか、次の各号に掲げる書類を添付しなければならない。

- (1) 在留資格を証明する書類
- (2) 身元保証書

(所管事務)

第10条 この規程における事務の所管は、第1条から第3条及び第10条にあつては入試・広報室及び教務室、第4条及び第5条にあつては入試・広報室、第6条から第9条にあつては教務室とする。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院特別研究学生規程

平成 25 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 46 条の規定に基づき、大同大学大学院(以下「本大学院」という。)の大学院特別研究学生(以下「特別研究学生」という。)に関し、必要な事項を定める。

(他の大学院との協議)

第 2 条 他の大学院との協議は、次の各号に掲げる事項について、大学院教授会の審議を経て、学長が行う。

- (1) 研究課題
- (2) 研究機関
- (3) 対象となる学生
- (4) 研究終了の取扱い
- (5) 学生の身分の取扱い
- (6) 授業料等の費用に関する取扱い
- (7) その他の必要事項

(出願手続)

第 3 条 前項の協定に基づき特別研究学生として研究指導を受けようとする者(以下「出願者」という。)は、出願者が属する大学院の長を経て、所定の期間内に、大学院特別研究学生入学願いにより学長に願い出なければならない。

(入学許可)

第 4 条 学長は、前条の願い出があつたときは、当該研究指導担当教員の承認を得た者について、大学院教授会の審議を経て、特別研究学生として入学を許可する。

2 学長は、前項の入学許可をしたときは、出願者が属する大学院の長を経て、出願者に通知する。

3 学長は、入学を許可した者に、その身分を証する証明書を交付することができる。

(入学時期及び研究期間)

第 5 条 特別研究学生の入学時期は、学期の始めとする。ただし、当該特別研究学生の属する大学院からの申請に基づき、学長が必要と認めた場合は、学期の始めとしないことができる。

2 特別研究学生の研究期間は、1 年以内とする。ただし、博士後期課程に在籍する学生にあつては、当該特別研究学生の所属する大学院の長からの申請に基づき、学長が必要と認めた場合は、更に 1 年以内に限り、その期間を延長することができる。

(研究指導状況報告書)

第 6 条 研究科長は、特別研究学生が所定の研究指導を終了したときは、当該特別研究学生の研究指導担当教員の報告に基づき、当該特別研究学生が属する大学院の長に研究指導状況報告書等を交付する。

(入学検定料及び納付金)

第7条 特別研究学生の入学検定料及び納付金については、別に定める。

(災害保険等への加入)

第8条 特別研究学生は、学生教育研究災害傷害保険及び学長が加入の必要があると認めたその他の災害保険等に加入しなければならない。

(入学許可の取消し)

第9条 学長は、特別研究学生が次の各号の一に該当する場合は、当該他の大学院と協議の上、大学院教授会の審議を経て、入学の許可を取り消すことができる。

(1) 成業の見込みがないと認められるとき

(2) 本大学院の規則等に違反し、学生としての本分に反する行為があると認められるとき

(大学院学則等の準用)

第10条 特別研究学生には、この規程に定めるもののほか、大学院学則及び諸規程を準用する。

(所管事務)

第11条 特別研究学生に関する事務は、教務室が行う。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院特別聴講学生規程

平成 25 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 46 条の規定に基づき、大同大学大学院(以下「本大学院」という。)の大学院特別聴講学生(以下「聴講学生」という。)について、必要な事項を定める。

(出願資格)

第 2 条 本大学院が開講する一又は複数の授業科目について、聴講学生として履修を志願することができる者は、本大学院との間に授業科目の履修に関する協定を締結した他の大学院又は外国の大学院(以下「他の大学院」という。)に在籍し、当該他の大学院が本大学院における聴講学生として履修を志願することを許可した者とする。

2 前項に規定する授業科目とは、次に掲げる各号に規定する授業科目とする。

(1) 大学院学則第 15 条に規定する各教育課程表の授業科目

(2) 他の大学院との個別の協議に基づき本大学院が特別に開設する授業科目

(出願手続)

第 3 条 前条第 1 項の協定に基づき聴講学生として履修を志願する者(以下「志願者」という。)は、所定の願書に履修を志願する授業科目の名称、単位数及び履修期間を記入し、志願者が属する他の大学院の長が発行した出願許可書等を添えて、学長に願い出なければならない。

2 前項の規定にかかわらず、第 2 条第 2 項第 2 号の授業科目の履修を志願する場合にあつては、他の大学院との協議に基づく出願手続とすることができる。

(入学許可)

第 4 条 学長は、前条の願い出があつたときは、聴講授業科目の授業担当教員の承認を得た者について、大学院教授会の審議を経て、聴講学生として、入学を許可する。

2 学長は、前項の入学許可をしたときは、志願者が属する大学院の長を経て、志願者に通知する。

3 学長は、入学を許可した者に、その身分を証する証明書を交付することができる。

(入学時期及び聴講期間)

第 5 条 聴講学生の入学時期は、学期の始めとする。

2 聴講学生の聴講期間は、履修する授業科目の履修期間とする。

(履修手続)

第 6 条 前条の許可を受けた者は、所定の履修手続を行わなければならない。

(成績評価)

第 7 条 聴講学生が履修した授業科目の成績の評価については、大学院学則第 17 条の 2 第 4 項及び第 5 項を準用する。

2 学長は、前項の成績評価について、聴講学生が属する他の大学院の長を経て、本人に通知する。

(履修中止)

第 8 条 聴講学生が病気その他の理由により聴講学生としての履修を中止しようとするとき

は、大同大学学長に願い出て、その許可を受けなければならない。

(入学検定料及び納付金)

第9条 聴講学生の入学検定料及び納付金については、別に定める。

(大学院学則等の準用)

第10条 聴講学生には、この規程に定めるもののほか、大学院学則及び諸規程を準用する。

(所管事務)

第11条 聴講学生に関する事務は、教務室が行う。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院入学前の既修得単位の認定に関する規程

平成 25 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 19 条の規定に基づく入学前の既修得単位の認定については、この規程の定めるところによる。

(単位認定することができる入学前の既修得単位)

第 2 条 単位を認定することができる入学前の既修得単位は、大学院学則第 19 条第 1 項に規定する大学院において履修した授業科目について修得した単位(科目等履修生として修得した単位を含む。)とする。

2 前項の規定により認定することができる単位は、大学院学則第 19 条第 2 項に規定する単位を越えない範囲とする。

(単位認定の申請)

第 3 条 前条に規定する学修について単位の認定を受けようとする者(以下「申請者」という。)は、入学年度の前期の授業開始後一週間以内に、入学前の既修得単位の認定に係る単位認定申請書に成績証明書、その他必要書類を添えて、学長に申請しなければならない。

2 単位の認定を受けようとする授業科目には、申請する当該学期に履修している授業科目を含めることはできない。

(単位認定)

第 4 条 前条の申請があつたときは、当該専攻において単位認定の可否について審査する。

2 学長は、前項の審査結果に基づき、大学院教授会の審議を経て、単位を認定する。

3 前項の規定により単位の認定を受けた授業科目の成績の評語は、「認定」とする。

4 学長は、第 2 項により単位認定を行つたときは、単位認定通知書により当該申請者に通知する。

(雑則)

第 5 条 この規程に定めるもののほか、入学前の既修得単位の認定に関し必要な事項は、大学院運営委員会の審議を経て、別に定める。

(所管事務)

第 6 条 入学前の既修得単位の認定に関する事務は、教務室が行う。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院他の大学院における授業科目の履修等に関する規程

平成 25 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 18 条の規定に基づく他の大学院又は外国の大学院(以下「他の大学院」という。)における授業科目の履修等については、この規程の定めるところによる。

(他の大学院との協議)

第 2 条 他の大学院との協議は、次の各号に掲げる事項について、大学院教授会の審議を経て、学長が行う。

- (1) 履修する授業科目の範囲
- (2) 履修期間
- (3) 対象となる学生
- (4) 履修の手続き
- (5) 学生の身分の取扱い
- (6) 授業料等の費用に関する取扱い
- (7) その他の必要事項

(願出手続)

第 3 条 前条により他の大学院において授業科目を履修しようとする者は、指導教員の承諾を得て、次の各号に掲げる書類を所定の期間内に学長に提出しなければならない。

- (1) 他の大学院の授業科目の履修願い
- (2) 他の大学院の要求する書類

2 外国の大学院において授業科目を履修しようとする者は、大学院学則第 32 条の定めるところにより、

前項各号の書類に加え、留学願いを所定の期間内に学長に提出しなければならない。

(許可)

第 4 条 学長は、前条の願い出があつたときは、大学院教授会の審議を経て、当該学生の授業科目の履修について当該他の大学院に依頼し、その承諾を得たうえ、これを許可する。

(派遣期間)

第 5 条 前条の許可を受けた学生(以下「派遣学生」という。)の他の大学院への派遣期間は、1 年以内とする。

2 前項の規定にかかわらず、博士後期課程の学生にあつては、大学院教授会が教育上特に必要と認めるときは、さらに 1 年以内に限り、その期間を延長することができる。

3 派遣学生の他の大学院への派遣期間は、在学年数に算入する。

(履修終了の報告)

第 6 条 派遣学生は、他の大学院における派遣期間が終了したときは、直ちに履修報告書及び当該他の大学院の交付する成績証明書等を学長に提出しなければならない。

(単位認定の範囲)

第7条 派遣学生の他の大学院における授業科目の履修により修得した単位は、大学院学則第18条第1項及び第19条第2項に規定する単位を越えない範囲で、本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

(単位認定の申請)

第8条 他の大学院における授業科目の履修により修得した単位について、本大学院の単位認定を受けようとする者は、他の大学院における授業科目の履修に係る単位認定申請書に成績証明書、その他必要書類を添えて、学長に申請しなければならない。

2 単位の認定を受けようとする授業科目には、申請する当該学期に履修している授業科目を含めることはできない。

(単位認定)

第9条 派遣学生から前条の申請があつたときは、当該専攻において認定の可否について審査する。

2 学長は、前項の審査結果に基づき、大学院教授会の審議を経て、単位を認定する。

3 前項により単位認定を受けた授業科目の成績の評語は、「認定」とする。

4 学長は、第2項により単位認定を行つたときは、単位認定通知書により当該派遣学生に通知する。

(学生納付金)

第10条 派遣学生は、派遣期間中においても、大学院学則第38条の2に規定する学生納付金を納付しなければならない。

(災害保険等への加入)

第11条 派遣学生は、学生教育研究災害傷害保険及び学長が加入の必要があると認めたその他の災害保険等に加入しなければならない。

(派遣許可の取消し)

第12条 学長は、派遣学生が次の各号の一に該当する場合は、当該他の大学院と協議のうえ、大学院教授会の審議を経て、派遣の許可を取り消すことができる。

(1) 成業の見込みがないと認められるとき

(2) 当該他の大学院の規則等に違反し、学生としての本分に反する行為があると認められるとき

(雑則)

第13条 この規程に定めるもののほか、他の大学院における授業科目の履修等に関し必要な事項は、大学院運営委員会の審議を経て、別に定める。

(所管事務)

第14条 他の大学院における授業科目の履修等に関する事務は、教務室が行う。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院他の大学院等における研究指導に関する規程

平成 25 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 13 条の 2 第 2 項の規定に基づく他の大学院又は研究所等若しくは外国の大学院又は研究所等(以下「他の大学院等」という。)における研究指導については、この規程の定めるところによる。

(他の大学院等との協議)

第 2 条 他の大学院等との協議は、次の各号に掲げる事項について、大学院教授会の審議を経て、学長が行う。

- (1) 研究課題
- (2) 研究期間
- (3) 対象となる学生
- (4) 研究終了の取扱い
- (5) 学生の身分の取扱い
- (6) 授業料等の費用に関する取扱い
- (7) その他の必要事項

(願出手続)

第 3 条 前条により他の大学院等において研究指導を受けようとする者は、指導教員の承諾を得て、次の各号に掲げる書類を所定の期間内に学長に提出しなければならない。

- (1) 他の大学院等での研究指導願い
- (2) 他の大学院等の要求する書類

2 外国の大学院又は研究所等において研究指導を受けようとする者は、大学院学則第 32 条の定めるところにより、前項各号の書類に加え、留学願いを所定の期間内に学長に提出しなければならない。

(許可)

第 4 条 学長は、前条の願い出があつたときは、大学院教授会の審議を経て、当該学生の研究指導について当該他の大学院等に依頼し、その承諾を得たうえ、これを許可する。

(派遣期間)

第 5 条 前条の許可を受けた学生(以下「研究派遣学生」という。)の他の大学院等への派遣期間は、1 年以内とする。

2 前項の規定にかかわらず、博士後期課程の学生にあつては、大学院教授会の審議を経て、学長が教育研究上特に必要と認めるときは、さらに 1 年以内に限り、その期間を延長することができる。

3 研究派遣学生の他の大学院等への派遣期間は、在学年数に算入する。

(研究終了の報告)

第 6 条 研究派遣学生は、他の大学院等における派遣期間が終了したときは、直ちに研究成果

報告書及び当該他の大学院等の交付する研究指導状況報告書等を学長に提出しなければならない。

(研究指導の認定)

第7条 研究派遣学生が他の大学院等において受けた研究指導は、前条の研究成果報告書及び研究指導状況報告書に基づき、大学院学則第20条に規定する課程修了に必要な研究指導として認定することができる。

2 研究派遣学生の属する専攻の専攻長は、前条の報告があつたときは、当該専攻において研究指導認定の可否について審査する。

3 研究指導の認定は、前項の審査結果に基づき、大学院教授会の審議を経て、学長が行う。

4 学長は、前項により研究指導の認定を行つたときは、研究指導認定通知書により当該研究派遣学生に通知する。

(学生納付金)

第8条 研究派遣学生は、派遣期間中においても、大学院学則第38条の2に規定する学生納付金を納付しなければならない。

(災害保険等への加入)

第9条 研究派遣学生は、学生教育研究災害傷害保険及び学長が加入の必要があると認めたその他の災害保険等に加入しなければならない。

(派遣許可の取消し)

第10条 学長は、研究派遣学生が次の各号の一に該当する場合は、当該他の大学院等と協議のうち、大学院教授会の審議を経て、派遣の許可を取り消すことができる。

(1) 成業の見込みがないと認められるとき

(2) 当該他の大学院等の規則等に違反し、学生としての本分に反する行為があると認められるとき

(所管事務)

第11条 他の大学院又は研究所等における研究指導に関する事務は、教務室が行う。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院連携大学院教育に関する規程

平成 25 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 14 条の 2 の規定に基づく大同大学大学院(以下「本大学院」という。)における連携大学院教育については、この規程の定めるところによる。

(定義)

第 2 条 この規程において連携大学院教育とは、協定等に基づき、国公立及び民間の研究所等(以下「研究所等」という。)の研究者を、その身分を保持させたまま、本大学院の客員教授として招へいするとともに、当該研究所等の研究環境を活用して、本大学院の正規の学生が受ける大学院学則第 13 条の 2 第 1 項に規定する研究指導(以下「研究指導」という。)を、当該研究所等において行うことをいう。(連携大学院教育の対象とする研究所等)

第 3 条 連携大学院教育の対象とする研究所等は、大学院教授会の審議を経て、学長が認めた研究所等とする。

(連携大学院教育の対象とする本大学院の専攻)

第 4 条 連携大学院教育の対象とする本大学院の専攻は、本大学院における各研究科の全ての専攻とする。

(協定等の締結)

第 5 条 本大学院が連携大学院教育を行おうとするときは、大同大学(以下「本学」という。)と研究所等との間で、次の各号に掲げる事項を定めた協定等を締結する。

- (1) 研究所等の研究者を本大学院の客員教授に委嘱する際の手続きに関する事項
- (2) 前号により委嘱された院客員教授(以下「客員教授」という。)の職務に関する事項
- (3) 客員教授と本大学院教員との役割分担に関する事項
- (4) 学生の研究指導に関する事項
- (5) 学生の修学に関する事項
- (6) 経費負担に関する事項
- (7) その他連携大学院教育を実施するうえで必要な事項

2 前項の協定は、大学院教授会の審議を経て、大同大学学長(以下「学長」という。)が締結する。

(客員教授)

第 6 条 客員教授の委嘱は、大同大学客員教授等規程による。

2 客員教授は、研究指導を行う学生の指導教員となり、次に掲げる業務を行う。

- (1) 学生の研究指導に関すること
- (2) 学位論文審査に関すること
- (3) その他研究指導に必要な業務に関すること

(副指導教員)

第 7 条 研究所等に派遣される学生(以下「連携大学院派遣学生」という。)の派遣に当たっては、当該専攻は、本大学院担当教員 1 名を副指導教員として、選任する。

2 副指導教員は、指導教員と連携して、次に掲げる業務を行う。

- (1) 連携大学院派遣学生の修学指導に関すること
 - (2) 連携大学院派遣学生の進学又は就職指導に関すること
 - (3) その他連携大学院派遣学生の厚生補導に必要な業務に関すること
- (連携大学院派遣学生)

第 8 条 連携大学院派遣学生は、本大学院に在籍し、客員教授により研究指導を受けることを希望する者の中から、当該専攻が推薦し、大学院教授会の審議を経て、学長が決定する。

2 連携大学院派遣学生の学生数は、当該専攻の学生数の半数を超えないものとする。

3 連携大学院派遣学生の研究指導を受ける期間は原則、修士課程の学生にあつては 2 年とし、博士後期課程の学生にあつては 3 年とする。

4 連携大学院派遣学生が研究所等で必要な研究指導を受けた期間は、在学年数に算入する。

5 連携大学院派遣学生の本大学院の修了に必要な単位は、本大学院において修得しなければならない。

6 連携大学院派遣学生は、研究所等における研究指導の期間が終了したときは、直ちに研究成果報告書及び研究所等が交付する研究指導状況報告書を学長に提出しなければならない。

7 連携大学院派遣学生は、研究所等で研究指導を受けている期間中においても、本大学院の学生としての学生納付金を納付しなければならない。

8 連携大学院派遣学生は、学生教育研究災害傷害保険及び学長が加入の必要があると認めたその他の災害保険等に加入しなければならない。

(研究指導の認定)

第 9 条 連携大学院派遣学生が、研究所等において受けた研究指導は、前条第 6 項の報告書に基づき、大学院教授会の審議を経て、研究指導として認定することができる。

(派遣の取消し)

第 10 条 学長は、連携大学院派遣学生が次の各号の一に該当する場合は、当該研究所等と協議のうえ、大学院教授会の審議を経て、派遣の許可を取り消すことができる。

- (1) 成業の見込がないと認められるとき
- (2) 当該研究所等の規則等に違反し、学生としての本分に反する行為があると認められるとき

(連携大学院教育の運営)

第 11 条 連携大学院教育の円滑な運営を図るため、各研究所等との間にそれぞれ連携大学院教育連絡協議会(以下「連絡協議会」という。)を置く。

2 前項に規定する連絡協議会に関する事項については、別に定める。

(雑則)

第 12 条 この規程に定めるほか、連携大学院教育に関し必要な事項は、大学院教授会の審議を経て、学長が定める。

(所管事務)

第 13 条 連携大学院教育に関する事務は、教務室が統括する。

附 則 < 省 略 >

大同大学学籍異動に関する取扱規程

平成 27 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学学則(以下「学則」という。)第 28 条から第 34 条及び大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 31 条から第 37 条に基づく、学部及び大学院の学生の学籍異動(転学、留学、休学、復学、退学、除籍、復籍)の取扱いについては、この規程の定めるところによる。

(転学)

第 2 条 転学を願い出る者は、所定の期日までに保証人連署による転学願を提出しなければならない。

2 転学の許可は、教務委員会又は大学院運営委員会の審議を経て、学長が行い、その結果を願出者に通知するものとする。

(留学)

第 3 条 留学を願い出る者は、所定の期日までに保証人連署による留学願を提出しなければならない。

2 留学の許可は、教務委員会又は大学院運営委員会の審議を経て、学長が行い、その結果を願出者に通知するものとする。

(休学)

第 4 条 学則第 30 条及び大学院学則第 33 条に規定するやむを得ない事由は、次の各号のとおりとする。

(1) 修学心不足

(2) 精神的事由

(3) 負傷

(4) 進路検討

(5) 経済的困難

(6) 履修不要

(7) 学長が特に必要と認めた事由

2 休学を願い出る者は、次の各号に掲げる区分及び期限に従い、学部の学生にあつては主指導教員と、大学院の学生にあつては指導教員と面談のうえ、保証人連署による休学願を提出しなければならない。

(1) 前期又は 1 年の休学を希望する者 原則、前年度の 3 月末日まで

(2) 後期の休学を希望する者 原則、当該年度の 9 月末日まで

3 次の各号に掲げる休学事由に該当する場合は、当該各号に掲げる書類を休学願に添えて提出しなければならない。

(1) 病気 医師による診断書

(2) 負傷 医師による診断書

(3) 学長が特に必要と認めた事由 学長が認めたことを証明する書類

4 休学の許可は、教務委員会又は大学院運営委員会の審議を経て、学長が行い、その結果を願出者に通知するものとする。

(復学)

第 5 条 復学を願い出る者は、次の各号に掲げる区分及び期限に従い、学部の学生にあつては主指導教員と、大学院の学生にあつては指導教員と面談のうえ、保証人連署による復学願を提出しなければならない。

(1) 前期末に休学期間が終了する者 原則、当該年度の 9 月末日まで

(2) 後期末に休学期間が終了する者 原則、当該年度の 3 月末日まで

2 学則第 31 条又は大学院学則第 34 条の規定にかかわらず、第 4 条第 3 項第 1 号又は第 2 号の事由により休学した者にあつては、修学に支障のない旨を証明する医師の診断書を復学願に添えて、提出しなければならない。

3 復学の許可は、教務委員会又は大学院運営委員会の審議を経て、学長が行い、その結果を願出者に通知するものとする。

(退学)

第 6 条 退学を願い出る者は、次の各号に掲げる区分及び期限に従い、学部の学生にあつては主指導教員と、大学院の学生にあつては指導教員と面談のうえ、保証人連署による退学願を提出しなければならない。

(1) 前期に退学を希望する者 原則、当該年度の 9 月末日まで

(2) 後期に退学を希望する者 原則、当該年度の 3 月末日まで

2 退学の許可は、教務委員会又は大学院運営委員会の審議を経て、学長が行い、その結果を願出者に通知するものとする。

(除籍)

第 7 条 除籍にかかる事由が発生した場合には、教務委員会又は大学院運営委員会の審議を経て、学長が決定し、その結果を除籍者に通知するものとする。

(復籍)

第 8 条 復籍を願い出る者は、所定の期日までに保証人連署による復籍願を提出しなければならない。

2 復籍の許可は、教務委員会又は大学院運営委員会の審議を経て、学長が行い、その結果を願出者に通知するものとする。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院一般奨学生規程

平成2年10月8日制定

平成21年4月1日改正

(目的)

第1条 この規程は、大同大学大学院(以下「大学院」という。)に在籍する優秀な学生に対して、奨学金を貸与することによって学問研究を助成し、将来社会に貢献する有為な人材を育成することを目的とする。

(資格)

第2条 一般奨学生となることができる者は、本大学院の学生で人物、学業ともに優れ、かつ健康であつて経済的な理由により修学が困難で、一般奨学金の貸与が必要であると認められる者でなければならない。

(一般奨学金)

第3条 一般奨学金の貸与額は、月額60,000円とし、無利子貸与とする。

(期間)

第4条 一般奨学生の期間は、原則として次のとおりとする。

修士課程 2年

博士課程後期3年の課程 3年

(以下「博士後期課程」という。)

(採用人員)

第5条 採用人員は、次のとおりとする。

修士課程 各年次6名以内

博士後期課程 各年次3名以内

(制限)

第6条 日本学生支援機構又はその他諸団体の奨学生は、一般奨学生となることはできない。ただし、博士後期課程においては、特別の事情があると学長が認めた場合は、この限りでない。

(申請手続)

第7条 一般奨学金の貸与を希望する者は、所定の申請書及び書類を学長に提出しなければならない。

(選考)

第8条 一般奨学生の選考は、学長が行う。

(誓約書)

第9条 一般奨学金の貸与が決定された者は、連帯保証人1名と連署した誓約書を学長に提出しなければならない。

(打切)

第10条 一般奨学生が次の各号の一に該当するときは、学長は一般奨学生の貸与を打ち切ることができる。

(1) 休学、退学又は除籍のとき

(2) 学業成績又は性行が不良となつたとき

(3) 第6条の規定により、一般奨学生となることができなくなつたとき

(4) その他一般奨学生として、適当でないと認められる事由が生じたとき

(返還)

第 11 条 一般奨学生の貸与を受けた者は、別に定める細則により、貸与された総額を大学院修了(退学、除籍を含む。)年度の翌年度から 10 年以内に返還しなければならない。ただし、本学大学院修士課程、博士後期課程共に奨学金の貸与を受けた者は、15 年以内に返還しなければならない。

(届出)

第 12 条 一般奨学生又は一般奨学生であつた者が、次の各号の一に該当するときは、遅滞なく届け出なければならない。

- (1) 休学、退学又は復学しようとするとき
- (2) 一般奨学金を辞退しようとするとき
- (3) 本人又は連帯保証人の氏名、住所、その他重要な事項に変更のあつたとき

(免除と猶予)

第 13 条 一般奨学金の貸与を受けた者が、死亡又は著しい障害その他の重大な理由により、返還することが困難となつた場合には、学長は本人又は連帯保証人の願い出により、第 11 条の規定にかかわらず、その返還額の全部又は一部を免除又は猶予することができる。

2 博士後期課程を修了し、本学教員に就任した場合には、毎年 10 月 30 日までに願い出ることにより、第 11 条の規定にかかわらず、その年度の返還を免除する。

(細則)

第 14 条 この規程の実施に必要な細則は、別に定める。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院一般奨学生規程施行細則

平成 2 年 10 月 8 日制定

平成 21 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 この細則は、大同大学大学院一般奨学生規程第 14 条の規定に基づき、一般奨学生の申請及び決定並びに返還に関して必要な事項を定める。

(申請書類)

第 2 条 一般奨学生を希望するものは、指定の期日までに、次の各号に掲げる書類を学長に提出しなければならない。

- (1) 一般奨学金貸与申請書
- (2) その他大学が必要と認めた書類

(選考方法)

第 3 条 一般奨学生の選考は、次のとおりとする。

修士課程

申請書類、学部の成績(大学院修士課程入学試験の成績を含む。)又は大学院修士課程の成績を総合的に判断して行う。

博士課程後期 3 年の課程(以下「博士後期課程」という。)

申請書類、修士課程の成績等(大学院博士後期課程入学試験の成績を含む。)又は大学院博士後期課程の成績を総合的に判断して行う。

(決定通知)

第 4 条 学長は、一般奨学生を決定したときは、本人と連帯保証人に、直ちに文書をもって通知する。

(誓約書)

第 5 条 一般奨学生決定の通知を受けた者は、通知を受けた日から 10 日以内に、誓約書を学長に提出しなければならない。

(貸与方法)

第 6 条 一般奨学金の貸与は、毎月 20 日本人名義の銀行口座に振り込むものとする。ただし、当日が土曜日、日曜日又は休日等に当たるときは、その前日とする。

2 一般奨学生の振り込み口座は、必ず学生本人の名義とし、採用決定の際振込口座届を提出しなければならない。

3 一般奨学生は、大学院修了又はその他の事由により一般奨学生の資格を失ったときは、一般奨学金借用証書を学長に提出しなければならない。

(打切通知)

第 7 条 学長は、一般奨学金の貸与を打ち切ったときは、本人と連帯保証人に、直ちに文書をもって通知する。

(返還方法)

第 8 条 一般奨学金は、大学院修了(退学、除籍を含む。)年度の翌年度から 10 年以内に返還しなければならない。ただし、本学大学院修士課程、博士後期課程共に奨学金の貸与を受けた者は、15 年以内に返還しなければならない。

2 返還は、元金均等割とし、毎月 16 日に郵便局又は銀行の預貯金口座振替によって返還する。当日が金融機関の休業日の場合は、翌営業日とする。

3 本人の都合により、返還期間の短縮又は返還時期の繰り上げを行うことができる。

4 返還を猶予された者の返還方法は、その都度決める。

(振替案内)

第9条 本人または連帯保証人に、毎年4月に残額と次回振替額を記した振替案内を送付する。

(延滞利息)

第10条 一般奨学生であったものが、正当な理由無くして一般奨学金の返還を延滞したときは、約束の返済期日を6か月過ぎる毎に延滞した額の5% (年額) 日割計算を延滞利息として徴収する。

(返還の督促)

第11条 奨学生であった者が、正当な理由がなく奨学金の返還を延滞したときは督促する。

2 前項の規定による督促は、次の各号の一に該当するときは、その者の連帯保証人にも行う。

- (1) 奨学生であった者の住所の変更の届出がない等の理由により、その所在が不明のとき。
- (2) 前項の規定による督促を重ねても奨学生であった者が返還を行わないとき。
- (3) その他の事情があるとき。

3 督促に関する事務の詳細は、別の要領に定める。

(返還の強制)

第12条 奨学生であった者又は連帯保証人が、前条の規定による督促にも応じず、返還を著しく延滞したときは、法令の定める手続きにより、未返還奨学金を返還請求するものとする。

(返還額の未納処理)

第13条 返還額の未納処理については、別の基準に定める。

(所管)

第14条 一般奨学金に関する事務は、学生室が行う。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院博士後期課程特別奨学規程

平成 14 年 3 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学大学院学則第 40 条に基づく大同大学（以下「本学」という。）の大学院博士後期課程において、特に優秀な人材を育成することを目的とする特別奨学制度については、この規程の定めるところによる。

(資格)

第 2 条 特別奨学金を受けることができる者（以下「特奨生」という。）の資格は、学力及び人物が特に優秀で、かつ、健康で博士号取得に相応しい能力を持った、次の一に該当する者とする。

- (1) 本学の大学院博士後期課程の行う一般学生入学試験又は社会人学生入学試験の成績が特に優秀で、引き続き在学中の学力も特に優秀である者
- (2) 1 年次の学力が特に優秀で、引き続き在学中の学力も特に優秀である者
- (3) 2 年次の学力が特に優秀である者

(特別奨学金の額)

第 3 条 特別奨学金は、年額 200,000 円とする。

(特別奨学金の給付)

第 4 条 特別奨学金の給付期間は、特奨生採用年度から最短修業年限とする。
2 給付の方法は、学生納付金納入時に、前条の額を免除することとする。

(採用人員)

第 5 条 特奨生の採用人員は、毎年度若干名とする。

(選考)

第 6 条 特奨生の選考は、大学院運営委員会の審議を経て、学長が決定する。
2 特奨生の選考に関する事項は、別に定める。

(誓約書)

第 7 条 特奨生として採用が決定した者は、連帯保証人 1 名と連署した誓約書を学長に提出しなければならない。

(取消)

第 8 条 特奨生が次の各号の一に該当するときは、大学院運営委員会の審議を経て、学長がその資格を取消すものとする。

- (1) 休学、退学又は除籍のとき
- (2) 学則違反をしたとき
- (3) 学業成績が特奨生として不振と判断したとき
- (4) 出席状況が特奨生として不良と判断したとき

(停止・返還)

第 9 条 前条の規程により特奨生の資格を取消したときは特別奨学金の給付を停止し、事情によっては、当該年の交付額を返還させることがある。

2 特奨生が疾病又は経済的事由等によりやむを得ず休学する場合は、特別奨学金の給付を停止し、復学したときに特別奨学金の給付を復活する。

(補則)

第 10 条 この規程の施行に関する必要な事項は、学長がこれを定める。

(事務)

第 11 条 第 2 条第 1 号に係る選考に関する事務は入試・広報室が行い、第 2 条第 2 号及び第 3 号に係る選考に関する事務は学生室が行い、以降の事務は学生室が行う。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院学生表彰規程

平成7年10月17日制定

平成30年4月1日改正

(趣旨)

第1条 大同大学大学院学則第41条第2項に基づく学生の表彰は、この規程の定めるところによる。

(表彰の種類)

第2条 表彰の種類は、次の各号のとおりとする。

- (1) 大同大学学長賞
- (2) 大同大学奨励賞

(対象)

第3条 大同大学学長賞（以下「学長賞」という。）は、修士論文が特に優秀で、他の学生の模範と認められた者に授与する。

2 大同大学奨励賞（以下「奨励賞」という。）は、次の各号の一に該当する個人又は団体に対して授与する。

- (1) 課外活動において、特に優秀な成績をおさめたもの
- (2) 研究活動において、特に顕著な業績をおさめたもの
- (3) 特に顕著な功績、善行があつたもの

(授与人数の制限)

第4条 学長賞は、各専攻2名以内、コースを有する専攻については、各コース1名以内の者に授与する。

(決定)

第5条 表彰は、大学院運営委員会の審議を経て学長が決定する。

(委任)

第6条 前4条に規定するほか、表彰に関し必要な事項は、別に定める。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院学生表彰規程実施細則

(平成 30 年 6 月 8 日制定)

(趣旨)

第 1 条 大同大学大学院学生表彰規程（以下「表彰規程」という。）第 6 条に基づく大同大学の大学院学生の表彰（以下「表彰」という。）に関し必要な事項については、この細則の定めるところによる。

(表彰の種類)

第 2 条 表彰の種類は、表彰規程の定めるところにより、次の各号のとおりとする。

- (1) 大同大学学長賞
- (2) 大同大学奨励賞

(対象)

第 3 条 大同大学学長賞（以下「学長賞」という。）は、表彰規程の定めるところにより、学位論文が特に優秀で、他の学生の模範と認められた者に授与する。

2 大同大学奨励賞（以下「奨励賞」という。）は、表彰規程の定めるところにより、次の各号の一に該当する個人又は団体に対して授与する。

- (1) 課外活動において、特に優秀な成績をおさめたもの
- (2) 研究活動において、特に顕著な業績をおさめたもの
- (3) 特に顕著な功績、善行があつたもの

(対象とするものの定義)

第 4 条 前条第 2 項第 1 号に規定するものとは、国際大会の出場者、全国大会の入賞者又はこれに準ずる成績をおさめたものとする。

2 前条第 2 項第 2 号に規定するものとは、次の各号の一に該当するものとする。

- (1) 国際的又は全国的な学会等で本学の名誉を高める顕著な業績をおさめたもの
- (2) 修了後、在学中の研究活動業績により、特に顕著な功績があつたもの

3 前条第 2 項第 3 号に規定するものとは、次の各号の一に該当するものとする。

- (1) 学内又は学外における社会貢献等の活動実績が、本学の名誉を高める模範的な行為として認められたもの
- (2) 前号のほか、特に顕著な功績、善行があつたもの

(授与人数等の制限)

第 5 条 表彰するものの数は、制限しない。ただし、学長賞については、表彰規程の定めるところにより、各専攻 2 名以内とする。

2 賞を授与する回数は、制限しない。

(推薦方法)

第 6 条 表彰の推薦は、第 2 条から第 5 条の規定に基づき専攻等が行う。

2 推薦者は、下表のとおりとする。

賞の種類と区分	推薦者
第 3 条第 1 項	専攻
第 3 条第 2 項第 1 号	学生の所属クラブの顧問又は監督
第 3 条第 2 項第 2 号	専攻
第 3 条第 2 項第 3 号	専攻又は学生部

3 推薦の時期は、次の各号のとおりとする。

- (1) 学長賞 原則として、毎年 2 月とする。
- (2) 奨励賞 随時とする。ただし、推薦の事由が発生した日より、原則 2 ヶ月以内とする。

(表彰時期等)

第 7 条 表彰の時期は、次の各号のとおりとする。

- (1) 学長賞 学位記授与式
- (2) 奨励賞 その都度速やかに行う

2 前項の規定にかかわらず、学長が特に必要があると認めた場合は、随時行うことができる。

3 受賞者には、表彰状及び副賞を授与する。

附 則

第 1 条 この細則は、平成 30 年 6 月 1 日から施行する。

大同大学学生懲戒規程

平成 27 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大同大学学則(以下「学則」という。)第 39 条第 4 項及び大同大学大学院学則(以下「大学院学則」という。)第 42 条第 4 項の規定に基づき、大同大学(以下「本学」という。)の学部及び大学院の学生の懲戒について、必要な事項を定める。

(懲戒の内容)

第 2 条 懲戒の種類は学則第 39 条第 2 項及び大学院学則第 42 条第 2 項のとおりとし、その内容は、次の各号のとおりとする。

- (1) 退学 学生の身分を失わせること
- (2) 停学 一定の期間、教育課程の履修及び課外活動を禁止すること
- (3) 訓告 文書又は口頭により注意を与え、将来を戒めること

2 停学は、有期又は無期とし、有期の停学とは、期限を付して命じる停学をいい、無期の停学とは、期限を付さずに命じる停学をいう。

(厳重注意)

第 3 条 学長は、前条に規定する懲戒のほか、教育的指導の観点から、文書又は口頭により、厳重注意を行うことができる。

(懲戒対象行為)

第 4 条 懲戒の対象となる行為は、次の各号のとおりとする。

- (1) 刑罰法規に抵触する行為
- (2) 交通法規に違反する行為
- (3) 人権を侵害する行為
- (4) 情報倫理に反する行為
- (5) 論文等の作成における学問的倫理に反する行為
- (6) 本学の規則に違反する行為
- (7) 試験等における不正行為
- (8) 本学の教育研究等の業務を妨害する行為
- (9) その他、学生の本分に反すると認められる行為

(懲戒の量定)

第 5 条 懲戒処分の量定は、次に掲げる行為者の状態等並びに行為の悪質性及び重大性を総合的に判断して行う。

- (1) 非違行為の動機、態様及び結果
- (2) 故意又は過失の別及びその程度
- (3) 過去の非違行為の有無
- (4) 日常における生活態度及び非違行為後の対応

2 退学については、学則第 39 条第 3 項及び大学院学則第 42 条第 3 項の規定を考慮しなければならない。

(懲戒処分の手続)

第 6 条 学長は、学生が第 4 条に該当する行為を行つたと認められるとき、学部の学生にあつては学生委員

会に、大学院の学生にあつては大学院運営委員会に、当該学生に対する懲戒処分の当否についての審査を命ずる。

2 学生委員会及び大学院運営委員会は、当該事案を調査の上、第4条及び第5条に基づき、懲戒の要否及び懲戒の種類等について審査し、その結果を学長に報告する。

3 学長は、当該委員会の報告を受け、懲戒処分を行う。

4 学長は、必要があると認めるときは、当該委員会に対して再審査を求めることができる。

(懲戒処分の通知)

第7条 学長は、懲戒処分を行う学生に対して、懲戒通知書(別記様式1)を交付して行うとともに、その保証人に対し当該通知書の写しを送付するものとする。

2 学長は、懲戒処分の内容を告示(別記様式2)により学内に公示する。

(異議申し立て)

第8条 懲戒処分を受けた学生は、懲戒通知書の交付日から20日以内に、事実誤認、新事実の発見その他正当な理由がある場合は、その証拠となる資料を添えて、文書により学長に異議申し立てを行うことができる。

(自宅謹慎)

第9条 学長は、当該事案が退学又は停学に該当することが明白であると認めるときは、懲戒処分の決定前に、当該学生に対して自宅謹慎を命ずることができる。

2 自宅謹慎の期間は、停学の期間に算入できるものとする。

(指導監督者)

第10条 停学中の学生に対する教育上及び生活上の指導を行うため、指導監督者を置く。

2 指導監督者は、学部学生にあつては当該学生の主指導教員とし、大学院の学生にあつては、指導教員とする。

3 指導監督者は、当該学生の生活状況を把握し、適宜、学長に報告しなければならない。

(無期停学の解除)

第11条 学生委員会又は大学院運営委員会は、無期停学の学生について、指導監督者の要請に基づき、停学解除の妥当性について審議を行う。

2 学長は、学生委員会又は大学院運営委員会の審議を経て停学を解除できる。

3 学長は、無期停学解除の通知を、停学処分解除通知書(別記様式3)により当該学生に行うとともに、その保証人に対し当該通知書の写しを送付するものとする。

(懲戒の記録)

第12条 懲戒処分が行われた場合は、学籍簿に記録するものとする。

(規程の改廃)

第13条 この規程の改廃は、学生委員会及び大学院運営委員会の審議を経るものとする。

(雑則)

第14条 この規程に定めるもののほか、学生の懲戒の実施に関し必要な事項は、学生委員会及び大学院運営委員会の審議を経て、別に定める。

(所管事務)

第15条 学生の懲戒に関する事務は、学生室が行う。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考規程

(平成 23 年 1 月 1 日制定)

(目的)

第 1 条 この規程は、大同大学大学院(以下「大学院」という。)において、独立行政法人日本学生支援機構が定める奨学金返還免除候補者(以下「返還免除候補者」という。)の選考に関し、必要な事項を定めることを目的とする。

(返還免除候補者)

第 2 条 返還免除候補者として独立行政法人日本学生支援機構(以下「機構」という。)に推薦できるものは、大学院において機構から第一種奨学金の貸与を受けた学生であつて、在学中に特に優れた業績を挙げたものとする。

(返還免除候補者の選考)

第 3 条 返還免除候補者の選考は、大同大学大学院日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考委員会(以下「委員会」という。)において、当該学生の大学院における教育研究活動等に関する業績及び専攻分野に関連した学外における教育研究活動に関する業績(機構が定める奨学規程「独立行政法人日本学生支援機構平成 16 年規程第 16 号」)に基づき、総合的に評価して行うものとする。

2 前項の選考に関する基準は、別に定める。

(返還免除候補者の推薦)

第 4 条 学長は、委員会の選考の審議結果に基づき、機構が定める業績優秀者返還免除申請書及び推薦理由書に業績を証明する書類を添付し、機構に推薦するものとする。

(推薦の取消し)

第 5 条 学長は、前条による推薦後、学位論文等に不正の事実等が判明した場合は、委員会の審議を経て当該推薦を取り消すことができる。

第 6 条 削除

第 7 条 削除

(規程の改廃)

第 8 条 この規程の改廃は、大学院運営委員会の審議を経るものとする。

(事務)

第 9 条 返還免除候補者の選考に関する事務は、学生室が行う。

附 則

第 1 条 この規程は、平成 23 年 1 月 1 日から施行する。

附 則

第 1 条 この改正規程は、平成 30 年 10 月 1 日から施行する。

大同大学大学院日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考委員会規程

(平成 30 年 9 月 12 日制定)

(趣旨)

第 1 条 この規程は、学校法人大同学園組織規則第 25 条第 2 項の規定に基づき、大同大学大学院日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考委員会(以下「委員会」という。)について、必要な事項を定める。

(任務)

第 2 条 委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 独立行政法人日本学生支援機構が定める返還免除の本学大学院における候補者(以下「返還免除候補者」という。)の選考に関する事
- (2) 返還免除候補者の選考基準及びその取扱いに関する事
- (3) その他返還免除候補者の選考及び推薦に関し必要な事項

(組織)

第 3 条 委員会は、次の委員をもつて組織する。

- (1) 大学院研究科長
- (2) 大学院副研究科長
- (3) 大学院工学研究科長
- (4) 大学院情報学研究科長

(委員長)

第 4 条 委員会に委員長及び副委員長を置く。

2 委員長は大学院研究科長とする。副委員長は、委員長が委員会の同意を得て指名する。

(定足数及び議決)

第 5 条 委員会は、構成員の 3 分の 2 以上の出席によつて成立し、議事は、出席者の過半数の同意によつて成立する。

(招集)

第 6 条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名したものが、その職務を代行する。

(委員以外の者の出席)

第 7 条 委員会が必要と認めるときは、委員会に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

(小委員会等の設置)

第 8 条 委員会は、必要に応じて小委員会等を設置することができる。

(事務局)

第 9 条 委員会の事務は、学生室が行う。

附 則

第 1 条 この規程は、平成 30 年 10 月 1 日から施行する。

大同大学提携教育ローン規程

平成 26 年 10 月 1 日制定

(目的)

第 1 条 大同大学（以下「本学」という。）に、経済的理由により学生納付金の納付が困難な学生に対し、別に定める金融機関（以下「提携金融機関」という。）と本学が契約する教育ローン（以下「提携教育ローン」という。）制度を設ける。

(資格)

第 2 条 提携教育ローンを利用できる者は、次の各号の一に該当する者とする。

(1) 学部又は大学院に在籍する正規学生の保護者（父母又はそれに準ずる者）

(2) 学部又は大学院の正規課程に入学を予定する者の保護者（父母又はそれに準ずる者）

(利用限度額)

第 3 条 提携教育ローンの一回当たりの利用金額は、前期又は後期の学生納付金額を上限とする。

2 累計利用金額の上限は、提携金融機関との契約による。

(利子)

第 4 条 提携教育ローンの利子は、提携金融機関との契約による。

(返済)

第 5 条 提携教育ローンの利用者は、提携金融機関に元金及び利子を返済しなければならない。

(申請)

第 6 条 提携教育ローンの利用を希望する者は、所定の手続きにより申請し、学長の承認を得なければならない。

(所管事務)

第 7 条 提携教育ローンに関する事務は、学生室が行う。

附則 < 省 略 >

大同大学提携教育ローン利子補給奨学規程

平成 26 年 10 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

(趣旨)

第 1 条 大同大学学則第 37 条第 2 項及び大同大学大学院学則第 40 条第 2 項の規定に基づく、提携教育ローン利子補給奨学(以下「利子補給奨学」という。)については、この規程の定めるところによる。

(目的)

第 2 条 利子補給奨学は、経済的に困窮して学生納付金の納付が困難となり、提携教育ローンを利用する学生に対し、その利子の全部又は一部を給付することにより、経済的負担の軽減を図ることを目的とする。

(資格)

第 3 条 利子補給奨学による奨学金(以下「利子補給奨学金」という。)の給付を受けることができる者は、提携教育ローンを利用し、かつ、最短修業年限以内に在籍している者とする。

(利子補給奨学金)

第 4 条 利子補給奨学金は、当該年度までの累計利用金額に係る当該年度の支払利子額に別表の給付率を乗じて算出した金額とし、千円未満は切捨てる。ただし、場合により、給付額を減ずることがある。

2 利子補給奨学金の上限は、1 年度につき 18 万円とする。

(申請)

第 5 条 利子補給奨学金の給付を受けようとする者は、毎年度所定の期間内に所定の必要書類を添えて、学長に申請しなければならない。

(選考及び決定)

第 6 条 利子補給奨学金受給者の選考は、学部にあつては学生委員会の、大学院にあつては大学院運営委員会の審議を経て、学長が決定する。

(利子補給奨学金の給付)

第 7 条 利子補給奨学金の給付は、申請のあつた指定口座に所定の時期に振り込むことによつて行う。

(雑則)

第 8 条 利子補給奨学の取扱いに関し必要な事項は、別に定める。

(所管事務)

第 9 条 利子補給奨学に関する事務は、学生室が行う。

附 則 < 省 略 >

別表

区分	主たる家計支持者の年間総収入		給付率
給与所得者	841 万円以上		50%
	841 万円未満		100%
給与所得者以外	355 万円以上		50%
	355 万円未満		100%

※給与所得者は源泉徴収票の支払い金額とし、給与所得者以外は確定申告書等の所得金額とする。

大同大学提携教育ローン利子補給奨学細則

平成 26 年 10 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日制定

(趣旨)

第 1 条 大同大学提携教育ローン利子補給奨学規程（以下「奨学規程」という。）第 8 条に基づく利子補給奨学の取扱いについては、この細則の定めるところによる。

(基準とする所得)

第 2 条 奨学規程の別表に規定する給与所得者及び給与所得者以外の所得は、私立大学等経常費補助金特別補助における「入学料・授業料減免等の給付事業」の家計基準を準用する。

(給付額の減額)

第 3 条 奨学規程第 4 条第 1 項のただし書に規定する「給付額を減ずることがある」とは、当該年度の利子補給奨学金の申請総額が予算額を超えるときをいう。

2 給付額の減額を行う場合の給付額は、次の計算式による。ただし、千円未満は切捨てるものとする。

申請者の申請金額×予算額／申請総額

(申請)

第 4 条 奨学規程第 5 条に規定する所定の期間は、12 月から 1 月末日までとし、所定の必要書類は、次の各号のとおりとする。

- (1) 提携教育ローン利子補給奨学金受給申請書
- (2) 所得を証する書類
- (3) 金融機関等が発行した返済計画書等（借入者・返済期間・利息が明記されたもの）

(給付時期)

第 5 条 奨学規程第 7 条に規定する所定の給付時期は、申請があった年度の 3 月とする。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院論文博士の学位授与申請書類((7)外国語の能力に関する申告書) についての申合せ

平成 11 年 2 月 17 日制定

平成 21 年 4 月 1 日改正

論文博士の学位授与申請書類（（7）外国語の能力に関する申告書）で「大学等における外国語単位取得状況及び本人の自己申告」については、以下のとおり取り扱うものとする。

1. 「大学等における外国語単位取得状況」
大学等における外国語の単位の取得状況を証明するもの
 - ・ 単位修得証明書、成績証明書等

2. 「本人の自己申告」
次のいずれかに該当する書類をもって、本人の自己申告書とする。
 - ・ 外国での学位取得
 - ・ 海外留学の経験を証明するもの
 - ・ 外国語で記載された論文（別刷り又は写しでも可）
 - ・ 翻訳した論文・解説記事等（写しでも可）
 - ・ 外国での研究活動を証明するもの
 - ・ 外国での調査実績を証明するもの
 - ・ 国際会議での研究発表実績を証明するもの
 - ・ 上記に相当する語学力を証明できるもの

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院論文博士の申請資格、試験及び業績についての申合せ

平成 10 年 11 月 18 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

論文博士の申請資格、試験及び業績については、「大同大学大学院学則」及び「大同大学大学院学位審査等取扱細則」(以下「細則」という。)等に定めるほか、次によるものとする。

1. 論文博士の申請資格について(大学院学則第 22 条第 2 項関係)

大学卒業後 7 年以上、修士課程修了後 4 年以上その他これらと同等以上の研究の経歴を有する者^{* (1)}とする。

* (1)「その他これらと同等以上の研究の経歴を有する者」とは、大学卒業の要件を満たさない者で、大学院教授会(教授で構成)において大学学部卒業者と同等以上の学力を有すると認定され、かつ、十分な研究の経歴を有する者とする。

2. 専門の試験について(細則第 21 条第 1 項関係)

受理された論文の公開講演会の際、学位論文に関連のある科目について口頭で行う。

3. 外国語の試験について(細則第 21 条第 2 項関係)

外国語は、特別な事情がある場合を除き英語とする。

4. 学力確認のための試験について(細則第 21 条第 3 項関係)

専攻の学術について筆答または口頭で行う。

5. 業績について(細則第 21 条第 5 項関係)

公表された論文は、3 編以上とし、学会誌、学会論文集、学会誌相当誌等^{* (2)}に掲載されている^{* (3)}ことを条件とする。

* (2)「学会誌相当誌」とは、掲載論文につき学会誌と同等以上の審査の行われる専門誌を指すが、学会誌と同等以上の認定は、それぞれの専門分野に委ねる。

* (3)「掲載されている」とは、査読済みで「掲載可」となっているものを含む。

附 則 < 省 略 >

大同大学大学院課程博士の業績についての申し合わせ

平成 22 年 4 月 1 日制定

平成 29 年 4 月 1 日改正

課程博士の業績については、「大同大学大学院学則」及び「大同大学大学院学位審査等取扱細則」(以下、「細則」という。)等に定めるほか、次によるものとする。

1. 業績について(細則第 13 条第 4 項関係)

公表された論文⁽¹⁾は、2 編以上とし、学会誌、学会論文集、学会誌相当誌⁽²⁾に掲載されている⁽³⁾ことを条件とする。

* (1) 「公表された論文」とは、学位論文の主要な部分に係するものとする。

* (2) 「学会誌相当誌」とは、掲載論文につき学会誌と同等以上の審査の行われる専門誌を指すが、学会誌と同等以上の認定は、それぞれの専門分野に委ねる。

* (3) 「掲載されている」とは、査読済みで「掲載可」となっているものを含む。

附則 < 省 略 >

大 学 院 研 究 科 便 覧

工学研究科〈修士課程・博士後期課程〉
情報学研究科〈修士課程〉

2019年4月1日発行

編集・発行 **大同大学**

〒457-8530 名古屋市南区滝春町10-3

TEL<052>612-6111 (代)

